

G—MoMo～銀曆少女モモ
～

凰太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遠い近未来〈銀暦〉——即ち〈銀河連邦暦〉！

ほんわか天然少女 “陽ノ咲モモカ” は、親友 “天条リン” & 天才美女 “マリー・ハウゼン” と共に今日も次元宇宙へフラクタルブレンを駆け巡る！

星空の海を泳ぐのは、オーバーテクノロジーのイルカにシヤチにクジラ？

次元宇宙はワクワクの宝庫！

まだ見ぬ冒険に出発だ！

Fuzzy Science Fiction
ほんわか癒し系スペースオペラが幕を開ける！

第二弾！

※この作品は以下のサイトにて展開しています。

小説投稿サイト：

〈NOVELDAY〉〈アルファポリス〉〈ツギクル〉

〈ノベルアップ+〉〈ノベルピア〉

〈ハーメルン〉〈カクヨム〉〈小説家になろう〉

SNS：

〈note〉〈pixiv〉

目次

ウチの銀暦事情

ウチの銀暦事情 Fractal. 1

ウチの銀暦事情 Fractal. 8

ウチの銀暦事情 Fractal. 7

54

ウチの銀暦事情 Fractal. 2

ウチと惑星テネンス

82

ウチの銀暦事情 Fractal. 3

ウチと惑星テネンス Fractal. a

1. 1 98

ウチの銀暦事情 Fractal. 4

ウチと惑星テネンス Fractal. a

1. 2 112

ウチの銀暦事情 Fractal. 5

ウチと惑星テネンス Fractal. a

1. 3 124

ウチの銀暦事情 Fractal. 6

ウチと惑星テネンス Fractal. a

43

リンちゃん	l.	4	ウチと惑星テネンス	F r a c t a	140
リンちゃん	l.	5	ウチと惑星テネンス	F r a c t a	156
リンちゃん	l.	6	ウチと惑星テネンス	F r a c t a	167
リンちゃん	l.	7	ウチと惑星テネンス	F r a c t a	184
リンちゃん	l.	8	ウチと惑星テネンス	F r a c t a	200
リンちゃん	l.	1	リンちゃん	F r a c	218
リンちゃん	l.	2	リンちゃん	F r a c	228
リンちゃん	l.	3	リンちゃん	F r a c	242
リンちゃん	l.	4	リンちゃん	F r a c	260
リンちゃん	l.	5	リンちゃん	F r a c	279
リンちゃん	l.	6	リンちゃん	F r a c	301
リンちゃん	l.	7	リンちゃん	F r a c	317
リンちゃん	l.	8	リンちゃん	F r a c	331

クルちゃん惑星ジェルダ

クルちゃんと惑星ジェルダ Fract

a 1. 1 | 349

クルちゃんと惑星ジェルダ Fract

a 1. 2 | 363

クルちゃんと惑星ジェルダ Fract

a 1. 3 | 377

クルちゃんと惑星ジェルダ Fract

a 1. 4 | 391

クルちゃんと惑星ジェルダ Fract

a 1. 5 | 403

クルちゃんと惑星ジェルダ Fract

a 1. 6 | 417

クルちゃんと惑星ジェルダ Fract

a 1. 7 | 431

クルちゃんと惑星ジェルダ Fract

a 1. 8 | 443

マリーと惑星ウイズエル

マリーと惑星ウイズエル Fract

a 1. 1 | 455

マリーと惑星ウイズエル Fract

a 1. 2 | 468

マリーと惑星ウイズエル Fract

a 1. 3 | 476

マリーと惑星ウイズエル Fract

a 1. 4 | 491

a l .	マリーと惑星ウイズエル	F r a c t	549
8	———		
a l .	マリーと惑星ウイズエル	F r a c t	530
7	———		
a l .	マリーと惑星ウイズエル	F r a c t	515
6	———		
a l .	マリーと惑星ウイズエル	F r a c t	504
5	———		
a l .	マリーと惑星ウイズエル	F r a c t	
	———		

ウチの銀暦事情

ウチの銀暦事情 Fractal. 1

遠い近未来——地球人類は太陽系銀河の開拓計画を実践に移し、それに伴^{ともな}って（銀河連邦政府）が樹立された。

これは近い将来に訪れるであろう物語……。
永遠に未来から近付かない物語……。

眩^{まぼゆ}く渦巻いた光のトンネルを抜けると——そこも宇宙やった。

それは、先刻^{さつき}までいた空間と何ら変わりなく……っていうか、ぶつちやけ宇宙空間の違いなんか肉眼認識で解るはずもあらへん。星々の細い息吹きが、深い漆黒の中で白い点と瞬^{またた}いているだけなんやから。

宇宙船^{スペースシップ}の空間転移先が何処であろうと、ウチ——陽^ひノ咲^{さき}モモカ——には同じ情景にし

か見えへんよ？

『ツエレーク、空間転移完了——量子波動安定化——現フラクタルブレイン座標照合、6
 フラクタル プレインデイメンション
 f \ 3 b 次元、マイナスコンマ0003誤差修正——滞在可能推定時間、二時間
 三〇分リミット——』

次空転移結果を報告する艦内放送が響く。

宇宙を悠然と回游する巨大なシロナガスクジラ——それが、ウチの搭乗する大型
 スベースシップ
 宇宙船へツエレークへやった。

比喩やないよ？

文字通り「クジラ」やねん。

うん、正確には「鉄のクジラ」や。

そのまま「鋼鉄製のクジラ」を想像してもらえばええ。

こう見えても銀邦政府が建造した最新鋭艦やねん。

全長三〇〇メートルにも及ぶ巨体は、滑らかな流曲線を描くフォルムながらも威圧感
 に満ちとつた。黒い艶を照り輝かせるボディは、広域吸収型ソーラーセル合金——つ
 まり太陽や恒星の光を吸収蓄積して、推進力へと転換するものやねん。基本は広域吸収
 型ソーラーセルで得た光量子エネルギーによる推進航行で、ブースト時にはそれを量
 子衝突させて大出力へと転化するのやって。

内部には長期間宇宙航行に準じた設備だけやなく、日常生活を営む都市機能も等しく建造されとる。早い話、宇宙居住地としての側面もあんなな。

で、ウチは〈ツエレーク〉から宇宙空間を眺め……とるワケやない。

愛機である宇宙航行艇〈エイザーナ〉の操縦席から見とつてん。

サブモニターに共有投影された映像を見とつたんよ？

つまり、格納庫で待機状態いうワケやね。

この銀暦——つまり銀河連邦暦——に於いて、宇宙船は機体規模に依じて公式にカテ

ゴライズされとる。

一般に〈宇宙船〉と呼ばれる形式は数十人の乗組員から構成される物で、全長も最小

で五〇メートル級から——標準でも二〇〇メートル級艦がザラに存在する。そのコス

ト面から一般層が個人所有できるような代物でもない。概ね、軍や企業が運用する法外

な機体や。

対して〈宇宙航行艇〉いうんがある。

コレは、広く一般普及しとる小型宇宙艇の事。

少人数程度——若しくは単身——で運用可能な宇宙船が、このカテゴリーへと分類さ

れとる。全長的には、だいたい一〇〇三〇メートル級が平均やね。

ウチの愛機〈エイザーナ〉も、当然この分類。

全長八メートルとやや小型で、一人乗り使用。

この〈エイザーナ〉の特異性は、その機体フォルムにも滲み出とつた。独自性の強い特徴的なデザインは、通常の〈宇宙航行艇コスモクルーザー〉とは特に一線を画する。

だつて、宇宙そらを泳ぐイルカ。そのものなんやもん。

要は〈ツエレーク〉の設計ノウハウを活いかした小型版や。

もつとも〈エイザーナ〉は、様々な点で〈宇宙船スペースシップ〉と同等以上の性能を有しとつた。

この機体が〈超宇宙航行艇スーパークルーザー〉とも呼ばれる由縁ゆゑんやねん。

一人乗り仕様とあつて〈エイザーナ〉の操縦席コックピットは狭い。

完全密封された暗さの中では、電子計器とともが点す明かりだけが光源やつた。とりわけモニターディスプレイの恩恵は大きい。

サブモニターを改めて眺める。

「……キレイやね？ イザーナ？」

『キユー♪♪ キユー♪♪』

イルカが鳴きよつた。

肯定の同調が嬉うれなつて、ウチはにっこり笑う。

量子ワームホールの眩まぼゆい光の潮流から抜け出た直後とあつて、その静寂なる深淵は息を呑むほど深く沈む虚無的絶景にも思えた。映し出される宇宙の闇は、視野一面に下

ろされた暗幕のようや。

その中で瞬く星々の細い蛍灯に見惚れて、ウチは呟く。

「軽く手を伸ばせば届きそうやんね?」

『キユー ♪ 』

「せやけど実際には、遙か光年先の歴史なんよね……コレ」

『キユー?』

「せやねえ? ウチらが住む次元宇宙での歴史ではないねえ?」

ほわつと笑うウチ。

暫し沈黙——ウチは間が堪えられなくなって別の話題を振った。

「……あんな? イザーナ?」

『キユー?』

自分の肢体に目を落とすと、密着フィットしたワインレッドの全身スーツがテヤテヤした光沢に艶かしい反射を生んだ。

コレは〈ポータブル・ハプピタル・ウェア〉——通称〈PHW〉——いう凡庸多機能宇宙服や。

「ウチ、コレ改善してほしい……慣れへんわ」

『キユーキユーウキウウ!』

「うん、知つとるよ？ スゴい代物シロモンやねん。耐圧・耐熱・耐寒の三拍子を基礎性能として備えとるし、極小ヘリウムバーニアを要所要所に内蔵しとるから無重力空間での姿勢制御もお茶の子さいさい——オプションのバイザーメットさえ被れば、それだけで真空状態下でも活動可能な代物シロモンや。そりゃスゴいよ？ せやけど……」

『キユウ？』

何が不服か訊きかれた。

「……ボディライン浮き彫りやもん。肌露出が皆無なのに妙に艶なまめかしいんわ、この生々しいシルエットのせいやで？ うう……やっぱりウチ、ちよつと恥はずかしいよう」

『キユウ？』

「ちちち違ちやうよ？ 胸のせいやないよ？ それに、Aカップ違ちやうで？ ウチ、Bあるもん——」

『キユウキユウ……キユウ』

「励はげまさんといてえ！ 余計、惨みじめなるわあ！」

その時、もうひとつのサブモニターに、インディブルーの〈PHW〉を着た美少女が映り込んだ。

『いつまでもイルカと戯たわむれてんなツツーの！ ボチボチ出撃だかんね？』

気丈にじさが滲くちようむ口調で注意されたわ。

綺麗に毛先を切り揃えた髪は背中まで伸びていて、それを大きな赤いリボンでロングポニーテールに纏めた美少女や。

スラリとした肢体はスマートさを維持しながらも、付くべきトコには肉感が実つとる。年頃の少女達にとつて、まさに羨望ものやね。

彼女の名前は「天条リン」――。

隣で待機しとする同型宇宙航行艇「ヘミヴィーク」のパイロットや。

ちなみに「ヘミヴィーク」の外見は「シャチ」やった。

うん、ウチの「ヘイザーナ」は「イルカ」で、リンちゃんの「ヘミヴィーク」は「シャチ」やねん。

『滞在可能推定時間、把握してるわね?』

「二時間三〇分リミット……やね?」

『そう、それまでに「ツエレーク」へと帰還する!』

「知つとるよう? ウチ、初めてやないよ?」

『……初心者じゃないのに初心者級にヌケてるから心配だツツの、アンタは』

ジト目で指摘されたわ。

リンちゃん、ヒドイ言い種やんね?

と、今度は、さつきまで「ツエレーク」と映像共有していた方のサブモニターに金髪

美女が映った。

知的印象の強いオシャレな眼鏡をかけた美女や。

冷静さを内包した憂いある眼差しは、せやけどインテリ特有の斜に構えた嫌味などは全く感じさせへん。むしろ人好きのする柔らかなオーラが、全身から醸しだされとる。腰まで伸びるロングヘアは息を呑むほど艶やかで、スツと通った鼻筋と薄い唇が織り成す美貌は芸術の域にも思えた。

黒のフォーマルスーツをシツクに着こなし、くつきりと浮かび上がるボディラインもウチらとは断然格違いの優美にある。さすがに大人の女性や。あまりにもグラマラスなわりに、見事なスレンダーさでもあった。完璧なプロポーションは異性でなくとも見惚れてまう。

とりわけ目を引くのは豊満な胸！

そのスゴさといったら……スイカやん！

まるで「歩く豊穣祭り」やん！

もしも叶う事なら、可哀想な成長に足踏むウチへと少し分けてほしい……。

彼女こそ、銀曆屈指の天才「マリー・ハウゼン」女史や。

若干二〇歳にして、いくつかの博士号を拾得してるんやから、とんでもない天才には間違いあらへん。

このへツエレーク艦長にして、ウチらの保護者でもある。

『二人共、準備はいい?』

『いつでも』

「うん、ええよ ♪ 」

『目的はへ宇宙クラゲの捕捉、及び、データ収集。そのリアルタイム情報を即時へツエレークへ転送して頂戴。それを基もとに迎えに行くから』

『場合によっては交戦しても、いいのよね?』

リンちゃんの勝ち気ぶりに、マリーは包容的に苦笑う。

『あまり勧めたくはないわね……自衛レベルでは仕方ないけど』

『心配ないツツーの。アタシとへミヴィークは殺やられはしないんだから』

『ケルルル……!』

気丈な自信に同調して、シャチが猛り鳴いた。

『出来るだけ離脱を試みて頂戴? 無理や危険を冒さないように……』

柔らかに釘を刺す。

『……つたく、心配要いらないツツーのに』

リンちゃん、少々不服そうやね?

ブツブツ言うとするねえ?

「あんな？ マリー？」

『何？ モモカ？』

「友達になんのは、ええ？」

ウチの発言にリンちゃんは苦虫顔を浮かべ、マリーは慈しむかのように微笑んだ。

『いいけど……無茶はダメよ？ 接触してみて意思疏通が不可能と思ったら、諦めるのよ？』

「はーい ♪」

ウチ、にっこりや ♪

ケンカするより、仲良しなった方がええ ♪

ややあって、正面の格納庫扉ハツチがゴウンゴウンと鈍重に開いていく。

星空の大海が歓待に漂う。

『……へミヴィーク 出る！』

「ハイザーナ」行ってきまゝす ♪ 「」

カタパルト射出！

鋼鉄のイルカとシャチが、大宇宙へと飛び込んだ！

ウチの銀暦事情 Fractal. 2

仲良う並んで航行するイルカとシャチ——。

『滞在可能推定時間は、二時間三〇分リミット——って事は、あまり遠くへは行けないわね。せいぜい近域惑星ひとつってトコか』

リンちゃんが、今後の指針を呟いた。

「あ、せやー！」ウチは不意に思い立った。「リンちゃん？ ちよつとええ？」

『何だツツーの？ 何かアイディアでも出たの？』

コンソール操作の片手間に応えるリンちゃん。

『あんな？ さつき』6 f フラクタル / 3 b プレーンディメンション 次元』

『うん』

「だいたい、どの辺りなん？」

——ズガシッ！

リンちゃん、ド派手に突っ伏したねえ？

勢いよくサブモニターからフレームアウトしたねえ？

ややあつて、ゴゴゴ……と怒気を孕はらんだリンちゃんの睨ねめ付け顔が浮上した。

「リンちゃん、額が赤く腫れてるよ？」

『ア……アアア……アンタツ！ いままで、どれだけ次空航行をしてきたと思ってるツツーの！』

『ケルルルル！』

リンちゃんとシヤチ、両方からツツコまれたわ……。

「せやかて、正直言つてへフラクタルブレーションの概念すら、よく解つてないモン。ねえ？ イザーナ？」

『キュー？ キュー？』

『そこから……ツツ？』

『ケルルル……ツツ？』

リンちゃん&ミヴィーク、反響してウルサイよ？

先刻、艦内放送が『空間転移』と読みあげた通り、此処はウチらがいた次元宇宙やない。

フラクタル分岐によるブレーション宇宙——平たく言えばへパラレルワールドというヤツやねん。

ただし、通称へフラクタルブレインと呼ばれるこの次空構造は、従来のパラレルワールド理論よりも些か難解な概念やった。

だから正直いって、ウチも未だによく理解できてへんのだ。当然ながら。

『モモカ、やっぱり理解していなかったのね……』

リンクモニターに、こめかみ押さえのマリーが映った。

暫し思案気に耽っていたマリーは「よし」と決心めいた一言を洩らすと、徐に『モモカでもわかるフラクタルブレーション講座』を特別講義してくれはった。

うん、『モモカでも——って、どゆ意味？』

『モモカ、いい？ まず、線を一本引いて……』

マリーに言われるまま、ウチはフリーディスプレイへと光線を一本引く。

「うん、引いたよ？」

『それが私達のいた宇宙。平面は、いくつある？』

「そりゃ、ひとつやん？」

『そうね。で、次はその中央を摘まんで、ひとつの三角形を作って？』

「三角形っていうか、摘まんで作ったら底辺無いよ？」

『……いいからやる』

「は〜い」

マリーの態度が静かに威圧的だったので、ウチは素直に従った。こういう時のマリーは、実は意外に沸点が低いから怖いねん。

『モモカ、今度は平面がいくつ?』

「底なし山の斜面として分断されて計二つやね」

『……じゃないでしょ』と、リンちゃん。

違うの?

うゝん……と?!

あー! せや!!

「中央に山作ったから、左右には地面が残っとる! 計四面や!」

『そうね。で、平面をひとつの宇宙と考えたら、これで宇宙が四つに分岐した事になるわ

ね?』

「なるん?」

『『なるの!』』

リンちゃんとマリーの同時口撃こうげき!

そんなユニゾンで怒らんでもええやん……。

『じゃあ今度は、その上に同様の図形を描いて……コピペでもいいけれど』

ウチは言われるままにタッチして、底なし三角形をコピペする。

それを見計^{みはか}らつて、マリーの次なる指示。

『それもさつきと同じ手順で、三角形の平面に同型の三角形を作ってみて？ 平面、今度はいくつある？』

「単純に二倍やから計八面やん」

『じゃあ、その上に同じ図形をトレースして、また同じ行程を繰り返す……今度はいくつになった？』

「何かコンペイトウの出来損ないみたなってきたで……えつと、計十六面！」

『最初の手付かずも含めて、ここまでの平面合計は？』

「えつとね……え……つと……」

目算ではややこしいので、ウチは指折り数えた。

「……ひいふうみい」

『計二十九面！』

「またもマリーとジュンの同時口撃^{こうげき}！」

ふぐう……数え終わる少しの間くらい待ってくれないやん？

『現在で分岐宇宙は合計二十九個存在するという結論になるわね？ これが延々と続くのがフラクタル分岐の宇宙理論よ』と、マリー。

「ふええ？ 延々なん？」

『つまりね？ このように平面への角構成が延々と続いていく増幅論は、カオスの演算のフラクタル理論を強引に図的解釈したものなの——旧暦時代から使われている古典的解説表現ね。これにブレーン宇宙論を適応させて考えると、一次から一〇次までの上層ブレーン宇宙は決して下層次元と完全な分離（セパレート）をされたものではなく、基（もと）となる次元宇宙から派生増殖したものと解釈できるの』

「？」

『ただし、この図形からは示唆できない要素として、各面——この面は異なる派生次元宇宙を現しているわけだけれど——は、全く同一の物ではなく、何かしらの差異要素を内包している。でなければ、カオス演算的観念としては成立しないでしょう？』

「??？」

『ということは、基（もと）となった次元宇宙——つまり起因次元を基準に考えて、それに連なる次元は、そのヴァリエーションと化しているという結論になるわね？ これが〈フラクタルブレーン理論〉の基礎理念なの』

「????？」

『けれど誤解してはいけないのは、そのどれもが〈オリジナル〉であり、また同時に〈ヴァリエーション〉でもあるという観念解釈。要するに、どれが〈オリジナル〉かという定義は、結局、どの次元を自身の基準とするかで変わってくる——それこそ〈一般相対論〉

の応用解釈ではあるけれど……」

『そして、その他次元に元来発生してなかったはずの存在——現在の〈私達〉がそうね——は、次元宇宙そのものが〈特異点〉と認識して別次元へと排斥しようとする——解り易くいうと〈異物〉を吐き出して正常な状態へと戻ろうとするわけね。その現象が発生する猶予時間が『私達の滞在可能時間』——これを、私は『特異点排斥の法則』と学会には提唱しているけれど』

『……』

『では、吐き出された〈異物〉——つまり〈特異点〉は、何処へ飛ばされるのか？ 実は突飛もなく離れた次元座標じゃなくて、起因次元へと向けたベクトルに沿って一次元分の層だけ戻されるのよ。そして、それも〈私達〉の次元じゃない場合、また『特異点排斥の法則』によって同過程が繰り返される。最終的には時間を掛けながらも起因次元へと帰される法則になっているけれど、それが数時間か数百年かは誰にも解らない。だから、私達の〈ツエレーク〉のような単独次元航行を自在とする存在は、銀邦政府でも一目置く唯一無二のスペシヤルなの』

『そして、フラクタル分岐による派生宇宙の危険性としては、どんな世界と化している

か解らない” っていう差異特性が挙げられるわ。それこそ猿や恐竜が知性的進化を遂げて支配するような、まったく異質な別世界と化している可能性すらもある——極端な例だけどね。起因次元から次元層が離れれば離れるほど、そうした非共通項が増えていく。何よりも他次元には必ずへもうひとりの自分——即ちへダブルへが存在し——

『ちよ……ちよつと、マリー？ ストップ！ ストップ！ 突然、講義中断を訴えるリンちゃん。『モモが煙噴いてる！ 噴いてるツツーの！』』

『キューツ！ キューツ！ キューツ！』

『ケルルツ！ ケルルツ！ ケルルツ！』

『——それが自分自身と接触すればへ自己存在対消滅へを起こしてしまいう危険性も——え？』

リンちゃんの必死な直訴を受けたマリーは、怪訝けげんそうにウチを窺うかがい見て絶句。

そう、リンちゃんの言う通り……。

その時、ウチは濛々ももつと煙を噴いてギブアップ硬直フリーズ。

ただでさえ勉強嫌いな思考回路がショートしよつた。

現場は右往左往の大騒ぎや——イルカとシャチも巻き込んで。

結論として得たのは『モモカでも解るく』でも『モモカには解らない』という再認識

だけやった。

うう、我われながら情けないわあ……。

数分後——。

「ううう……まだノーミソがジンコラするわあ〜」

ウチは操縦シートをリクライニングモードにして寝そべり、スッキリしない不調感を呻うめいた。

顔に当たったアイスパックが、ヒンヤリと癒してくれてはいたけど。

『キユー？ キユー？』

心配したイザーナが声を掛けてくる。

「えへへ……大丈夫やよお〜？ もう少ししたら起きるね？」

ありがとねえ、イザーナ？

この子、優しいねん。

そんなウチを呆れた視線で眺めて、サブモニター越しのリンちゃんちゃんが皮肉を投げてき

よった。

『……アンタ、脳味噌あるの？』

「あるよツ？」

あまりに失礼な一言に、ガバツと半身起こしたわ！

休憩中断や！

『そりゃ失礼』とか言いながらも、リンちゃんはコンソール操作をテキパキと再開。まったく悪びれた様子もない。

リンちゃん、意地悪や。

『ま、マリーの講釈はアンタには難しいかもね』

「そういうリンちゃんは、どうなん？ 理解してんの？」

『アタシ？ もちろん、しているわよ』

余裕しやくしやくに、根拠に満ちた自信を示しはった。

と、リンちゃんはジツとウチを見つめる。

そして、暫ししばの黙視後、実情把握を兼ねて訊ねてきた。

『ねえ、モモ？ アンタ、さすがに今回の目的と経緯は理解しているわよね？』

「今回の目的？ もちろんやん！」

自信満々にウチは返した。

事の起ころは、三日前に遡る。

ウチの銀暦事情 Fractal. 3

太陽系第四惑星へ火星〉生存可能宙域——そこには銀邦政府太陽系支部が在る。

直径は凡そ5平方キロメートル。

円盆型の人工地盤の上に築かれた都市が機能し、それを透明半球体がすっぽりと覆った形状や。底部から火星へと伸びとる竜骨のような機械塔は、地表に建設された移民都市へライマンへと繋がつとるへ超電磁軌道エレベーターやねん。

要するにへ宇宙ステーションとへ衛星コロニーの両性質を兼ね備えてんな？
名をへマルスクラウン言う。

そこに呼び出されたウチとリンちゃん、長官室へと通された。

呼び出し主である「レスリー長官」が、後ろ手を組んで眼下の赤い惑星を眺めとる。
要するに貫禄感の自己演出やんね？ 長官？

やがて沈黙の頃合いを見定めた長官は、重々しく会話を切り出した。

「陽ノ咲モモカくん、天条リンくん、どうして呼ばれたか……分かつてるかね？」

「いいえ？　今回は、さつぱり？」と、リンちゃん。

「そりやそうだろうね。まだ用件を言つてない」

「帰つていいわよね？　貴重なプライベートタイムを無駄にしたくないし」

リンちゃん、温顔につこりで怒つてはるねえ？

「まあまあまあ！　待ち給え！　軽いジョークだよ！　ウエットに富んだジョークだよ

！」

アメリカンスマイルで振り向くも、実は慌ててはるね？

尋常じゃない早さやったもん。

振り向く速度がシュバツて。

ともあれ平静を無理矢理取り繕つた長官は、椅子を引いて腰掛けた。

「実はだね。先日、ハウゼン博士にも話したんだが……」

「そう言えば、マリイはどうしたん？　呼んどらへんの？」

「ハウゼン博士には本件の解析を引き続きしてもらい、場合によつてはへツエレークへの

出撃準備を……つて、うん？」

ウチの返しに、怪訝そうな表情で詰まる。

「何？　長官？」

「いや、いま『マリイ』つて……」

ああ、そこやったんか。引っ掛かったのは。

「ウチら、マリーと呼び捨てにしあえる仲やもん ♪」

「いつの間に、そこまでッ？」

何か知らへんけど、露骨に動揺してはるし。

「キミ達がチームになつて数カ月だよッ？ たった数カ月で、そこまで親密になつたというのかいッ？」

「ウチ、友達作り得意なんよ ♪」

ウチは「にへら ♪」と得意気に笑た。

「う……羨ましい！ 羨ましい限りだ！」

「は？」

「長官、羨ましいん？」

「あまり大声では言えないが、こう見えても前から狙つていてねえ……ハウゼン博士を」

ホントに『大声では言えない話』を言い出しはった。

仮にも『銀邦トップ』が、神妙な面持ちで何をカミングアウトしてんのん？

「だって、こう……ねえ？ スラッキュッボンッだし」

何やエライ事口走ってはる。

しかも、スタイル表現のジェスチャー添えて。

「……もう帰ってええの？」

ウチは無垢に小首コクン。

「待ち給え待ち給え！ まだ話は終わっていないぞ？」

「つていうか、始まってもないわよね？」

「思いつきり美人だし、性格も控え目でたおやかだ。世の男性なら憧れを抱いて当然

……スラツキキュッポンツだし」

「まだ続ける気ツ？ このマリー煩惱！」

「長官？ そのジェスチャーやめた方がええよ？」

「あわよくばキミ達をダシにして親密になろうと考えていたんだが、よもや先を越され
るとは！」

「どういいう了見だー！ーッ！」

間髪入れずへパーソナルモバイルカード——通称へパモカ——を、顔面へと投げ
つけるリンちゃん！

宛ら^{さながら}「怪盗予告カード」のようにサクツと長官の額に突き刺さる！

「リンちゃん！ 暴力はアカン！ 長官相手に暴力振るつたら、下手したら^{テロリスト}反逆者扱い
なつてまう！」

「はーなーせーっ！ モモーっ！」

「ダクメくやあああ〜！ ウチ、リンちゃん逮捕されたない〜！」

慌てて羽交い締めにしたけど、リンちゃんはジタバタジタバタ！

アカン！ リンちゃん、興奮しとる！

「ぎぎぎ銀邦長官に対して何をするんだね！」

濁々と流血塗れの長官が、瀕死から這い上がりつつ抗議してきおった。

「わざわざ年頃女子を呼び出して、しみじみとセクハラ妄想を語る官僚なんて聞いた事
ないっつーの！」

「ああ、そうか……そうだな。些か本題から脱線してしまったよ。ハハハハハ！」

「空笑いで誤魔化すな！」

「何や会うたびに敬意とか尊敬とかが薄れていくわあ……この長官。」

「ま、それはさて置き」

「さて措くな！」

「実は、このようなものが銀邦の観測システムに確認されてね」

長官のパーソナルタブレットから、ウチらのパモカへ映像データが添付されてきた。

この「パモカ」言うんは、超薄型多機能電子端末やねん。

見た目はホビーカードそのものやけど、実質は超科学の結晶や。

うくん？

みんなに分かり易う表現するなら、スマホの超進化版やるか？

イラストスペースにも見えるんは、ディスプレイ画面や。

ディスプレイフレーム四隅のアイコンをタッチすると、様々な多機能アプリが立ち上がる仕様。

もちろんディスプレイ自体もタッチパネルやけどね。

パモカ間の通信・通話に於いては〈ネオニユートリノ・ブロードバンド〉を採用しとつて、太陽系圏内程度ならタイムラグ皆無で連絡が取れんねんよ？

「まずは見たまえ、貴重な資料映像だよ」

言われたウチとリンちゃんは、各々パモカのディスプレイ画面を開く。

「うん、確かに貴重ね」

「せやね」

「そうだろう。まだ一般に流通させていない極秘映像だから、普通なら御目に掛かる事もない」

「流通していたら大事おおいとやんね？」

「さすがにそうか……いや、然さもあらん！」

長官としては真面目な資料映像を添付してきたつもりやろうけど、ウチらのパモカに

は『薄着マリーのブラウス透け透け動画』が添付されてきよった。しかも、要所を拡大トリミングしたヤツ。それがユサユサ揺れとるよ？

「初めて見た時は、あまりの衝撃に嘔然あぜんとしたよ。まさに未知との遭遇だった」「でしようね」

「私の人生に於おいても、こんな凄まじい光景は見た事も無い。だが、己おのれを震い立たせたよ。『尻込みしてなるか！ 絶対に全貌を解明してみせる！』ってね」

「解明する気は満々なん？」

「とは言うが易し。実際は、全力で挑んでも持て余す事は明白だろう」

「ま、持て余すかもね。これだけ大きいと」

「だが！ 私とて男だ！ こればかりは退けん！ 己おのが魂を灰と燃やし尽くしてでも挑む所存だ！」

「……エラく本意気の覚悟やね？ 長官？」

「男つてバカよね」

「コホン、そこで……だね？ 是非、キミ達にも助力を願いたいのだよ。どうだね？ 私と一緒に臨んではくれまいか？」

「「鬼畜変態」」

「そう、実に鬼畜変態——んん？」

奇跡的に嘯み合っていた会話に、ようやく違和感を抱いたようや。

水戸黄門の印籠宜しく、パモカを翳すリンちゃん。

顔面蒼白となった長官が「ははあーッ！」とばかりに土下座した。

「ど……どうか内密に」

「それはドコに？ 銀邦委員会？ それとも、マリー？」

「どっちも！ とりわけ『マリー』には！」

「……いま、どさくさ紛れで呼び捨てにしたでしょ。アタシらに乗っかって」

へこへこと謝罪に頭下げまくる長官を流し、ウチは改めて動画再生して観た。

「それにしても、よくこんなベストアングルで撮らはおったねえ？ 長官？」

「分かるかね？ いやあ、苦労したんだよ。気付かれずにカメラ設置するのは」

何かドエライ事を口にしはったねえ？

「顔と胸とを鮮明な解像度に抑え、障害物も少なく、尚且つ視認されない位置を探る！

実に半月は計画を練り込んだよ、キミ」

「何を揚々とセクハラ犯罪行為のカミングアウトしてんだ、長官……」

リンちゃん、心底ドン引きしてはる。

「だが、此処こそが胆だ！ 絶対に妥協してはイカンのだよ！ 陽ノ咲くん、キミなら分

かるだろう！ この男の浪漫が！」

「ウチは『女の子』やーーーッ！」

今度はウチがパモカをに投げつけた！

サクツと眉間に刺さった長官が、再度流血に沈む！

「ふえくん！ リンちゃ〜ん！ ウチ、胸とほ乏しないもん！ ちゃんと『B』あるもん！

ふえええ〜ん！」

「ああ、もう……よしよし」

泣きつくウチを、リンちゃんが「イイ子イイ子」と宥なだめてくれた。

クスン……えへへ〜 ♪ 何か元氣出た ♪

「まったく、どいつもこいつも……。で、極秘事項扱いの本題って何なワケ？」

混沌現状カオスの仕切り直しとばかりに、リンちゃんは物臭な態度でソファへと投げ座る。

ウチも後追いでチヨコンと隣に座った。

「ああ、それはだね……コレだ」改めて正式な資料映像が添付されてくる。「水星宙域で撮影された映像だよ」

「なツ？」「ふえ〜？」

ウチとリンちゃん、揃って驚嘆や！

それは、惑星付近に浮遊する巨大なヘクラゲスケルトンをやった！

透明な軟体ボディに、無風空間でそよぐ無数の触手！

頭か胴体か解らへん内部には何やら発光器官があつて、プリズム光彩を絶え間なくグラデーションさせとる！

信じられへんのは、その大きさや！

周囲に待機しとる監視衛星と対比しても、おそらく数百メートルはある！

つまりへツエレークとドッコイや！

ウチの銀暦事情 Fractal. 4

「ウチ、こんなん資料で見た事ある！ 確か……えと……えとお……せや！ 確かへカツオだべし」とかいいうヤツや！」

「……それを言うならへカツオノエボシね」

せやの？

「ようここまで育ったねえ？ 何年生きたら、ここまで大きくなるん？」

「だから、想起させても別物だツツーの！ そもそもへカツオノエボシそらが宇宙飛ぶか！」

「進化したんちやうの？」

「するか！ つてか、飛ぶか！」

「亀さん、飛ぶよ？ 火イ吐いてグルグルグル……つて」

「ドコの亀だ！ その節操無い進化論に染まった亀は！」

「……ウチも、よう知らへんよ？」

そんなこんなしてる間に動画が進行した。

何や？ 巨大クラゲが声を発したよ？

喋れんのか？ この子？

『銀河連邦政府ニ告グ。タダチニ宇宙開拓ノ着手ヲ停止セヨ。コレ以上ノ開拓行為ハ、宇宙ノ生態摂理ニトツテ害悪デシカナイトイウ事ヲ心セヨ。然^サモナクバ、主立ツタ開拓設備ハ片ツ端カラ破壊セザル得ナイ。コレハ脅シデハナイ』

「……コイツ？」

リンちゃんの正義感が歯噛みする。

「何や無茶苦茶ワンマンやんなあ？ それじゃ『人類は活動範囲を縮小せよ』って言うてるようなモンやんね？」

「そう言ってるんだツツの——暗にね」

『繰り返ス、コレハ脅シデハナイ。ソノ証拠トシテ、軽イ挨拶ヲ送ツテオコウ』

そして、巨大クラゲは触手を振った！

そこから眩しい光撃^{こうげき}が放たれる！

ウチ、けたたましい爆発音にビククリしてソファからひっくり返ったよ？ コテンつ

て！

「ひゃう！」

そして、映像は終わった。

そのままブラックアウトや。

「破壊されたの？ ステーションが？」

「いや、破壊されたのは監視衛星だけだよ。幸か不幸か、水星宙域には生存可能宙域（ハブピタルポイント）は発見されていない……まだコロニーやステーションも建造されていないからね」

「あ、そうか……そうだったわね」

リンちゃんにしては珍しく失念していたようや。

それだけ焦っていたという事やろね。

せやけど、その表情は微かに安堵を嘯み締めとつた。

ウチ、せやからリンちゃん好きやねん ♪

口くちは悪いけど優しいねん ♪

「この後、この巨大怪物の反応は消失した。あらゆる観測システムからね。つまり消え失せたという事だ」

「……コレ、ホントに生物？」

「ほう？ 何故かね？ 天条くん？」

長官が予見していたかのようにニヤリとしはつた。

「その場で瞬時に全反応が消え失せたっていうんなら、大方へフラクタルブレーション航行でしようよ。だとしたら、あの光彩機関はへ光速推進力発生コンバータの可能性が高

い。つまりは「人工物」と考えるのが妥当だツツの。ま、正体が〈ロボット〉か〈サイボーグ〉かは知らないけどさ」

「ほう？ さすがだね、天条くん？」

リンちゃんの演繹能力えんえきに、長官は御満悦の様子や。

一方でウチは、よう解らへんかった。

せやから、キョトンと質問してみる。

「……あんな？ リンちゃん？」

「何よ？」

「その〈ナンタラコンバータ〉って、何？」

リンちゃん、ズルツとソファを滑り落ちたわ。

「アンタ、ホントに銀暦世代ぎんれきか！」

「せやかて、ウチ難しいのキライ」

「つたく……つまり〈光速推進力発生コンバータ〉ってのは『アクティブジャイロ機構によつて、固定座標で距離を稼かせいで光速移動エネルギーを得られるエネルギーユニット』の事——早い話〈OTF〉よ！」

「……どゆ事？」

「だ〜か〜ら〜ッ！ 光速エネルギーを発生させるには、必然的に膨大な航行距離と時

間を費やさなきやならないでしょ！ けど、それじゃヘリップ・ヴァン・ウインクル現象のせいで実用性が乏しい！ そこでアレのジャイロ回転運動によつて擬似的な航行距離を無限発生させ、その場に停滞しながらも光速エネルギーを得る事を可能としたシステムなの！ そうする事でヘリップ・ヴァン・ウインクル現象の影響下に存在するのは、あのユニットパーツだけって事になるから、本体は通常空間に滞在しながらも光速エネルギーを抽出供給する事が出来る！ 要するに、本体は滞在空間の時間軸に存在しながらも、光速時空軸の影響を受けずに航行が可能となるの！ 解った？」

「うーん？」ウチは示された難解な理論を噛み砕いてみた。「あ、バスの中で足踏みするようなモンやんね？」

「……どうしてそうなった？ 脳ミソふわふわメレンゲ娘？」

リンちゃん、あんまりや。

「で？ 結局、コイツ何なの？」

「うむ、順を追つて説明しよう。まず、この巨大怪物が突如として水星宙域に出現したのは、約一週間前に遡る。さて、では、如何なる怪物なのか？ 我々は存在考察の糸口たる情報を模索した。関連しそうなデータベースや文献を洗い直したりね。だが、有益な情報は何ひとつ得られない。目撃談も研究形跡も。つまり人類史上に於ける初遭遇という事だ。そこで、マリー——」馴れ馴れしさをリンちゃんがジロリと咎める。「——

「……ハウゼン博士に相談してみたんだよ。すると、快く実態調査を引き請けて——」

「すかさず卓上の御茶請け入れを投擲するリンちゃん！」

「ボウル型容器が長官の顔をスカーンと直撃！」

「続け様に床へと撃沈した長官を仁王立ちで威圧する！」

「余計な事すんなツツの！ おかげでマリーの好奇心が触発されちゃったじゃん！」

「今回の任務、十中八九コレじゃん！ アタシら大迷惑だツツの！」

「リンちゃん！ 暴力はアカンて！」

「放せーッ！ モモーッ！ コイツ、簧巻きにして宇宙空間へ放り出す！」

「拘束イッヤクやあああ〜〜！ ふぐう〜！」

「ウチ、半泣きでリンちゃん諫めたよ？」

「必死にソファへ押し戻したよ？」

「つつつつまりだねえ——」流血ダラダラの長官が、ゾンビみたいに這い起きよった。

「——満を辞して、キミ達のヘツエレークへに出動してもらおう……と」

「何が『満を辞して』だーッ！」

「リンちゃんが手近なりモコン取ってスカーン！」

「アタシはやるなんて、一言も言っていないツツの！」

「あ、ウチも言うてないよ?」

一緒なんが嬉しなって、ウチはほわっと笑う。

「それをマリーやアンタが一緒になって、勝手に盛り上がって!」

……無視されたわ。

もう一回 ♪

「なあなあ、リンちゃん? ウチも言うてないよ?」

「だいたい、何で一介の女子高生kが戦わなきゃいけないツツの! それも銀邦ぎんぽうが持て

余すレベルを相手に!」

「なあなあ、リンちゃん?」

「ざけんなツツの! アタシは平穩に日常を過ごしたいだけなんだからね!」

……無視された。

「ふぐう!」

「イタタタタタツツ?」

ウチ、寂しなつた!

せやから、リンちゃんの腰にギユウって抱きついたよ?

力ちから一杯、抱きついたよ?

「リンちゃん! 無視イヤやあ!」

「イタタタツ！ モモ、痛いツツーの！ 放せてば！ このー！」
「ふぐうぐー！」

もつとギユツとしたよ？

いっぱいギユツとしたよ？

「アタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタツ！」

「あー！ リンちゃん、北斗 ● 拳や？」

「キョトンと無垢顔を向けて、何を天然ボケてんだツツーのおおーツ！」

「ぎゃんー！」

卓袱台返しちゃぶだいで放り捨てられたよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「潤々うるうるしながら『痛いよ？』じゃないツツーの！ ベアハッグか！ アタシの方が百倍痛

かったわー！」

ウチとリンちゃんが長官から特別視されとる理由が、コレやつてん。

つまり銀邦最新鋭大型宇宙船ぎんぽうへツエレックスペースシップ——そして、艦載機であるヘイザーナヘイザーナと

へミヴィークヘミヴィークは、マリーが個人所有する私製宇宙船やねん。

どういう事かいうと、その基本設計をしたんはマリーの祖父である ヴィリス・ハウ

ゼン博士ゼン博士がやから。

ウイリス・ハウゼン博士は、とつくに故人なんやけど「銀曆稀代の大天才」と呼ばれる傑物やねん。

そんな大天才が独自設計した〈ツエレーク〉や〈エイザーナ〉&〈ミヴィーク〉は、それこそ〈OTF〉の塊や。

銀邦にしても、そないな危ない宇宙船の野放し状態は避けたいし、あわよくば自分達の最終兵器と抱えたい思惑もあつてん。

とは言え、遺産相続権はマリー——この状況を好転させるべくマリーに私有権を与えたままにして、有事には協力してもらおう提携で建造を承諾させた。

一方でマリーにしても、祖父の形見なら完成形を見てみたい慕情もある。

いや、それ以上にどんな超科学の結晶かを見てみたい好奇心やろね。

せやけど、これだけの途方もない宇宙船を個人建造なんて出来へんから、銀曆が資金と実働作業を買って出てくれるなら『渡りに船』やった——宇宙船だけに。

斯くして利害は一致。

晴れて、銀曆最大の大型宇宙船〈ツエレーク〉は建造される運びとなつたねん。

そんな〈ツエレーク〉の超スペースックは、銀曆でも随一や。

それ故に〈超宇宙船〉や〈超宇宙航行艇〉なんて異名も持つとる。

これにマリーの貪欲な知識吸収欲が併さると、今回みたいな「銀邦宇宙時代の驚異に

挑む事態^{もっ}になんねん。

んで以て、ウチとリンちゃんはマリーに付き合う形が余儀なく強^しいられとる。

その辺の理由は追々語るけど……とりあえずマリーはウチらの司令塔であり保護者やねん。

つまりウチらは一蓮托生な関係やつてん。

「さてー」と、^{おもむろ}徐に一本締め^{つぐろ}の笑顔を繕^{つくろ}い、長官が仕切り直しはった。「話も無事に纏^{まと}まったところで——」

「……纏^{まと}まってないツツーの」

リンちゃん、ジト目や。

恨みがましいジト目や。

「——とりあえずキミ達には〈宇宙クラゲ〉を追ってもらう事になります」

「ウチら次空を越えて〈クラゲ〉を追跡すれば、ええん？」

「そういう事だね」

「アタシは承諾してないツツーの！」

「何や？ ウチらだけ、また貧乏クジやんな？」

「ハツハツハツ……では、一連の事が片付いたら御馳走してあげようじゃないか？」

「だくかくらッ！」

「え！ 御馳走？」

「うむ。無事任務を遂行したら、みんなを私の御用達ごようたしであるレストランへ連れて行ってあげよう。地球産食材も食べられるような高級レストランだよ？」

「地球産ッ！ 培養養殖やなくてッ？」 魅惑の言葉に、ウチはソワソワ浮かれた。「食べたいなあ……ウチ、食べてみたいなあ……」

「……簡単に懐柔されんな。脳ミソふわふわ綿菓子娘」

「ハツハツハツ ♪ 無論、マリ……コホン……ハウゼン博士も一緒にね★」

「……どさくさ紛れにセツティングしたわね？ エロ長官？」

「わーい ♪ ウチ、がんばる！」

「ハツハツハツ……頑張ってくれた御褒美だよ ♪ 」

「アタシの話を聞けーッ！」

「リンちゃん ♪ 楽しみやんね？」

満面の笑顔で振り向いた途端とたん——カコカコーン！——二刀流の投擲とうてきが、ウチと長官をダメージに沈めた！

ウチはリモコン、長官はボウル型菓子容器。

肘折り交差に構えるリンちゃんの事後フォームは、何や // 苦無を投げ終えたくノ一”
みたいやつた。

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「……黙れ、脳ミソぷるぷるゼリー」

あれ？ ついに「娘」いう形容詞が消えたねえ？

ウチの銀暦事情 Fractal. 5

斯^かくして、現状に至る。

『ま、大まかには把握しているか……』

ウチの述懐を聞き終わったリンちゃんは、関心薄く航行手順のコンソール操作を再開した。

「それにしても、あの〈カツオであべし〉エライ強そうやったね？」

『……〈カツオノエボシ〉ね』

この数時間前、ウチらは目標と接触しとんねん。

3 f フラクタル / 2 b ブレンディング 次 元での出来事や。

ほんでもって、軽く一戦やらかした。

だって〈ツエレーク〉を捕捉するなり光撃^{こうげき}してきはつたんやもん、アチラさん。

せやけど、そこは〈ツエレーク〉——銀邦^{ぎんぽう}の切り札にして、ハウゼン家の私船や。

互角以上の善戦で、逆に痛手を負わせたねん。

あ、出撃した〈エイザーナ〉&〈ミヴィーク〉との連携も外せんよ？

うん、ウチとリンちゃん功績も大きいねん。

それはともかく、結果、巨大クラゲは〈フラクタルブレイン航法〉で逃亡。

ウチらも、すかさず追跡——で、この次元宇宙へと辿り着いたいうワケや。

と、ここまでの情報を鑑みて、ウチは軽い疑問をふと抱く。

「あれ？ 発見してから一週間、銀邦ぎんぽうかて黙ってたワケじゃないやん？ それこそ〈軍属スペースシップ宇宙戦艦〉で……」

『応戦したみたいよ？ けど、手に負えなかった。理由はふたつ。ひとつは〈フラクタル

ブレイン航法〉を応用した神出鬼没ぶり。もうひとつは〈宇宙クラゲ〉自体が脅威的怪

物だった事。あの光撃こうげきも、おそらく高出力レーザーたぐいの類と思われるし』

「銀邦軍ぎんぽうでも歯が立たないって、どんだけスゴイ〈クラゲ〉やの？」

『だ〜か〜ら〜！ 〈OTF〉実装だツツの！』

「ああ、そやった。そうでした。えへへ ♪」

ふえ？

さつきから頻繁に出てくる〈OTF〉ってのは何やって？

う〜ん、正直ウチにも詳細は説明しづらいんやけど——平たく言えば //宇宙人の超科

学技術を疑似再現した応用技術”ってトコやるか？

実は〈宇宙人〉との邂逅は、旧暦時代からあるにはあったんや。国家レベルで極秘裏に。

ほら、旧暦時代に物議を醸しとつた『ロズウエル事件』とか『フラットウツズ事件』とか『エリア51』とかあるやん？

アレって、実は“在る派”が正解だったんよ。

まあ、あの手の人種は万事を〈UFO〉へと結びつけたがるから、ほとんどが眉唾論なんやけど。大概は子供染みたこじつけ甚だしい夢想やし。

それでも、ごく少数ながら実在例があったのも事実なんよ。

そうした信憑性に富む事件は、国家プロジェクトチームによつて研究解析が為されてきたんやって。

そやけど、そもそもブラックボックスの塊のようなUFOのテクノロジを、格下科学で得ようなんて土台無理な話やん？

せやから、現行科学技術で擬似的に再現しようというコンセプトが〈Over Tec norg y F i e d b a c k〉——即ち〈OTF〉やねん。

ほんでもって、ウチらの〈ツエレーク〉も〈OTF搭載艦〉だったりすんねん。

だから、単機で〈フラクタルブレーション航行〉も可能なんねんな？

『ま、それでアタシ達に白羽の矢が立ったってワケ。〈OTF〉には〈OTF〉を……つてトコでしょうね。フラクタルブレン航法を単機行使できるような〈宇宙船〉^{スペースシップ}は、現在のところ〈ツエレーク〉だけだし。正直いつて適任どころか唯一の対抗手段とも言えるわよね』と、リンちゃんは肩を竦める。

「せやけど、あの〈クラゲ〉は何なんやろね？」

『さてね？ それを突き止めるのも、アタシ達の任務。少なくともアタシは〈生物兵器〉と考えてるけどね』

「何で？」

『生物的に〈フラクタルブレン航法〉を備えている生物なんて聞いた事もないツツの。おまけに触手から破壊光線なんか出すし……。どんな進化論よ？ 生物としては不自然過ぎるツツの』

「せやけど、何で〈フラクタルブレン〉って断定できるん？」

『アタシ達の次元宇宙では、人類が宇宙進出してこの方、他の生態系と遭遇した試しは無い。だいたい〈銀河連邦〉って言ったところで、宇宙進出した“地球人種子”の連合体——別に〈地球外生命体〉と邂逅したワケでもないんだから』

「現在^{いま}は無^ないけど、これからあるかもしれないよ？ ねえ？ イザーナ？」

『キュー ♪ キュー ♪』

えへへ ♪ この子も同意や ♪

『……『フェルミのパラドックス』？ 否定はしないけどさ、確率は天文学的に低いわよ』

「何？ その『ハルミのデトックス』って？」

『……『フェルミのパラドックス』だっつーの。誰だ “ハルミ” っつて。要するに “銀河が果てしなく広い以上、地球と同じ環境の惑星が無いはずはない。同等以上の知的生命体も必ず存在する。にも拘わらず、一向に接触が無いのは何故だろう” っつて概念——旧暦の物理学者 “エンリコ・フェルミ” が唱えた一種のジレンマ論よ』

「ああ、せやねえ？ ハルミさん、エライトコ気付きなはったねえ？」

『……だから、誰だ “ハルミ” っつて』

「そやけどな？ いろいろぎょうさんおった方が、ウチ楽しい ♪」

『はあ？』

「どの宇宙も、こないに広いねんもん。地球人類だけやったら、きつと寂しいよ？」

『つたく、アンタは……』

何や？ リンちゃん？

呆れたんか共感したんか分からんテンションで溜め息ついたねえ？

と——「あ、せや！」——ウチは妙案閃いてペアと明るい笑顔に染まった！

「リンちゃん、さっきのマリーの説明把握してんのやよねえ？」

『へフラクタルブレイン概念』？ まあね』

細かいコンソール操作に集中しながら、無関心に応えるリンちゃん。

「せやったら、リンちゃんが教えて？」

『……は？』

「リンちゃん、頭ええもん ♪ 説明も巧いもん ♪ リンちゃんの説明やつ

たら、きつとウチにも解り易い ♪ 」

『え〜 ♪ ヤダア ♪ 』

にっこりと笑顔を彩ったリンちゃんは、親友の頼みを快く拒否して……って、アレ？

もしかして、いま「イヤ」言うた？

ウチの聞き間違い？

「あんな？ リンちゃんなら、ウチにも解り易……」

『あはははは☆ 無理イ〜 ♪ 』

『……………』

朗らかな笑顔で言いはった。

「何で？」

コクンと訊ねるウチに、リンちゃんは温顔ににっこりと返す。

『だって、サルに『ハムレット』は書けないし〜？』

あ、せやね。

確かにサルに『ハムレット』は……うん？

「誰がサルやの？」

『アンタ ♪ 』』

うん、聞き間違いやない。

まるで聖職者のような温和性で毒吐きよつた。

まあ、この「見た目の可憐さに反して辛辣しんろうな気丈さ」いうのが「リンちゃんらしさ」

なんやけど。

「リンちゃん薄情や！ 親友パートナーのウチが無知のままでもええの？」

『仮定義した縦軸次元がブレーション構造で、各横軸にはフラクタル構造が発生している。

以上。理解できた？』

「うう、えと……えつと……あんな？ もつと簡単に説明して？」

『だから、無理だつて言ってるツツの。これが理解できないなら、もう打つ手は無いわ

よ。これ以上の簡単な説明は無いんだから』

ウチの必死さに反して、リンちゃんの物腰はあくまで沈着。まるで幼い妹の駄々を諫いさ

めるように、涼しく流しとる。

「ふえ〜ん……リンちゃん、意地悪せんと教えてよ〜？」

『箆びょうに水を注ぎ続けるほど暇ひまじゃないツツーの』
「箆？」

『アンタの脳ミソ』

ああ、なるほど。

リンちゃん、ウマイねえ？

って、違ちがうツ！

「あ！ せやったら、一項目覚える度たびに白玉抹茶パフェをご褒美に付けたらええよ？

そしたらウチ、やる気出る ♪」

『……アンタ、曲芸仕込みの動物か』

「ふぐう！ リンちゃんの意地悪！」

『はいはい』

「性悪！」

『はいはい』

「ウチよりおっぱい大きい！」

『ありがとう』

全部涼しく流されたわ……。

「ふぐう〜〜！」

ウチ、膨ぶくれた！

悲しなった！

『め……目に涙溜めてムクれんなツツの……しよ……小学生じゃあるまいし』

「ふええええええん！ リンちゃん、意地悪やあ……！ ふええええええん！」

『なな泣く事ないじゃん！』

「イヤやあ……！ ウチ、リンちゃんがええええええ！ ふええええええん！」

ウチが大号泣した直後——『はいはい、そこまで♪』——突然割つて入る

気の抜けた美声。

聞き覚えのあるその声音は、先刻まで難儀な講釈をしてくれた女性の声やった。

口調が思い切り変わつとるけれど。

心当たりがありすぎるが故ゆえに、ウチとリンちゃんの喧騒けんそうも一時停戦。

そして同時に、恐る恐る声の主へと目を向ける。

ツエレークとの通信モニターには——やはりと言うべきか——マリー・ハウゼン女史

が映とつた。

ただし、メガネは掛けていない……って事は、つまり、もうひとつの人格「裏マリー

”や。

その事実を認識し、ウチとリンちゃんこわばの表情が思いつき強張る！

ウチの涙も一瞬にして引っ込んだわ!

『モモちゃん、リンちゃん、ケンカはメツよ?』

幼児を優しく叱る母親のように、マリーは軽く頬を膨らませる。

『あ……あの、マリー? メ……メガネ……は?』

恐る恐るに訊ねるリンちゃん。

『んとね、コレ?』

上目遣いにそう言つて、マリーは愛用のメガネを取り出した。その仕草はイタズラを見つけられた子供のようで、メチャクチャ可愛らしいけれど……。

で、肝心のメガネはというと——フレームがグチャグチャに折れ曲がり、レンズは割れ砕け、見るも哀れな残骸と化しとつたよ。

『さつき、うっかり踏んじやつた ♪』と、可愛らしいテヘペロに染まるマリー。

『うわああああ……あああああああいつ!』

先程までの展開を忘れたかのように、見事なハーモニでパニくるウチとリンちゃん!

狭いコックピット内で、頭を抱えて乱れる様がユニゾる!

いま、ウチらの思いはひとつ。

つまり「これまたメンドくさい事になった!」や。

みんなは知らんけど、マリー・ハウゼンは人格をふたつ持つてるねん。

そして、彼女の人格入れ替えとなるスイッチが、メガネの有無や。

このメガネを掛けてないマリーを、ウチらは便宜上「裏マリー」と呼んでるのや。

通常の「表マリー」は、完璧な才色兼備ぶりを宿した大人の女性。豊富な知識量も去る事ながら判断力や決断力も素早く、とにかく頭の回転が早い。

一方で「裏マリー」は、完全に「マイペースな天然癒し系」やねん。おまけに状況把握能力などは著しく欠落しとる。知識や経験は「表マリー」と共有しとるんやけど、それを有効に応用するだけの器量は無い。

で、この「裏マリー」の厄介な点は、自覚無きトラブルメーカーとしての側面が非常に強い事やってん。

それは総て天然が為せる業ではあんなねんけど……。

ウチの銀暦事情 F r a c t a l . 6

『さて、お話は、だいたい分かりました。♪』

天真爛漫な笑顔で、マリーは状況把握を自己申告する。

いや、どうせ分かってないやろ？

『要するに、モモちゃんは仲間外れになったみたいでイヤだったんだよね？』
違うよ？

当たらずとも遠からずの範疇はんちゆうではあるけれど、何か違うよ？ 表現が。

『じゃあね、わたしがちゃんと説明してあげるね？』

ほんわか担任教師が微笑ほほえんだ。

いや、せやから……そもそも、マリーの説明で理解できなかつたんやん？
助け船を求めてリンちゃんを見遣みやると——あ、そっぽ向いとるし。

さては無関係を決め込んだん？

場の空気など露つゆほども悟らずに、マリーは説明を始める。

『モモチちゃん、まずケーキを想像してみて?』

「ふえ? ケーキ?」

『モモチちゃんの好きな白玉抹茶のケーキが、丸々あるとするよね? とても大きなホー

ルサイズの。でね、一層目が生クリームで、二層目がスポンジで、三層目が白玉入り抹茶スフレで、四層目もスポンジなの。この各層が重なった造りを、ブレイン構造だと考えてみて?』

ふわあ? おいしそうやわあ ♪

って、違ちやう!

ん? つまり——

「——つまり、違う層が重なってる……って単純な解釈で、ええの?」

『そうそう! でも、層の性質が違ってても、それをひとつにまとめた解釈で〈ケーキ〉だよね? このケーキの層と同じで、宇宙も『異なる宇宙同士が次元層で重なってる』って考えるのがブレイン宇宙構造の基本的解釈なの。違う宇宙が次元層で重なっていても、まとめて〈宇宙〉という括くりになるでしょう? 〈ブレイン〉っていうのは〈膜〉っていう意味だから、要するに“次元宇宙という名の膜が重なってる”って考え方なのね。ただ、ブレイン宇宙層はケーキ層とは違って、現在確実視されている数だけでも十二層になるんだけれど……』

「せやけど、単に重なってただけなら別次元宇宙への航行なんて、そんなに大変な事でもないinchやうの?」

『もしもモモちゃんがケーキの上で蠢く微生物だったとしたら、一番上のクリーム層を抜けてスポンジ層へ到達するだけでも大変でしょう? 層の間にウエハースなんか敷いてあつたら、もう大変!』

……その表現イヤや。

『さて、これで〈ブレーション構造〉は、なんとなく理解できたかな? じゃ、次は〈フラクタール構造〉の説明ね?』

理解……できたん?

自覚はあらへんけど?

ま、ええか。

“表マリー”の説明よりは解りやすいし……。

『今度はケーキの層を〈次元〉と考えて、抹茶スフレ層の白玉それぞれを〈宇宙〉と考えてね? いい?』

「うん、ええけど?」

『じゃあ……食いしん坊のモモちゃんは、上から指を突っ込んで白玉を摘み取ろうとします』

「ちよつと待つてーーツ？」

いきなりの誤解を招く例文に、ウチは思わず絶叫訂正！

「そんな意地汚い食べ方、ウチはせえへんもん！」

『だ〜か〜ら〜、仮定だつてば〜』

いくら仮定やからつて……。

あれ？ リンちゃん？

何で顔を背けて、笑いを噛み殺してるん？

『はい、白玉が取れました〜！ でも、アレレ？ その隣に埋まっていた白玉の方が大きいですね〜？ モモちゃんは悲しくなりました。シクシク』

……此処は「ハウゼン幼稚園」なの？

『そこでモモちゃんは、また指を突っ込みます！ 今度は、さつきよりも少し斜めに指を入れてみました』

「……せえへんつてば」

『白玉は無事に取れました〜！ さつきより大きいやつです〜！ すこし指を入れる角度を変えただけなのに……不思議ですね〜？ そこでモモちゃんは指を差し込む角度を毎回変えて、他の白玉もほじくり出す事にしました』

「せえへんつてー……ーーツ！」

何や、コレ？

何や、この辱め？

ふええ……もうイヤやあゝ！

顔から火イ出そうやあゝ！

リンちゃんに至つては、コンソールパネルに突つ伏して笑い死にしろし……。

『白玉は全部、形も大きさも違いました。指を入れた穴は同じなのに、角度を変えると出てくる白玉は違うのです。不思議ですね？』

ウチは不機嫌さを隠しもせず、膨れっ面で答える。

「別に不思議やないよ。入れる穴は同じでも、その先にある白玉は全部別物なんやから」
『そう！ それなの！』

「ふえ？」

『全部“抹茶スフレ層に埋まっている白玉”でも、個々の出来には微妙な違いがあるから同じではないでしょう？ それと同じで、同一の次元層に存在する宇宙でも、それぞれが微妙に違うのよ。だから、次元突入の際に座標方向性を変えるだけで、微妙に異なる宇宙へと到達するの』

「つまり、進入角度と到達座標によつて異次元宇宙の性質が決まる……つて事なん？」

『抹茶スフレ層全体にある白玉は、それぞれが全然異なるよね？ 大きさや形はまだし

も、細かくいえば“粉の生産元”とか“機械の調整具合”とか“白玉粉を作った人のプロフィール”とか“練り上げるタイミングのコンマ秒での差”とか……同じ条件の物は、ふたつと無いでしょ?』

「病的に細かいよ?」

『うん。でも、その細かな差が、宇宙へ置き換えた時には重要な。一見同じ宇宙に見えても、実際には微妙な差があつて、全く同じ宇宙は決して存在しない。例えば“モモちゃん”がサイボーグの宇宙”もあれば“モモちゃん”がサイキッカーの宇宙”もある。そうかと思えば、果ては“モモちゃん”が存在しない宇宙”だつてありえるの。これは本当に一例で“モモちゃん”を基準に考えた宇宙”だけでも、それこそ無限にあるのよね』

『『存在しない』』とか言われると、ゾツとするわあ……』

『そうよね。でも、これは“モモちゃん”を基準にした例だけで、基準を他へ移すともつと膨大な数になるの。“銀河連邦”が設立されていない宇宙”とか“イザーナ”が開発されていなかった宇宙”とか。或いは“人類が死滅した宇宙”だつてありえるのよ?』

「し……死滅うーッ? そ……そんなアカン!」

ウチ、慄然と硬直したわ!

『例よ、例! もつと小さな例でいうと“いま地球にいる橘たちばなさんが小石を蹴つたか蹴らないか”なんていう些細な事でも分岐した宇宙が発生する。ね? 無限大でしょ?』

「せやけど、それって普通にへパラレルワールドへ概念と違ちがうの?」

『うん、そうだよ。でもね? これにへフラクタル構造を適応させると、この差が微妙な宇宙ほど近くに存在してて、差が激しい宇宙ほど遠く離れている形になるの。さっきのケーキの例でいうとね? モモちゃんが指を入れた辺りは“白玉”だったけれど——』

「……入れへんつてば」

『——外れたところでは“果物”かもしれない。もっと外れた位置なら“ダイヤモンド”や“ウラニウム”かもしれないのよ』

「あ、だから『コンペイトウの出来損ない理論』なワケや?」さつき「表マリー」が何をさせたかったのか——ようやくウチは解ったような気がした。「つまり、そうした微妙な差が次々と際限なく派生していくから、ああした“線のインフレ”みたいな図形になるワケやね?」

『そうそう! だからね? 縦軸の次元層はケーキの層、横軸の分岐宇宙はたくさんの白玉なのよ。解とけた?』

「うん ♪ 漠然ぼくせんとやけど……」

『それでいいと思う』マリーは嬉しそうに、満面の笑顔を浮かべた。まるで落ちこぼれ生徒が、ようやく公式を解いた瞬間に立ち会った先生みたいに。『モモちゃんは、漠然ぼくせんとし

た感覚でしつくりとくればいいのよ。解釈の在り方なんて、人それぞれなんだもの』

『楽しい個人授業中、申し訳ないんだけどさ——』不意にリンちゃんくちが口を挟んできた。その口調はさつきまでと一転して、規律然とした緊張を孕はらんだ。『——前方からエネルギー反応が接近中！ 到達推定距離、およそ2Cメートル！』

すかさずウチも座り直し、気持ちいを操縦体勢へと切り替えた。

「攻撃？」

『違うわね。間違いなく航行物体よ』

ウチの質問を簡潔に否定しつつ、リンちゃんはパネルに輝き浮かぶイルミネートキーを次々とタッチ操作する。

「まさかヘクラゲ？」

『待ち伏せた？ なくはないけどさ……』

リンちゃんも完全には否定せえへん。

そんなウチとリンちゃんの緊迫したやりとりにも、お呼びじゃない方のマリーが加わる。

『まだ、なぐんにも準備してないのに……困っちゃうね？ ブウ！』

……一気到场違いな脱力感に満ちたわ。

「可愛く膨れてる場合やあらへん！ 艦長、マリーちゃん！」

『あ、そうだね？ うん、そうだ！ 頑張んなきゃ、わたし！』

小脇絞めて小さくガツポーズ！

いや、言われんでも自覚してくれへん？

『で？ モモちゃん、リンちゃん、どうしよつか？』

アカンわ、この人。

きつと『使命感』いう文字が辞書から落丁しとる。

と、リンちゃんが的確な判断力に一喝した！

『狼狽うろたえない！ とりあえず識別が先！』

リンちゃんのパネル操作は素早く、そして、正確やった。

その手慣れた感覚がもたらす指捌ゆびさばきは職人技の域にも映る。

『ニユートリノビーコン、出す！』

ミヴィークが前方へと光速素粒子弾を撃った！

いや、もちろん肉眼では見えへんよ？

これは次元航行直前にへ宇宙クラゲにも使用した物で、本来は追跡などに用いる素

粒子マーカーや。

要するにな？

えとお……えつとお……。

「……あんな？ マリー？」

『なあに？ モモちゃん？』

「……へニユートンのベーコン」って、何？」

ウチの質問にマリーは優しく微笑み、リンちゃんは『アタシが知りたいツツの』と吐き捨てた。

『つまり“人工ボソン粒子をニュートリノコートリノコーティングした素粒子マーカー”の事よ？ 光速を帯びるニュートリノコートの性質によつて、如何なる距離でも初速着弾するし、障害物に関係なく透過貫通する特性があるの。おまけに不可視だから、気付かれにくいメリットもある。指定座標で拡散した後、対象表面に満遍なく付着した人工ボソンはヘイザーナやヘミヴィークが発する対波動ボソンとの相互反応によつてレプトン衝突現象を起こすの。その量子反響を電子エコーケーション感知システムが受信し、コンピュータが解析した仮想機体像から様々なデータを割り出してくるといふ構成なのよ？』

「ふぐぐ……解らへん！」

『うん？ モモちゃんに解り易く例えるなら“透明人間に頭から小麦粉を被せ掛けるようなモノ”かな？』

「あ！ そんなら解ったわ ♪」

マリー、につこり笑^{わろ}た。

リンちゃん、深い溜^ため息^{いき}や。

「せやけど、リンちゃん？ そないなモンをブツ掛けて、どないすんの？ 今回、追跡せえへんやん？」

『今回は追尾目的じゃないツツ一の。さつきマリーが述べた理屈の応用になるけど、ニユートリノビーコンは拡散付着した機体データを表層的に解析し、その機体像を仮想映像化する事も可能。それを狙ったのよ』

「……どゆ事？」

小首傾げるウチを一瞥^{いちべつ}だけで無視したリンちゃんは、テキパキとしたキータツチ操作の後に処理報告を読み上げる。

『仮想モデリング完了……機体映像、出すわよ』

そして、メインモニターへ問題の機体像が映し出された。

その機影は……！

『なっ？』

同時に驚きの声を上げるウチとリンちゃん！

対照的にマリーは『あらあら〜？』とゆつたりしたマイペース口調。一応は驚いてい
る様子やけど、伝わり辛いわあ……。

映し出された正体不明機は——宇宙を泳ぐへエイやってん！
いや、比喩表現やなく、読んだ文面そのままの！

ウチの銀暦事情 F r a c t a l . 7

「どう見てもヘイザーナ〈やヘミヴィーク〉と同じじゃん！ ただヘエイ型〈なだけや！
何なん？ アレ？」

『ちよつとマリー、何なのよ！ アレ！』

『え〜？ わたしに言われてもお〜？』

『このヘミヴィークもヘイザーナも、ハウゼン製でしょ！』

『うん、そうだよ？ ついでに言えばヘツエレークも。ウイリスお爺ちゃんが着想した
設計図を基にして、銀邦ぎんぽうに建造してもらったの ♪ 』

あつけらかんとした温顔で言いはった。

『じゃ、やつばハウゼン製じゃないのよ！』

『違うってば！ あんなの、お爺ちゃんの残した設計図にも無かったし、わたしだって監
修してないもん！』

プウと頬つぺた膨らまる二〇歳はたちの天才美女。

アカン！

帰って来て！ 表マリー！

と、その直後！

『ケルルルルッ！』

『キュウーッ！ キュウーッ！』

今度はイルカとシャチが興奮に騒ぎだした！

気性の荒いヘミヴィークは攻撃的な警戒心を現し、おとなしい性格のヘイザーナは脅えながら威嚇いかくしとるようやった！

「よしよし……どないしたん？ 怖ないよ？ イザーナ？」

コンソールを撫なで撫なでして宥なだめたげる。

せやけど、あんまり効果無しや。

「リンちゃん？ この子達、どないしたんやろ？ エライ脅えとるよ？」

『……そりやそうでしょうよ』レーダーモニターへと釘付けのまま、リンちゃんは深刻な表情に染まっとる。『アイツ、追われてる！ レーダーに追尾機影反応あり——エネルギー測定値が大きいから、こっちはへ大型宇宙船宇宙船に間違いない！ おまけに時折、高速熱源反応——つまり攻撃されてるって事よ！ ミサイルかビームか知らないけど！』

「分かった！ ウチ、救たすけてくるね！ 行くよ、イザーナ！」

『キューツ！』

『どつちにせよ、もうすぐ視認範囲だから——つて、モモツ？』

リンちゃんの制止、ちよつと遅かったわ。

ウチとイザーナ、もう飛び出しとつたもん。

本意気になったヘイザーナへの航行速度は速い！

五分もせんと見えたんは、被弾に喘ぐ^{あえ}ヘエイと、その衰弱に容赦無い追撃を加える

イジメっ子！

船首に大きなドクロをあしらった船や！

せやけど、誰であろうと関係あらへん！

弱いものイジメはアカン！

「イザーナ、突撃や！」『キューウ！』

星の大海で縦横無尽な曲を描いた！

わざと目障りになるように、ドクロ船の周囲を纏^{まと}わり泳ぐ！

程^{ほど}なくして、船首のドクロが目から光線を撃ってきた！

どうやらウチとイザーナに標的を推移したようやね？

うん、それでええ。

相手の関心をウチらへ惹き付けければ、それでええ！

これで〈エイ〉は、少しでも射程から離れられる！

「当たらへんもん！」『キューツ！』

ピッタリとした呼吸に、ウチとイザーナは旋回して避ける！

『キサマ！ 何者だ？ 我^わが邪魔立てをするなら、誰であろうと容赦はせんぞ！』

いきなり宣戦布告されたわ。

あ、せや！ 自己紹介しとらへん！

「ドクロさん、こんにちは ♪

ウチ ♪陽^ひノ咲^さモモカ ♪ 言うねんよ？ 宜^{よろ}しゆうね

？」

『あ、こんにちは。こちらこそ……って違うわ！』

怒られたよ？

ウチ、笑顔で挨拶しただけやんな？

明るい挨拶、大事やんな？

『と……ともかく！ この〈宇宙の帝王……を夢見る帝王〉を邪魔するなら容赦はせぬ
！』

何やコメントしづらい複雑な肩書を自己紹介されたわ。

『いくぞ！ ドクロ変形！』

雄々しい叫びに呼応して、ガキヨガキヨと分割されていく船体！

その内部から、腕が——脚が——頭部が——割れた船内からパーツ解放されていた

！

徐々に形成されていく人型！

船首が直角に折れて、大きなドクロが胸飾りになる！

頭部もドクロやから二段ドクロや！

その側頭部からは野牛みたいな角が生え伸び、悪魔然とした禍々しいまがまが威風を演出しと

る！

そして、完成したんは、全高八〇メートルはあろうかという巨体！

「ふええ？」『キユキユウ？』

イザーナと二人して驚嘆に見入ったわ！

『ドクロイガアアアーツ！』

……まんまやった。

『フハハハハ……ッ！ ワシは絶対に伝説のネクラナミコンを手に入れてみせる！

その邪魔立てをするのであれば、誰であろうと容赦はせん！』

「根暗な巫女？」

『ネクラナミコンツツツ!』

何や?!

お嫁さん探しやつたん?

『さあ、いくぞ! イルカ娘! 悪の名に於いて正義の鉄槌を下す!』

「悪」なん? 「正義」なん? どっち?

『喰らえイ! ドクロブレエエード!』

ウチらを狙って振り下ろされる巨大な半月刀!

避けた。

『ドクロビイイーーム!』

胸のドクロが両目から光線が放たれる!

避けた。

当たるワケないやんな?

その対比も去る事ながら、機動力かて違うもん。

せやけど、困ったねえ?

あの巨軀相手では、コツチも決め手になりそうな武器があらへん。

「あんな? イザーナ?」

『キュウ?』

「ウチ、アレやつてもええんかな？」

『キューツ！ キューツ！』

意気揚々と「よし！ やろう！」言うとする。

うん、せやね？

攻撃してきたんはアッチやもん。

「ほんなら、いくよ！ イザーナ！」

『キユウ！』

ウチとイザーナの合意で、機体は高々と頭上へと跳んだ！

『キユキユキルルルルルーーーツ！』

昇天の加速にイザーナが甲高く鳴く！

宇宙空間でも機能する〈特殊超音波〉と宇宙量子へオルゴンとの干渉が、プリズム光

彩の大きな輪へオルゴネーションリングを発生させた！

それは連続的に発生し、神秘的光彩のリングトンネルと形成される！

一旦、旋回に距離を取ったイザーナが、再度、トンネル目掛けて突進！

ウチは頭部コックピットから出ると、イザーナの鼻頭へ立った！

静かに臉を綴じ、カチューシャ形のへシンクロコネクターに精神を集中させる。

それに呼応してへシンクロコネクターに嵌め込まれた赤いクリスタルへトランスコ

ア〜が起動の輝きを息吹きだした！

そして、ウチは叫ぶ！

「G ギヤラクシー フォルム・メタモルアップ！」

渾身の跳躍にヘリウムブースターの高出力を加味し、眼前の〈オルゴネーションリング〉へと飛び込んだ！

潜在の世界は、まるで御伽世界のようにメルヘンチックや……。

せやけど、ウチに生じるんは、超常的変化そのもの！

徐々に巨大化していく肢体！

宇宙量子〈コスモマター〉へオルゴンを分子レベルで吸収融合し、質量変換しとるからや！

此処は、それを可能とする局地的特異空間やねん。

無論〈OTF〉や。

続けて、後追いに飛び込んだヘイザーナが空中分解——各パーツが〈プロテクター〉として、ウチの五体に装着されていく！

変身を終えた現状のウチは、約四〇メートルの大きさやった。

「Gモモ！」

凛々しくも可愛くポーズを決めて名乗る！

『ズ……ズルい……』

「ふえ？　ズルい？」

ドクロさん、ワナワナ震えだしはったねえ？

『ズルいぞ！　何だ！　〃巨大な萌えっ娘〃　って！』

「知らへんよツ！　ビシツと指差して、何を糾弾してんのんツ？」

『こつちなんか　〃胸にドクロ〃　だぞ！　誰が見ても　〃悪役〃　だろうが！』

そんならドクロ取って、改名したらええやんな？

『おまけにノリノリで美少女戦士然と決めポーズとは！　そんなに人気欲しいのか

！』

ノリノリやあらへんねん。

コレせんとプロテクター機能しとる　ヘイザーナ～との感覚伝導率が落ちんねん。

そういう仕様やねん。

裏マリーの趣味が全開やねん。

本音はウチかてイヤやねん。

恥ずかしいねん。

『もう、いい……こうなったら、正々堂々　〃悪役〃　として生きてやる！』

あ、やっぱ　〃悪役〃　なん？

っていうか　〃正々堂々とした悪役〃　って、何？

『喰らええい！ イルカ娘！ ドクロバース——』『モモーツ！ 無事ーツ？』『——
トオオオツ？』

突然、後頭部への猛突進を喰らってつんのめったわ……何かする前に。

って、アレ〈Gリン〉や！

リンちゃんとミヴィークの〈G^{ギヤクワン} フォルム〉形態や！

「ふええ……リンちゃん！」

「アンタは——ツ！」

「ぎゃん？」

飛びつこう思うたら、グレードアップしたハリセンアプリで叩かれたよ？

巨大なイルカ娘が巨大なシヤチ娘にドツかれたよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「潤々しながら『痛いよ？』じゃないツツーの！ アタシに心配掛けんな！」

「リンちゃん、心配してくれたん？」

「ううう……うっさい！ 少しは反省しろツツーの！」

「えへへ ♪ リンちゃん、心配してくれた ♪」

『ぬうう……仲間か！』

あ、ドクロさんがダメージから復活はったねえ？

『だが！ 何人来ようと、この宇宙の帝王……を夢見る帝——』『ちよつとアンタ！』

ハリセンをビシツと突きつけるGリンちゃんの怒気どきに、悄々しわしわと呑まれはった。

「アンタ、さつきモモに何しようとした？」

『えっ？ え……つと？』

「女の子相手に何しようとしたかつて訊きいてんだツツーの！ このセクハラロリコン！

銀邦倫理協会ぎんぽうに訴うったえるわよ！」

『ロ……ロリ？ 倫理……？ ええ……？』

あ、困ってはる。

「あと、その趣味悪いドクロデコも取れ！ ポリシーか何かと勘違いしてるみたいだけど、傍目に不快なだけだツツーの！」

『ええええええ……ツツ？』

リンちゃん、無敵や！

『あの……スミマセン？ 私わたくし、こう見えても宇宙の帝王——を夢見る帝王』でして……』

「だから何よッ！」

『その……このドクロとか圧倒的な武力誇示は、ある種のアイデンティティーと申しま
すか……その、何と言いますか……威厳とか……ねえ？』

「四の五の言うなーッッ！」

『てんぷくッ?』

あ……顔面ハリセン、スパーンいったわ。

ドクロさん、顔面押さえて苦悶しとる。

ちよつと涙目や。

アレ、鼻頭入ったねえ?

「へ宇宙の帝王……を夢見る帝王」って事は、アマチュアじゃない！ 実績も無いアマが

「威厳」とか言うな！ おこがましい！」

……へ宇宙の帝王」にプロアマあんのん?

『クツ……フフ……アーハッハッハッ!』

フルフルと震えたドクロさんは、ややあつて吹っ切れたかのように笑い始めた。

『ウキイイーッ! 何だ、このアホ臭い展開は! もういい! みんな壊してやる

!』

ヒステリックに『帝都 ● 語』みたいなフレーズ叫びはったよ?

次の瞬間、宣言通りの猛攻が暴走する!

『喰らええい! ドクロバーストオオオーッ!』

ドクロビームに、全身砲門の一斉掃射!

星間ミサイルも節操なく打ち上がった！

「危ない！ 危ないで！」

「ちよつと！ やめなさいッつーの！ 宇宙塵をバラ撒くな！」

ウチとGリンちゃんは各部バーニアの機動力を活かした体捌きで、無差別攻撃を避けまくる！

『アハハハハハハッ！ アハハハハハハハハハハハハッ！』

狂気めいた高笑いに、破壊の権化と化すドクロさん！

つていうか、泣いてへん？

ちよつと涙声なんは気のせい？

『暴走したつていいじゃない！ だつてドクロだもの！』

今度は「相田み ●」を「みたいなフレーズ言い出しはった。

活用、間違つとるよッ？

「つたく、環境汚染すんなッつーの！ こうなつたら……モモ、アレやるわよ？」

「うん！」

提案に乗った！

ウチとリンちゃんは相手の左右から挟み込むと、両手合わせの五指を花と開く！

その掌を標的へ向けると、不可視の枷が自由を奪った！

ブースター全開のダブル特攻が、同時にドクロ船長を突き抜ける！

「Gクロスファイナル！」

二人の軌跡が十字架と輝いた！

『又オオオオー……ッ！』

エネルギー臨界の奔流ほんりゅう——「乙女の奇跡！」——G少女の決め台詞が起爆コードと

作動！

……いや、ウチらからホントはやりたくないねん。

そういう「裏マリー仕様」やねん。

ともあれ大爆発！

あ、殺生はイヤヤから破壊はせんよ？

破壊はせんけども……ドクロさんは嘖き飛んだ！

星間の彼方へと！

『おのれえええーッ！ 覚えていろオオオオー……ッ！』

あ、悪役の「お約束」になる捨て台詞吐いていったわ。

〈帝王〉やなくて〈雑魚〉ランクのやけど。

現場を少し離れた宙域で「エイ」は漂流しとった。

「どうやら被弾ダメージで力^{ちから}尽きたようや。

ウチとリンちゃんはイザーナ達を横付けにすると、その船体へと取り付く。

その外見から予想した通り、構造はウチらの宇宙^{コスモクルーザー}航行艇と一緒にやった。

せやからハッチを開ける人も造作無い。

勝手知ったる……や。

そして、操縦席には意識を失った少女が居^おった。

「^{バイタルセンサー}生体測定器に異状なし……気絶しているだけね」

「良かったあ」

安心するウチを見て、リンちゃんは優しく苦笑した。

「モモ、この娘^こお願い」

救出対象をウチに預けたリンちゃんは、コンソール機器を操作し始める。

「何すんのん?」

「マリーに連絡。座標指定して「ツエレーク」に回収しに来てもらう」

「ふくん?」

ウチは膝枕に寝かせた少女を眺めた。

小柄な銀髪美少女やった。

ウチの銀暦事情 F r a c t a l . 8

「……う？」

「あ、気が付いたん？」

ようやく意識が目覚めた銀髪少女の顔を、ウチはにぱつと覗き込む。
医療用ベッドや。

救出してから一時間強、ずっと意識失っててん。

せやから、ウチとリンちゃんが交互に付き添ってたんよ。
いつ目が覚めても、いいように。

「……誰？」

感情薄い怪訝けげんで訊ねられたわ。

「あ、ウチ 陽ひノ咲さきモモカ」言います。よろしゅうね？」

にぱつと笑顔で自己紹介したウチは、ベッド脇の椅子へと腰掛ける。

半身を起こした銀髪ちゃんは、周囲を見渡して状況把握つとに努めとつた。

「……此処は？」

「医療室やよ？」

「……何処の？」

「ウチらの大型宇宙船スペースシップへツエレークや」

「何故？」

「あんな？ 銀髮ちゃん、気絶してたやん？」

「銀髮ちゃん？」

何やら思案気に首を傾げたねえ？

「誰？」

「何や？ さつき自己紹介したやん？」

せやから、ウチは「陽ひノ咲さきモモカ」言うねんよ

？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

ジツと見つめる銀髮ちゃん。

にへへと笑顔を返すウチ。

「ふむ?」

また首を傾げたねえ?

「過去の経験データを鑑かんみるに、その『銀髪ちゃん』というのは『私』の仮呼称と解釈
していい?」

「せやよ? だってウチ、名前知らへんもん」

「ふむ?」

また首を傾げたねえ?

ま、ええわ。

それよりも優先したい事があんねん。

ウチは、いそいそと持参した袋を漁あさった。

「銀髪ちゃん、マカロン好き? ウチな? 抹茶クリーム味が大好——」

「……『クルロリ』」

「——『ふえ?』」

「私の名前」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

またジツとウチを見つめる銀髪ちゃん——いや「グルロリちゃん」やね？

ウチもジツと見つめ返し、ややあつて「にへへ♪」と碎けた。

「せやったら「グルちゃん」や♪」

「クルちゃん？」

不思議そうにコクンと小首傾げた。

あ、なんか可愛いねえ？

クルちゃんがコクンで「グルコクン」や♪

「ほんでな？ クルちゃん、何味が好き？」

「話の脈絡が成立しない」

「このマカロン、地球産でな？ 中に老舗和菓子店の餅が入って——」

「友達感覚で脱線すなーッ！」

「ぎゃん？」

ハリセンが後頭部を叩き^{はた}抜けたよ？

ウチがガサゴソと袋を漁^{あさ}っている最中にスパーンと！

「目を覚ましたなら、さっさと連絡よこしなさいよ！ このノーミスほわほわ娘！」

リンちゃんや！

いつの間にか来てたらしいわ。

ウチ、お菓子選びに夢中なつて、オートドアの開閉にも気付かへんかった。

「うう……痛いよ？ リンちゃん？」

「潤々して『痛いよ？』じゃないっつーの！ だいたい敵か味方かも判らないのに、何で

女子会感覚だっつーの！」

リンちゃん、スパンスパンと妄想ヴァーチヤルハリセンを弄もてあそんで睨にらんどるよ？

「ふぐうー！」

「イタタタタタッ？」

ウチ、リンちゃんの腰にギユウって抱きついたわ。

なだ宥めてみたわ。

「リンちゃん、イライラしたらアカンよ？ ウチ、怒ったリンちゃんイヤや！」

「イタタタッ！ モモ、痛いっつーの！ 放はなせてば、この！」

「ふぐうー！」

もつとギユツとしたよ？

「イタタタタッ！ わかった！ モモ、わかったから！」

「ホント？ えへへ、そんならええわ ♪」

にぱつと笑わろて解放わろしたった ♪

「ゼエ……ハア……こんの〈脳ミソマカロン娘〉が！」

何か言うてるねえ？

「……ねえ？ モモ？」

深呼吸に落ち着いたリンちゃんは、徐おもむろにパモ力を操作し始めた。

「何？」

にっこり笑わろうウチ。

「……アンタさあ？」

「うん」

「毎回毎回、ギリギリと締め付けるバカが何処にいんのよ！」

「ぎゃん！」

いきなりハリセンで後頭部殴り抜かれたよ？

ハリセンの質量上げたよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「早々と天井すんな！ 無邪気に背骨折られたらレーティング指定やり直さなきやならんわ！」

そんなウチらのやりとりを眺めていたクルちゃんは、何やら意味不明な独ひとり言ごとを零しとつた。

「……………既き視し感かん」

「マリー・ハウゼン……と仲間たち、まずは救出に感謝する」

クルちゃんは感情乏しい抑揚で切り出した。

現在はウチのお気に入りスポット——つまり〈食堂〉におった ♪

だって、お腹減ったんやもん。

数台のドローンが調理に勤しみ、運ばれてくる料理がテーブルを賑やかす。

ウチはそれを堪能しながら、クルちゃんへと返事した。

「ふいふいふえんふえふえーふお？」

「……………何語か、それ」

隣の席でサンドウィッチを摘むリンちゃんが、呆れた口調でウチにツツコンできはつたわ。

「ふあつふえふおふあふあふえつふあん」

「……………だから、人語喋れ」

「ごくん！ えへへ ♪ ウチ、チーズハンバーグセット大好物や ♪ 」

「ああ！ もう！ ケチャップ付いてるし！」

にぱつと笑うウチの口元を、リンちゃんがナフキンで拭き拭きしてくれた♪
えへへ♪

「あ、せや！　ねえ？　クルちゃん？」ウチは気負わぬ笑顔で、クルちゃんに語り掛ける。

「クルちゃん独りで、あの宇宙航行艇と航行してん？」

「そう」

「母艦は？」

「無い」

「ふーん？　クルちゃん、寂しないの？」

「慣れた」

「アカンよ？　それ、慣れたらアカンよ？　独りは寂しいよ？　あ、せやったらや？　今

日からウチが友達——」

——スパ——ン！

「ぎゃん？」

またハリセンが後頭部を叩き抜けたよ？

「うう……痛いよ？　リンちゃん？」

「潤々して『痛いよ？』じゃないツツーの！

この脳ミソノンセキリユティ娘！　警戒

心皆無か！」

ウチとリンちゃんを措おいて、唐突にクルちゃんおが切り出す。

「……マリー・ハウゼン、この艦の説明は陽ひノ咲さきモモカから聞いた。その超性能を見込んで、折り入って頼みがある」

「はい？ 私への頼み……ですか？」

そう返しつつ、裏マリーはランチプレートへと大量の固形食材をジャラジャラ盛つとつた。

いや、シリアルとかやあらへん。

明らかに薬剤カプセルの山盛りや。

それを見たウチとリンちゃんは、思わず唾然とした。

「……マリー？」

「どうしたの？ リンちゃん？」

「何？ ソレ？」

「高圧栄養配合サプリメント——自家製よ？」

「いや、そういう事じゃなくて……」

思えばマリーと食卓囲んだんは、今回が初めてやったわ。

いつも私室で済ませとるし……。

っていうか、こんなん食べてたん？

「バナナをベースとして、ヒジキやチーズ、シジミにトマトにケールにハチノコ……その他諸々の有用食材を約四〇種類配合したの。これなら一日辺りの必要栄養価を不備無く簡単に接種できる。効率的でしょう?」

「いや、そういう事でもなくて……………」

味とか食感は考えへんの?

それでええの? マリー?

「それで? 頼みというのは?」

進めおったよツ?

何事も無かったかのように再開しおったよツ?

「私と協力関係を結んでほしい」

「協力関係? 何のでしょう?」

「つと、その前に!」疑いもなく人の良さを返すマリーを遮さえぎって、毅然きぜんとした警戒心に訊とい返すリンちゃん。「アンタ何者だツつーの? それに、あの宇宙航行艇コスモクルーザーは何よ? アタシ達の宇宙航行艇コスモクルーザーにそっくりじゃん!」

「それに関する情報開示許可は得ていない。現状では伏せておく」

「ざけんなツつーの! そんなんで信用できるか! 相手ひとに物を頼むなら、まず素性を明らかにするのが筋ってモンでしょ!」

クルちゃんは醒めた一瞥を向け、マリーへと関心を戻す。

「マリー・ハウゼン、私と共に〈ネクラナミコン〉を探しだしてほしい」

「……………の！ 無視すんな！」

「ネクラナミコン？ 何ですか？ それ？」

「そう言えば、ドクロさんも婚活宣誓してたねえ？ 『絶対に〈根暗な巫女さん〉を手に

入れてみせる！』って…………」

「陽ノ咲モモカ『根暗な巫女』ではない」

「だから、それって何だツツーの！」

「コレ」

クルちゃんはテーブルの上にゴトンと石板を置いた。

手帳程度の大きさやけど厚みはある。

ほんでもって仄かに緑色やったけど、コレは苔やない。石の素材自体が緑掛かってん

ねん。

「何よ？ ただの石じゃない」

「ただの石ではない。コレは、ある種の〈アカシックレコード〉とも呼ぶべき情報結晶体

——その欠片」

「ふええ？ コレ『明石焼き』なん？ どんな曲が集録されてん？」

「陽ひノ咲さモモカ、コレは『明石あかしや焼きのレコード』ではない」

淡白たんぱくに否定されたよ？

と、突然、マリーが驚嘆の叫びにガタンと腰を浮かせた！

「アカシックレコード」ですって！」

何や？

一転してテンション上がったねえ？

「何よ？ そのアカシックレコードって？」

「タヌキさん？」

「陽ひノ咲さモモカ、それは『信楽しがらきやき焼』……」

またクルちゃんくらちゃんが淡白たんぱくに否定したよ？

慣れた感じに流したよ？

一方で興奮冷めやらぬマリーは、熱を帯びた口調くちようで教示を始めた。

「つまりね？ このアカシックレコードっていうのは『宇宙創造の真理とも言える膨大な情報を収録した記録物』なの！ それこそ旧暦時代から、まことしやかに実在まことが囁ささやかれていた物なんだけど、実存証拠は皆無……。それでも多くの知識探求者が追い求めて止まらなかった伝説のアイテムなのよ！」

「ふ〜ん？ コレが？」

訝^{いぶか}しげに石板を拾い眺めるリンちゃん。

「あ、旧暦伝説の芸人さん……」

「陽^ひノ咲^{さき}モモカ、たぶんそれは『明石家さ ● ま』……」

クルちゃん、よう知つとるねえ？

旧暦情報に詳しいねえ？

「ともかく、この『ネクラナミコン』は『フラクタブルブレイン』に散在してしまっている。

それを狙^{やから}う輩^は多い」

「ドクロさんも？」

ウチの質問にクルコク。

「先程遭遇した『ドクロイガー』も、そう」

「でも何だつて、そんな血眼になつてゐるんだツツーのよ？ たかだか『データベース』つ

しよっ？」

「もう、リンちゃんつてば！ コレは普通の『データベース』じゃないの！ さつきも

言つたけど『宇宙創造の真理とも言える膨大な情報』が記録されているんだから！」

マリー、小脇絞めてポンポンや。

ホッペタ膨らませてポンポンや。

……確か、二〇歳^{はたち}やんね？

「だからさ？ 仮にそうだとして、具体的に何がどうなのよ？」

「ああ、もう！ 分からないかなあ？」 非共感に落胆したマリーは、分かり易い価値観に置き換えてくれはった。「例えるなら〃ニュートンとアインシュタインとホーキング博士とステイブ・ジョブスが共同製作した限定版ゲームソフト〃みたいな物なの！ それもサイン入り！」

「要るかッ！」

「ウチ欲しい！」

「黙ってるツツの！ この脳ミソファミコン娘！」

リンちゃん、あんまりや……。

「天条リン、コレが邪よこしまな者の手に落ちたら大変な事になる」

「はあ？」

「この〈ネクラナミコン〉を総て集めた者は〈神ごの如ごとき力ちから〉を得ると言われている」

「いきなり飛躍したわねツ？ ホーキング博士とかアインシュタインとかはドコ行ったワケツ？」

「せやったら、全次元宇宙に〃白玉抹茶毎日無料フェア〃も起こせるんツ？」

「可能」

「……黙ってる、脳ミソ白玉娘」

リンちゃん、あんまりや。

「そういうワケで……マリー・ハウゼン、協力を願いたい」

「はい、喜んで！」

満面の笑顔に染まるマリーは、居酒屋みたいな元気に快諾した……って、うん？

ウチとリンちゃんは顔を見合わせ——「ちよつと待つてえええーッ？」——慌てて静止したわ！

「何を勝手に快諾してんのよ！ そんな面倒事！ だいたい、それって次空航行の長旅になるって事じゃない！」

「そやよ！ それにクラゲは？ クラゲは、どないすんの？」

「大丈夫だよお？」にへらつと朗らかに笑うマリー。「だつてへ宇宙クラゲもへネクラナミコンも両方探すから、長旅だつて退屈しないよお？」

「そういう事じゃなくてッ！」

ウチとリンちゃんの直訴も空しく、二〇歳の子供は退室した。ルンルン気分の笑顔で。

「やっぱり宇宙はワクワクでいっぱいだあ ♪」

オートドア閉じた。

絶句に固まるウチとリンちゃん。

ややあって、クルちゃんが席を立つ。

「陽ひノ咲さきモモカ、天条てんじょうリン、今後ともヨロシク」
退室した。

オートドア閉じた。

ウチとリンちゃんは、絶句に固まり続ける。

そして——「メガネ屋さんドコー——ッ？」——悲痛な叫びが、閑寂とした食堂に木霊したわ……。

ウチと惑星テネンス

ウチと惑星テネンス F r a c t a l . 1

クラゲ探索……って言うか、クルちゃん救出から二日経^{ふっかた}った。

ウチは教室の机に突っ伏して、思わず「ふぐう」と半ベソや。次の授業を準備しようとして哀しかった。

うん？ せやよ？

特に任務に当たつとらん時は、学生やねんよ？

つまり「女子^J高生^K」いうヤツや。

せやから、ウチもリンちゃんもへPHWやあらへんねん。紺色のブレザー制服やねん。

ほんでもって、此処へコスモウイズ・スクールはへツエレーク内部の都市区画^{コロープロック}に在^あんねん。

前も言うたけどへツエレークは全長三〇〇メートルにも及ぶ巨体や。

その内部は都市区画も建造されとって、そこに在^あんねん。

長期間宇宙航行を前提とした場合、いちいち惑星都市や衛星ステーションへ帰還するんは非効率過ぎて実用的ではあらへん。せやから大型宇宙船^{スペースシップ}自体を小規模な宇宙居住地として活用しとるいうワケや。

ともかく新たな指示が入るまで、ウチとリンちゃんは日常生活に戻つとる。簡単に言うたら「待機中」いうヤツやね。

「どうしたのよ？ モモ？」

隣席のリンちゃんが怪訝^{けげん}そうに訊^{たず}ねてきた。

ブレザー姿やから見た目の清廉さが一層際立つとる。

中身は同じやけど。

「あんな？ 壊れた……」

「頭^へが？」

「違^{ちが}うよ！ ヘリウム銃^{ガン}や！」

「は？」

「ウンともスンとも言わなつた……」

「次の授業『宇宙塵^{デブ}対策の射撃^リ実習』じゃん？ どーすんのよ？」

「いぶぐう……どうしようっ。」

みるみる視界が滲にじんだよ？

この〈コスモウィズ・スクール〉は、旧暦でいう「学校」とは若干概念が違ちがうねん。基本的な「学力向上教育を受けるための学習施設」だけやなくて「自身が宇宙生活へと適応するのに必要な知識や技能を拾得する教習施設」でもあんなや。

具体例としては『宇宙船の操縦方法』『エネルギー機器の扱い方』『無重力空間での作業ノウハウ』とかやね。

宇宙環境で生活するとなれば、まず最優先に習得せなアカンのは、そういう実践的技
能やもん。

それが無かったら〈宇宙航行艇コスモクルーザー〉で宙域活動も出来へんから、他惑星ステーションへ
買い物や外出も行けへんよ？

何よりも宇宙生活は些細な事で大小様々なアクシデントが生じるから、いざという時
に身を守る対応も出来へん。

……危険や。

……死と隣り合わせや。

「原因は？」

「知らへんよ」

「じゃ、心当たりは？」

「判らへんねん」

「落としたとかも？」

「落としたよ？」

「何処で？」

「家で。手エ滑すべつてツルーンと。そしたら、味噌汁鍋うどん鍋に落ちてん」

「……それだわ」

「どれだわ？」

「ドジも大概にしないと、単位不足で進級できないわよ？」

「ふぐううう……」

「だいたいアンタは、いっつも抜けて——」

「ふぐううううう……」

何や視界が涙でプールみたいになった。

どうしたらエエか分からへん。

「えつぐ……えつぐ……ふええ……」

「ななな泣く事ないじゃん！」

「せやかて……進級出来へんかったら、リンちゃんと離れ離れなつてまう！」

「はあ？ そつち？」

「ウチ、イヤや！ リンちゃんと一緒にエエ！」

「つたく……見せてみ？」

軽い溜め息がてらに、ウチのヘリウム銃を調べるリンちゃん。

「電磁銃口の調子は撃つてみないと解らないとして……とりあえず変換システムには異状無いみたいね。となると、圧射式撃鉄？ ん〜……でもないみたいだし……」

入念にヘリウム銃を観察してはる。

そしたらな？

——ズドオオオ——ン！

銃、大暴発した。

銃口からクラッカーみたいに、ぎょうさん榎茸が飛び散って、窓ガラス全部木端微塵にした。

直つたみたいや……。

さすがや！ リンちゃん！

「まったく貴女達は、毎回毎回……」

校長室——ウチとリンちゃんを傍らへ立たせたマリーは、こめかみ押さえに溜め息を

零こぼした。

これで何度目の光景やろか？

デジャヴしかないわ。

「ア……アタシじゃないもん！ これはモモが——」

「天条さん、言い訳しない」

「うう……」

せやねん。

日常に於けるマリイは、ウチらの校長先生やねん。

この「ヘツエレーク」の艦長にして校長やねん。

ウチらがマリイに逆らえん理由のひとつや。

「あんな？ マリイ？」

「陽ひノ咲さきさん、学校では『校長先生』を付けなさい。最低でも『先生』は必須です」

「あんな？ マリイ？ 校長？ 先生？」

「……分けない」

「ウチ、リンちゃんと一緒にエエ」

「……はい？」

「せやから、ウチも進級したいねん」

「だったら、勉強に励み、問題を起こさない」

「イヤや！ ウチ、勉強キライや！」

「アンタ大物か」

隣のリンちゃんも、呆れながらに指摘しはった。

マリーは再び溜め息や。

「その救済処置として、貴女達には、私の『探索活動』を手伝わせているのだけどね

……」

「いや、その『貴女達』ってのヤメてくんない？ アタシは『モモのお守り役』だし？

アタシ、成績いいし？」

せやねん。

これがウチら——っていうか、ウチ——が『マリーに逆らえん理由その2』や。

マリーの私的研究の手伝いしたら、多少は単位に下駄履かせてもらえんねん。

簡単に言えば『単位目当てのアルバイト』や。

実際、マリー自身から小遣い程度の報酬も出るけど。

ちなみに分野は『総合宇宙考察学』とかいうヤツで、文字通りに『あらゆる学問分野を総合的に融合考察して宇宙史全体を研究する新鋭分野』らしい。せやけど、それがどういったものなのか……実はウチ、よう解らへん。難しいのキライやもん。

もちろん教職者としては禁則タブーやよ？

せやから、周りには内緒や。

この事を知ってるんは、レスリー長官と銀邦政府ぎんぱうせいせいふの一部だけやねん。

まあ、そうした“学生的事情”以外にも、理由はあんねんけどね？

それは追々おいおいや。

「……とりあえず、また『個人教授』の申請はしておいたわ」

「は？ つて事は、またアタシ達〈探索〉に狩り出されるワケ？」

サラリと告げるマリーに、リンちゃんりんちゃんが頓狂とんきやうな抑揚よくようで訊ね返す。

ウチとリンちゃんりんちゃんが出動になる時は、マリーが『個人教授』として学校へ休暇申請す

んねん。

便宜的名目は『現地実習』や。

そうでもないど、長期不登校扱いになつてまうからやねんね？

もちろん、そうそうしよつちゆう罷り通る理由まかとおでもあらへんのやけど、それを可能と

しているんは『マリーが銀暦学会ぎんれきア카데미きつての天才やから』と『校長権限の職権乱用』……

それから『レスリー長官の御墨付き』という三重の威光が効いとるからや。

「つて事は、クルちゃんから何か情報の進展があつてん？」

「ええ、どうやら次なる〈ネクラナミコン〉を察知したみたいね」

「クラゲは？ どないしたん？」

「現状、行動が沈黙化しているから手の打ちようがないわ。当面はへネクラナミコン優先ね」

「つたく、どつちもこつちもメンドクサイわね」と、リンちゃんは吐き捨てた。心底辟易へきえきしてはる。「で？ いつからだツツのよ？」

「いまからよ？」

「……………はい？」

『ツエレーク、空間転移完了——量子波動安定化——現フラクタルブレイン座標照合、3
フラクタル ブレインデイメンション

f \ 4 b 次 元、マイナスコンマ00008 誤差修正——滞在可能推定時間、二時間

二〇分リミット——』

次空転移が終わった。

また別のへフラクタルブレインへや。

ウチらはツエレークの操縦室ブリッチ——とは言つても艦橋型やなく頭部内の大型コックピットやけど——から、新たな探查舞台となる宇宙空間を眺めとつた。

「んで？ そのへネクラナミコンとやらは、何処たずに有るワケ？」

リンちゃんがクルちゃんに訊ねる。

そこはかと無く不機嫌やね？

あ……たぶん、まだクルちゃんに心を許してないん？

「天条リン、訂正しておく。正確には〈ネクラナミコンの欠片〉……」

「どつちでもいいツツーの！ アタシはさっさと片付けて、面倒事を軽減したいんだから！」

「……了承した」

クルちゃんは感情の機微も見せず、徐おもむろに手近なコンソールを操作し始めた。

それによって、室内中央に身の丈以上の大きな仮想ヴァーチャルディスプレイが電子板と立つ。

そこに投影されたんは、この周域を纏まとめた宇宙海図や。

無論、事前にデータがあつたワケやないよ？

時空転移直後、ツエレークは周囲に〈ニユートリノビーコン〉を散布照射して、その反響を即時キャッチ——そのデータを基にリアルタイム構成したものや。

つまり〈クルちゃんのエイ〉を仮想モデリング識別した方法の広域版や……って、事前にリンちゃんから叩き込まれたわ。

事前にスパルタや！

ウチ、勉強キライやのに……ふぐう！

「このまま進行すれば〈惑星テネンス〉に遭遇する。そこに有るはず」

ヴァーチャル

仮想宇宙海図を指して、今後の指針を示唆するクルちゃん。

「惑星テネンス……どんな惑星なの？」と、表マリー。

「樹林や草花に恵まれた惑星。原生生物は、その恩恵によつて自然共存サイクルへと帰属している」

「ふうん？ で、何でアンタはへネクラナミコンの在処を断定できるワケ？」

露骨な値踏みを向けるリンちゃん。

クルちゃんは一瞥を向けて種明かし。

「理屈は簡単。このへネクラナミコンは、引かれ合う性質だから。私は、その意思を伝達しているに過ぎない」

「へえ〜？ アンタ、石と話せるの？ 人間相手にはコミュ障なのに？」

「別に『石』と話せるわけではない。単にへネクラナミコンの意思に関しては何感受できるだけ」

「つまり『選ばれし巫女』って？ 御大層な身分じゃん？」

リンちゃん、ちよつと攻撃的や。

コレ、良くないねえ？

クルちゃん、さすがに可哀想やんな？

「だったら、いつそ石コロと友達に——」

「ぶぐうー！」

「——なったらタタタタターッ！」

えへへ ♪ ギュツとしたった ♪

ハグしたら、みんな仲良しなるよ？

「コラ！ モモ！ 放せ！ このベアハッグ娘！」

「仲良うしてえ！ ウチ、リンちゃんとクルちゃんに仲良うしてもらいたい！」

「放せッつーの！」

「い〜やくやあ〜！ 仲良うしてえ！ ウチ、どっちも友達やもん！」

「……うっ！」

涙汲んだウチの顔を正視して、リンちゃんは少し息を呑んだ。

そして——「ハア……分かったッつーの」——承諾してくれた ♪

「ほんま？」

ウチはコクンと小首傾げて確認する。

「仲良くするかどうかはソイツ次第として、とりあえずへネクラナミコン探索には素直に準じるわよ」

「天条リン、決断に感謝する」

「言っておくけど！ もしも『アンタが信用できない』と判断したら、即座に〈敵〉とし

て認識するからね！ それに——」リンちゃん、ウチの頭を撫で撫でしてくれた。「——
この子を危険な目に遇わせたら承知しないんだから……」

何やエラい小声やねえ？

眩き、聞き取れんかったわ。

「……了承した」

クルちゃん、聞き取れたん？

耳いいねえ？

でも、これでみんな仲良しや ♪

せやからウチ、リンちゃん好きやねん ♪

ツンツンしとるけど、ホンマは優しいねん ♪

「リンちゃん大好きや ♪ ふぐう ♪」

「イタタタタタツ？」

嬉しなつてギユツとしたつた ♪

「承諾したのに、何で更に絞めつけてんだツつーのオオオーッ！」

「ぎゃんー！」

ハリセンや！

「うう……痛いよ？ リンちゃん？」

「潤^{うるうる}々して『痛いよ？』じゃないっつーの！ 毎回毎回、何でこの流れだ！ 少しは学習

しろ！ この脳ミソ新喜劇娘！」

リンちゃん、あんまりや……。

そんなこんなの姦^{かしま}しさの中で、目的の惑星は接近しとった。

もうすぐ出動や。

ウチと惑星テネンス Fractal. 2

地平線から青の天幕と緑の絨毯じゅうたんが広がってくる。

「クルちゃんの言うた通り、自然がいっぱいやね？」

『キュキューウ ♪ ♪』

イザーナも喜んどう。

うん、ウチとリンちゃんは「イザーナ」と「ミヴィーク」で惑星へと降下した。ついでに言えば、今回はクルちゃんも「エイ」で同行や。

せやねん。

この子達、大気圏内でも運用可能やねん。

ほんでも、さすがに「ツエレーク」は無理や。

そこが「スペースシップ大型宇宙船」と「コスモクルーザー宇宙航行艇」との差異でもあんなな。

『大気濃度は……正常値か。バイザーメット無しで降りても問題無さそうね』

地表データの計測結果を把握するリンちゃん。

『天条リン、陽ノ咲モモカ、このまま座標IP1600/EP800へと向かう』
クルちゃんからの通信指示や。

『そこに〈ネクラナミコン〉が有るんでしょうね?』

『間違いなく、その辺りに存在する』

『その辺りですって? あやふやな情報で私達を動かすなツツーの!』

『私は所有する〈ネクラナミコン〉の意思を感受し、それを伝えているだけ。位置詳細までは特定できない』

う〜ん、相変わらず『水と油』やんね?

ウチ、仲良うしてほしいのに……。

あ、せや!

「あんな? クルちゃん?」

『何? 陽ノ咲モモカ?』

「その子、何て名前なん?」

『その子?』

「うん、その〈エイさん〉」

『名前は、まだ無い』

文学猫みたいな返答されたわ。

「名無しの権兵衛はアカンよ？ 可哀想やん？」

『じゃあ〈ゴンベエ〉でいい』

クルちゃん、短絡過ぎや。

『どーでもいいツツーの！ 名前なんて！』

「アカン！ ちゃんと考えてあげな可哀想やん！」

『名前の使用目的は個体識別。それなら〈ゴンベエ〉でも問題無いはず』

『う〜ん……だけでもないのよね』

優しい苦笑いで通信を挟んできたのは、表マリーやつた。

一方でクルちゃんは腑に落ちない様子や。

『マリー・ハウゼン、他にも用途があるの？』

『そうね。とりわけ共感性を意識したコミュニケーションでは名前って大事よ？』

「なら、マリー・ハウゼン……アナタに一任する』

『え？ 私？』

「せや！ マリーなら名付け親に適任やん？ この子達や〈ツエレーク〉は、マリーが名

付けたんやし？」

『私……って言うか、お爺ちゃんだけどね？』

ウチらにしてみれば大差ないよ？ マリー？

『う〜ん？ そうねえ？ ヘツエレークやヘイザーナ達はヘハウゼン語なのよね……』
と、顎線あごせんを指でトントンしながら思案。

っていうか、いま聞き捨てならへん単語聞いたよ？

『……マリー？』

『何かしら？ リン？』

『いや、そのヘハウゼン語って……何？』

『ああ、私のお爺ちゃんを作り出した新言語よ？ 来るべき宇宙時代を見据えてヘ宇宙共

有語を作っていたの……個人趣味で』

『ヤバい人じゃん！ 単なる「イタい人」じゃん！ ウィリス・ハウゼン！』

……道理で聞き覚えのあらへん響きやったワケや。

『まあ、浸透しないで消えちゃったから、ハウゼン家にしか通じないけどね？』と、淡い苦笑に肩を竦すくめる。

『いや、でしょうね！ 意図的に流行はやらそうと思つて流行はやるモンでもないもんね！ 言語ごって！』

『で、確かヘイザーナが「博愛」でヘミヴィークが「勇敢」……このヘツエレークは「叡智」だったかしら』

どんだけ浸透しなかったか分かる気もしたわ。

だって、孫娘のマリーがウロ覚えやし。

『あと覚えているのは……えつと……そうそうへドフィオンへ辺りは、どうかしら？』

いや「どうかしら？」言われても分からへんよ？　そもそも？

ハウゼン家だけに伝わる暗号みたいなモンやんか？

『んで、意味は？』

半ば呆れて投げ捨てやね？　リンちゃん？

『意味は“不思議”よ？』

何で此処に来て、その意味を選びはったん？　マリー？

『はいはい、それでいいツツーの！』

リンちゃん、ついに丸投げや。

『了承した。では今後、本機をへドフィオンとする』

……受け入れはったねえ？

何の躊躇ちゅうちよも無く、クルちゃん受け入れはったねえ？

何や分からん展開に軽く困惑を覚えたウチは、眼下の大自然へと関心を逃がした。

延々と敷き広がる深緑の樹海。

と、変な物を見つけた。

「……あんな？　リンちゃん？」

『は？ 何だツツーのよ？』

「アレ、何？」

ウチからの示唆に、リンちゃんは対象を視認した。

『……異常なし』

リンちゃん、視認物体を無視しよったわ。

何や繁る樹々に紛れて、大きい脚が生えとつたよ？

ドデーンと逆立ちに生えとるよ？

鋼鉄製の脚が……。

まるで『犬●さん家の一族』の名シーンみたいに、上半身を地面に埋もれた状態で

……。

「リンちゃん、アレってドクロ——」

『異常なし！』

無下に遮って断定しはった。

「天条リン、アレはドクロイ——」

『異常なしッ！』

クルちゃんからの指摘も無下に遮りはった。

語気強く。

どうあっても「見なかった事」にする気やね？

ウチの釈然としない思いを残したまま、イザーナとミヴィークとドフィオンは茫洋とした青空を泳ぎ去って行く。

ゴメンね？

ドクロさん？

「ほんなら、此処で待つとつてね？」

『キュウキュウ ♪ 』

『ケルル！ ケルル！』

『クルルルル……』

イザーナとミヴィーク——そして、ドフィオン——を森の中で待機させて、ウチらは惑星探索に降りた。

「とは言うものの、こっからどーしたモンかしら？」

パモカナビと周囲を見比べて、リンちゃんが零す。

「街で聞き込みする？」

森の中を並び歩き、ウチは顔を覗き込んで提案した。

ウチの半歩後ろには、トテトテと無表情でついてくるクルちゃん。ちなみにクルちゃ

んのへ PHW は紫色や。

「そもそも街が在るかも分からないツツーの」

「リンちゃん、ナビ見とるやん？」

「初遭遇の惑星で地図なんか有るか。これは単に磁極を確かめてるのよ。方角だけは把握しておくように」

「ふうん？」

「だいたい在ったら在ったで、どう訊ねるっていうのよ？」

「素直に訊いたらええやん？ 根暗な巫女さん”知りませんか——つて？”

「……見知らぬ女がゾロゾロ集まって、マニアックなミスコン状態になるわ」

と、不意にクルちゃんが口を挟んだ。

「陽ノ咲モモカ、再度訂正しておく。我々が探しているのはヘネクラナミコンであつて

”根暗な巫女”ではない」

「……えへへ 〽」

「何？ 陽ノ咲モモカ？」

「クルちゃん、やつと会話に参加したねえ？」

「……それが？」

「ウチ、何や嬉しい 〽」

「……そう」

「うん ♪」

「どーでもいいツツーの」

リンちゃん、物臭にくそうに憎にくまれ口ぐちを叩いとった。

けど、ウチ見てたよ？

肩越しに盗み見て、クスツと優しく苦笑してたの……。

せやからウチ、リンちゃん大好きやねん ♪

テコテコと三人揃って歩き続けていると、ややあつて正面に白い光が射し込んでつた。樹木のトンネルや。

どうやら出口みたいやね？

ようやくにして繁る緑を抜けると、拓けた草原さんさんが燦々と明るい日射しに出迎える。

そこで一旦、ウチらは足を休めた。

作戦会議や。

「地図も手掛かりも無し……はてさて、どうしたモンかしら？ 座標IP1600/E

P800には間違いないけど、人間縮尺にすれば結構な広範囲だし……」

立ち尽くしながら思索に耽ふけい入るリンちゃん。

「ねえ、アンタ？ 何か知らないの？ そのへネクラナミコンとやらの在処あつか？」

「さて?」

振られたクルちゃんは、クルコクンで返しはった。

可愛いねえ?

ウチより小柄やから、何や妹みたいや ♪

「眠たそうな顔して『さて?』じゃないツツーの! アンタ、その石コロと話せるんでしょー!」

「天条リン、未だに誤認しているようなので訂正しておく。私は所有するヘネクラナミコン」の意思を感受し、それを伝えているだけ。位置詳細までは特定できない」

「……使えねー」

リンちゃん、ゲンナリ顔や。

ウチは傍そばの岩に座って、おとなしくリンちゃんとクルちゃんの方針決定を待つ事にした。

と、正面の樹林から女の人が出てきはった。

何や鎧装束を着た美人さんや。

うん、昆虫みたいな鎧やった。

ヘルメットの頭頂には大きな複眼が据えられとって、長い触覚が生えとる。

そういうえば旧曆には『仮面ナンタラ』いう変身ヒーローものがあつたらしいけど、あ

んな感じやろか？

せやけどフルフェイスやなくてオープンヘルム形状やから、可愛らしい美少女顔は露出してはった。繊細な線で纏まとまったべつぴんさんや。

零れる銀色のロングヘアが揺れると、まるで光のカーテンを思わせる綺麗さが演出された。

見た感じ、ウチより若干じやっかん年齢しうえ上やろか？

妙に大人っぽくて、穏やかな雰囲気きふきのわりには凛々しく引き締まったカツコよさも印象付ける。

あ、目が合った。

アツチもウチを見つけたねえ？

予測外の遭遇に戸惑っているようやから、ウチはニコニコ笑顔で手を振った。

何や？ 怪訝けげんそうな表情を浮かべとるよ？

「磁力的には、あつちが北だから……」

リンちゃん、まだ考えとるねえ？

あ、せや！

あの人、何か知ってへんやろか？

教えてもらうたら、リンちゃんの手間も省けるやんな？

ウチ、相手の所までトテテテテツと駆け寄った。

ウチと惑星テネンス Fractal. 3

「こんにちは ♪」

「え？ な……何です？」

「こんにちは ♪」

「あ、はい……こんにちは」

改めて間近に見れば、やっぱり結構な美人さんやった。

スラツと目鼻が通った顔立ちに、穏やかそうな眼差し。

微々と靡く銀髪はサラリと長くて、朝陽の射光みたいや。

ウチ、ほわつと笑顔で話し掛けてみた。

「あんな？ ウチ “陽ノ咲モモカ” 言うねんよ？」

「え？ あ、はい……」

「ほんでな？ 根暗な巫女さん、知らへん？」

「え？」

「ウチ、捜してんねん」

「いえ、そういう知り合いはいませんけど……」

「そうなんや？」

「はい」

ウチはニコニコと笑顔を向ける。

「……………」

あちらさん、黙って見つめ返しとつた。

「……………」

ニコニコ ♪

「街どこ？」

「え？」

「ウチ、街へ行きたいねん」

「えっと……ゴメンなさい。私も、この辺りは知りません」

「せやの？」

「はい」

「……………」

「……………」

ニコニコ ♪

「此処どこ？」

「え？」

「せやから、此処どの辺？」

「ですから、私も初めての場所なので知りません」

「せやの？」

「はい」

「……………」

「……………」

ニコニコ ♪ ニコニコ ♪

「何歳？」

「え？」

「せやから、何歳？」

「え……つと、十八歳ですけど？」

「ふええ？ そないに変わらん年齢とどなん？ 大人とどっぽいねえ？」

「そう……ですか」

「うん ♪ ウチ、十六歳 ♪ 」

「はあ……」

「……………」

「……………」

ニコニコ ♪ ニコニコ ♪

「アリさん？」

「え？」

「せやから、その鎧へアリさん〓がモデルなん？」

「ゴメンなさい、さつきから何を言ってるか解らないんですけど？」

「何で？」

「いや、小首コクンと『何で？』って…………あの、とりあえず、その無垢顔やめて下さい」

「……………」

「……………」

ニコニコ ♪ ニコニコ ♪ ニコニコ ♪

「ほな、バイバ☆イ★」

「え？ あ、はい、バイバイ……」

「リンちゃん、知らへんつて〜 ♪」

「然も当然とばかりに報告するなアアア……ッ！」

「ぎゃん！」

叩かれたよ？

トテテテつてリンちゃんのトコへ駆け寄ったら、いきなりパモカハリセンで後頭部叩かれたよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「潤々しながら『痛いよ？』じゃないツツーの！ この脳味噌白雲娘！ ったく、目を放した隙に勝手な別展開を進行させんな！ アタシが気付かなかつたら、何の事かサツパリ分からなかつたところじゃない！」

「あんな？ あんな？ ウチ、訊いてみてん。そしたらな？ あの人、知らへんって。ほんでな？」

「……いや、必死になって説明しないでもいいから。親に言い訳する子供か」

「ちやちやちや違ちやうよ？ 言い訳、違ちやうよ？ ウチな？ ウチな？ リンちゃん手伝おう思うて——」

「はああ~~~~~……」

リンちゃん、何や深い嘆息たんそくを吐いとつた。

「で？ 誰よ？」

「知らへんよ？」

「……友達作りの天才か、アンタ」

「あの？ ちょっと、スミマセン」

背後から呼び掛けられて、ウチらは注視を向けた。

さつきの虫娘むしごさんや。

怖ず怖ずとウチらへ近付いて来はった。

「あなたたち貴女達、何者です？」

「ウチ “陽ひノ咲さきモモカ” 言うねんよ？」

「いえ、それは先程聞きました……」

「その前に！ 他人ひとへ質問するなら、まず自分の名前から名乗りなさいよ！」

リンちゃん、強気や。

初対面なのに強気や。

「あ、スミマセン……私は “アルゴネア・リイズ・コーデス” という者です」

それを受けたリンちゃんは、ロングポニーをフワサアと鋤すき流して絶対無敵な自尊を

誇示。

「耳の穴かっぱじって、よく聞きなさい！ アタシは “リン” ！ 銀曆ぎんれき有数の大企業

〈ほしかわ星河コンツェルン〉の娘 “天条リン” よ！ 不可能なんて無いんだから！」

「……はあ」

虫娘さん、どう対応していいか分からへんといった感じや。

そりやそうやんな？

初対面で、いきなりこんな自己紹介を聞かされても困るだけやんな？

せや！

ウチ、アダ名を付けたげよう！

アダ名付けたら距離縮まるよ？

すぐに仲良うなれるよ？

「ほんなら、略して「アリコちゃん」や♪」

「アアアアリコちゃん？」

「……黙つてろツツーの。脳味噌フレンドパーク娘」

リンちゃん、あんまりや。

「で？ その「アリコさん」が、初対面のアタシらに何の用だツツーのよ？」

「アリコじゃありません！」憤りに抗議したあと、深い溜め息に気持ち切り替えるアリコちゃん。「あの……この人を見ませんでした？」

そう言つてパモカを取り出すと、立体映像を投影する。

カードの上に立体化したミニチュアファイギュアを見るなり、リンちゃんは閉口にフリーズした。

巖^{いか}ついロボットの胸に大きな骸骨の意匠と、野牛のような角を生やしたスカルヘッド
——ドクロさんやった。

「へドクロイガー〜って言うんですけど——」

「アハハハハ〜 ♪ 知らな〜い★」

ウソつきはったよツ？

カワイコブリッコにしな繕^{つくろ}って、ウソつきおったよツ？

「ずつと探してるんですが……」

「ゴメ〜ン？ 知らな〜い★」

「そうですか。結構な巨体だから目立つし、見た人もいるかと思っただんですけど……」

「見てな〜い★」

「天条リン、これはへドクロイ——」

「——聞いた事もな〜い★」

クルちゃんくらちゃんの指摘さしえさえも遮さへったわ。

どうあつても黙殺する気やんね？ リンちゃん？

再び森の中をさまよう。

かれこれ三〇分歩き通しや。

先頭はリンちゃん。

次がウチ。

並んでクルちゃん。

ほんでもって、最後尾がアリコちゃんや。

「つてか！ 何でアンタまで同行してんだツつーの！」

「スミマセン。一人では何かと心細いもので……」

「ええやん？ リンちゃん？ ウチ、いっぱいの方が楽しい ♪」

「……黙ってる、脳味噌西遊記娘」

リンちゃん、あんまりや。

と、不意にクルちゃんが会話に割り込んだ。

「アルゴネア・リイズ・コーデス、質問がある。その容貌からして、アナタは〈ジアント〉

だと推察した。その推測で間違いない？」

「え？ あ、はい。私は〈ジアント〉ですが？」

「やはり」

納得するクルちゃん。

初耳用語に顔を見合わせるウチとリンちゃん。

「ジアント？ 何よ？ それ？」

「この惑星テネンスに生息する知的生命体種族。我々の次元で言えば〈蟻人間〉といったところ」

「ふくん？ って、アレ？」

「何？ 天条リン？」

「何でアンタ、そんな『他次元情報』にまで精通してんのよ？」

「……………」

「……………」

「V！」

「いや！ 無表情に『V』じゃないツツーの！」

クルちゃん、Vサイン出しはった。

何や？ 結構、茶目っ気あるやんな？

「私は〈ジアント〉の誇り高き戦士……。先日、集落巢を襲撃してきた〈ドクroiガー〉という者と一戦交えたものの逃がしてしまいました。彼の者のせいで集落巢も半壊の大打撃……。現状再襲撃されたら、今度こそ危ない。その前に見つけ出して決着をつけて、先手を打たないと……」

「ふくん？ だから〈ドクroiガー〉を追って、さ迷ってた……ってトコか」

「はい……って、え？」

「何だツツの？」

「いえ、先程へドクロイガーなんて知らない——と？」

「……………」

「……………」

「え〜？ アタシ、何も言つてな〜い★」

「え？ だつて、いま……………」

「ヤダア〜？ 聞き違〜い★」

変わり身早ツ！

リンちゃん、変わり身早いよツ？

と、その時！

周囲の繁みから大勢の人影が姿を現した！

「な……………何？」

狼^{うろた}狼^{うろた}えるウチ！

いや、今回ばかりはウチだけやない！

リンちゃんも……………アリコちゃんも……………全員が狼^{うろた}狼^{うろた}えた！

……………クルちゃん以外は。

完全に包囲されとつた！

それも、相手は〈異形〉や！

その容姿は、簡単に言えばスズメバチ怪人！

全身は黒光りするキチン質甲殻で、背中にはシャープな透明羽が四枚。

頭部は言わずもがな蜂ヘッド。半円形に吊り上がった巨大複眼や鋭利な鎌型牙が秘めたる攻撃性を窺^{うかが}わせる。

せやけど、アリコちゃんとは違^{ちが}うて、昆虫色が強い。

人間的要素は口元^{くちもと}だけや。

薄い唇は女性的で……というか、全身的なフォルムがスレンダーで女性的やった。

うん、きつと「女性」や。

前腕部位には黒縞の黄色い生体箆手が付いとる。蜂の尻部を彷彿させる^{シロモン}代物やった。

おそらく針が出るやんな……アレ。

「へアルワスプ〜！」

咄嗟^{とつさ}に臨戦態勢を構えるアリコちゃん！

手の甲に有った小さな二対の鎌爪が、巨大に生え伸びて刃と化す！

「な……何だツツーの！ コイツら〜！」

狼狽えながらもヘリウム銃^{ガン}を取り出すリンちゃんに、クルちゃんが無抑揚な解説を答えた。

「彼女達はへアルワस्प〜——この惑星テネンスに於いてへジアント〜と双壁となる高度知性種族」

「見つけたぞ！ アルゴネア・リイズ・コーデス！ 今日こそ、我々と共に来てもらおう！」

「性懲りもなく〜！」

アルワस्पの警告に、アリコちゃんは忌々しく齒噛みした！

そして、蟻型ヘルメット頭頂の複眼部位がガシヤツとスライドダウン！

人間的美観は口元くちもとだけになった。

つまり、包囲しているへアルワस्प〜と同じや。

コレでへ蟻〜かへ蜂〜かだけの差になった。

つてか、何や？

アレ、ヘルメットバイザーになるんや？

あれれ？ つて事は、つまり——や？

ウチはトテテテツと手近なへアルワस्प〜さんに駆け寄った。

「ごんちは ♪」

「な……何だ！ 貴様は〜！」

「ごんちは ♪」

「何だと言っている！」

「こんにちは ♪」

「だから、貴様は——」

「挨拶、大事！」

「あ、はい……こんにちは」

ウチがプンプンしたら、ようやく挨拶返してくれた。

えへへ ♪

「あんな？ ウチ // 陽ノ咲モモカ” 言うねんよ？」

「……で？」

「上がるん？」

「は？」

「せやから、その目のトコ。ガチャンって上がるん？」

「……上がるが？」

「上げて？」

「ハアア？」

「ウチ、見たいねん」

「ふぎけるな！ バカにしてるのか！ 貴様は！」

「してへんよ？」

「いや、無垢にコクンと『してへんよ？』って……とりあえず、その顔やめろ」

「ねえ？ 上げて？」

「ふざけるな！ 何故、私がそんな事を！」

「ウチ、見たいねん ♪」

「上げん！」

「ええやん？ チビツとだけやん？」

「ダメだ！」

「ええく？ どうしても？」

「どうしてもだ！」

「うう……ほんなら、しゃあないわ」

「……………」

「ほな、バイバ☆イ★」

「え？ あ、うむ、バイバイ……」

「リンちゃん、アカンつて ♪」

「早々に新パターンを天井ボケするなアアア……ッ！」

「ぎゃん！」

叩かれたよ？

トテテテってリンちゃんのトコへ駆け戻ったら、いきなりパモカハリセンで叩かれたよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「潤々しながら『痛いよ？』じゃないツツーの！ この脳味噌ワンタン娘！ この緊迫状況を把握しろ！」

「せやかて、ウチ気になってん」

リンちゃんにガミガミ説教されるウチを呆気に見て、アリコちゃんはクルちゃんへと質問した。

「……あの、スミマセン？」

「何？ アルゴネア・リイズ・コーデス？」

「あの娘、どういう娘なんです？」

「未知数……私も、よく把握しきれていない」

そして、ウチらは連行された。

多勢に無勢やった。

それ以前に、ウチが人質にされたからやねん……。

ウチと惑星テネンス Fractal. 4

「おやんー」

大広間へ投げ放り込まれて、ウチは無様にヘッドスライディング！
蜂さん達の基地や。

大きな山があつて、その岸壁に吊るされる形で築きずかれとつた。

蜂の巣の巨大版や。

ウチは改めて室内を見渡した。

内壁の素材は分からんけど、くすんだ茶色がミルフィーユみたいに濃淡の層を描いてる。おそらく「樹皮」や。それを積み重ねたものやろね。

微かに甘い香りが、ウチの鼻腔を擦くすくった。

部屋の奥には蜜蝋を固めたような太い支柱が数本立つとつて、大きな花卉質のヴェールが結界のように張つとる。

その内側に据えられとるんは、器用に枝を絡め作つた装飾過多な椅子。

座つとるんは、豪華な風貌の蜂女さん。

他の蜂さんとは若干異なる。

女性の口元は同じやけど、他の蜂さんよりも少しゴージャスな外殻やった。柄も凝つてる上に、色彩の所々に金や銀も混じつとる。大きさも一回り大きい感じや。

周囲の蜂さん達はビシツと規律めいて直立不動。

たぶん「偉い人」やねんね？

「おそらく〈女王蜂〉つてトコか……」

「天条リン、その推測は正しい。アレは〈クイーン・アルワスプ〉——彼等にとつて唯一無二の統治者」

「見りや判るツツの。こんだけ〈蜂〉を模倣したような連中ならね」

「……理解してない者もいる」

「はあ？ んなバカいるワケ——つて、モモツ？」

「こんにちは ♪」

ウチ、女王様の前までテクテク進んで、ニツコリ笑顔で挨拶したつた ♪

「何だ？ 貴様は？」

「あんな？ ウチ「陽ノ咲モモカ」言うねんよ？」

「その「陽ノ咲モモカ」とやらが何用だ」

「ウチ、根暗な巫女さん」探しとんねん。知らへん？」

「知らぬ」

「せやの？」

「知らぬ」

「……………」

「……………」

「あんな？」

「何だ？」

「此処、さつきから甘い匂いするねえ？ 何で？」

「それは、この宮殿が〈アマリの樹〉を基礎素材としているからだ」

「此処、宮殿やの？」

「そうだ」

「ふええ……………スゴいねえ？」

「……………」

「……………」

「あんな？」

「何だ？」

「さっきのへアムリの樹って何？」

「我等へアルワस्पの主食にして、諸々の建築資材だ」

「木イ食べとるん？」

「樹皮ではない。蜜だ」

「おいしい？」

「美味だ」

「ウチ、食べてみたい ♪」

「嬉々と何を言っている？ 貴様は？」

「アカンの？」

「己を弁えろ」

「自分を？ あ！ せやから、ウチ 陽ノ咲モモカ 言うねんよ？ 覚えて？」

「……先刻聞いた」

「……………」

「……………」

「ほな、バイバイ★」

「うむ、バイ……バイ？」

「リンちゃん、食べてみたいねえ？」

「質量倍イイイーッッ！」

「ぎゃん！」

叩かれたよ？

トテテテってリンちゃんのトコへ駆け寄ったら、大きめのパモカハリセンで叩かれたよ？

けたたましい破裂音に、居合わせた蜂さん達がビクウと色めきはった。

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「……今回は、もうツツコまないかんね」

イヤヤ！ 放置はイヤヤ！

「久しいな、アルゴネア・リイズ・コーデス」

静かな威圧感でアリコちゃんに注視を傾ける女王蜂さん。

「……ハーチェス・エルダナ・フォン・アルワズプ・ビースウオームIV世！」

キツと睨み返すアリコちゃん。

長い名前やんね？

あ、せや！

「ほんなら『ハツちゃん』でええ？」

「……ならぬ」

小首コクンと提案したら、無下に却下されたわ。

「皆の者、下がれ。我は、この者達と直接に話がしたい」

「なりません！ ハーチエス様！ その身に万ケ一の事があつては！」

「案ずるでない。我は、ハーチエス・エルダナ・フオフォン・アルラワスプ・ピーソー

ムIV世——」

嗚んだねえ？

嗚み倒したねえ？

「——實力にて〈アルワスプ〉の頂点に君臨する者だ。飾り物ではない」

「し……しかし！」

「くどい！ 我こそは、ハーチエスなるぞ！」

略したねえ？

嗚むのを回避するために略しはったねえ？

凜然とした威風を当てられた配下達は、渋々と一斉に退室していきはる。

軋む大扉が重い閉鎖音を鳴いた。

静寂——。

緊迫した空気が、室内を緩やかに攪拌する。

「ヤッ……」

女王蜂は玉座から立つと、悠々とウチらに歩んで来た！

どうやらターゲットは——アリコちゃんや！

何やら因縁があるのやろね。

さつきの一幕を見るに……。

明らかな焦燥しょうそうを美貌びぼうに孕はらみ、アリコちゃんは少し後退あとすきつた。

「クウ！ ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワスピ・ピースウオームIV世！」

軽く噛かんだよ？

女王は歩ほを止めへん。

そして、アリコちゃんの眼前で立ち止まった！

「フッフッフツ……アルゴネア・リイズ・コーデス、会いたかった……実際に会いたかった

ぞ？ この瞬間を、どれほど待ち侘たびた事か」

「私は会いたくなどありませんでした！」

「さて、どうしてくれようか……クツクツクツ」

「ち……近付くな！ いや……いやあああ——ッ！」

アリコちゃんの悲鳴なげが木霊こだました！

抱き締められて、頬ほ擦りスリスリされたから！

うん、スリスリや！

美少女抱き枕みたいにスリスリハグや！

「あぁん ♪ もうアルつてば、会いたかった会いたかった会いたかったくん ♡

」

「やめ……うひゃう！ やめろ！ 放せ！ うひゃああ！」

「うふふ ♡ うふふ ♡ うふふふ ♡ アルウゥン ♡ 」

悲鳴と恍惚が入り交じつとる。

コレ「地獄絵図」でええのん？

「……何だツツーの？ この光景？」

リンちゃんが醒めながらに困惑。

「コ……コイツは……うひい！ 私の幼馴染みで……ひいい！ 昔から……ふひゃあ！

ここういう性格なのだけありあ！ だ……だから、私は会いたくな……イヤア！」

「ふくん？」

「平然と見てないで助けて下さい！」

「ま、頑張れや ♪ 」

「そんな爽やか笑顔で見捨てないで！」

「アルアルアルゥン ♡ 」

「やめひゃはりやあへりひいーっ！」

何語？ アリコちゃん？ ハウゼン語？

「つたく、何かと思えば……アホらしくて付き合ってられるかつつの」

「……あんな？ リンちゃん？」

「は？ 何よ？」

「撫で撫でして？」

「はあ？」

「ウチも撫で撫でしてもらいたなつた！」

「触発されんなツつーの！ この甘えん坊！」

「ふぐう……イヤや！ ウチ、リンちゃんに撫で撫でしてほしいの！」

ウチ、涙目で駄々コネた。
それを見たリンちゃんは「……つたく」と、眉間を押さえて嘆息たんそくや。
ほんでもな？

「ほれ、いいこいいこ……コレでいい？」

頭、撫で撫でしてくれた ♪

「えへへ ♪ もっと ♪」

「はあ？ つたく、面倒なの触発してくれたわね……。ほれ、いいこいいこいいこいいこいいこいいこい」

「！」

「えへへへ♪」

撫で撫で撫で撫で――。

「アルアルアルウゥン ♡」

「イヤアアアーツ？」

スリスリスリスリ――。

「いいこいいこいいこいいこいいこ！」

「えへへへへ♪」

「アルアルアルアルアルウゥン ♡」

「うひゃらはあーツ？」

撫で撫で撫で撫でスリスリスリスリ――。

「……カオス？」

クルちゃんが無感情に纏まとめはった。

玉座の背後を抜けると、開放的なテラスがあつた。

そこでテーブルを囲って、ウチらは建設的会合や。

少なくともハツちゃんが「悪い人」やないって判つたし。

真ん中へ出されたお茶うけは、ハツちゃんからのアムリクッキーやつた。

鼻先に持つてくるといい香りすんねん。

口に入れると優しい甘さが広がんねん。

「ふひゃう ♪」

ウチ、味覚でとろけそうになった!

「至福や ♪ 天国や ♪ あの世逝きや ♪ 殺人兵器や ♪」

「陽ノ咲モモカ、その比喩は誉め言葉に適さない」

クルちゃんから淡白に指摘されたわ。

「へえ? コレが〈アムリの蜜〉の味?」

リンちゃんは物珍しそうに観察しながらも、冷静に受け止めていた。

「クツキーに練り込んでいるから純度は多少落ちるがな」と、ハツちゃんは微かに誇らしげ。

せやね、地産が褒められるんは嬉しいもんや。

「もつと蜂蜜つぽいのかと思つたけど、この後引く濃厚且つクリアでまったりとしたとろみ感からすると原液は水飴つぽいのかしら? でも、ほのかに柑橘的な香りもするのよね……レモンティー的な? 味には反映されていないけど……あ、でも、クエン酸が成分に入ってるのは間違いないわね」

リンちゃん凄いなえ?

何で短時間で、そこまで分析できるん？

御先祖様に『神舌の新聞記者』でもいたん？

けど、ウチはおいしければええねん。

素直に「おいしい」で、ええやん？

食べ物『おいしい』か『おいしくない』か『ふつう』やよ？

星何個とかも意味不明やから要らへんねん。

評価サイトとかも要らへんねん。

自分が『好き』なら、それでええねん。

ウチとリンちゃんがあムリクツキーを堪能している傍らで、アリコちゃんはクルちゃ

んからの説明を受けとった。

「では『根暗な巫女』ではなく『ネクラナミコン』だったのですか？」

「そう」と、クルココヤ。

「せやから、そう言ってたやん？」

「……いえ、言ってませんけど」

言うてたよ？

「そう言えばへドクロイガーが、そのような事を口走くちばしっていたような？ あの時ときは半月

刀を振り回しながら『根暗な子いねがー！』と聞こえたので、何処どこの方言かと思いまし

たが……」

……〈宇宙の帝王〉諦めて「ナマハゲ」に転職したん？

「そもそも、その〈ネクラナミコン〉とは如何なる物なのだ？」

軽い興味に口を挟むハツちゃん。

「コレ」と、クルちゃんは卓上へ現物を置いた。

「この石板が〈ネクラナミコン〉ですか」

「フム？ やはり知らぬな？ して、この〈ネクラナミコン〉とやらは何なのだ？」

「コミュニケーション」

「サイン入りの明石焼きやねん」

「違う」

リンちゃんとウチの見解を、クルちゃんが淡々とバツサリ全面否定。

「コレは、ある種の〈アカシツクレコード〉——つまり、宇宙の真理そのものを内在させた記録媒体”になる」

「はあ……とんでもない代物ですね」

軽く驚嘆を浮かべながらも、アリコちゃんはピンと来とらん感じやった。

そりゃそうやんな？

ウチかてピンと来てないもん。

「ふむ？ そなた達は、コレを集めている……と？ して、集めると、どうなるのだ？」

「クラゲ漁解禁」

「毎日、抹茶パフエやねん」

「違う」

クルちゃん、またもバツサリ全面否定しはった。

「この〈ネクラナミコン〉を集めた者は、神の如き力ちからを得ると云われている」

「か……神の如き……ですか？」

「とてつもない物であるな！」

今度は二人揃って素直な驚嘆や。

やっぱりドエラいモンやのん？

「だからこそ、よこしま邪な者へ渡してはならない……。知らない？」と、クルコクン。

「スミマセン、あにく生憎……」

「うむ、我も初見だ」

二人の反応を承けたクルちゃんは、口元へ手を当てて「ふむ？」と軽い一顧いっごを刻む。

「これだけ散策して片鱗も反応も無く、有力情報も無いとなると……」

「そりゃ惑星全体の中から『特定の石コロ』なんて見つけられないでしょーよ」

皮肉気味に肩を竦めるリンちゃん。

軽く投げ遣りや。

「事情は解りました」と、アリコちゃんが決意めて頷く。「そういう事でしたら、この
“アルゴネア・リイズ・コーデス”——協力致します！」

「ふむ？ アルが乗り気であるというなら、我も助力しようではないか」

「有り難う、アルゴネア・リイズ・コーデス。そして、ハッチちゃん」

「……ハッチちゃん言うな」

と、不意にウチは引つ掛かっていた事を思い出した。

「あ、せや！ あんな？ アリコちゃん？ ウチ、ちよつと訊きたい事あんねんよ？」

「何ですか？ モモカさん？」

「アリコちゃんとハッチちゃんは、何でケンカしとるん？」

「え？」

「さつき言うtotたやん？ 会いたくなかった……つて？」

「……それは」

「もー ♪ アルつてばツンデレなんだからあ♡」

「違います」

モジモジ嬉しそうに照れるハッチちゃんを、間髪入れずに冷蔑否定。

そして、アリコちゃんは、真剣味を孕む憂いに溢し始めた。

「話せば、少々長くなるんですが……」

「ほんなら、ええわ ♪」

「うん、アタシも別に興味ない」

「聞いてくれませんツツツ？」

ウチと惑星テネンス Fractal. 5

「そもそも、私達〈ジアント〉と〈アルワスプ〉は、同一の源泉種族から枝分かれ進化した種族なんです」

「でしようねえ？」と、アムリクツキーを摘まみ食いしながら関心薄く受け入れるリンちゃん。

「リンちゃん？ 何で知つとるん？」

「そりや、これだけ〈蜂〉と〈蟻〉を模倣トレスしてりや、然さして驚きもしないツツ一の。そもそも〈蜂〉と〈蟻〉が、そうだもん。ルーツは〈蜂〉の方で、その内、陸棲に適性特化したのが〈蟻〉——進化とも退化とも取れる変質として羽根が無くなったのよ」

「ふええ？ 蜂さんと蟻さんつて、兄弟やったん？」

「……いや 兄弟 じゃないツツ一の」

「せやつたら、アリコちゃんとハツちゃんも姉妹やん？ ケンカはアカンよ？」

「イヤですよツ？ こんなのと姉妹なんてツ！」

アリコちゃん、必死になつて全否定や。

よっぽどイヤなんね？

「うむ、苦しゆうないぞ！ モモカとやらー！」

ハツちゃん、とりあえず鼻血拭こうねえ？

ボツタンボツタン垂れてるの拭こうねえ？

「まあ、確かにヤダけどね？ こんなのと一緒なんて」

「貴様、この「ハーチエス・エルダナ・フォフォフォン・アルラスふぐつスオームIV 世

」に対して無礼なるぞー！」

「いまの『ふぐつ』て何だ！ 自分の名前を噛み倒してんじやないわよ！」

「……噛んでおらぬ」

「いや、噛んだじゃん」

「噛んでおらぬと言っている！ ねー？ アルー♪ 私、噛んでないよねー？」

「まあ、それはともかく——」

ハツちゃん、黙殺されたッ！

「——それまでの両種族は、持ちつ持たれつの関係でした。ジアントが地上の恩恵を見つければアルワスプへも情報提供し、対してアルワスプも空中から発見した有益情報を見我々に教えてくれた」

冷やかに一蹴されて、床に『の』の字を書き始めるハツちゃん。半ベソで。誰かフオローしたってえ！

女王様が体育座りでイジケてんねんよ！

「ふくん？ つまり地上担当と空中担当で、上手に住み分けてたってワケね」

「アリコちゃんとハツちゃんも？ 仲良かったん？」

「まあ、その頃は……幼少期から一緒に遊んでいた幼馴染みですし」

「んで？ それが何で犬猿になったワケ？」

「このバカのせいですッ！」

キツと振り向き睨むアリコちゃん！

睨め付けを受けたハツちゃんは「イヤ〜ン ♡」と照れて……いや、ハツちゃん？

「イヤ〜ン ♡」やあらへんねん。

熱い視線ちや違うねん。

ラブコールやないねん。

遺恨を浴びせられとるねん。

帯びとる熱さの質ちやが違うねん。

「このバカが！ 事もあろうに！ 異種族結婚などを公言するから！」

「ファル、いひやい……いひやい……いひやい……いひやい……」

ハツちゃんのほっぺたを憤慨ふんがい任せにグニグニ引つ張りはった。

そやけど、ハツちゃん嬉しそやからええか？

「異種族結婚って……アルワスプとジアントの？」

「そうです！」

リンちゃんへ振り向き応えるついでに、ハツちゃんへ後頭部ピンタバチーン！

「ぎゃん！ アル、痛いよ？」

ハツちゃん！ それ、ウチの！

「確かに異種族結婚なんて大問題ではあるけどさ……」

「いえ、そこは問題ではありません。両種族共、寛容に受け入れました。私とて、そうです。そもそも両種族は同一祖先から枝分かれた種族ですし、深い信頼と共感に在った存在。特に怨嗟も不信感ありませんから。我が母「クイーン・ジアント」も容認です」

「そなの？ って、うん？ ちよ……ちよつと待って！ 母親？ って事は、アンタまさか？」

「……ええ」

含羞はにかんだ憂うれいをリンちゃんへ返すアリコちゃん。

「あ、母子家庭なん？」

「違うわあああーッ！」

「ぎゃん！」

ハリセンスパーンや！

こないなツツコミパターンもあんの？

「女王が母親つて事は〈姫〉だツつーの！ コイツ！」

リンちゃん、お姫様相手に「コイツ」言うてるよ？

ビシイと顔を指差して言うてるよ？

「まだ王位は継承していませんよ。いまは修行中の身です」

リンちゃんの動揺に、アリコちゃんはクスツと肩を^{すく}竦めた。

「せやけど〈戦士〉言うてたやん？」

「ええ、まだ修行中の身ですから」

またまた優しい微笑。

うん？

どういう意味やろ？

と、^{おもむろ}徐にクルちゃんが理解を示す。

「成程。つまり、王位を継ぐまでは武者修行中の身という事……」

「「そっちーッーッ？」」

さすがにリンちゃんと一緒に突っ込んだわ!

「普通は『花嫁修業』とか違ちがうの?」

「そうよ! 或いは『政治学』とか『地政学』とか、百歩譲って『帝王学』だっつーの!」
 「先程、ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワस्प・ブースウオームIV世は言っていた
 ——『実力にて〈アルワस्प〉の頂点に君臨する者』と……。身体能力や戦闘技能に長
 けた者が実力誇示にてヒエラルキーで優遇される生態系は、自然界でも定石の事象。だ
 とすれば、種族の頂点たる王位継承者が戦闘技能を要求されても不思議ではない」
 「うむ、その通りだ」

クルちゃんの解説を追い風に、揚々と自己顕示をしだすハツちゃん。

立ち直り早いねえ?

「我が〈アルワस्प〉と〈ジアント〉の長は、代々種族随一の戦闘技能が要求されてきた。
 故ゆえに現世代で最強なのは、この私。ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワस्प・ビー
 スウオームIV世」とアルなのだ」

「ふええ? ハツちゃん、スゴいねえ?」

「フツ……モモカとやら、苦しゆうないぞ」

「今度は嘸めずに言えたやん?」

「かかか嘸んでおらぬ!」

「噛んだよ？ さつき？」

「黙れ！ 無礼な！ 我を誰だと思ってる！ 我こそは、ハーチエス・エルダニヤツ

！」

「『……………』』』」

「……………』」

悄悄と顔を背けはった。

沈黙に視線が集中する中、一向にコツチ見ようとせえへん。

ハツちゃん、たぶん舌噛んだねえ？

「でも、だったら別にいいじゃん？ 両種族容認なら、アンタがヤキモチ妬く必要ない

じゃん？」

「や……………妬く？」

「そ。コイツが誰と結婚しようとする自由なんだし？ 親友が離れていく寂しさは分からない

くもないけどさ、ヤキモチは見苦しいだけだツツの」

「……………私です」

「は？」

「このバカが結婚相手に指名したのは、この私なんです！」

「……………』』」

一同、閉口や。

気まずいへビー情報に閉口や。

重い沈黙が漂う中、ハツちゃんだけが「うふふふふ ♡」と身悶えにクネつとる。

「異種族婚なら、まだ寛容に受け入れましよう……ですが、同性婚なら話は別です！ 況^まして、自分が……このバカと！」

「えつと……まあ、頑張れ？ うん」

「結婚式には呼んだつてな？」

「……宇宙的に異種族結婚と同性結婚の兼任は前例が無いけれど、アナタ達が風習起点となるかもしれない」

「全員で諦めないで下さいますツ？」

「ゴメン、アリコちゃん……。」

「ウチら、どないに処理してええか分からへんねん。」

「そこまで器用やらへんねん。」

「ねえ？ エルダニヤ？」

「エルダニヤ言うな！ リンとやら！」

「アナタの真意は何よ？ どうしてアリコと結婚なワケ？」

「そ……それは……。」

全員の好奇心が注がれる中、恥じらい赤面にくねりつつ、床に『も』の字を書き始めた。

何で『も』なん？

「私が〈女王〉の座に就いてから、アルつてば全然会ってくれないんですもん……そうではなくても、成長してからは会う機会も少なくなってきたのに……こんなんじや、二人が〈女王〉になったら全然会えなくなるんじゃない………」

「当然です！ 子供の頃とは違います！ 況して〈女王〉の座に就けば、双方責務に追われるのは明白でしょう！ それをいまから何を甘ったれた事を言っているのです！」

「だから………いっそ結婚しちゃえば万事解決なんだつてば。両種族の政治も一括で処理できるし、私もアルも一緒にいれるし ♪ ね？ ウインウイン ♪」

「何がウインウインですか！」

「だってえ、私はアルといっぱい一緒にいたいものお……」

ハッちゃん、今度は『へ』の字を書き始めた。

……『へ』のへのもへじ？

もしかして『へ』のへのもへじ』を大量増産してはるの？

「なるほど……ね。とりあえず事情は解ったわ」と、リンちゃんは「ひとま先ず納得。「要するに、エルダニヤは百合気質って事か」

「リンさん、何とか言ってみてやって下さい！」

「……ねえ、アリコ？」

真剣な真顔を向けるリンちゃん。

「はい！」

期待に満ちた表情を返すアリコちゃん。

「不運は、どうしようもない……時には諦めも肝心だから」

「はい？」

「頑張れ ♪ うん ♪」

リンちゃん、にっこり温顔で肩^{かたすく}竦めはった。

「淡泊に見捨てないで下さいッ！」

あ、慌ててはる。

必死になつてはる。

「ええ〜？ んな事言つたつて、アタシ別に興味無いしイ？」

無関係だしイ？

所詮は

他人事^{ひとごと}だしイ？」

一転して無気力無関心。

リンちゃん、ホンマにどうでもよくなつてはるね？

「だったら何故、話題を拡張したんです！」

「ん？ 単なる好奇心 ♪」

「リンサーーんツ？」

アムリクツキーをポリポリ食べつつ見捨てはった。

「どちらがベースとなるにしろ、生まれてくる子孫は宇宙史初の混血体……」

クルちゃん、何やブツブツ考え込んでるねえ？

ほんでもって、アリコちゃんにクルコクン。

「へアルアント」？ 「ジワスプ」？ どっち？」

「クルロリさん！ 早々に次期種族名を模索しないでツ！」

孤軍奮闘の逆境を悟ったアリコちゃんは、強い目力めちからをウチへ向けた。

何か期待されとるみたいやね？

「モ……モモカさん！ 何とか言言ってやって下さい！」

何とか言えばいいん？

うくん……あ、せや！

「ハツちゃん？ ウチ、思うたんやけど……言うてええ？」

「そうです！ このバカにビシツと言ってあげて下さい！ 常識を！」

「ウチへアムリの樹」ツ いうの見てみたいねん」

「モモカサーーんツ！」

ウチと惑星テネンス Fractal. 6

ハツちゃんに導かれ、ウチらは清涼な森林を歩き続けた。

明るい緑のトンネルに、目映い木漏れ陽が光のカーテンと織り射しとる。

アルワスプ宮殿の、すぐ近くの森や。

御付きの部下とかは率いとらんねん。

そんだけ腕に自信あんのやろね？ ハツちゃん？

それにアリコちゃんもおる。

ハツちゃんは知らへんやろうけど、ウチらもそれなりに強力やしねえ？

「ほんでもスゴいねえ？ アリコちゃん？」

「何がです？ モモカさん？」

「相当強いんやね？ 生身でドクロイガーはん倒しはつたんやから」

「ああ、そこは確かに驚嘆するわ。あの体軀差で、よく戦えたわよね？ 相手へ巨大口ボ」

「よ？」

「いえ、それは私ではありません。いくら私でも、あんな巨大ロボットなんて倒せませんよ……つて、え？」

「何よ？ アリコ？」

「いえ、確かへドクロイガーなんて知らないのでは？」

「……………」

「……………」

「やだあ？ うん、アタシ知らなくい★」

そのキャラ、まだやるんツ？ リンちゃん？

「何だ？ そのへドクロナンタラ」とやはらは？」と、先導役のハツちゃんが足を止めて振り向いた。

「あんな？ 大きいロボットやねん。ほんでな？ 何や〈宇宙の帝王〉を夢見てはるんやて」

「そーそー。その為ためにへネクラナミコン〉を集めてて……ま、ぶつちやけ競争相手つてトコかしら」

「やっぱり知っているじゃないですか！ リンさん！」

「やだあ？ 神託くう！」と、リンちゃんは人差し指フリフリ。

何で「どんだけくうえ！」みたいに言うてはるの？

「アル、まさか?」

ハッチちゃん、急に深刻な面持ちで投げ掛けはった。

「ええ、大樹神さまが……」

「何よ? その〈大樹神さま〉って?」

リンちゃんの疑問に、アリコちゃんは優しく諭すような抑揚で返す。

「我々の守護神ですよ。このテネンスに……いえ、大自然に仇為す邪な者が現れし時、その巨体を奮つて成敗して下さる——そうした伝説が、我々〈ジアント〉と〈アルワスプ〉の間では流布しているのです」

「へえ? んじゃ、ソイツがドクロイガーを倒してくれたんだ?」

「せやの? ウチ、てつきりアリコちゃんが倒したと思うとつた」

「ふむ?」と、クルちゃんが不可解そうにクルコクン。「おかしい? 私の知る限り、テ

ネンスにそのような伝説は無かった」

「……あれ?」

「何? 天条リン?」

「いや、何でアンタ、そんな事まで知ってるのよ?」

「……………」

「……………」

「神託うー……」と、御通夜^{おつや}テンションで指振り。

クルちゃん、そこはテンション上げてやんねんよ？

無感情無抑揚に御通夜^{おつや}テンションでやると、ダダ滑り^{すべ}するネタやねんよ？

「で、アルゴネア・リイズ・コーデス？ この伝説は、いつから？」

「あ、はい。このテネンスに〈大樹^{だいじゆしん}神さま〉が降臨されたのは、昨年からですが？」

「伝説違うじゃんツツツ！」

リンちゃんに一票や！

それは見事なまでに瑞々しい大樹やった。

辿り着いたのは、樹々に囲われ拓けた清涼的な空間。

一面は湖と広がり、一步踏み出せばドボン確定や。水深は解らへん。木漏れ陽を湖面が反射して一帯を青い光彩に染めあげ、神聖で厳肅な雰囲気を自然に演出しとる。

二〇メートル程度先には大きい樹が密集に生息し、そこだけ浮島みたいに孤立地帯化しとった。離れ密林や。

嗅覚に味わうのは、あのアムリ蜜の甘さ——せやけど、濃度が半端ない。蜜坪へ溺れたか思うたわ。

「アレが〈アマリの樹〉だ」と、ハツちゃん。

せやろうね？

あそこから強烈に香つとるもん。

「ふくん？ 湖のド真ん中か……。でも、アレが食材や資材なんでしょ？ 飛べる〈アル

ワस्प〉は苦も無いとして陸棲の〈ジアント〉は、どうやって採取してんのよ？」

「基本〈アルワस्प〉からの貿易ですね。自らで採取する場合は、舟ふねしかありません」

「持ちつ持たれつ……。か。そりゃ両種族の共存関係は重要かもね」

「うむ、そうだ。だからといって、我々われわれ〈アルワस्प〉が独占する気など毛頭無いぞ？」

そのような愚行に走れば、如何いかに〈ジアント〉が困窮するかは明白。我等は同源泉種族

——共存関係を維持していかねばならぬ」

「へえ？ ちつとは〈女王〉らしいトコあんじゃん？」と、リンちゃんはクスツと苦笑。

「当然であろう、リンとやら。我はわれ〈クイーン・アルワस्प〉なるぞ？ それに我個人われと

しても、アルが困惑する事など……。ハッ！」

「どうした？ エルダニヤ？」

「アルゴネア・リーズ・コーデス！ おとなしく我われと結婚せよ！ さもなくば、この〈アマリの森〉は我々われわれ〈アルワस्प〉が独占——」

「さっきの崇高なポリシーは何処行ったアアア——ッ！」

リンちゃんから顔面ハリセンススパーン!

女王様の顔面ヘスパーン!

うん、せやけど今回はハツちゃんが悪いよ?

「イタタタタ……さて、どうだ? 陽ひノ咲さきモモカよ? これで満足いったか?」

「連れてって?」

「は?」

「あそこ、連れてって?」

「待たぬかッ! 無垢に小首コクンと何を言い出した! 貴様は!」

「あんな? 連れてって言うたんよ?」

「……聞こえておったわ。そこをリピートせよとは言うておらん」

「ウチ、見たいねん」

「抱いて飛べというのか! 貴様を! 女王である、この我われに!」

「うん★」

「……屈託なく肯定するな」

「ええやん? ウチ、見たいねん? リンちゃん、ええよね?」

「気を付けて行くのよー?」

「ハイ♪」

「勝手に纏めるでないわ！ 異邦人共！」

憤慨ふんがいに拒否するハツちゃんへ、軽く嘆息たんそくを吐いたアリコちゃんが怖おず怖おずと申し出た。

「ハーチエ、迷惑は承知ですが御願ごんい出来ませんか？ どうやらモモカさん、好奇心が強い娘むすめみたいなんです。何事も、こんな感じで……。出来る事なら、その純粋な好奇心を尊重してあげたいのですが……」

「んもう♡ アルつてば優しいんだからあゝ♡ いいわよ！ いいに決まってるじゃない ♪」

ハツちゃん、腰クネクネで快諾してくれはったよ？

アリコちゃん、ありがとね？

えへへ ♪

「アルの御願ごんいなら、何往復でもするわよ ♪ 三回でも五回でも十回でも百回でも！」

……そんな見たくない。

「何なら千回でも一億回でも百億回でも！」

一気に新型拷問が完成したよッ？ ハツちゃん！

改めて間近で見ると、その圧巻な生命力に感嘆した。

「ふええ〜……コレが〈アムリの樹〉？ スゴいねえ？」

「当然であろう。これこそ、まさに『樹木の王者』よ。然さもなくば、我等われらの主要として成り立つワケが——」

「あー！ アレ、一番大きいねえ？」

「——つて、聞けイ！ トテテテじゃなく！」

ウチ、少し奥に一際ひととき大きい樹を見つけたよ？

廻回りが五メートルぐらいやろか？

えへへ ♪ グルグルや ♪

樹の周り、軽く散歩や ♪

グルグルグルグル ♪

見上げるとな？

遙か頭上には深緑の傘が繁つとるねん。

密集に生まれた葉っぱの雲が日光遮つとんねん。

ほんでもグルグル回ると、重なる木漏れ日がいろんな表情を見せんねんよ？

あ、アレや！

色の無い万華鏡や！

あれ？

ずっと上のトコ、何や〃顔〃みたいになつとるねえ？

うん、ずっと高いトコや。

虚うろが絶妙に配置されて〃埴輪ハニワ顔〃みたいになつとんねん。

自然つてスゴいねえ？

こういうの、たまに偶然出来るから面白いねんな ♪

……。

……。

……。

ま、ええわ。

とりあえず樹の回りグルグルしてみるわ。

えへへ ♪

大きいねえ？

グ〜ルグルグ〜ルグル ♪

グ〜ルグルグ〜ルグル ♪

グ〜ルグルグ〜ルグル ……。

グ〜 ……。

ウチ、いつの間にか傍観していたハツちゃんへ訴えた。

「あんな？ ハツちゃん？」

「……………」

「……飽きた」

「で、あろうな」

むんずと首根っこ掴まれて、ズルズルとスタート地点へと引き摺られたよ？

「樹の周りを延々と回って、何が楽しいか！ 我等へアルワस्पの子供とてせんわ！
斯かよう様な奇妙な遊び！」

何やプリプリしてはる。

どないしたん？

「リンちゃん★ ただいま♪」

「お……………おかえり……………」

パモカでイケメンドラマ鑑賞中で、顔すら上げてくれへん。

リンちゃん、ウチ見てえ！

「で、どーだったー？」

なげやりや！

「あんな？ つまんなかったよ？」

「……そこに直れ、陽ひノ咲さきモモカ」

と、その時！

突然にして大爆風が吹き荒れた！

大振動と共に！

「ふぐう！ な……何？」

叩きつける風圧に抗いつつ、ウチらは視界を確保した。

元凶は眼前の森林に聳そびえ立つとつた。

天を仰ぐような巨体！

太陽の光を照り返す宇宙金属の巨軀きよく！

そして、胸に飾り吸えた大きなドクロ！

『フハハハハハハッ！ 宇宙の帝王（予定）！ ヘドクロイガー！見参！』

あ、復活したんや？

おめでとねえ？

『フハハハハハハッ！ 今度こそヘネクラナミコンを頂戴し……って、ああーッ？

またしても出たな！ イルカ娘！ シヤチ娘！』

ウチへイルカ娘！ 違ちがうよッ？

変な愛称付けんといてえ！

「ええ〜？ アタシ、アンタなんか知らなくい……」

露骨にウンザリゲンナリなテンションで、リンちゃんが例のキャラ設定続行。

っていうか、そのテンションやと別キャラやよ？

「ドクロイガー、ひとつ訊きたい」臆せずたずに普段通りの抑揚で訊ねるクルちゃん。「どうしてヘネクラナミコンの欠片」が此処に有ると断定した？」

『き……貴様は？ そうか……さては、そのヘイルカ娘つこーズの仲間となつたか！』
変なユニット名を付けられたわ。

『はっ！』そして、三人揃ってアイドルデビューか！ 人が『ドクロ』で悩んでいると
いうのに！ そこまでして人気欲しいか！』

知らへんよツ？

アイドルデビューなんて誰も言うてへんやん！

そこまで悩んでるならドクロ取ってえ！

「取りやいいじゃん、ドクロ」

『……はい？』

「取れ？ ドクロ？」

『……………』「……………」

気まずい沈黙。

うわあ？ リンちゃん、さらりと言いはった。

無敵や！

『小娘！ 可愛いからって調子づくな！ 人生薔薇色ウハウハか！』

「そうよ？」

『……はい？』

「だって、アタシ可愛いもん」

『……………』『……………』『……………』

絶対的な自信に一同絶句。

そして、リンちゃんはロングポニーをフアサと鋤いた！

「可愛いなんて百も承知！ アタシを誰だと思ってるの？

有数の大企業へ星河ほしかわコンツェルンの娘「天条リン」よ！ 超絶級の美少女にして銀暦ぎんれき

！」

無敵やツ！

と、クルちゃんがクルコクンにうなが促す。

「二人共、コントも面白い？」

『「コント違うわーっ！」』

リンちゃんとドクロイガーはん、仲良う抗議を吠えはった。呉越同舟じえつどうしゆうや。
 つていうか、クルちゃんも大概やよ？

「で、何故？ ドクロイガー？」

『フツ……フハハハハハッ！ その様子だと、どうやら利はワシに有るようだな！
 教えてほしいか？ ん？ どーしよつかなく？ 教えちやおうかなあ？』

嬉しそうに焦じらしてはる。

後ろ手に爪先蹴りや。

……乙女なん？

『よし、いいだろう！ 憐あわれだから特別に教えちやおう！ ワシが作りあげたヘネクラナ
 レーダーンなら、その波長から所在を半径約一〇〇メートルまで特定感知する事が可能
 なのだ！』

「そのわりには〈ギアント〉の集落を襲った……何故？」

『当然だ！ この惑星に降下した時点では完成していなかったのだからな！ だから、
 とりあえず「此処なら有るかなあ？」とな？」』

……ただの場当たりやった。

「そ……そんな理由で、我が集落を？」

『そうだ！ 山勘だ！』

誇示したらアカン!

それ、誇示したらアカンやつ!

「よ……よくも!」

フルフルと怒りを噛み締めるアリコちゃん。

ほら!

そんなんで襲撃されたらへジアントも堪^{たま}らへんよ?

そりゃアリコちゃんかて怒るよ?

「フム?」と、クルちゃんは平静に黙考クルコクン。「つまり、無様に吹っ飛ばされて、その後に完成させた……と?」

「あー、あのズブーンと『犬●さん家』^ちした後、復活して作りはったん? せやったら、ウチラがハッチちゃんトコでお茶会しとった時やんね?」

『おおおお茶会だど! 人がコツコツ地道にレーダー作成している時に、仲良く楽しくお茶会女子会していたのか!』

「うん ♪ アムリクツキー、おいしかったよ?」

『クククツキーだど? ワシがスイーツ好きと知りながら仲間外れか! どういう了見だ! 新しいイジメか!』

いや、知らへんよ?

無敵や
ツツツ！
リンちゃん！

ウチと惑星テネンス Fractal. 7

「Gモモー」「Gリン！」

滞空した二人はキュートな名乗りを飾る！

巨体戦に対処すべく〈Gフォルム〉になった！

『グスツ……グスツ……何で復活したばかりで、いきなりこんな目に……って、ああーッ？ またしても巨大化したな！ 〈ヘイルカ娘こころs〉！』

「それ、やめてえ！ ウチ、恥ずかしい！」

「つてかアンタ、いま泣いてなかった？」

『なな泣いてないよッ？ フハハハハッ！ この『宇宙の帝王になってみたい男』が涙など見せるか！ そのような懦弱さは、とうにブラックホールへ投げ捨てたわ！』

笑止！ 笑止笑止笑止ッ！』

笑止はええけど、さりげなく夢の規模が縮小してたよ？

『ねー？ アリ娘？』
ワシ、泣いてないよねー？』

「私に振らないで頂けますッ?」

足下から、思いつきり傍迷惑はためいわくそうな拒否が返ってきはった。

「貴様! 気安く我われのアルへと語り掛けるな!」

ハツちゃん、即座に嫉妬反応。

「ねー? アルは、私のだもんねー?」

「一ミリたりとも貴女あなたのじゃありませんッツツ!」

本家炸裂も、見事に撃沈で地面に〃の〃の字や……。

って言うか、何でドクロイガーはんも〃の〃の字書いてるんツ?

何で二人同調で膝抱ふたりシンクロ ひざかかえとるんツ?

「あー……もう、何だかな? この混沌カオス?」

Gリンちゃん、こめかみ押さえとる。

せやけど、ウチも同感や。

「つたく、もーいいわ。ねえ、ドク郎?」

『変な呼び名を付けるなッ!』

……ウチには付けたクセに。

「アンタ、そのへネクラナレーダー」とやらをよこして帰んなさいよ?」

『……とんでもない提案しだしたな、オマエ?』

「いいから、よこせ？　そんでもってゲットバック！　ハウス！」

Gリンちゃん、犬扱いや。

『ウキイイイーツ！　何だ、このアホ臭い展開は！　もういい！』

ドクロイガーはん、キレはった。

何やる？　この既視感きしかん？

『……みんな壊してやる』

寄せはった！

低い抑揚で凄んで「本家」に寄せはったよツ？

『喰りえええい！　ドクロバアアス——』『アホか——』『トオオオ——？』

力りんだ発射体勢を構とえた途端とたん、Gリンちゃんからの顔面ハリセンスパーン！

「何考えてんのよ！　アンタ！　宇宙空間ならいざ知らず、こんな場所で撃つたら山火

事大惨事だツツーの！」

『うう……グスツ……』

鼻頭押さえて泣いてはった。

ブラックホールへ投げ捨てたんやなかったの？

『だ……だったらへドクロブレードならいいですか？』

「よし、許す」

『ははあ！ ありがとうございます！』

土下座謝辞や。

っていうか、何で〈敵〉に武器の使用許可求めてはるん？

何で「主従関係」みたいになってはるのん？

『フハハハハッ！ 行くぞ！ ドクロブレエエード！』

半月刀を翳かざして決めポーズ構えはった。

ウチ、何や目頭熱うなつて拍手してたわ。

よかつたねえ？

『喰らえええい！ イルカ娘エエエーッ！』

「ひあああうー！」

ウチや！

油断しとつたら、標ターゲット的はウチや！

厳いかつい刃が振り下ろされる！

ウチ、身を強張らせて縮こまったよ？

ふぐう！ 怖くて動けへん！

絶体絶命や！

その刹那！

玉突き事故してる間に逃げたらええやんツ!

『フハハハハッ! 人質ゲットだぜ!』

勝ち誇るドクロイガーはん。

まるで〈憧れの人質マスター〉でも目指してるかのようなテンションやねえ?

「ちよつと! アンタ、人質なんてズルいわよ!」

『何とでも言うがいい! シャチ娘!』

「この卑怯者!」

『痛くも痒くも無いわ!』

「臆病者! 卑劣!」

『平気 ♪ 平気 ♪』

「そんなんだからモテないのよ!」

『は〜い ♪ 生まれてこのかた、バレインタインチチョコなんか貰った事ありません ♪』

「ぐぬぬぬっ! コンの! 開き直りやがって!」

『フハハハハハッ! フハハハハハハハハハハハッ!』

「まるで悪役みたいやんねえ?」

『……それはチョット傷付いた』

何で？

ウチ、小首コクンと素直な感想言うただけやよ？

『さあ、形勢逆転だ！ コイツらの安全が惜しいならば、おとなしくオマエ達が持つへネ
クラナミコンの欠片^{かけら}を渡せ！』

もう持つとるよ？

その手の中にいるクルちゃんを持つとるよ？

『どうした！ さっさと渡せ！』

持つとるよ？

「くうう！ あんな石コロやるのは構わないけど、アイツに屈するのは腹が立つ！」

Gリンちゃん、重視すべき点が変わつとる。

「アンタなんか絶対渡すかア！」

『何だとオ！』

せやから、持つとるよ？

渡すも何も持つとるよ？

「悔しかったら実力で奪ってみなさい！ ベンベロペー！」

『この……意地悪わがまま娘がア！』

事態ややこしなつた！

起きとる展開は単純なのに、事態ややこしなった！

巨大な子供のケンカなつた！

と、その時、ゴゴゴ……と地鳴りが轟いた！

「な……何や？」

慌てて周囲に元凶を追えば、それは一本の〈アムリの樹〉が刻む振動やつた！

アレ、ウチがグルグル回ったデツカイ樹や！

あの「つまんなかった樹」や！

そして、その大樹が動き出しはつた！

地面から引き抜いた根は脚！

掲げた枝を下ろせば腕！

ウチが見つけた虚は、そのまま顔や！

微々とした変形が示したのは、完全な人型ひとがたやつた！

木製の巨人や！

その雄姿を見たアリコちゃんが驚愕に染まった！

「アレは〈大樹神アキラカツラ〉さま！」

見たらアカンもんを見たような名前やね？

大樹神さんは顔前で肘交差した両腕を、ゆつくりと上げ……上げ……上げ……上げ……何

も変わってへんかった。

てつきり「荒々しい鬼神顔」にでもなるんかと思つたけど「ハニワかお埴輪顔」のまんまやつた。

あ、でも真つ赤にマイナーチェンジしてはるねえ？

一応、怒つてはるんや？

単に顔面だけ枯れたようにも見えるけど。

そして、ズシンズシンと重々しい歩を刻んで「ドクロイガー」はんと対峙！

『キ……キサマはー！』

動揺に構えるドクロイガーはん！

そういうえばアリコちゃんトコ襲撃した時に、やられはつたんよね？

因縁や！

『現れたな！デク木偶人形！』

再戦前哨ににら睨みあう巨体と巨体！

『さつきは敗北を喫したが、今度はそうはいかんで！ このワシに勝てると思うなよ！』

いや、負けはつたんやん？

『たかだか木偶デクこ如きの攻撃が、全身へ宇宙合金コズミウム製コズミウムのワシに通用すると思うか

！』

通用したんよねえ？

『さあ、分かったらこのまま帰れ！ 帰るといふなら、止めはせん！ ここは速やかに帰るが吉だ！ うん！』

何で高圧的に懇願してはるん？

『ハウス！』

さつそく使つたよッ？

『あ、そうだ！ フハハハハハッ！ それにコレを見よ！ 我が掌中には人質がおるの

だ！ さあ、レッツ・Uターユイんごはあーッツ？』

アララカツラはんの顔面ストレートが、躊躇ちゆうちゆう無く炸裂！

吹っ飛び倒れる衝撃に、クルちゃん達が放り出された！

「アカン！」

ウチ、咄嗟とつさにヘリウムブースター全開や！

スライディング宜よろしくでクルちゃんを抱だき掬すくう！

一方でGリンちゃんは、高々と放り上げられたアリコちゃんとハツちゃんを……つ

て、アリコちゃん、ハツちゃんにぶら下げられて飛んどった。

せやねえ？

ハツちゃん、飛べたねえ？

「ああん♡ アルが全体重を掛けて、私をイヂメるくん ♪」
 「誤解を招く言い方をしないで下さいッ！」

……仲良しや。

「あ」

「ふえ？ クルちゃん、どないしたん？」

「陽ノ咲モモカ、天条リン、たつたいまへネクラナミコンの欠片」を見つけた」

「え？ ホンマ？」

「はあ？ このクソ忙しい時に！ 何処だツツーの？」

「アレ」

「は？」「ふえ？！」

「あの大樹神へアララカツラ」が「ネクラナミコンの欠片」と思われる」

二人して眼前の木製壇輪を見て、言いようもない感情に暫し絶句と固まる。

『痛ッ！ ちよつと待つ……痛ッ！ 話を……痛いつて！』

「オオオオオオ……！」

森の樹々をリングマットに変えて殴りあう巨人！

違うた……一方的に殴る巨人と、一方的に殴られる巨人！

ボコボコや！

これぞホンマのフルボッコや！

ド迫力やけど陰湿で地味や！

「私の所有する〈ネクラナミコンの欠片〉^{かけら}が共鳴現象を起こしている。間違いない」

クルちゃん、淡々と確定してくれはった。

「石板じゃないじゃんッ！」

「そもそも〈ネクラナミコン〉は、擬似的な意思を宿している。もしかしたら自己防衛本能から別形態へ擬態変化した可能性も^{いな}否めない」

「別形態？ ちょっとアンタ！ そんな情報言つてなかったじゃん！」

「私も初めて知った」

「その〈ネクラナミコンの欠片〉^{かけら}は、ドクロイガーはんをマウントフルボッコしてはるんやけどツ？ 大暴れしてるんやけどツ？」

「ざけんなツツーの！ どうやって回収しろつてのよ！ アイツ、^{テンフシャーロール}振り子殴りでイケイケじゃん！ オラオラオラ状態じゃん！」

「心配無用。高レベルエネルギー^{もち}を用いて活動停止へと追い込めばいい」

「どゆ事？ クルちゃん？」

「倒せばいい」

……意外とシンプルやんね？

「倒せば……って」

軽く困惑を噛みつつ、Gリンちゃんは改めて戦況を見つめた。
私刑^{リンチ}、まだ続いてはる。

「つたく、ドクロイガーのヤツも使えないし！」

心の底から失望に苛立^{いらだ}つGリンちゃん。

っていうか、使う気やったん？

「しやーない！　こうなったら……モモ、やるわよ！」

「ふえ？　う……うん！」

指示を承^うけて、即座にフォーメーションを陣取る！

「エコロケーションホールド！」

花と開いた掌^{てのひら}から〈高出力特殊超音波〉を照射！

拘束技が相手の自由を奪^うう！

アララカツラはん……と、ドクロイガーはんの。

「オオオオオオオオオオオオ……」

『グスツグスツ……って、又オオオオツ？　コ……コレはツ？　一度ならず二度までも！』

足掻^{あが}くアララカツラはん……と、ドクロイガーはん！

うん、今回はほんまにゴメンねえ？

「コ……コレって?」

両手の中の現物を見たGリンちゃんは「フフ……フフ……フフ……フフ……」と、顔を伏せた笑みに浸り始めた。

怖いよ? Gリンちゃん?

「よっしやあーっ!」へネクラナレーダー「ゲットよーっ!」

高々と勝利宣言を吠えはった。

「何で、それがへネクラナレーダーって判るん?」

「だって書いてあるもん」

あ、ホンマや。

裏面に『ねくらなれーだー』『どくろいがー』って、油性マジックで手書きしてある。

……ドクroiガーはん?

何で幼稚園児ばりに「ひらがな」なん?

「どうよ? アタシこそ「天条リン」! 銀暦ぎんれき有数の大企業ほしかわへ星河コンツエルン」の娘」

天条リン「なのよ! 不可能なんて無いんだから!」

ロングボニーをフアサと鋤いて、高らかに誇示や。

いや、Gリンちゃん?

コレ「大企業の娘」関係あらへんと思うよ?

ウチとリンちゃんは〈Gフォルム〉を解除して、みんなと合流する。

アララカツラはんの姿は光に掻き消え、その場所には手帳程度の石板——〈ネクラナミコンの欠片〉が転がり落ちとつた。

それを回収して咄くクルちゃん。

「なるほど。どうやら〈ネクラナミコンの欠片〉は、自衛本能から別形態へと擬態進化を為すらしい。コレは初めて知った」

「って事は、どういう事よ?」

「それは、つまり——」

「つまり?」

「——これから先〈ネクラナミコンの欠片〉と戦う展開もあり得るという事」

「はああくくくッ?」

厄介な展開増えたわ!

ウチと惑星テネンス Fractal. 8

もうじきタイムリミットや。

ぼちぼちへツエレークへ帰還せなアカン。

着陸待機しとるへ宇宙航行艇^{コスモクルーザー}の傍ら^{かたわ}で、ウチ達はアリコちゃん達との別れを惜しんだ。

「もう行ってしまわれるのですか……出会って、あつ言う間でしたね」

「うん ♪ あんな？ アリコちゃん？ ウチ、楽しかった ♪」

ホワホワとした笑顔を見せるウチに、アリコちゃんはクスツと微笑^{びしょう}を返す。

「そうですか」

「結婚式には呼んだってな？」

「ま、百合つても人生なるようになるから」

「へアルアントン？へジワスプ？どっち？」

「別れ間に爆弾落とさないで頂けますツツツ？」

せやけど、ハツちゃんクネツとるよ？

嬉しそくに身悶えしとるよ？

「けど、実際問題どうすんの？」

「そ……それは」

リンちゃんの指摘に口籠るアリコちゃん。

「もう、いつそ結婚しちやえ ♪」

「結婚式には呼んだってな？」

「どっちが『母親』で、どっちが『父親』？」

「ですから！ 別れ間際にッ！」

ハツちゃん、ウネウネし過ぎて原型留めてへん。

何や『チンアナゴ』みたいになっとる。

アリコちゃんは「ハア」と嘆息の一言を置くと、軽い黙想を刻んだ。

「宇宙には、まだあのような者が多くいるのですか？」

「ん？ 誰の事よ？」

「いえ、あの『ドクロイガー』のような『猛者』が……」

「猛者かどうかは知らないけど、バカは多いわね」

リンちゃん、ウチやないよね？

「アルゴネア・リイズ・コーデス、多次元構造宇宙へフラクタルブレーンへは無限に展開している。従って、上限も下限も無い。少なくとも、私は『宇宙規模でスゴい』とんでもない友達^{バカ}を一人知っている」

クルちゃん、ウチやないよね？

「そう……ですか」軽い一顧^{いっこ}。「……武者修行には、いいかもしれませんね」

「アア〜ルウウウ〜！ 行つちやヤダああ〜〜〜！」

耳にした途端^{とたん}、アリコちゃんの脚へと縋^{すが}り付くハツちゃん。

鼻水流した号泣や。

女王様、それでええのん？

離婚言い渡されたダメ亭主みたいやんね？

「……このバカとも、距離を置けますし」

冷蔑^{れいべつ}を向けられて、ハツちゃんピキイ固まった！

氷結したみたいになった！

「うわあああああ〜〜〜ん！」

大泣きながら彼方へ走り去ったよッ？

土煙上げて爆走やよッ？

飛べるの失念しとるよッ？

「で、実際どうなの？」

「何がです？ リンさん？」

「エルダニヤ、嫌いななの？」

「そ……それは……」困惑に眼差しまなざしを伏せた。「嫌いなワケ……無いじゃないですか」

「結婚式には呼んだってな？」

「段階無視して飛躍し過ぎですッ！ モモカさんッ！」

そうなん？

え？

でも、そういう事違ちやうの？

「子供の頃から、大の仲良しですし……でも、そ……う……対……象……と……して……は……見……て……い……ま……せ……ん……で……し……た……か……ら」

そりやそうやんな？

そう見てたら、アリコちゃんの方に問題あるやんな？

「アルゴネア・リイズ・コーデス、心配無用。その方向性で自然体のまま邁進まいしんしている
友達バカひとりを一人知っている」

……クルちゃん、それ誰？

さつきから出てくるけど、それ誰？

「ま、型を破るも善し！ 破らぬも善し！ 結局は……さ？」リンちゃんはアリコちゃんの胸をコンと小突いた。「アンタのココ次第だから」

「……リンさん」

「周りの目なんか遠慮すんじゃないわよ？ そんな無責任な意見なんかクソ喰らえなんだから！ いつでも〈自分〉だかんね？ 後悔だけはすんな？」

明るく笑顔を添えるリンちゃん。

「……はい」と優しい憂うれいが微笑ほほえみ返す。

ウチ、自分のココを触ってみた。

……小さい。

ふぐう！

「いつか、私も行ってみたいですね……宇宙へ……私よりも強い相手に会うために……」

「アリコちゃん、赤いハチマキ要いる？」

「はい？」

みるみる青い惑星は離れていく。

数分前までは、あそこにおった。

数分前までは、あそこで「新しい友達」とおった。
何や不思議や。

『結局、アリコは来なかった……か』

ニユートリノ通信で感慨を零すリンちゃん。

「せやね」と、ウチは若干しんみりや。

『ま、選択としちや順当つしよ？ アリコはへ次期ジアント女王……いつ帰れるか判らない旅路なんかに出てられないわよ』

「せやね」

『……何よ？ モモ？ しんみりしちやつて？』

「あんな？ リンちゃん？ ウチ、ちよつと寂しい……」

『はあ？』

「せつかく「友達」なれたのに、もうこれで会えへんもん」

『つたく……このパータリン』

「ふぐう……せやかてえ〜！」

『また会いに来りやいいツつーの。幸いへツエレークにはへフラクタルブレーション航行の性能が備わってるんだから』

「ええの？」

『いいわよ』

「せやけど、マリーは？」

『つたく……アタシを誰だと思ってるの？ 銀暦ぎんれき有数の大企業ほしかわ（星河コンツエルン）の娘

「天条リン」よ？ 不可能なんて無いんだから！ そんな時は、アタシが説得してあげるツツーの！』

ウチ「にへへ」と笑わらうた。

「あんな？ ウチ、リンちゃん大好きや ♪」

『……し……知ってるツツーの』

聞き取れへんかった。

リンちゃん、急にゴニョゴニョなんやもん。

「あ、せや！」

『何よ？ 急にテンション一転させて？』

「リンちゃん、もう一回アレ言うて？」

『何よ？ アレって？』

「ドクROIガーはんから庇かばった時、言うてたやん——『アタシのモモに何すんだー』

！』って？」

『ええ〜？ そんな事、言ったかなあ？』

「言うたよ？」

『言つてないけどなあ〜？』

「言うた！」

『覚えのないなあ〜？』

「ふぐう！ リンちゃん、意地悪や！」

『アハハハハハ★』

大きい鯨が見えた。

帰還したら、このへフラクタルブレインとは、おさらばや。

せやけど、またね？

アリコちゃん ♪ ハツちゃん ♪

明かりを消した暗室の方が集中力が維持できる。

陽^ひノ咲^{さき}モモ力達の探索結果を受け、マリー・ハウゼンは自室へと籠^{こも}った。

彼女達が持ち帰った貴重な情報を、すぐさまデータベースに追記する作業へと没頭する。

モニターが点^{とも}すブルーライトを遮光眼鏡が軽減し、勤^{いそ}しむキーパンチ音だけがひたす

らにカタカタと鳴り続いた。

とりあえずの区切り目まで一気に更新し終わると、ようやく小休止とばかりに背凭れへと自分を解放する。

「ふう……」

零れる一息に虚空を仰ぎ、才女は目頭を押さえた。

眼精疲労……というよりは、この作業中に気付いた事実が虚脱感を促進したのであるう。

その要因を、彼女は誰に言うともなく洩らすのであった。

「今回……私の出番少なかった」

あ、気にしてたんだけ？

うん、何かゴメン。

作者的に。

「パンパカパーン★ サプライズ登場♪」

「……………」

さすがに面食らったわ。

揚々と飛び出したトコ悪いけど、こっちは思考停止で固まったわ。

ウチも、リンちゃんも、クルちゃんも……。

帰還直後の整備中、ハツちゃんが姿を現した。

何故か〈ドフィオン〉の貨物倉庫から……。

あのちつこい空間から……。

「む？ さすがに虚を突かれたようだな？ いや、無理もなからう。よもや、この「ハー

チエス・エルダナ・フォン・アルワルプ・ビーシヨシヨウオームIV世」が現れるとは、露^{つゆ}程^{ほど}も思うておらんかったであろうからな……フッフ」

そうやよ？

優越感^{ふく}に含^わみ笑^わいを浮かべるとこ悪いけど、その通りやよ？

いろんな意味で……。

「さて……アルウゝ♡ 追って来ちやつたあゝ ♪ ♪」

おらへんよ？

「アルが武者修行するなら、私も付いて行くゝ ♪ ね？ アル？ ドコオゝ？」

おらへんよ？

「アホかあああーッ！」

リンちゃんの後頭部ハリセンがスパーン！

格納庫内に景気良く破裂音が反響した。

「ドーすんのよ！ エルダニャ！ 既に（すで）へフラクタルブレーンを離脱航行中よ！」

「痛たた……フツ……愚かなり、天条リン！ 我とアルは一蓮托生（いちれんたくしょう）！ 切つても切れぬ
運命の赤い糸なのだ！」

切れたよ？

「さ ♪ アルはドコかなあ？」

「……いないわよ」

「……む？」

「だから、いないツツーの」

暫し（しば）、嘔み砕く。

「いない？」

「うん」

黙考。

「え？ アル、いない？」

「うん」

沈黙。

「あんな？ やっぱ武者修行やめたんやって。このまま、テネンスで鍛えるらしいわ」

「……………」

ややあつて、血相変えはったわ。

「帰るぞー！」

「帰れるかああー……ッ！」

今度は顔面ハリセンがスパーン響いた！

惑星テネンスから帰還して三日経みっかたった。

宇宙クラゲの形跡は、まだ無い。

クルちゃんへのネクラナミコン＜反応も、まだ無い。

せやから、平和や。

平和にJKライフや。

ブレザー姿の雑踏に馴染んで、ウチも登校の流動に乗る。

ほんでもって、芋洗いをキョロキョロキョロキョロ……。

「あ、おった！」

ウチ、トテテテと目標のトコまで駆けてったわ。

「おはよう ♪ リンちゃん ♪」

「おー、おはようモモ」

まだ覇気無い。

毎朝の事や。

リンちゃん、低血圧やねん。

ホームルームにはエンジン掛かんねんな。

「ごきげんよう、モモカにリンよ」

挨拶を手土産に並び歩く美人さん。

涼しい眼差しまなざしに、通った鼻筋。

日射しを散らす長い金髪が、ふわりと微風に泳いだ。

物腰にしや滲み出でる気品が、優麗な印象を漂わしとる。

「あー！ ハツちゃん、おはようさん ♪ 」

「あー、エルダニヤおはよう……」

「うむ、苦しゆうないぞ？」

「……………」

「……………」

「……………」

慌てて登校の波から外れたよツ？

並び歩いてるハツちゃんを首フックで連れ去って！

眠気もブツ飛んだわ！

「ええい、苦しいわ！ 何をするか！ リンよ！」

「何をするか……ぢやないわよ！ 何で、しゃあしやあと並んでるんだツツの！」

リンちゃん、路地裏で胸ぐら掴つかんでガクガクや！

傍はた目にカツアゲしとるみたいや！

「決まっておろう？ 〃とーこー〃というヤツじゃ」

「ヤツじゃ……じゃないツツの！ アンタ、いつ転入した！ ってか、羽根とか甲殻ど

うした！ ってか、初めて見たわよアンタの素顔！」

「……質問の多いヤツであるな」

「つたり前だー！ーツツ！」

「天条リン、心配無用。転入手続きは、マリー・ハウゼンが処理しておいた」

「うひやあおうツツ？」

いきなり背後から浴びせられた声に、ウチとリンちゃんはビクウ驚き跳ねる！

クルちゃんやった！

どこかの忍者かと思うたら、クルちゃんやった！

陰おんやうじゆつ行術の達人やツツ！

「ク……ククク……クル？ アンタ、いつからいたツツ？」

「カツアゲ行為が始まった辺りから」

「失礼ねッ！」

「違った？」と、クルコクン。

「違ちやうよ？」

ウチにもそう見えただけど、違ちやうよ？

そもそもリンちゃん、お小遣いに困らへんよ？

「ちなみに、ハーチエス・フォン・エルダナ・アルワスプ・ピースウオームIV世の羽根や容姿は、パモカの擬態アプリによる変身」

「は？ 擬態アプリ？ そんなんパモカにあつた？」

「公式には存在しない。私が独自作成した物になる」

「何に使う気だった！ そんな需要皆無なアプリ！」

「需要」と、ハツちゃん指した。

「……うん、そうね。役に立ったわね」

リンちゃん、意気消沈で引き下がりはったわ。

せやけど、コレはしやあないよ？

現物、居おるもんねえ？

「ともあれ、これからは共に学校生活を送る事になる。陽ひノ咲さモモカ、天条リン、ヨロシ

ク頼む」

「コレとか！ コイツとか！」

「うむ、光栄に思え？」

「……何で上から目線だ、アンタ」

「とは言え、我^{われ}とて“てーピーおー”というヤツは弁^わえておる。学校では“ふつうのじよしーサー”として接するがよい」

「……だから、何で上から目線だ」

それよりも全部“ひらがな発声”の方が、ウチ気になんねん。

ハツちゃん、ホンマに理解しとるん？

「とりあえず、話は纏^{まと}まった。よって、これより全員で登校する」
「纏^{まと}まってないツツの！ ……って、うん？ 全員で登校？」

クルちゃんの発言を耳にしたリンちゃんが、ようやく違和感に気付きはった。

ウチ、さつきから気になつてん。

クルちゃん、当校^{ウチ}の制服やねん。

ブレザー姿やねん。

「……クル？」

「何？」

リンちゃんと惑星レトロナ

リンちゃんと惑星レトロナ Fractal. 1

『レエエエトロオオオナ……フアアアイブツ！』

天空に立つ鋼鉄の巨人が、雄々しくポーズを決めはった！

「アカン……リンちゃああ……ん！ 帰って来てえええ……ッ！」

ウチは叫んだ！

哀しなって……空むなしなって……必死ごんがんの懇願を叫んだ！

さかのぼ
遡る事、約三日前——。

『ツエレーク、空間転移完了——量子波動安定化——現フラクタルブレーション座標照合、3
フラクタル ブレーンデイメンション

f \ 2 b 次 元、マイナスコンマ0003誤差修正——滞在可能推定時間、七十二

時間四十五分リミット——』

空間転移が終わった。

「今回はエライ滞在可能時間長いねえ？ 約三日やん？」

イザーナの操縦席コックピットで転移報告を聞いたウチは、率直な感想を洩もらした。

『ま、そういう事もあるっしょ』と、ミヴィークの操縦席コックピットからリンちゃんのモニター通信。淡白に切り捨てて、テキパキと発進準備を進めとる。

『んで、クル？ 今回は、どんな感じの惑星よ？』

リンちゃんの質問に答えるべく、反対側のモニターにクルちゃんが映った。

『今回の目的地は〈惑星レトロナ〉——あなた達の地球に似通った惑星』

「ふえ？ ウチらの〈地球〉に似とる惑星ほしなん？」

『とは言っても、旧暦——それも“昭和”と呼ばれた時代に酷似している』

「ふわあ？ ウチ、楽しみや ♪ 旧暦、体験した事無いわあ ♪」

『……いや、そりやそうでしょうよ』

「リンちゃん、ある？」

『あるか！ アンタ、アタシを何歳だとカウントしてるツ？』

「えへへ ♪ ウチと同年 ♪」

『……嬉しそうにニコニコしないで、少しはアタシの意図を汲め』

「楽しみやね？ リンちゃん ♪ クルちゃん ♪」

『うむ、実に楽しみであるな』

「ほら、ハツちゃんも楽しみやつて……」

『……………』

『「……………」』

ウチとリンちゃん、とんでもない予感に泡食つたよ？

第三の通信相手に面喰らつたよツ？

『エエエ……エルダニヤ？ まさかアンタも降下する気なのツ？』

『騒がしいのう、リン。当然であろう？ オマエ達が降下するのであれば、我^{われ}とて降下す

るは道理！』

『どうしてだッ！ そもそもアンタへ宇宙航行艇^{コスモクルーザー}は、どうしたッ！』

『フツ……抜かり無いわ！ 我^{われ}を誰だと思^{われ}うておる！』

「ハツちゃん」『エルダニヤ』『痛いアルワスプ』

『違うわッ！』

合^あつてるやんな？

『さあ、心して見るが良い……我^{われ}が愛機の勇姿を！』

自信满满^{トツ}ぶりに続けて、普段使わへん第四ブロック十三型六六六番格納庫^{ドッグ}がゴウ

ンゴウンとシャッターを開け始めた。

此処、普段は閉鎖されとんねん。

不吉な番号の羅列やし、夜間整備してるとラップ音とかオーブとか騒乱しはるし、シャッターとか御札おふだだらけやし。

ほんでもって重々しい逆光を浴びつつ、初見の〈宇宙航行艇コスモクルーザー〉が姿を現してきはった。ハツちゃん専用機やから、きつと〈蜂型〉……やない！

何故か〈魚類型〉や！

ウチの〈エイザーナ〉やリンちゃんの〈ミヴィーク〉に似たフォルムやけど、二回りデカイ！

しかも、何処となく凶暴な面構ツラがまえや！

ウチ、あんなん古い映画で観た事ある！

確か〈モササウルス〉いうヤツや！

『何で〈モササウルス〉だーッ？』

リンちゃん、ウチの代弁を叫んでくれはった。

有難うねえ？

『む？ コレはへもささうるす』というのか？ 実は我われも、何がモチーフに良いか日夜検

索しておったのだ。いやはや苦勞したぞ……主ぬしらに合わせたモチーフでなければ

てーびーおー』というものが成り立たんてな』

ハツちゃん、もしかして“DVD”を“でーぶいでー”言うタイプ？

『そんな中で、斯様に雄々しい生物を見つけたのだ。見よ、この勇猛さ！　そして、王者の貫禄！　実に相応しいではないか？』

『いや、まあ……アンタの気位なら、そういう基準にもなるか……』

『私のアルにー♡』

『基準そつちかー……ッ！』

『だつてえ〜ん ♪　アルつてば、カツコイイじゃない？　凜々しいじゃない？

胸、大きいじゃない？』

最後の関係あらへん。

「あんな？　ハツちゃん？」

『うふふ♡　アルアルアル♡　コレで一緒に新婚旅行〜 ♪』

「あんな？　ハツちゃん？　鼻血流してクネクネなってるトコ悪いけど……ちよつとええ？」

『アルアルアル♡　私アル♡』

「おらへんよ？」

『うわ〜〜〜ん！』

号泣しだした。

感情忙しいねえ？

『うぐつ……グスツ……して、訊ききたい事は何だ？ モモカよ？』

凜と上から視線や。

ハツちゃん、情緒不安定？

「あんな？ それ、誰が造つたのん？」

『そうよ！ そんなへ宇宙航行艇コスモクルーザーなんて、おいそれと急造できる物じゃないでしょ！

まさか、またマリリーとか言うんじゃないでしょうね！』

『私じゃないわよ』

また新たな通信モニターが開いて、困惑気味の眼鏡美女が映った。

表マリリーや。

操縦席内、モニター乱立で忙せわしくガチャガチャなってきたわ。

軽くパーリー状況や。

『マリリーが造つたんじゃないの？ じゃあ、誰だツツのよ？』

『うくん、私じゃないんだけど……何処となく見た記憶があるのよね、それ』

『フツ……やれやれ。どうにも御主達おぬしたちは、救すくい難がたい無頓着むとんちやくのようであるな？

晴らしき機体を失念しておつたとは……勿体無もったいない！』

ス様に素かよう

ハツちゃん、優越感めいて勝ち誇つてはる。

『コレは、あの倉庫に眠っていた機体である！ それをへもささされすへとフォルム改修して新生させたのだ！』

「嘩んだよ？」

『あの倉庫って……まさか“第四ブロック十三型六六六番格納庫”の事ッ？ エルダ

ニヤ？』

『左様じゃ、リン』

『ンなワケあるかッつの！ あそこ、ずっと封印されてんのよッ？』

「封印言いはったねえ？」

「リンちゃん、閉鎖やなく封印言いはったねえ？」

『思い出したわ！』と、突然マリーが声を上げた。『あの倉庫に眠ってたのはヘイザーナ』とへミヴィークの試作機体——つまりへプロトタイプよ！』

『は？ アタシらのプロトタイプ？ それがへモササウルスって……色気無えー』

『いいえ。別にへモササウルスじゃなかったわ。かといってへイルカでもへシヤチでもない』

『んじゃ、何だったのよ？』

『何でも無いわよ。単に外装無しの剥き出し機体……骨組みと基礎設計メカニズムだけ。機体も、ここまで大きくなかったわ。せいぜいへイザーナへミヴィークの1:3

『倍程度……』

『だから、言うておろう？ 我がへももささうれすへと改修した——と』

『嘩んだよ？』

『んで？ 何で、そんなのが封……放置されてたワケ？』

『また〈封印〉言い掛けたねえ？』

『……死んだのよ』

『は？』『ふえ？』

『当時、その機体開発を担当していた整備員がね……その格納庫で睡眠薬自殺したの』

『陰惨な黒歴史が炙り出てきた！』

『おぼろげ臆気に予想してたけど、オカルト入って来た！』

『アカン！ この作品〈SF〉なくなつてまう！』

『相当思い詰めていたみたいね……生真面目過ぎる性格だったから……けれど、誰も彼女の胸中に気付けなかった』

『ウチとリンちゃんは、ゴクリと生唾なまつば飲み込んだ。』

『それって、開発に行き詰まった……とかなん？』

『あ……或いは、過労死？』

『いいえ』と、深刻な面持ちで真相を告げるマリー。『彼氏と別れたらしいのよ』

『開発秘話、関係ないじゃんツ!』

リンちゃん、間髪入れずに突っ込んだ!

『来る日も来る日も缶詰状態で、しかも完成の目処メドが付かない。クリスマスも誕生日も返上で、ひたすらに開発へ孤軍奮闘——。そんな長距離恋愛で関係が冷え込み、彼氏から別れの連絡が……』

『よくある話じゃん! 死ぬ程ほどの事ないじゃん! 男なんて掃いて捨てるほどいるんだから!』

「ふぐう……その人、可哀想やあ〜」

『……何で潤々うるうるしてんだ、脳味噌スウィーツ娘』

リンちゃん、あんまりや!

『頬を伝う乾いた涙は何だか可笑しく、明日からの生き甲斐を模索するのも面倒になつてきていた』

クルちゃん? いきなり何をブツ込んできたん?

誰も読んでへんよ? それ?

『しかし、それにしても、なかなか見事な腕前であるな? 正直、我われも感嘆し——いやいや、謙遜けんそんするでない——フフフ、左様であつたか』

……ハツちゃん? 誰と話しとるのん?

点いてないサブモニター相手に、誰と話しとるのん？

『僅わずか数週間で、このように完璧な機体を完成させるとは——何を言うか、見事である！可能であれば特別報酬を授けたいところであるが、生憎あいにくと現状いまの我われは——ふむ？ そ
うか？ 何と無欲な——うむ、構わぬ。申してみよ——なるほどのう？』

見えへん人と話してはるッ！

ハッちゃん！ 帰ってきてえくくッ！

『うむ、善かろう！ 今日より、我われの専属エンジニアにしてやろう！』

ドエライ人を採用しはった！

ほんでもって、噛んだ！

『ホホホ……苦しゅうないぞ？』

オーブ飛び始めた！

ハッちゃんの周り、無数の発光体が喜び飛んではる！

『では、改めて紹介しよう。リン、モモカ、クルロリよ、此処こゝに居るが、我われが専属の——』

『行なつてきまーすツツツ！』

半なかば強引なにへイザーナとへミヴィークは出勤した！

格納庫扉ハッをミサイルでブチ破チって！

リンちゃんとか星レトロナ Fractal. 2

白い滞留が僅かな間だけ真つ赤な世界に染まると、青く広がる清涼へと抜け出た。

『此処が〈星レトロナ〉か』

一望に感想を漏らすリンちゃん。

雄大な満ち引きが入江に浸食を食い止められ、波打ち際の境界付近は灰色に拓かれた人工地が利便の支配を誇示しとる。

その先端には、結構、大規模な敷地を使うた建築物が物々しく聳えとつた。

おそらく、アレを造る為だけに開拓したねんな？

だって、周辺を囲うように森林は手付かずやもん。

「ホンマや！ 旧暦そっくりや！ あ、東京タワー在る！ スカイツリーや！ ほんでもって、通天閣も在る！」

『待て待て待て！』

『ね？！』

『クル！ コクンと「ね？」じゃないツツの！ どうして全国名所が一緒くたに乱立してるツ？』

『……』

『………』

『ね？』

『クルコクンで「ね？」して誤魔化すな！』

せやねん。

あの建築物の敷地内、世界名所だらげやねん。

大きさは均衡化しとるようやけど。

ほんでもって、どれも、おそらく元祖より巨大や。

「あ、奈良の大仏様や！ 自由の女神や！ エッフェル塔や！ スフィンクスや！ お

台場が ● ダムもある！」

『カオス増やすなーッ！』

『天条リン、旧暦通り』

『なワケあるかーッ！ 世界各国の国境無視じゃないのよ！』

『おかしい？ 旧暦では、世界名所は一ヶ所へ集あっているはず？』

『どんな誤認よ！ 世界名所は、世界各国に在あってこそその“世界名所”でしょ！』

「あ！ ウチ、それ知ってるよ？ 旧暦アーカイブで見た事あんねん ♪」

『そう、それ』

『はあ？』

「『東武ワールドス ● ウエア ♪』

『ハモるなーーツ！』

リンちゃん、プリプリや。

何で、そないにカリカリしてんのん？

ええやんな？

世界の名所、一網打尽や ♪

と、突然、けたたましいサイレンが辺り一面へ鳴り響いた！

コレ、明らかに非常事態警報やんな？

ウチでも解るよ？

えへへ ♪

『な………何よ？ コレ？』

狼狽うろたえるリンちゃん。

出所を求めると、どうやら眼前の名所地帯からや。

すると〈奈良の大仏〉と〈自由の女神〉と〈お台場ガ ● ダム〉がマトリョーシカ

みたいに関前後へ割れ開き、中から三機の戦闘機が垂直に飛び立った。

……格納庫だったん？

っていうか、最後のええのん？

戦闘機は、こちらに向かつて来る。

あの世界名所敷地は〈東京タワー〉〈スカイツリー〉〈通天閣〉の尖先からピンク色のエネルギー光を放出し、それをバリアと張り巡らせた。

『現れたな！ レトロナ星人！』

尾翼に『1』書かれてると赤いジェットマシンが、外部スピーカーで叫びはった。

ウチ、ワクワクして周囲を探したよ？

「宇宙人？ ドコ？」

『はい』

無抑揚に手を挙げるクルちゃん。

「ふええ？ クルちゃん〈宇宙人〉やったの？ ウチ、気付かへんかった ♪」

『陽ノ咲モモカ、私だけではない。宇宙そのものに判断基準を据えれば、アナタも立派に〈宇宙人〉という定義になる』

「ウチも？」

『そう』

♪ 「違うよ？ ウチ〈宇宙人〉違うよ？ あんな？ 宇宙人は、もっとうこう……変やねん
地球人と違うねん ♪ 肌色やなくて、青とか緑とか銀やねんよ ♪

「
クルちゃんに教えたった ♪

ウチ、物知りさんや ♪

えへへ〜 ♪

『陽ノ咲モモカ、アナタは『変』』

淡泊に返されたよツ？

ウチ『変』違うよ？

ふぐう！

『……その定義はともかくとして、どうやらアイツらが指しているのはアタシ達のような
ね』

リンちゃんは緊迫した面持ちで、接近して来る戦闘機を睨み据えとった。

『天条リン、交戦するの？』

『場合によつては……ね。アイツらの出方次第』

『……了解した』

クルちゃんは、軽く一顧を刻む。

『天条リン、その前に解決しなければならぬ問題が出来た』

『はあ？ ったく、アンタは……どうして毎回、切羽詰まった局面で新たなトラブルを提示するかな？ 何よ！ そのトラブルって？』

『あれ』

『うん？ ……って、モモローツ？』

ウチ、相手の隣に並び飛んだ。

ほんでもって、外部スピーカーで挨拶した ♪

「こんにちは★」

『な……何ツ？ こちらの間に詰めただとツ？』

『気を付けろ！ ケイン！ どうやらソイツは〈瞬間移動能力〉を持っていてるようだぜ！』

主翼に『2』書かれたジェット機から忠告が向けられた。

『ああ、分かっている！ ジョニーー！』

持つてへんよ？

ウチの〈エイザーナ〉に、そんな性能スペックあらへんよ？

普通に近付いて並んだよ？

「あんな？ ウチ ひび陽ノ咲モモカさき 言うねんよ？」

『な……何ツ？ 少女……だと？』

『気を付けろ！ ケイン！ どうやら、ソイツは“少女”に化けて隙を突く作戦のよう
だぜ！』

『ああ、分かっている！ ジョニー！』

『フツ……しつかりしてくれよ？ リーダーさんよ？』

化けとらへんよ？

ウチ、正真正銘の“少女”やよ？

「えへへ♪ 1号機はん、名前“ケイン”言うの？」

『な……何ツ？ どうして、俺の名をツ？』

……言うてはったやん。

散々“ケイン”“ジョニー”言うてはったやん？

『気を付けろ！ ケイン！ おそらく〈テレパシー〉……それも、機体外からの介入だ！

どうやらソイツは、とんでもない〈超能力者〉サイキッカーのようだぜ！』

『ああ、分かっている！ ジョニー！』

違ちがうよ？

ウチ〈超能力者〉サイキッカー違ちがうよ？

「あんな？ ウチ“レトロナさん”やあらへんよ？」

『な……何ッ？ レトロナ星人じゃない……だと？』

何で、この人は、いつも驚愕しはるの？

ほんでもって、何で、その度に世界がブルートーンに染まるのん？

『冷静になれ！ ケイン！』

『し……しかし！』

『オマエの言い分は分かる……だが、いまは、まだレトロナ星人との和解共存は無理なんだ！ 例え、彼女のような平和思想のレトロナ星人でもな！』

『クッ！ どうして……どうして君は……混血なんか生まれちゃったんだアアア……ッ！』

生まれてへんよッ？

寝耳に水な設定やよッ？

『戦うしかねえ……こんな時代に生まれちゃった事が、彼女の不幸だったんだ』

『す……済まない！ 許してくれ！』

勝手に「不幸な身の上」にされた！

ケインはんに男泣きされた！

『こうなったら……ジョニー！ レトロナ合体だ！』

『オウ！』

何が「こうなったら」なん？

そんな思うとつたら、三機のジェットマシンは垂直軌道に高々と飛翔した！

『レエエエーッ！』『チエエエーッ！』『レトロナ！』

『レトロイイイーン！』『スイッチオーン！』

掛け声バラバラやッ！

せやけど合体プロセスは発動した！

よっほど頭のええ音声認識やんね？

機体が黄色いスパークを帯び、それが各機を繋ぎ引き寄せる！

重々しい合体！

1号機は頭部となり、2号機は両腕と化し、その他の部位には3号機が……………3号

機の負担、半端ないよ？

斯くして完成したのは、全高六〇メートルはある巨大ロボット！

『レエエトロボオオナ……………フアアアイブッ！』

雄々しくポーズ決めはった。

ええねえ？ ノリノリで？

ウチなんか「乙女の奇跡！」とか、やりたないねん……………。

『さあ、行くぞ！ レトロナ星……………グアアアッ！』

ほんでもって、何で、この「ジョニー」言う人、いつも斜に構えとんの？

「ふぐう！ ウチ、知らへんもん！ 何も悪い事しとらへんもん！」

『キュウ！ キュキュキュウ！』

ウチとハイザーナは、揃って抗議した！

ブンブンや！

『往生際が悪いぞ！ レトロナ星人！』

「違ちやう！」

『キュウ！ キュキュキュウ！』

『もう騙ちやされないぜ！』

「違ちやうツ！」

『キュウ！ キュキュウ！』

『なんて卑怯なヤツなんだ！』

「違ちやうツツ！」

『キュウ！ キュウ！ キュウ！』

ウチ、何や悲しなってきた。

また「新しい友達」出来る思うただけやのに……。

怒鳴られて……疑われて……決めつけられて……。

「ふぐう……ふええ……ふえええ〜ん！ リンちゃ〜ん！ うわ〜ん！
泣いとった。」

涙腺、我慢出来ななつた。

『キュウツ？ キュ〜ウ？ キュ〜ウ？』

一所懸命へイザーナが「いいいいこ」慰めてくれんねんけど、涙が止められへん……。

悲しくて……悲しくて……ただ泣いとった。

「リンちゃ〜ん！ リンちゃ〜ん！ うわ〜ん！」

『今度は泣き真似か！』

『猿芝居は止すんだな！ レトロナ星人！』

「うわ〜ん！ リンちゃ〜ん！ リンちゃ〜ん！ うわ〜ん！ うわ〜ん！」

『アタシのモモを泣かせんなー！』

『ケルルルルルルルッ！』

グス……グス……あ、リンちゃん？

リンちゃんとへミヴィークが、怒り心頭で特攻して来た！

『何ツ？ 増援……だどツ？』

『気を付けろ！ ケイン！ どうやら——』

『やかましいイイイー……』

『『グハアアアアー……』』

フルブラスト

問答無用の全砲門攻撃！

そのまま高音速で巨大ロボの足下を突き抜け、衝撃波の槍と化した！

螺旋に墜ちて行く鋼鉄の巨体。

『グアアアア……何イイイツ？ 墜イイイ落……だああとおおーツ？』

『グアアアア……気を付けえええろ！ ケイイイイン！ どうやあああら——』

みずしぶき
水飛沫上がった。

海面に「押すなよ？ 絶対に押すなよ？ ……押せよッ！」みたいな水飛沫上がった。

「グス……グス……ふぐう……リンちゃん……」

『ったく、アンタは！ だから、ヒヨイヒヨイ行くなツツーの！』

「せやかて、ウチ お友達” なれるか思うたんよ？」

『この脳味噌よいこのえほん娘！ 少しは警戒心を持って！』

「ふぐう……ごめんなさい」

『……反省、した？』

「……うん」

『よし！ そんなら許す！』

「あ、あんな？ リンちゃん？」

『何よ？』

「えへへ ♪ ありがとうね？」

『べ……別に御礼おれいなんか、いいツツーの』

リンちゃん、視線逸らしたよ？

何故か、ほっぺ真っ赤やよ？

何で？

「あ、ほんでな？ リンちゃん？」

『な……ななな何よ？』

「ウチ ♪レトロナさん ♪ やないよ？」

『……知ってるツツーの』

今度は苦虫顔いそがされた。

リンちゃん、百面相いそが忙しや ♪

リンちゃんと惑星レトロナ Fractal. 3

何やかんやあったけど誤解は解けた。

うん、あの後、和解してん。

え？ 具体的には……って？

色々★

ええやん？

ウチ、細々したの嫌いやねん。

せやからな？

例の「ケインはん」と「ジョニーはん」に導かれ、ウチらは基地に招待されてん。
機体格納は通天閣や。

せやけど、たぶん本物よりデカイよ？

展望台に当たる所が開くと、格納庫ドツグになつてはるもん。

ウチらの「宇宙航行艇」コスモクルーザーを回収しはったもん。

懐古的外見の割に、中身は如何にもハイテクな基地やってん。
ちなみにへレトロナナンタラは分離して、発進してきた格納庫へと回収された。
せやよ？

あの〈奈良の大仏〉と〈自由の女神〉とへお台場ガ ● ダムや。
つまり、この通天閣格納庫は、ウチらのような「来客用」やねんな？

……ってどうか、やつぱりええのん？ 最後の？

「つたく！ ただじゃおかない！ 文句言つてやる！」

格納されたへミヴィークから降りるなり、リンちゃんプリプリや。

「リンちゃん、何でそないにカリカリしとんの？」

ツカツカとエレベーターへ向かう後ろ姿に追いついて、ウチは訊ねた。

「はあ？ 当事者が何をのほほんとしてんだツツーの！ 聞く耳持たずで、よつてた
かって女の子をイジめるなんて、大の男がやる事か！ 女ナメンなツツーの！」

「……原因、ウチ？」

「……アンタじゃない」

「せやかて、ウチのせいでリンちゃんカリカリしてるん違うの？」

「アンタは何も悪くない！」

……やつぱりウチや。

何や悲しなつた。

ウチ、明るいリンちゃんがあええ。

怒つたリンちゃん、イヤや。

悲しなつた。

すごく悲しなつたよ？

せやから……。

「ふぐうー！」

「アダダダダーツ？」

えへへ ♪

思いつきり後ろからハグしたつた ♪

ギユツとしたら温かいねん ♪

イライラ無くなるよ？

「痛いツツーの！ 放せ！ モモ！」

あれ？

イライラ収まらへんねえ？

もつとや！

「ふぐうううー！」

「アダダダダダダダッ！」

「陽^ひノ咲^{さき}モモカ、そのまま後方へと投げ捨てれば、天条リンは気絶する。そうなれば報復行動は起こせない。とりあえずは問題解決」

「せやの？ クルちゃん？」

ウチの確認にクルコク肯定。

「上手くいけば記憶もトぶ……いっせきにちよう「石二丁」」

「せやったら……せーの！」

「何が『せーの！』だあああ——ッ！」

「ふぐう！」

後頭部ハリセンスパーン来たよ？

リンちゃん、えらい焦って無理矢理振りほどいたよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「潤^{うるうる}々しながら『痛いよ？』じゃないッつーの！ 忘れた頃に懐かしいパターンを再活用

すんな！ この脳味噌スポ根バカ娘！」

リンちゃん、あんまりや！

「せやかて！ ウチ、リンちゃん怒るのイヤや！」

「だからって、いきなり〈ブレーンバスター〉かますバカが何処にいる！ 気絶どころか

死ぬわ!」

「天条リン、それは誤解」

「何がだ! クル!」

「陽ノ咲モモカが実践しようとしていた技は〈バックドロップ〉——よく誤認されているけど〈ブレーンバスター〉ではない。ちなみに解放せずにホールド体勢を維持したのが〈スープレックス〉と呼ばれる技で——」

「知るかーッ!」

カリカリ増した……不思議や!

「やれやれ……その元氣じゃ、どうやら大丈夫そうだな?」

不意に男の人が声を掛けて来はった。

別なエレベーターからや。

聞き覚えあるよ?

「ああん?」

ギンツと殺氣紛いに振り向くリンちゃん。

目エ怖いよ?

不良みたいやよ? 大企業の御嬢様?

格納庫片隅からコツリコツリと歩き出て来たんは、精悍で誠実そうな青年やった。

凛々しく太い眉毛に、真つ直ぐ澄んだ瞳。

黒い髪は、快活さと清潔感を印象付ける。

真つ赤な〈PHW〉には、胸に黄色い『V』の字があしらってはった。

ウチ、自分の〈PHW〉を見比べた。

あんまし好きやないけど……アレの恥ずかしさよりはマシやんな？

「さつきは済まなかつたな？ 俺の名は『ケイン』——レトロナマシナー号機ヘレトロ

ナギユギューン〉のパイロット 神谷ケイン”だ」

ああ、やつぱり『ケインはん』や……つていうか、機体名ツ！

それ、変えた方がええよツ？

まだ〈ハウゼン語〉の方がマシやよツ？

リンちゃんは相手を見据えて固まったままやった。

たぶん食つて掛かるタイミングを見計らつとるんやね？

これ、あんま良くないねえ？

せやから、ウチは明るい自己紹介で流れを変えようと思つた。

「こんにちは★ ウチ『陽ノ咲モモカ』言うねんよ？」

「な………何イ？ き………君が『陽ノ咲モモカ』だつただとオ！」

………またブルートーン入つた。

……世界が青く染まった。
超能力？

「私は『グルロリ』でいい」

「な………何イ？」

「それは要らない」

ブルートーンが打ち消された。

クルちゃんの醒めた淡白で。

超能力対決でも繰り広げられとったん？

ウチが気付けへんだけで？

「それで？ そつちの君が………？」

「……………」

関心を移されるも、リンちゃんは答えへん。

固まったままや。

まだ攻撃心が軟化しとらへんようやね？

うゝん、どないしたらええんやろ？

「あの………君？」

「天条リンでゝす♡」

一転してキャピルン挨拶や！

握り拳を口元へ添えて、片足跳ねや！

リンちゃん？ まさか！

「気軽に『リン』って呼んで下さ〜い ♪」

「あ……ああ……え？」

「あ、でもでもお〜？ アタシだけ『さん付け』じゃ他人行儀よね？ それってば、不
公・平♡ だからだからあ〜？ アタシも『ケ・イ・ン♡』って呼んじやおっかなア
〜？ ダメエ？」

人差し指を唇に添えて、甘えん坊の上目遣いや！

これ、アカン！

「あ、いや……構わないが？」

「ヤ〜ン ♪ アタシってばラッキー♡」

跳ねとる！

ピョンピョン小兎アピール入った！

「……陽ノ咲モモカ？ 天条リンがおかしい？ どうした？ 何か悪い物でも拾い食
した？」

「……イケメン好きやねん」

「ふむ?」

不可解とばかりにクルコクン。

「せやねん……リンちゃん、イケメン好きやねん! 惚れると、あなんねん! ほん

でもって、実は惚れ易いねーん!」

ややこし展開の確約に、ウチは頭抱えて大絶叫!

一方で、クルちゃんは平静に纏めはった。

「やはり『変』なキャラクターだった」

司令室へ案内された。

一際物々しい自動扉が開くと、計測器やコンピューターが並ぶ機能美的な大部屋やつ

た。

四方は硝子張りに見晴らしも良く、海原や森林が豊かな息吹を視覚に伝えとる。

っていうか……リンちゃん、ケインはんにベツタリや!

強引に腕組みや!

ウチ、おもしろない!

胸中ブンブンや!

「それはそうと、さつきは悪かったな? モモカくん?」

「全然気にしてないですぅ♡」

ウチやないよ？

ウチの台詞やないよ？

このキャピルンは、リンちゃんや。

「いや、しかし……」

「ケガとかしてないんでえ ♪ 気にしないで下さ〜い ♪」

リンちゃん、あんまりや！

それ、ホンマのあんまりや！

「だが、男としてあるまじき……」

「間違いなんで誰にもありますからあ♡ ノー・プ・ロ・ブ・レ・ム ♪」

人差し指でケインはんの唇へ「シッ」と触れた。

ウチ、数分前に戻りたい！

ふぐう！

「それで、神谷^{かみや}ケイン？ あのロボットは何？」

クルちゃんが平然とした抑揚に質問する。

一人^{ひとり}だけ通常運転やね？

他^{ひとごと}人事やね？

「アレは〈超リニアロボ・レトロナ V〉——この惑星レトロナを防衛する為に造られた超科学の結晶だ」

「防衛？」

怪訝けげんそうなるクルちゃん。

「ああ……〈レトロナ V〉は、レトロナ星からやって来たレトロナ星人が送り込んで来る〈レトロナ獣〉と戦う為に造られたのさ」

うん？

何や、ややこしい事を言い始めたよ？

「あんな？ ちよつとええ？」

「何だい？ モモカくん？」

「この惑星は、何て言うん？」

「惑星レトロナだ」

「あのロボットは？」

「レトロナ Vだ」

「……敵は？」

「レトロナ星人だ」

「……どっから来てん？」

「レトロナ星だ」

「……………何と戦ってるん？」

「レトロナ獣だ」

全部へレトロナや！

何故か全部へレトロナや！

説明されたフォーマットは単純なのに、ややこししてる原因それや！

「ちなみに、此処は惑星レトロナの防衛を一手に担う最新鋭基地へレトロナベースだ」

「また出た！」

思わず声が漏れたわ！

ウチが驚愕した直後、自動扉が開いて誰かが入って来た。

小柄やけど恰幅のいい髭オジサンや。

白衣姿にヨレヨレのズボン。そして、下駄履き。

鼻を発端に顔は真っ赤で、腰から濁酒ぶら下げとる。

要するに「だらしのない酔っ払い」やね？

「あ、博士」

「博士なんツ？」

またまた声漏れたわ！

どっからか不審者が入り込んだと思うたよ！

「みんな、紹介しよう。この基地の最高責任者、四ツ乙女谷博士だ」
……スゴい名前を紹介された。

「博士、彼女達は——」

「うるせーッ！ さっさと酒持って来ーッーい！」

博士、酒乱やよッ？

重度のアル中やよッ？

「呑んでも尽きない養老乃瀧……呑んでも尽きない養老乃瀧……」

プルプル手を震わせて、何を言うてんの？

「アルコールプルプルひやつほーッーッーう！」

何を吠えてんのんッ？

惑星レトロナ、壊滅秒読みやん！

何とも言い難い気まずさが沈黙に漂う中、クルちゃん「ふむ？」と一顧を刻む。
「困った。これでは会話が成立しない。有益な情報を引き出す事も不可能」

そして、物怖じせずに博士へと歩き進んだ。

「神谷ケイン、少しばかり四ツ乙女谷博士を借りる。マンツーマンで話したい」

「ああ、それはいいが……」

「感謝する」

「うるせー！ 公園はみんなの物だ！ 住んで何が悪いーっ！」

そのままズルズルと酔っ払……博士を連れて、オートドアの外へ出る。

閉まった。

「……ねえ？ ケイン？」

「何だい？ リン？」

「あの博士、公園に居たの？」

「ああ。出会ったのは偶然だったが、話してみれば、なかなか聡明な人でね。ああ見えて、人生哲学等にも精通しているんだ」

「……へえ」

「家族と別れてから人生観の探究にも余念が無いようだね。博士曰く『家族とは、血の繋がった他人の共同生活環境』に過ぎない』『人間、死ねば所詮、万人塵芥』だそうだ。あまりにも高尚過ぎて、俺には把握しきれないが……実に深い理念だと思わないか？」

「……そーなんだー」

リンちゃん、醒めとるねえ？

醒めとるけど、ケインはんの手前、いつものツツコミが出来へんでいるねえ？

「……酔ってた？」

「はははっ！ 博士がシラフなところなんて、まず見た事が無いよ」
「……へえー」

それ、ただの酔っ払いやん！

おそらく人生転落した酔っ払いがクダ巻いとおただけやん！

——ビビビッ！

「ハウッ！」

ウチら全員ビクウなつた！

ドアの外で短い悲鳴と電気音が聞こえたから！

あ、ドア開いた。

帰って来た。

並んで帰って来た。

ほんでもって、クルちゃんの手には、まだチリチリと帯電してるパモカ。

「ふむ？ それで、君達は何者なのかね？」

爽やかに語り出したよッ？

博士、スツキリした顔しとるよッ？

せやけど瞳孔開いとるよッ？

クルちゃん、何したんッ？

「へネクラナミコン」ねえ？」

ウチらから事情説明を受けた博士は、軽く思索を巡らせた。

「博士、何か知っていますか？」

ケインはんの質問に、重々しく首を振る。

「仮に、そのような物を知っているならばへレトロナ V_{ファイナ}の強化に役立てておるよ」

「博士、具体的には？」

「……………」

急に黙りはった。

「具体的には？」

「それは…………アレだよ」

「アレとは？」

追い詰められた。

「…………き…………君きみの考えている通りだ、ケイン」

「何ですって！ そいつはスゴい！ 百人ひゃくにんりき力だぜ！」

ええのん？ それで？

「おかしい？」と、水を差すクルコクン。

「どないしたん？ クルちゃん？」

ウチの問い掛けに、パモカへと視線を落としたまま答える。

「この〈ネクラナレーダー〉の反応では、確かに、この基地内に〈ネクラナミコン〉は存在する」

「ネクラナレーダー……って、ドクロイガーはんから手に入れたヤツ？」

「そう」

「せやけど、それパモカやん？」

「私が作ったアプリ。ニュートリノブロードバンドを用いて〈ネクラナレーダー〉本体とリンクさせてある。そうでもしなければ、彼のサイズ基準では巨大過ぎるので活用には不向き」

「せやったら、本体は？」

「ツエレークの内部機構として組み込んだ。そして、それ故にツエレーク自体にも〈ネクラナレーダー〉の機能が新規実装された」

「ふええ？ いつの間にか大改造されてんねんな？」

「それって、確か半径約一〇〇メートルまで特定感知する事が可能なのよね？」

「そのはず。ドクロイガーの技術力が確かならば……」

「じゃあ、ダメじゃん」

リンちゃん、決めつけはった。

微塵も信用しとらんねえ？

「ふむ？」と、納得いかんクルコクン。「陽ノ咲モモカ、天条リン……暫く、私は別行動を取る」

「はあ？ 何しようってのよ？」

「この基地内を隈無く捜してみようと思う」

リンちゃんと惑星レトロナ Fractal. 4

医療室を出て来たケインはんの様子は、浮かない顔やった。

「ケイン……：ジョニーの様子は？」

リンちゃんの質問に、悲痛な表情が首を振る。

「しばらくは安静が必要だ。いまは、誰にも会いたくないそうだ……」

「そんな？」

「右腕の腱鞘炎けんしやうえんは深刻だ。当面は愛機〈レトロナトビマス〉にさえ乗れないだろう」

2号機の名前ツ！

「クソツ……何故、こんな事に！ まさか……：まさか俺の腱鞘炎けんしやうえんが完治したと思つたら、今度はジョニーが発症するなんて！」

苦悩のままにチタン壁を殴るケインはん！

何故って「ジエ ● ガ」やよ？

「レトロナ Vファイブは、レトロナマシン三機が揃わなければ合体出来ない！ こんな状況で、

もしも〈レトロロナ獣〉じゆうが襲撃してきたら……」

何で、三機なん？

そしたら〃ファイブV〃は何なん？

「俺とジョニー……二人が揃わなければ……」

何で、二人なん？

そしたら、三機目のパイロットは誰なん？

「最悪時は、俺おれひとり一人で……残りのレトロロナマシンは〃オートAI〃で出撃してしまうことになる」

それで、ええやん！

何だったたら、全機それでええやん！

「このままでは、五大武器の真価すら発揮出来ない！」

ここに来て〃ファイブV〃の意味が明かされた！

まさかの武器数やった！

少なッ！

「こんな事になるのなら、命懸けで止めるべきだったんだ！ ジェ ● ガを！」

その通りやよ？

命懸けかどうかは別として、その通りやよ？

「せめて……せめて臨時のパイロットさえいれば！」と言った後、数秒リンちゃんを注視した。

ほんでもって、再び壁に向かって弱音を吐露しはる。

「いまだけ……いまだけでいい！ 臨時のパイロットさえいれば！」

また数秒、リンちゃんをジッと注視した。

ねだってはる？

「え……つとお？」

困惑を浮かべるリンちゃん。

そりやそうやんな？

「ひとつだけ……ひとつだけ打開策はある！ だが……いや、ダメだダメだ！ こんな事をリンに頼めるはずがない！ まさかヘレトロナトビマスに乗ってくれなんて！」

露骨に口にし始めたわ。

「あ……うん、それはチョット……」

「さっきの戦闘で確信した……確かにリンはへパイロットとして卓越した腕前を持っている！ 俺とリンなら、相性はバッチリだろう！ そう、俺とリンなら！ だが、リンの気持ちを無視して、俺のエゴを通すなんて出来るワケが——」

「やるッ♡」

リンちゃん、嬉々と快諾しはったよツ？

「え？ いいのか？ リンくん？」

「イヤ〜ン♡ リンって、呼・ん・で ♪ ♪」

ツボ、そこやった！

呼び捨て連呼や！

リンちゃん、意外とチヨロかった！

「だつてえ〜？ ケインがそんなに困ってるなら、ほつとけないしい？ そこまで頼りにされたら、期待に応えたいしい？ 確かにアタシとケインなら相性バツチりだし？」

何言うてんの？

乙女眼おとめまなこの上目遣いうわめづかで何言うてんの？

出会ってから数時間しか経ってへんよ？

相性も何も、ほぼ初対面やよ？

「ありがとう！ リン！」

「うふふ ♪ ケ・イ・ン♡ な〜んて、イヤ〜ン♡」

「アカーーンツツツ！」

ウチ、見つめ合う二人の間へ割って入った！

血相変えて割って入った!

「リンちゃん! そしたらへネクラナミコンどないすんの! クルちゃんとの約束は、どないすんの!」

「あ、それならいい考えがあるから。とりあえずへドクロイガー泳がせてえ……収集させといてえ……揃ったところで強奪フルボッコ♪」

「山賊の考え方やんツ!」

「ええ……? 効率いーじゃ〜ん?」

完全に萎^なえとる!

やる気喪失しとる!

「せやったらへクラゲは! あのへ宇宙クラゲは、どないすんの!」

「大丈夫よ? 読者だつて、そろそろ忘れてたから♪」

「それ、言うたらアカンとこーツ!」

このままやったら、リンちゃんへレトロナ^{ファイブ}Vのパイロットになつてまう!

作品タイトルも『G—M O M O〜銀暦少女モモ〜』^{ガールズ}から『超リニアロボ レトロナ

V』になつてまう!

ウチ、ケインはんへと直訴した!

「せや! 博士乗つけたら、ええやん! 博士ならへレトロナ^{ファイブ}Vに精通しとるやん!」

「あんなアル中、乗つけられるかー！ーッ！」

……ハッキリ言いはった。

……躊躇ちゆうちゆう無く言いはった。

「俺だつて……俺だつて、まだ死にたくないんだ！」

何言うてんの？ この人？

失意の拳を金属壁へと叩き込みながら、シリアスモードで何をぶつちやけてんの？

「ケイン、大丈夫よ……私、お酒飲まないわ……未成年だから」

そつと慈しみに寄り添って慰めるリンちゃん。

何言うてんの？

リンちゃんはリンちゃん、何言うてんの？

「リン……」

「ケイン……」

見つめあう瞳と瞳……つて、それアカン！

そのフリーズが生まれる状況はアカン！

ホンマに『超ニアロポ』の世界観になりつつある！

「じゃあ、早速特訓だ！」

「はーい♡」

そそくさとケインはんについてった!

ルンルン気分^ニに浮足立つとる!

「リンちゃん!」

ウチ、心の底から声張つたよ?

だつて……だつて、こんなん認められへんもん!

「せやったら……せやったら、あの子は……へミヴィークは、どないすんの……」

琴線に触れたんか、リンちゃんはピクリと立ち止まつた。

「だつて、イケメンなんだもん……熱苦しいけど」

「リンちゃん!」

「……下の名前呼んでくれるんだもん」

「リンちゃんつてば!」

「ヴァーチャルとかゲームとかじゃないんだもん!」

断腸のような吐露を残して、その背中は通路の奥へと歩み去つた……。

コックピット
操縦室内で、ウチは膝抱えとつた。

へイザーナやない。

へミヴィークの……や。

あれから一日経った。

リンちゃん、新しい搭乗機に慣れるんに特訓してはる。

今日も……や。

「……あんな？ ミヴィーク？」

『……ケル』

気のせいかな、気落ちしたかのようなテンションやった。

きつと、この子なりに何かは感じ取っておるんかもしれへん。

賢いねん。

この子、寡黙やけど賢いねん。

だから、言わずとも悟ったんやろね。

リンちゃん、この子の整備にも来^けえへんし。

……いや、違^ちうか。

この子とリンちゃんには“絆”がある。

ウチとヘイザーナのように……。

言葉、要^いらへん。

「あんな？」

『……………』

何て切り出してええか分からへん。

せやからウチ、コンソールを優しく撫でとつた。

「心配要らへんよ？　リンちゃん、いまは酔つとるだけやねん。イケメン好きやねんから」

『…………ケル』

「あはは…………せやねえ？　ホンマ、困った性格やねえ？」

『……………』

「…………あんな？　ミヴィーク？」

『ケル？』

「大丈夫…………帰ってくるよ？　ウチらのトコ…………」

『…………ケルル』

にへつと碎けたウチの笑顔は、きつと情けなかつたんやと思う。

それが自覚できたから、ウチの心の仮面は綻んだ。

顔、膝に埋めとつた。

「ふぐつ…………え…………ふええ…………」

『…………ケルル…………ケル…………』

慰められた。

ゴメンね？ ミヴィーク？

これじゃ、どっちが励ましに来たんか分からへんね……。

ゴメンね……。

滞在、二日経った。

青空には並列飛行の機影が白い尾を引いとる。

ウチ、その光景を司令室から空しく眺めとった。

『リン！ 高度が低いぞ！』

『ゴメン、ケイン！ いま合わせるわ！』

通信スピーカーから聞こえる会話は、もうすっかり馴染んだパートナー同士や。

「スゴいな……彼女は」

「ああ、こんなに早くこのレベルとは……ジョニーさんと同レベルじゃないか」

観測結果に驚嘆を交わす白衣の所員達。

その言葉すら、ウチには虚しい旋律や。

(リンちゃん、このまま帰って来なかつたら……ウチ……ウチ、どうしよう?)

寂しい未来予想図を噛み締める。

「……陽ひノ咲さきモモカ」

背後からの呼び掛けに、虚無感に乾いた心境が少し清水を潤した。

「あ……クルちゃん？」

「状況が呑み込めない。説明を頼む」

「説明？」

小柄な肢体が一步踏み出して並んだ。

無感情に眺めるのは、大空を舞う二機の戦闘機。

「何故、天条リンがアレへ搭乗している？」

「何故……って……」

せやね。

あの展開になったんは、クルちゃんと別れてからやねんね。

せやから、ウチが説明せんと分からへんよね？

ウチが……説明せんと……。

「ふええ……クルちゃん！」

説明しよう思うて口を開いたら、一緒に涙腺弛るいせんゆるなつた。

ウチ、小さな肩に頭預けて泣いとおつた。

「ふむっ！」

感情乏しい困惑は、それでも撫で撫でてくれた。

「よしよし」

なんか、すごく柔らかくて温かかった。

「なるほど……状況は把握した」

人目につかない非常階段に腰掛けて、ウチとクルちゃんは詳細を話し込んだ。隣に座る存在感は小柄なのに、何や頼り甲斐に溢れとるようにも感じる。

「クルちゃん……ウチ、どうしよう?」

「どうしたい?」

「え?」

自然体で向けられた言葉に、心の奥が何故か小波を生んだ。

改めてクルちゃんを見れば、愛らしくも涼しい童顔がジツとウチを見つめとる。

その瞳は、特に示唆も鼓舞も孕んどらへん。

ただ、返事を待つとつた。

「ウチ……ウチ……」

口隠った。

頭ん中グルグルして、上手く考えが纏まらへん。

「ふぐう」

膝抱ひざかかえたわ。

我われながら頭悪いのんが、情けななつた。

クルちゃんは「ふむ？」と独ひとり納得なっどくしたかのよう、正面の虚空を正視する。

「少し昔の話をする」

「ふえ？ クルちゃんのこと？」

「そう」

ちよつと驚いたわ。

クルちゃん、自分の事は全然語らんに……。

「バカがいた」

導入ッ！

唐突に導入がオカシイよツ？

「とてつもないバカだった。手のつけられないバカだった。救いようのないド級バカ。

おそらく宇宙規模のバカ——」

いきなり何をデイスつとんの？

誰をデイスつとんの？

ウチ、消沈中断で何を聞かされとんの？

「そのバカが、私の最初の友達……」

まさかの「友達」をデイスつつたーツ！

それも大事なんのをーツ！

「そのバカにも、大切な親友がいた。常に一緒にいるような間柄だった。丁度、アナタと天条リンのように……」

「ウチとリンちゃんに？」

「そう」

「似とるん？」

「個々の性格差異はあるけれど、関係性は酷似している」

「……そうなんや」

不思議や。

何や、ちよつと気持ちがあわつとした。

会った事はないけど、温かい親近感が湧いとつた。

「あとは、アナタが天条リンの胸を崇め揉むのを日課とするだけ」

「揉まへんし崇めへんよツ？」

一気に数百年彼方へ遠ざかったわ。

どないな人なんツ？

「ある日、彼女が戦っている〈侵略宇宙人軍団〉によって、その親友が拐さらわれた」
……うん？

いま、変な事を言うたねえ？

「侵略宇宙人？」

「そう」

「戦ってたん？」

「そう」

「それは〈火星〉や〈木星〉の移民？」

「違う。外宇宙生命体」

「その人〈銀邦軍〉とか〈惑星防衛軍〉とかに所属してはったん？」
ひと
ぎんほうぐん

「一般女子高生」

状況解らへんツ！

あまりに特異な状況過ぎて、ウチの脳内キャンバスは絵具えのぐひっくり返したみたいなたよツ？

「大好きな親友と引き離された彼女は、どうしたと思う？」

「……あ」

クルちゃんの正視が、ウチに何を伝えんとしているかを物語つとつた。

もしかして……その人も、現状のウチと同じ心境やったん？

クルちゃん、その時の事をヒントにしてくれるつもりやったん？

「とりあえず敵要塞へと殴り込んで、親友の胸を揉みまくった」

ヒントならへんツ！

参考にも御手本にも、ならへんツ！

「その結果、敵勢力は無力化して地球が救われた」

何でツ？

そないな要素無かったよツ？

宇宙人の巣窟そうくつに、胸揉み行っただけやよツ？

その女子高生はんツ！

「つまりは、そういう事」

どういう事ツ？

「彼女は、やりたい事へと邁進まいしんするだけ……自分の心に素直に従って。そう、ただ

それだけ。けれど、それが状況を打開する原動力にも成り得る」

「あ……」

「陽ひノ咲さモモカ、どうしたい？」

改めてウチを見つめる瞳。

「ウチ……ウチは……」

正直、まだ分からへん。

けれど、ひとつだけ……ひとつだけ確かなんがある！

「ウチ、リンちゃんと一緒にええ！　ずっと一緒にええ！」

「……そう」

あれ？

クルちゃん、いま微笑わろうた？

錯覚？

その時やった！

基地内に鳴り響く警報！

染めては引く赤灯から、非常事態なんはウチにも解った！

「な……何や？」

ウチに答えるワケやあらへんけど、至る箇所のスピーカーから所員の状況報告が流れる！

『緊急事態発令！　緊急事態発令！　上空より未確認飛行物体接近中！　ヘレトロナマ

シン』は、速やかに迎撃へ出撃せよ！　繰り返す——』

「クルちゃん！」

「どうやらへレトロナ星人」の襲撃……かもしれない？」

クルコクン。

「……何で疑問形？」

「確定要素が無い。ただし、ひとつだけ確定要素がある。天条リンはへレトロナトビマス」で出撃する」

「せやった！」

「陽ノ咲モモカ、私は引き続きへネクラナミコン」搜索を継続する為^{ため}にサポートが出来ない。即時、天条リンを引き止める事を忠告しておく」

「うん！ 急いで格納庫行かん！」

「そう、急がないと天条リンは……滅茶苦茶カツコ悪い機体で活躍する事になる」
「そつち違うよッ？」

「一足遅かった。」

格納庫^{ドック}へと向かっている最中、通路の窓には飛行機雲を描いて飛び立つふたつの機影——へレトロナマシーン」や。

せやけど、ウチは足を止めない！

待機しているへ宇宙航行艇」目指してまっしぐらや！

止められへんかったら、追う！

ウチ、リンちゃん追う！

よくやく格納庫ドックへ着いた！

息を切らしたウチを見つけるなり、イザーナが声を掛けて来る。

『キューイ！ キューイ！ キューイ！』

急げ言うてた。

以心伝心で、ウチの出撃決意を感じたからや。

ウチは「えへへ」と碎くだけて、その鼓舞こぶへと応える。

「あんな？ ごめんねイザーナ？ 今回は……今回だけは違ちがうねん」

『キューイ？』

そして、ウチは決意を込めた顔で、今回の搭乗機パイロットナイを見つめた。

「……行こう！ ミ、ヴィーク！」

『ケルツ？』

リンちゃんと惑星レトロナ Fractal. 5

『すまないな、リン』

「何が？ ケイン？」

『いや、君の〈PHW〉の用意が間に合わなくて……』

「あ……ああ〜 ♪ いいのいいの ♪ 気にしないで？」

ケインつてば、レデイへの気遣いが出来てるわね。

長所 ♪

でも、ゴメン。

たぶん、絶対、間違いなく、着ないわ。

そのミニスカピンクヴァージョンだから……。

『それから、君は〈レトロナマシン〉では初戦闘だ！ 決して無茶をするなよ！』

「ええ、分かったわ！ ケイン！」

モニター越しの忠告に、アタシは快活な返事を向ける。

もう、ケインってば……優しいんだから♡
頼もしい声にも艶があるし？

長所 ♪

『一機でも失えばへレトロナV^{ファイブ}に合体出来なくなる！』

「……え？ ああ、うん……そつちね」

うん、そうよね？

惑星防衛の使命と責任があるものね？

当然よね？

うん、そうよ！

ケインってば正義感が強いのよ！

いまどき、いないわ！

こんなにも実直な人！

長所ツ！

と、レーザー反応が著しい^{いちじる}反応を示した！

敵機が近い！

「ケイン！ 敵が急接近中よ！」

『ああ、分かってる！ リン！』

嗚呼、コレよ ♪

みんな聞いた？

「ジョニー」じゃなくて「リン」よ？

いま無二のパートナーとして呼ばれてるの、アタシよ？

必要とされてるなあ……ア・タ・シ ♡

『来るぞ！ リン！』

「へ？ ああ、うん！」

いけない、いけない。

数秒、幸福脳内麻薬にトリップしてたわ。

ヨダレ拭くの映ってなかったでしようね？

やがて雲海の腹に巨大な機影が孕み映る。

『ホー……ホッホッ！ ホー……ホッホッ！』

如何にも「悪の幹部」らしい高笑いを響かせて……三流感バリバリだわ。

流行りの「悪役令嬢」気取りかつつの。

フン、鼻で笑うわ ♪

アタシは「天条リン」！

銀暦有数の大企業へ星河コンツエルン〳の娘「天条リン」なのよ！

そんじよそこらの「エセ令嬢」とは格が違うのよ！
来るなら来なさいよ？

二度と逆らえないぐらい、グチャグチャのギタギタのメタメタにポイ捨てしてやるわ

！

雲間を裂いて、重々しく降下してくる機体！

つてか……何？ この物々しい音楽は？

勇猛でけたたましい音楽は？

クラシツクの『ワルキューレ騎行』よね？

何かけてんの？ コイツ？

何で外部スピーカーから轟かせてんの？ コイツ？

え？ 威厳の自己演出？

サブいんですけど？

そうこうしている内に、やがて敵機が全貌を晒さらけ出す！

それを視認した瞬間、アタシは信じ難い現実に驚愕硬直！

おぞましさに血の気が引いた！

『出たな！ レトロナ獣シキウ！』

「いや、まあ……何っーか……」

そつないコメントを模索したわ。

だつてへモササウルスなんだもん。

『だが！ オレ達が……へレトロナ V^{ファイブ}』がいる限り、オマエ達の好きにはさせない！』

「うん、あのね？ うん……とね？」

どう説明しよう？

つてか、エルダニャ！

アンタがへモササウルスなんか選ぶからだ！

どう見ても悪役然とした狂暴外見じゃない！

『ホホホホ……御初に御目に掛かるな、惑星レトロナに住まう下々の者達よ。我こそは「ハーチエス・エルダナ・フォン・アルラワスあぐつピースウームIV世」——またの名をへクイーン・アルワスプなり！ 存分に歓迎するが善い！^よそして、我が威光に平伏^{ひれふ}すが善いぞ！ フフフフ……アーハッハッハッ！』

うおい！

毅然と悪役印象を示すな！

外部スピーカーからの大音声で、周囲一帯へ誇示すんな！

事態ややこしくなるツツの！

そんでもつて「あぐつ」つて何だ！

「嘯むな！ 此処一番の見栄で！」

『クツ……何て自信に満ちてやがる！ まさか？ ボス級か？』

うん、まあ……ボス級は、ボス級だけどね？

ただし「レトロナ星人」じゃなくて「アルワスプ」の。

ついでに言えば「宇宙規模バカ」の。

『やるぞ！ リン！ あんなヤツの好きにさせて堪るか！』

「ちよちよちよ……ちよつと待って！ ケイン！」

『どうした？ リン？』

「いや、その……アレ「レトロナ獣」じゃないツツか……何ツツか……」

『何ツツ？ 「レトロナ獣」じゃない……だと？』

御家芸のブルートーン入ったわ。

アタシだつて入れたいわ……あのアホのせいで。

『リン、君は何か知ってるのか？』

「うん、まあ……知ってるツツか……知らないツツか……知り合いたくなかったツツか……」

「……もしかして「友達」なのか？」

「うん、まあ……」

ばつ悪くアタシは認めた。

『何……だとツ?』

あれ?

またブルートーン入ったわ?

『何て事だ! リン、まさか君が……レトロナ星からの逃亡者だったなんて!』
「違うしツ?」

あらぬ設定を付け加えられたわよ!

エルダニヤ! アンタのせいだ!

アタシの気持ちを逆撫でするように、ピーピーと鳴る電子シグナル!

うっさい!

いま、それどころじゃないわよ!

アタシの沽券こけん、地の底まで堕ちてんの!

それを耳障りにピーピーピーと思索集中の邪魔して……って、うん?

え? ウソ?

レーダーに別な機影?

つて事は……まさか今度こそレトロナ獣じゅうつてヤツ?

新たに降下して来た襲来者は、またも雲間を裂いて姿を現し——『フハハハハ

ハーーーーッ！ 宇宙の海はオレの海！ オレの果てしない〈宇宙の帝王〉への憧れ！ 〈ドクロイガー〉見参ッ！』——アンタかアアーーーーッ！ 今度はアンタかアアーーーーッ！

『な………何だ？ アイツは？』

「ケイン！ 〈レトロロナ獣〉よ！」

間髪入れずに畳み掛けたわ！

『え？ いや、しかし………』

「〈レトロロナ獣〉よ！」

『だが〈レトロロナ獣〉なら、既に………』

「………〈レトロロナ獣〉よ」

『しかし、ヤツは〈ドクロイガー〉と名乗っ——』

「ううん★ 〈レトロロナ獣〉♪」

温顔ニツコリ★

ケインつてば、意外なトコで頑固ね？

うしッ！ しゃーない！

アタシは特攻を仕掛けた！

「現れたわね！ 〈レトロロナ獣〉！」

『こはあーーーーッ？』

ロボットアームの鉄拳が、ドク郎の横つ面をブン殴ったわ!

あのへレトロナV^{ファイブ}とかいう“木偶^{デク}の坊”の腕ね。

『いきなり何を……というか、その声! シヤチ娘ではないがはああーッ?』
すぐさま二発目!

余計な事を言わせるか! コンニヤロー!

アンタは、おとなしくへレトロナ獣^{じゅう}として散りなさいッツツ!

『痛ッ……ちよつと待つ……ゴフッ! 待つてと言うにカハア!』

殴打!

殴打殴打殴打!

殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打
打!

デツカイ腕を生やした戦闘機が、鉄巨人をタコ殴る!

「よくもアタシの仲間を洗脳したわね! このこのこの!」

『何ッ? じゃあ、さっきのへレトロナ獣^{じゅう}は……まさか!』

「そうよ! ケイン! コイツに洗脳されたのよ!」

『何て……何て卑劣な手をオオオーッ!』

正義感が憤怒を吼えた!

うしッ！ 責任転嫁成功！

『何と！ それに乗っておるは、リンか？』

ようやく気付いたか、エルダニヤ。

『して、リンよ……そなたの知り合いが洗脳されたと申すのだな？

何と卑劣な！ そ

れは、どいつじゃ？』

黙ってろ、アンタだ。

『許せねえ……許せねえぜ！』

怒りを噛み締めるケイン。

んもう、どこまでも熱血正義漢なんだから★

長所 ♪

『こうなったら……リン！ レトロナ合体だ！』

何が「こうなったら」なのかは知らないけど、分かったわ ♪

いよいよケインと、合・体 ♪

いゃ〜ん★

『行くぞ！ レエエエツツ！』

「……………」

『リン？』

「え？」

『戦闘中にボーツとするな！ 合体だ！』

「え？ ああ、うん」

『行くぞ！ レエエツツ！』

「……………」

『……リン？』

「え？」

『え？ じゃない！ 合体キーワードを叫べ！』

「あ、うん………つて、合体キーワード？」

初耳なんですけど？

「何て叫べばいいの？」

『何でもいい！』

ああ、そう………何でもいいんだ？

……要る？ それ？

『行くぞ！ レエエツツ！ レトロイイイイーン！』

「星河プリズムパワー・メイクアップ！」

あ、発動した。

合体シークエンスがオート起動した。

機体から発せられた電磁波が互いを繋ぎ合わせ、重々しい誘導に変形合体を展開していく！

『ファイブ！（ゴー！ ゴー！）

ファイブ！（ゴー！ ゴー！）

ファイブ！（ゴー！ ゴー！）

フアアアアアーイブ！

宇宙の平和を乱す悪魔を〜♪

（ダンダダン！ ダンダダン！）

許しはしない 俺は戦う〜♪

（ダンダダン！ ダンダダン！）

燃やせ！ 正義の魂を！

吼えろ！ 勝利の雄叫びを！

鋼の巨体が悪を討つ〜♪

三つの力がひとつになって〜♪

二人の心が無敵となって〜♪

正義を呼ぶのさ！

奇跡を呼ぶのさ！

叫べ 燃えろ

ボクらのく ♪

レ・ト・ロ・ナ・フアーイーブウウー ♪

フアーイーブウウー ♪ 『

……何コレ？

全スピーカーから変な主題歌が流れてきたんだけど？

水木 ● 郎みたいな歌声で、文字数を喰ったんだけど？

『ズエエエエー……ツト！』

ズエツト言ったしツ！

魂の決めシャウトしたしツツツ！

『レエエエトロオオオナ……フアアアイブツ！』

鋼鉄の巨大守護神が、雄々しくポーズをキメた！

ってか、いいわね？ ノリノリで？

アタシなんか「乙女の奇跡！」とかやりたくないんですけど？ いやマジで。

『さあ、いくぞ！ 宇宙の平和を乱す悪魔め！』

『いや……別に宇宙の平和とかは乱してないんですけど……』

ビシイと熱血に指差されて、ドク郎が困惑していた。

今回は、ちよつと可哀想な気もする……いや、いいか？

コイツだし。

『黙れ！ 善良な“あぐつさん”を洗脳し、尖兵と利用するとは……その卑劣さ、断じて

許せん！』

『あぐつさん？ 誰じゃ？』

アంతだ、エルダニヤ。

『行くぞー！ 超リニアアアアメンコオオオー……ッ！』

腹部スリットから飛び出したカードを空中キヤツチ！

電磁波を帯びたそれを、ドク郎の横っ面へ叩き付ける！

『ふげふうツ？』

ただの渾身ビンタにしか見えないわ。

生活指導体罰みたいだわ。

つてか、何でハイテク武器が“メンコ”なワケツ？

『超リニアアアア……キユウQウウウツ！』

五指先から射出される黒い連弾！

それはドク郎の各部位へ付着して……チリチリと煙を上げ始めた。

『熱ッ？ 熱熱熱熱ッ？』

小躍りに悶えてるし。

どうやら「全身灸」のようだわ。

地味な攻撃！

つてか、リニア関係ないじゃん！

『グスツ……何でワシが、いきなりこんな目に……』

メソメソ泣くなドク郎。

えつら 絵面的にキモいから。

『ただ「あ、綺麗な自然がある ♪」つて、森林浴に降下しただけなのに……グスツ』

へネクラナミコン＜じゃなかったーッ！

まさかのへネクラナミコン＜じゃなかったーッ！

そこは何かゴメーン！

『グスツ……もういい、みんな壊してやる』

あれ？

聞き慣れたフレーズ言い出したわね？

『喰らえええい！ ドクロバース——』『超リニアメンコオオオ——ッ！』『——トふ

げふうううーッ?』

させるかツツの!

横つ面ひつぱたいてやったわ! アタシが!

ケインから操縦系統を一時奪って!

メンコは出さなかったから、それこそ『教育的指導ビンタ』でしかないけれど。

うん、いいのよ?

どうせコイツだし?

何よりも、アタシは『天条リン』なんだから ♪

ドク郎がキレた。

んなモンだから、剣劇が始まる。

大空を舞台に『レトロナ V 対ドクロイガー』が展開する。

とは言っても、ぶつちやけアタシに出来る事なんか無い。

だって、合体後の操縦系統はケインに一任だし?

武器だってケインの意思ひとつだし?

……暇ひまよね、合体ロボのサブパイロットつて。

『フハハハッ! どうしたどうした? レトロナ Vよ!』

半月刀へドクロブレードの猛攻を、腿脇から取り出した両刃剣へレトロナブレードで弾き捌く！

つてか、ドク郎？

いまのアンタ、完全に「悪役」の言動だかんね？

『クウ！　なんてパワーだ！　まるで体格差から違うみたいだぜ！』と、焦燥のケイン。

いや、違うわよ？

ドク郎は全高約八〇メートル。

対してへレトロナ^{ファイブ}Vは約六〇メートルですもの。

格闘家と高校生ぐらいの差は、あるわよ？

でも、まあ、それが「強さ」には直結しないけどね？

だって、アタシとモモのへGフォルムは、約四〇メートルですもの。

そんでもって、毎回完勝してるもの。

んツ？

つて事は……ぶっちゃけ、アタシらの方がへレトロナ^{ファイブ}Vより強くない？

……………。

いや、そつと胸の内に仕舞っておこう。

さすがに、何か悪いわ……ケインにも……ドク郎にも。

『フハハハ！ どうした！ どうしたどうしたどうしたアアアーツ！』

『クソツ！ 圧おされているツ？ こ……このままでは！』

「ポチツとな」

『熱ウウウー……ツ？』

暇だから手近なボタンを押したら、腰のバックル部からへ超リニアキユウとか言うのが
射出されたわ。

ドク郎が全身灸もたに悶え踊ったわ。

さつきと出る場所が違うけど、もういいわ。

『リン、何をやっているんだ！』

「え？ あ……その……マズかった？」

そっか！

残弾数の都合もあるものね！

『武器を繰り出す時は、高らかに叫べ！』

「あ、そっか……音声認識か……って、アレ？ 出ただけど？ 武器？」

『そうじゃない！』

「うん？」

『……それが礼儀だ』

「……………」

礼儀なんだッ？

いままで礼儀で「使用武器紹介」してたんだッ？

まだ「乙女の奇跡！」の方が意味あるんですけどッ？

アレ、一応〈起爆コード〉になっているもの！

『又ウウ……相変わらずの天敵ぶりだな〈シヤチ娘〉！ いやさ〈腕娘〉！』

イヤな呼び名つけんな！ コンニヤロー！

『だいたいキサマ！ いつもの〈シヤチ〉は、どうした！ 相棒の〈イルカ娘〉は！』

ビシイと指差し糾弾されたわ。

ドク郎風情に。

でも……アレ？

何かイラツとした。

……ドク郎風情が偉そうに構えたからだ！

アタシは「天条リン」！

アンタなんかとは格が違うんだからね！

『リンよ、聞こえるか？』

今度はエルダニヤからの緊急通信——つてか、どうやってレトロナ^{ファイブ}Vの通信回線

を割り出し……ああ、パモカからか。

ま、どっちでもいいけど。

「つたく、何………よっ？」

一瞬……それはパモカを耳元へと添えた一瞬だった……ふと琴線が白く揺れた。

いや、何で唐突に浮かんた？

いつもの雑談の感覚——。

たまに……寝る前に交わす長話——。

たいした中身も無いバカ話——。

あのユルツユルでホワホワした声音——。

って、現状いまは戦闘中！

しっかりしろ！ 天条リン！

トリツプしてる状況か！

アタシは軽く両頬を叩く！

「何だツツーの！ エルダニャー！」

『上じゃ』

「はあ？」

『強大なエネルギー反応が近づいておる』

「敵機接近つて？ そんな嬉しくない情報を、何で閑雅なゆとりで伝えてんだ！ アンタは！」

『敵かどうかは……ズズツ……生憎、我にも判らん』

オイ？ いまの『ズズツ』て何だ！

さては紅茶とか啜つてるだろ、アンタ！

「まさか……今度こそへレトロナ獣」とかいふヤツじゃないでしょうね！」

焦燥にレーダー機器を操作する。

未だ反応は無い……が、エルダニヤが感知した以上、それは確かだろう。

母体がプロトタイプとはいえへツエレーク艦載の宇宙航行艇——つまりはへスー

パークルザーだ。

その性能を疑う余地は無い。

と、すれば……性能的に信用度が低いのはコッチ。

あ、ようやく映った。

どんだけポンコツだ！

惑星レトロナの守護神！

「確かに降下して来ている。だけど……」

エネルギー値が大きい。

この場に居合わず誰よりも……。
存在を認識しながらも、現状で為せる事前策は無い。
その「正体」が判別できない以上は……。

脅威接近の情報を共有した全員が警戒に構える。

そして、ようやく雲を押し崩して姿を露にした！

「嘘……でしょ？」

その全貌を視認し、今度こそアタシは驚愕に固まる！

真の驚愕に！

それは——ソイツは——その異形は！

アタシ達が追い求めている怪異……巨大なヘクラゲだった！

リンちゃんと惑星レトロナ Fractal. 6

——ヤツは言った。

『惑星レトロナノ民ニ告グ。タダチニ科学技術ノ向上開発ヲ停止セヨ』

——ヤツは言った。

『現段階ノ科学レベルヲ以テシテモ、オマエ達ニハ過ギタル技術……分ヲ弁エヌ技術保有ハ、宇宙摂理ニトツテ害悪デシカナイトイウ事ヲ心セヨ。然モナクバ、実力行使ニテ放棄サセザル得ナイ』

——ヤツは言った。

『警告トシテ、軽ク我ガ実力差ヲ知ラシ示ス事トスル』

そして、大猛攻が始まる！

無数の触手から破壊光線を発射し、無差別に爆炎を生む！

眼下の海面は瞬間的な蒸発に潮騒の表皮を浅く失った！

陸地の緑は次々と火の手に貪られ、固い大地とアスファルトは粉碎に崩れる！

防衛基地〈ヘレトロナベース〉は建固たる光子バリアで保ち堪えているものの、はたして、それがいつまで維持できるか！

乱雑に踊る危険な光を、アタシ達は避かし続ける！

レトロナ V も！

エルダニヤも！

ドク郎も！

当たればシヤレにならない事は、重々確信できた！

『クツ？ 何だ！ コイツは！』

さすがのケインにも、眼前の猛威が〈ヘレトロナ獣〉とかいう三下とは格違いという事

実は肌で直感できたらしい。

『ヌウウ……我が障害となる者が、此所にも居ったか！』

忌々しく歯噛みするドク郎！

その野望実現に脅威となる存在とは認めようだ。

『ええい！ 不覚！ まさかへエ ● ゼルパイ〜とかいう美味を忘れて来るとは！』

……状況を把握できていないバカが、一人いたわ。

ともかく、無差別に荒れ狂う大災厄は鎮まる兆しも無い！

「ケイン！ 何か武器は無いの？」

『ヘレトロナブレード』も〈超リニアメンコ〉も至近戦用だ！
 懐^{ふところ}へ潜り込まなければ使えない！』

「銃とか飛び道具は無いの？」

「あいにく〈超リニアQ^{キョウ}〉しかない」

……さすがに使えないわよ、あの〈全身灸〉は。

「じゃあ、他に手段は？」

『……ひとつだけ有る』

「だったら、それを使えば！」

『あまり気は進まないが……』

「出し惜しみしている余裕なんか無いわよ！」

『……分かった！』

苦渋の決断を噛み締めると、ケインは高らかに叫んだ！

『超リニアアアア……シャイイイン・自^{ジバアアアーク}爆ツ！』

「ちよつと待つてー……ッ！」

慌てて制止したわよ！

「何よ！ それッ？」

『シャイン・自爆——全超リニアパワーをヘレトロナ^{ファイブ}V〉に結集させて、膨大なエネルギー

ギー弾と化して突っ込む特攻技だ』

「ちやんと脱出するのよね？ ギリで離脱とかするのよね？」

『馬鹿を言うな！ 漢おとこは常に真つ向真剣勝負……小細工などしない！』

してッ？ そこは！

『又ウウウ……森林浴を妨害された挙げ句、よもや、このような不埒者が現れるとは……ああ、鳥さん達が！ 鹿さんが！ おのれえええい！ この『イジメっこ』があああ！』

燃え盛る森から逃げ惑う動物達を見て、ドク郎が憤慨ふんがいしていた。何故か。

スウィーツ嗜好やら動物愛玩やら……アンタ、意外とメルヘン思考ね？

『こうなったら思い知らせてくれる！ 喰らえええい！ ドクロバー………』

アタシを見た。

何か言いたそうに、アタシを見た。

『いいですか？』

何がだ。

『喰らえええい！ ドクロバーストオオオ………ツ！』

ドク郎の全身から一斉に開放される射撃武装！

おびただ夥しい程ほどの自動追尾ミサイルが、ピラニアの如くごとへ宇宙クラゲへと噛み付いていく

!

爆発！

爆発ッ！

爆発ッッッ！

轟爆と黒煙の狂騒が、神秘にして不気味な軟体を呑み込んだ！

が——『何だとッ！』——沈静に引いていく破壊のヴェールからは、まったく堪えて
いない怪物の姿が！

「どんだけ強固よ！ アイツ！」

『リンよ、聞こえるか？』

「エルダニヤ？」

パモカ通信だった。

『我われに妙案があるのだが……御主おぬしの見解を仰あおぎたい』

「……何か閃いたの？」

『うむ』

そして、エルダニヤの提案は、さすがの私も耳を疑うものだった。

『このレモンティーをクーラーボックスで凍らせれば、簡易的な菓子になると思うが
……レモンティーにレモンティー味のアイスキャンデーはアリか？』

「はあ？」

『リンちゃん乗るの、それやない！ リンちゃん居おるの、そこやない！』

「つて、勝手に決めるな！ アタシがいないとへレトロナファイブは性能が落ちるの！」

『アカン！ イヤヤ！ 降りて！』

「駄々っ子か！」

『せや！ これは、ウチのわがままや！ ほんでも、それでええ！ わがまままでええ！』

「モモ？」

何よ……必死に？

何だつて、今回はそんなに意固地よ？

いつもフワフワ流されてんのに……。

『ウチ、リンちゃんと離れたない！ ずっと一緒にええ！』

『ケル……ケルル！ ケルケル！』

「……アンタ達？」

分かんない。

分かんないけど……感傷が占めた。

その瞬間、両機の狭間に光撃が放たれる！

思考を巡らせる隙も無く距離が引き離された！

『クラゲさん、アカン言うたやん！ いい加減にせんと、ウチ怒るよツ？』

牽制に敵の周囲を旋回するへミヴィーク！

まったく、何だツツーのよ。

何で、そこまで「リンちゃん」「リンちゃん」って……。

いつも、のほほんとして頼りないクセに……。

いつもホワホワ笑ってばかりで……考えなしで……泣き虫で……決断力も無いクセに……。

何で、今回は臆してないのよ？

『天条リン』

パモカからの通信。

クルだ。

『ようやくへネクラナミコンの欠片かけらを見つけた』

そう。

でも、関係無いわ。

いまは頭に入んない。

『それから、私は泣かせていない』

「え？」

『陽ノ咲モモカは、泣いていた』

「ッ！」

『……私は泣かせていない』

何よ、それ？

唐突に……意味不明だツツーの。

意味不明だけど、何故かアタシはドキリとした。

何故？

『うひゃう？』

「モモー！」

目障りな纏わりを鬱陶しく感じたか、クラゲは標的を完全にへミヴィークへと定め

ていた！

捕縛しようとする無数の触手が揺らぎ迫り、撃ち落とさんと光撃が襲う！

『う……ぐう！ ミヴィーク、もつと早う！』

『……ケル！』

モモの苦悶を気遣いながらも、ミヴィークは加速した！

『ふぐう！』

『ケルツ？』

『え……へへ♪　へ……平気だよ？』

「……んなワケないじゃない」

アタシは菌痒さを覚えつつ吐き捨てた。

現状は辛うじて高機動性依存に回避は続けている……が、紙一重な危なっかしいものだ。

況してや、搭乗者はアタシじゃない。限界はある。

各愛機は、専属パイロットに合わせたカスタム調整が為されているからだ。

つまりアタシが乗ってこそへみヴィークは真価を發揮できる！

『うきやうー』『ケルツ！』

「モモ！　ミヴィーク！」

触手に弾き叩かれた！

直線進路上を予測しての先手だ！

荒く回転を躍りながらも滞空制止！

おそらくへみヴィークの自己制御だ！

墜落は避けた！

けれど、その沈黙を狙う敵意！

幾多もの触手が迫り来る！

「すぐ離脱して！ そのままブースター全開！ モモッ！」

『……………』

「モモッ！」

反応が無い？

まさか衝撃で気を失った？

下手をしたら、直前までのGが困憊こんばいの負荷を掛けていた可能性もある！

「モモッ！」

『ドクロブレエエエード！ 乱舞滅多斬り！』

「え？ ドク郎？」

割って入った半月刀が、総ての触手を斬り払った。

何で、アンタがモモを庇かばってんのよ。

何で、アタシじゃなくアンタがそこにいるのよ。

そして何故、こんなにイラツとしてんだろう……アタシ。

『見損なつたぞ！ シャチ娘！』

ビシイとアタシを指差して説教垂れ始めたわ……生意気に。

『如何いかなる理由があるかは知らん！ 興味も無いわ！ だが！ キサマ達は常にワンセットではなかったのか！ それを何だ！ そんなガラクタに鞍替えしおつて！』

……コレ、いつもと違う苛立ちだから。

『さあ、どうした！ シヤチむす……ムウ？』

またも触手の潮が襲い来る！

ドク郎に斬り捨てられた先端は、みるみる再生して元通りとなっていた！

『ええい！ 鬱陶しいい！』

ミヴィークを胸に庇い抱きつつ、刃で弾き続けるドク郎。

何やってんだ……アタシ。

あんなヤツにモモを庇われて……。

『リン、どうやらチャンスだ！』不意に耳へ飛び込んで来たのは、ケインからの指示。『いまヤツは、あの髑髏型ロボに集中している！ 一気に間合いを詰めるチャンスだ！ そうすれば、最強必殺の〈超リニア剣・スピン斬り〉で仕止められる！』

ああ、まだ奥の手があつたんだ……。

最後の武器ね……。

つてか〈五大武器〉しか無いのに〈剣〉が別々にあるんだ？

ウケるわ。

どうでもいいし……。

『ヌウウ！ キリが無いわ！ このクラゲ風情が！』

……うっさい。

『リン、このまま突っ込むぞ！』

……うっさい。

『天条リン、私は泣かせてはいない』

うっさい！

『泣かせたのは、誰？』

「ッ！」

——えへへ ♪ リンちゃりん ♪

白い脳裏を、いつもの弛い笑顔が占めた。

まったく……どうして、アンタはそんなにフワフワだ。

どうして、警戒心ゼロだ。

どうして、いつも考え無しだ。

心配で仕方ないじゃない。

アタシが傍そばにいないと……。

なのに、アタシは……アタシは何やってんだ？

熱に浮かされて……。

酔って……。

ミヴィークを不安にさせて……。

モモを泣かせて……………。

『しまった！ 捕まっ……………グアア！』

『リン、どうした！ 懐へ飛び込むぞ！』

「うっさいって……………言ってるのよー……ッ！」

ブチキレにフロントキヤノピーを蹴破ってやったわよ！

どいつもコイツも知るかつーの！

アタシは “天条リン” ！

思うがままに行動するだけよ！

「ミヴィーク……ッ！」

破砕に刻まれた開放からへへリウムブースターへ任せに飛び出した！

アタシの呼び声に呼応してへ宇宙航行艇が覚醒する！

そのまま抱く巨腕をスルリと抜け出して、アタシと踊るかのように天空高々と泳いだ

！

「ギヤラクシー
G フォルム・メタモルアップ！」

髪止め型のヘシンクコロコネクターに嵌め込まれた青いクリスタルヘトランスコアが

起動の輝きを息吹いた！

そして——「Gリン！」——アタシは、アタシを名乗った！

リンちゃんと惑星レトロナ Fractal. 7

運命の王子様つてのに憧れた。

少女漫画を読み漁るようになった。

それもこれも窮屈な家庭環境のせいだ。

物心ついた頃から、やれ許嫁やら、やれ名門家柄とのお見合いだとか……ウンザリだ。

だから全部、破談へと持ち込んでやった。

ある時は〈宇宙航行艇〉の超高速ツーリングでビビらせ、またある時は運動神経の雲

泥差を誇示して気後れさせてやったわ。

何が「いつ見ても御美しいですね、天条さん」だ。

所詮「家柄に操られた人形」じゃない。

どいつもコイツも名門温室育ちの御坊っちゃんだから、少しばかり箱庭から引き摺り出せば簡単にドン引く。

次第に親も根負けして、何も強くなかった。

うん、それで善し！

アタシは「天条リン」——自分の人生は「自分」で決める！

以前にも増して、少女漫画を読み漁るようになった。

イケメンドラマを観るようになった。

ヴァーチャル恋愛ゲームも、必ず新作チエツク。

ハア……ラブロマンスかあ。

こんな「燃えるような大恋愛」を体験したいものだわ。

いつの日かアタシにも現れるわよね？

運命の王子様ってヤツが……。

「うう……」

モモが意識を取り戻した。

アタシの両りょうてのひら掌なかの内なかで。

「あ？ リンちゃん？」

「つたく、アンタは……。専属じゃないのにへミヴィークへ乗りこなせるかつーの！」

「えへへ、せやねえ？ さすがへリンちゃん専用機だけあってGスゴかったわ★」

相変わらずホワホワとした苦笑にがわらいに染まる。

ホントに反省してるのかしら？

……まあ、いいわ。

この笑顔に免じて、もう少し『ラブロマンス』は御預けにしますか。

「あんな？ リンちゃん？」

「何よ？」

「……ゴメンねえ？」

「は？」

「ウチのわがままで、ケインはんと引き離してしもた」

「べ……別に、まだそんな仲じゃ……」

「せやけど、ウチ、リンちゃんと一緒にええねんよ？」

「……」

「せやから、ゴメンねえ？」

「……アンタは悪くない」

「リンちゃん？」

「……言つとくけど、アタシも悪くない」

「ふえ？ せやったら？」

「せやけど！ 今回の相手は〈宇宙クラゲ〉やねんよ？」

「アタシを誰だと思ってるの？ アタシは『リン』——『天条リン』よ？ 不可能なんて無いんだから★」

波打に伸びる触手の槍！

おびただ

夥しいそれを、アタシはヘリウムブースターの微々たる滞空推移で回避する！

紙一重！

大きく旋回なんかしない！

直進を兼ねているからだ！

本体へ近付かなければ何も始まらない！

また来る！

しつこい！

「ドク郎ッ！」

『ドクロブレエエード！ 乱舞滅多斬り！』

呼ばれて飛び出て、下僕が触手の群を斬り払った！

「よし、よくやった！ そのまま引き付ける！」

『アイアイサー……って、チト待てえええーい！ 何故、ワシがオマエに命令されな

即座に、その場から離脱！

四方八方から触手が伸びてきたから！

「厄介ね！ あのゼリー饅頭！」
まんじゅう

『何をやってるか！ シヤチ娘！ 全然効いておらんではないか！』

「うっさい！ ドク郎の分際で！」

『分際って何だ！ というか〃ドク郎〃って誰だ！』

「絶対、アソコが弱点だと思っただけどなあ？ 他に目立った異質箇所は無いし……中

核に据えてあるし……ブツブツ」

『無視をするな！ 腕組み思案で無視するな！』

「あ、そだ！ ねえ、アンタ？ ちよつと中性子爆弾でも抱かかえて、アソコに特攻して来て

くんない？」

『さらつと恐ろしい死刑宣告するな……それも悪意無く』

「何よ？ 使えないわね？ ドク郎のクセに！」

『鉄砲玉に使うなッ！』

『3 f \ 1 b 次 元の少女よ』
フラクタル プレーンテイメンション

沈着な抑揚で、クラゲが語りかけて来た。

って、その 3 f \ 1 b 次 元の少女〃 って、疑う余地無くアタシの事よね？

『我が身に一撃を加えた結果は、素直に驚嘆に値する。あのような結果は、我がヘラプラス・コンプレックス』には演算されていなかった』

何だヘラプラス・コンプレックスって！

シンプルにへ未来予測って言え、コンニャロー！

一聞に把握しづらい横文字へ置き換えれば、自分を高尚に見せれるとか思ってたんなら大間違いだかんね？

そんな安っぽいオタ房発想www

『しかし、だからこそ立証された——やはりオマエ達 $\begin{matrix} \text{フ} \\ \text{ラ} \\ \text{ク} \\ \text{タ} \\ \text{ル} \end{matrix}$ 3 $\begin{matrix} \text{f} \\ \backslash \\ \text{l} \end{matrix}$ b $\begin{matrix} \text{ブ} \\ \text{レ} \\ \text{ィ} \\ \text{ン} \\ \text{デ} \\ \text{ィ} \\ \text{メ} \\ \text{ン} \\ \text{シ} \\ \text{ヨ} \\ \text{ン} \end{matrix}$ 次 元の人類』

シンプルにへ可能性って言え！ このスットコドツコイ！

厚顔無恥な白痴政治家か！ アンタ！

『その反面、精神的成長は未熟。このアンバランス性は、宇宙全体にとって害悪となる事を憂慮せねばならない。やはり現状から活動領域を拡張させるべきではないと判断……』

「知るかつつの」

『……何？』

「そもそも『籠の鳥』なんて真つ平ゴメンだつつの！ そんなんで納得するぐらいな

ら、とつくに縁談だつて快諾してるわ！」

『……何を言っている？』

「フツ……分かんないなら教えてあげるわ」

そして、アタシはロングポニーをフワサと鋤^すき流した！

「アタシは“リン”！ “天条リン”よ！ いつでもどこでも、自分の思った通りにやる！ 誰の指図も受けないんだから ♪」

『……ああ、やっぱり』

オイ？

その「やっぱり」って何だ？ ドク郎？

『慢心と奢り……だから、危険だと言う』

「フン……『自信』と『可能性』っていうのよ！ そーいうの！」

『害悪の危険性は、この場で少しでも排斥する』

「ヤダア★ 奇遇うく？ 同感く ♪」

アタシの挑発を皮切りに第2ラウンド！

またも襲い来る無数の触手！

「つたく、ウネウネと！ アタシはエロアニメのヒロインじゃないっての！」

『イ……イヤアアア！』

……アンタの恥態ちたいなんて見たくないわよ、ドク郎。

「クツ……ソ！　せめて、触手の動きさえ止められれば！」　齒齧みの中で、ふと妙案が脳裏うらを過る。「やってみるか」

そして、アタシは両りょうてのひら掌を花と開いた！

「エコロケーションホールド！」

放たれる超音波拘束！

クラゲの動きが愚鈍に染まる！

……けど！

「クウ？　や……や……やっぱり独りひとじゃ不充分……か？」

クラゲのヤツ、まだ動ける！

そもそもはモモとの相乗効果で、膨大な拘束力を領域形成する連携技だ。

アタシ独りひとからの圧だけでは、そりや不充分に決まっている。

況ましてや相手は、あの〈宇宙クラゲ〉——難敵もいとこだ！

「うらあああああ——ッ！」

だったら振り絞る！

持てる渾身を限界まで！

宇宙の平和？

人類の存亡？

カンケーない！

単に……アタシは負けたくない！

何故なら、アタシは天条リンだから！

『愚かな……仮に力業ちからわざで抑え込んだとて、その後はどう攻撃へ転ずる？』

「グウウ……オ……オイシイ見せ場は……譲ゆずつてあげるわよ！」

不本意ながらに、攻撃担当への任命を叫ぶ！

「ドク郎！」

『イヤーン！ 破廉恥ハレンチな！』

「触手宙吊りにTトOLラOVEブってんじやないわよーッ！ この一大事いちだいじにーッ！」

ホントに使えないわね！ コイツ！

『いいや、リン！ 一瞬でも動きを止められれば充分だ！』

え？ この頼もしい声……ケイン？

肩越しに振り向けば、いつの間にか間合いを詰めていたレトロナファイブの勇姿が！

そうか！ 完全に蚊帳の外だったから、失念のままノーマークになっていたのね！

『行くぞおおおーッ！ 超リニア剣ーッ！』

胸部に据えられていた深紅のシンボル『V型エンブレム』が、刀身と柄を伸ばして両刃もろは

の巨剣に……つて、違った！

アレ『V型エンブレム』じゃなくて『レの字』だ……
カタカナの『レ』だった……

微妙な傾斜に据えていたから誤魔化されてたわ！

『ハアアアア……ッ！』

高々と巨剣を振りかざすと、頭上には雷雲が集積していく！

……何で？

何で、いきなり局地的天候変化？

もしかして、例の〈ブルートーン効果〉の応用？

とか胸中でツツコミを巡らせていた直後、神々しいほどの落雷！

膨大な電気エネルギーが両刃に帯電蓄積される！

そんなもつて、煤けた！

レトロナ V、機体色が少し黒ずんだ！

絶縁処理ハンパだった！

落雷受けた瞬間、軽くビクウって痙攣したし！

『超リニア剣……スピン斬りイイ……ッ！』

強大なエネルギーを攻撃力へと転じ、鋼鉄の巨体が高速回転！

大爆発！

白い光の拡散がへクラゲの最期を演出した！

柔らかくも眩く染まる眼界。

だがしかし、予想外の展開が、またもやアタシ達を驚愕へと貶める！

「な……何ですってッ？」

確かに斬りはした！

確かにトドメとなった！

少なくともへクラゲには……。

だけど、溶けていく光の中にソイツはいた。

白の中心に……。

あのへクラゲに取って代わって……。

少女だった！

閑雅に泳ぐ銀色の長髪。端正で線の細い美貌には、憂いを帯びながらも冷ややかな眼差し。まるで聖女のような高潔さを感じさせながらも、得体知れない恐怖感をゾツと抱かせる。

「我が名はへニョロロトテップ……」

それがへクラゲの正体だった。

リンちゃんと惑星レトロナ Fractal. 8

「んじや、コレがへネクラナミコン<だったの?」

「そう」

夕日に萌える格納庫で、リンちゃんはクルちゃんが見つけた物に呆れとった。

無理もあらへん。

ウチかて同じ心境や。

ハツちゃんは軽い好奇心だけを注いどったけど。

クルちゃんが探し出したへネクラナミコン<は……博士の「濁酒徳利」どぶざくどつくり やった。

「四ツ乙女谷博士は言っていた——『呑んでも尽きない養老乃瀧』よらうのたき……呑んでも尽きない養老乃瀧……』と」

「……ああ、アレ『アル中の幻覚症状』じゃないんだ」

「奇怪な現象ではあるけど、これがへネクラナミコンの擬態<ならば納得はできる」

できへんよ?」

「ふむ？ 理には叶っておるな？」

叶ってへんよ？

「ま、何にせよ目的は達成したし滞在リミットもドンピシャ……そろそろへツエレークへと帰りますか」と、リンちゃんは伸びに砕ける。

ウチ……やっぱり凹んだ。

なんや空元気に見えた。

「あんな？ リンちゃん？」

「うん？ 何よ？ 神妙な顔しちやって？」

「ゴメンね？」

「……はあ？」

「ウチのせいで、リンちゃんの恋愛を台無しにしようた」

「……………」

「あんな？ ウチな？ リンちゃんと一緒にええねん！ ずっと一緒にええねん！ せやけど……そのせいで、リンちゃんにイヤな思いさせた」

「……………」

「ウチ……ウチ……ごめんなさい！ ふぐつ……ウチ……ふえ……リンちゃ……リンちゃんに嫌われた……ない……ふええ……」

「えい★」

「ふぐうー！」

ほっぺムニされたよツ？

いきなり両手で、ほっぺ引つ張られたよツ？

「ふひい……フィンふあん？ ふあひひほんほ？」

「アハハハハ★ 面白ーい ♪ 大福顔ー ♪」

リンちゃん、わろ笑た。

心の底から大笑いしとった。

何で？

「別にアンタのせいじゃないっての！ 笑つとけ笑つとけ★」

「リンちゃん？ でも……」

「アンタは笑ってりやいいのよ。いつもみたいにフワフワトトロトのパータリンぶりで

♪」

「リンちゃん！ あんまりや！」

「アハハハハ★」

「そう……事の発端は、天条リンの尻軽にある」

「黙れ！ クル！」

ギンツと睨め付けるジャレ合い。

そのワンクツションの後、リンちゃんはウチに向かってボソボソ口隠りっぽく言うた。

「んでもって、アタシの傍にいなさいよね？ アタシがフラフラしちやつても……その

……懲りずに……」

「……ええの？」

「いいに決まつてるでしょ！」

「せやけど、また迷惑かけてまうかもしれへん……」

「フツ……アタシを誰だと思ってるの？」いつもと変わらない自信が、ファサとロングポニーを鋤き泳がせた。「アタシは『リン』……銀暦有数の大企業（星河コンツエルン）の娘『天条リン』よ！ 不可能なんて無いんだから！ 迷惑の百や二百、ドンと来い！

片っ端からクリアしてやるわよ！ 難無くね！」

「うむ、頼もしい事よ。では、今後世話になるぞ？」

「いや……アンタは別口だ、エルダニヤ」

あ、本気でゲンナリしとる。

せやけど、なんやいつも通りの雰囲気なつた。

せやから、ウチ嬉しゆうなつて「えへへ」と笑とつたねん。

「ギユウウウ ♪」

「アダダダダー……ッ? コラ! 痛いつての! モモ! 放せ!」

ハグやねん。

嬉しゅうなったらハグやねん。

ギユツとしたら、もつと仲良うなれるよ?

「リンちゃん ♪ 大好きや ♪ ギユウ ♪」

「アダダダダダダー……ッ?」

「あ」

「ふえ? どないしたん? クルちゃん?」

「陽^ひノ咲^{さき}モモカ……その体勢は、前回不発だったバツクドロップを再行使する絶好の

チャンス」

「せやの?」

「頑張れ、陽^ひノ咲^{さき}モモカ。アナタの可能性を、私は応援する」

「うん! ウチ、頑張る! セーの!」

「何が『セーの!』だあああ……ッ!」

「ふぐう!」

後頭部ハリセンスパーン来たよ?

リンちゃん、血相変えて振りほどいたよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「潤々しながら『痛いよ？』じゃないツツーの！ この脳味噌火サス娘！ 今回のは間違

いなく殺意だかんね！ 殺意無き殺意だかんね！」

「やれやれ、相変わらずの仲の良さだな？」

格納庫ドックの奥から、男の人が姿を現した。

ケインはんや。

軽くデジャヴやね？

「ケイン……」

リンちゃん、さすがにバツ悪そうやった……。

せやね。

そう簡単に割り切れへんよね。

さつきのリンちゃんの言葉は、嘘やあらへんやろうけど……。

「オレの安直な身勝手さで、いろいろと迷惑を掛けちまったな……リン」

「迷惑って……そんな……」

「……ほら」

差し出された手を躊躇ためらいつつ、ややあつてリンちゃんはサヨナラの握手を交わす。

「でも、ゴメンね？ やっぱアタシにへレトロナ ファイブ V は無理だわ」

「だな」と、ケインはんはウチを覗き見た。「君には君の居場所がある……それが一番だ」
「……うん」

「フツ……いいムードのところを邪魔するが、オレにも別れの見送りをさせてもらえるかい？」

今度は聞き慣れた斜に構えた口調が聞こえた。

「ジョニーはんやね？」

コツリコツリと靴音が近付いて来る。

そして、姿を現す あつわ ジョニーはん……と思うたら、女の人やった！

ウエスタンススタイルの金髪ポインのお姉さんや！

「え？ 誰？」

リンちゃんが戸惑う かたわ 傍らで、ケインはんが断定した。

「ジョニーー！」

「ジョニーイイイー……ツ？」

驚愕するウチとリンちゃん！

「ジョ……ジョジョジョ……ジョニーって、女だったのツ？」

リンちゃんの混乱に、ジョニーはんの眉尻がピクリと不快を示した。

「歯を喰いしばれえええー！ ツ！」

「い、ふうー！」

殴られた！

いきなり殴られた！

ケインはんが！

質問したの、リンちゃんやのに！

「『ジョニー』が女の名前で何が悪いんだ！ オレは女だよ！」

「ああ、判ってる！ ジョニー！」と、爽快サムズアップ。

……何なん？ このやりとり？

「だが、その調子なら、もう大丈夫そうだな？」

「フツ……いつまでもけんしょうえん腱鞘炎なんかで寝込んでいられるか」

せやね？

普通、寝込みはせえへんね？

「えつと……ちよつと待つて？ つまりジョニーは、最初から『女』で？ レトロナファイブV

は二人乗りで？ 実質、男女相乗り状態タンデムで？ え？ え？」

リンちゃん、軽くパニックや。

「あんな？ 二人は恋人同士やの？」

「…………あ」「…………う」

目え逸そらした。

恥じらいながら、目え逸そらした。

それ、答になつとるよ？

「ガツデー……ムツ！」

叫んだ！

リンちゃん、明後日あさってへ向かつて絶叫した！

ラブロマンス御破算になった！

いろんな要素で！

「神谷ケイン…………我々われわれは、そろそろ帰還する。今後、アナタ達へレトロナファイブの善戦を

祈っている」

「ああ、有難う！ クルロリくん！ 今回の実戦経験は、実に貴重な体験となった！ 初

戦は必ず勝利してみせるさ！」

…………うん？

いま、変な事を言わへんかった？

「あんな？ ちよつとええ？」

「何だい？ モモカくん？」

「確かヘレトロナ V^{ファイブ}はヘレトロナ星^{ファイブ}から来たヘレトロナ星人^{ファイブ}が送り込んで来るヘレトロナ獣^{じゆう}から惑星レトロナ^{ファイブ}の平和を守ってるんよねえ？」

「ああ、そうだよ？」

「これまで何回戦ったん？」

「ハハハ……まだ戦ってないさ」

「ふえ？」「は？」「……………」

「だが、ヤツラは必ず攻めて来る！ 恐るべき軍団を率いて！ その時は……必ず野望を砕いてみせる！ 俺達ヘレトロナ V^{ファイブ}が！」

グツと拳を握り締め、まっすぐな正義感を夕陽へと投げるケインはん。

無言の同調に「フツ」と含羞^{はにか}むジョニーはん。

いや、何言うてんの？

ええ感じに纏^{まと}めながら、何を「実^みの無い正義」を誇示^{ほこ}しとんの？

「神谷ケイン、ひとつ訊^ききたい。その事前情報は、何処から得た？」と、クルコクン。
「決^きまつてるじゃないか、博士だよ」

「あんのヤロオオオオ……ツツツ！」

リンちゃん、猛^まダツシユヤ！

大爆走で基地内へ駆け戻っていった！

「擬態？」

「この形態も、そうだ。だが、貴様達が示してくれた——その〈可能性〉とやらを。故に、ゆえその〈特性〉に特化する事にした」

「姿形を『女子』にしたところで備わるかッ！ つてか！ そもそも目的は何だッつの！ 何故『人類の活動領域』を縮小させようとしてンのよ！ わざわざへフラクタルブレインを股に掛けてまで！」

「……貴様達程度には理解出来まい」

「……ンのー！」

「今日のところは引き下がるが、次に会えば容赦はしない。今回の件で、貴様達はへ危険分子と確信した」

「あ！ ちよつと待て！ 逃げんなッつの！」

『アイツ……結局、何者なのかしら？』

「あの後、何もせえへんと帰りはったねえ？」

『また来るでしょうよ……因縁、出来ちゃったしね』

「えへへへへ ♪ ー」

『何よ？ 急にニヤけて？』

「あんな？ リンちゃん？ そしたら、ウチ “友達” なってええ？」
『はああッ？』

「ウチ、ニヨロちゃん “友達” なりたいねん ♪」

『この脳味噌キクラゲ娘！ なれるか！』

「イヤや！ なりたいねん！」

『まったく、もう……………クスッ ♪』

「どないしたん？ リンちゃん？」

『いや、アンタらしいなあ……………って』

「？」

『可能性……………か』

『??？』

天条リン達からの報告を受け、マリー・ハウゼンは「宇宙クラゲ」に関するデータを更新した。

薄暗くも雑多に散らかった自室に、キーパンチの音がカタカタと鳴り続ける。

「ニヨロトテップ……………か」

とりあえず更新を一気に済ませると、背凭せもたれて軽い考察に囚われた。

「宇宙クラゲ……ニョロトテップ……ネクラナミコン……クルロリ……」
感慨も無く羅列していくキーワード。

此処に来て、総ての異端要素が因果関係を繋つないだようにも思えたのだ。
持て余す「非現実的現実」を直視し、脳内整理に務める。

そして、誰に言うともなく洩らすのであった。

「……私、この作品に必要かしら？」

ゴメン！ マリー！

もうちよつと……もうちよつと待って！

どうにか出番を増やすから！

「お掃除や ♪ キレイキレイや ♪」

「何をそんなに浮かれてんだツツーの？」

並んで格納庫ドックへ向かう中、リンちゃんあきが呆れながらに訊たずねてきた。

「えへへ ♪ せやかて、今日は『キレイキレイの日』やもん ♪ あの子達、

喜ぶよ？ 〈イザーナ〉も〈ミヴィーク〉も喜ぶよ？ それ想像したら、ウチも何か嬉し

いねん ♪」

せやねん。

今日は月一回〈宇宙コスモクルーザー航行艇〉を徹底整備する日やねん。

難しいのは整備士メカニックはん達に任せるけど、ウチとリンちゃんはキレイキレイに清掃して

あげるねん ♪

「ま、惑星レトロナではへミヴィークを不安にさせちやつたし……今日は念入りに洗ってやるか」

「うん★へミヴィークへ頑張つたよ？」

そして、格納庫ドックの扉が開いた。

……ピカピカやった。

へイザーナもへミヴィークも、新品ばりにピカピカやった。

「ど……どういう事？ コレ？」

さすがにリンちゃんも困惑する。

せやね？

こんなん初めてやんね？

「うむ、ようやく来たか？ モモカにリンよ」

ハツちゃんや。

格納庫ドックの奥から、清掃道具を携えたハツちゃんが出迎えに来た。

うち、とりあえずピカピカになったへいザーナゝの体を撫で……あれ？

この子、怯えとるよ？

心がカタカタ震えとるよ？

「エルダニヤ？　これ、アンタが？」

「フツ……礼には及ばぬぞ、リン。単にへりヒアークゝの整備のついでじゃ」

「へりヒアークゝ？」

「我が愛機わの名じゃ」

ああ、モササウルスや。

名前決まったんや？

よかったねえ？

「あんな？　ハツちゃん？　それ、何て意味の『ハウゼン語』なん？」

「その『ハウゼン語』なるものは知らん。が、いい感じに“いんすぴれーしょん”が降りたのどのう」

「ふえ？　いいアイデアが閃いたん？」

「うむ。文字盤の上で滑るコインの連鎖で決めた」

それ『コックリさん』や！

この人『コックリさん』で名前決めはった！

「に、しても——」改めて〈ミヴィーク〉の光沢へと見入るリンちゃん。「——よく一人ひとりで両機を整備できたわね……って、あれ？ この子、震えてる？」

〈ミヴィーク〉も？

おかしいねえ？

その子、肝座つとるのにねえ？

「フツ……我われひとり一人で、これだけの数を整備できるワケもなかるう？」

「ふえ？ セやつたら？」

「さあ、感嘆せよ！ 我が『専属整備員』の腕前の素晴らしさを！」

オーブ飛び始めた！

ハツちゃんの周りに無数のオーブ飛び始めた！

この人、機体整備に〈幽霊〉使役しはった！

「モモカよ、リンよ、改めて紹介しよう！ 此処おに居るが、我が専属の——」

「マリーー！ 今日の授業、質問があるんだけど————ッ！」

二人揃って猛ダツシュ！

恐々猛ダツシュで格納庫ドックを後にした！

「ふむ？ 何じゃ……忙しい奴等よのう？ せつかく我が『専属整備員』の有能さを示

してやろうと思うたに……む？ おお！ そこおに居るわ、クルではないか？」

「……………何？」

「整備か？」

「そう」

「ふむ？ では、僭越せんえつながら手伝ってやろう。何、ものの数分で完璧じゃ。フッフ……………驚くが、いいぞ？ 我わが『専属整備員』の有能さを！」

「要いらない」

「……………」

この後、格納庫ドックの片隅で膝を抱えるハツちゃんの姿があつたんやて。チタン床に、いっぱい『のの字』を書いて……………。

クルちゃん惑星ジェルダ

クルちゃんと惑星ジェルダFractal. 1

「ふうん？ 今回の目的地は、アレ？」

「そう……アレが〈惑星ジェルダ〉」

リンちゃんとクルちゃんは、徐々に大きくなってくる緑の惑星へと見入ってしまった。

ツエレークのブリッジや。

次空座標は、 $2 \overset{\text{フラクタル}}{f} \setminus 1 \overset{\text{ブレンディメンション}}{b}$ 次元やて。

何や？

今回は「お隣さん」やんね？

それぐらいウチでも解わかるよ？

えへへ ♪ ウチ「賢かしこさん」や ♪

「んで？ どんな惑星よ？」

「豊かな自然に恵まれた惑星……種々様々な原生生物が共生している」

「ふくん？　つまりは〈惑星テネンス〉のような？」

「大別的には同類型。ただし、微々たる差も在る^あ」

「例えば？」

「文明レベルは低く、高度知性体も存在しない。加えて、原生生物の種類は雑多。危険レベルも高い」

「要するに？」

「もつと原始的」

「なるほど」

「あ、そういえば……クルちゃん？　あんな？　〈ネクラナミコン〉って、全部で何個あるん？」

「あ、そういえばそうよね。いままで漠然と集めてたけど……」

「全部で六つ」

「つて事は、現状アタシらが持っているのは三つだから……あと三つか。丁度、半分じゃん？」

「天条リン、そうではない。ドクロイガーが、ひとつ所有しているので、あと二つ^{ふた}」
「アンニヤロー！　しれつと持ってたか！」

簡潔な補足説明を紡ぎ終わると、クルちゃんはジッと惑星へ見入った。

いつもと同じ無感情やけど、ウチにはそう見えたねん。

何や感傷的に浸つとるような……。

「天条リン、陽ノ咲モモカ……」ややあつて振り向いたクルちゃんは、ウチとリンちゃんに静かなる決心を告げた。「今回は、私一人で行く」

「ザケンなツツーの!」

惑星降下しての第一声が、リンちゃんの憤慨ふんがいやつた。

深い森林に〈宇宙航行艇コスモクルーザー〉を着陸させると、ウチとリンちゃんは緑草の浅瀬に脚を沈める。

結構、乱雑に生い茂つとるねえ?

この辺、説明通りや。

ハツちゃんの故郷〈惑星テネンス〉が、拓けた自然つたやとしたら、此処〈惑星ジェルダ〉は、未開のジャングルつた、いう感じやつた。

見渡す限りの樹々は巨大に育ち、蛇を思わせる蔦つたが洩れなくブラ下がつとる。南国植物のように厚い葉がカーテンのように日照を邪魔立てて、森の中は少々薄暗い。

一番イヤなのは、地熱が隠つて蒸し暑い事やつた。

せやから、ウチとリンちゃんはベルトバツクルに据えたパモカを操作して（PHW）の『体感温度調整機能』をオンにする。

これで常時快適や ♪ えへへ ♪

「つたく！ 何が『今回は、私ひとりで行く』だ！ ワンマンプレイにも程ほどがあるツツーの！」

「えへへ ♪」

「な……何よ？」

「リンちゃん、やっぱり優しいねえ？」

「はああ？」

「クルちゃんの事、心配やんね？ せやから追って来たんやもん ♪」

「ち……ちちち違うツツーの！ 別に、あんながどーなっても、アタシには関係無いし！」

「せやの？」

「そうよ！」

「せやったら、何で？」

「う……」リンちゃん、目え背そむけて眩つぶやいた。「で……でつかいマンゴー食いたかった」

「ギユウウウ ♪」

「アダダダダ……ーッ？」

ハグや★

仲良しハグやねん★

「リンちゃん、照れ屋さんや★」

「イダッ……違つ……イダダダダッ？」

「ギユウウウウ……御褒美に、もつとギユウウウウや★」

「イダダダ……つて、それ以前に暑苦しいわアア……ーッ！」

「ぎゃん？」

叩かれたよ？

パモカハリセンで後頭部スパ……ン叩かれたよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「潤々うるうるへたり座つて『痛いよ？』じゃないツツーの！ せつかくの『体感温度調整機能』

が無意味になるわ！」

と、ガサガサと繁しげみの草が動く気配！

誰かが来た！

すかさず〈へりウム銃ガン〉を引き抜いて、警戒に身構えるリンちゃん！

「モモ、気を付けなさいよ……どんな危険なヤツか判わからないから」

「危険？」

「クルの説明だと、この惑星に『高度知性体』はいない……とすれば、原生物よ！」

「せやの？」

ウチ、繁^{しげ}みをジツと眺めた。

あ、ガサガサ揺れんのが大きくなってきたねえ？

もうすぐ出て来るよ？

「ウホオオオオ……ッ！」

誇^ほらしげな咆^{ほう}哮^{こう}に姿を現したんは『六本腕のゴリラ』やった！

大きい！

2メートルは越えとる！

「こんにちは★」

「ウホ？」

「つて、モモ……ッ？」

ウチ、テクテク近付いて挨拶したった。

「あんな？　ウチ『陽^ひノ咲^{さき}モモカ』言うねんよ？」

「ウホ……」

「ほんでな？　クルちゃん知らへん？」

「ウホオ？」

「違^{ちや}うねん。小さい女の子やねん」

「ウホオ……ウホ？」

「せやの？」

「ウホ！」

「うん、分かった！ ありがとねえ？ ほんなら、バイバ〜イ ♪」

「ウホホーイ★」

六本腕に手を振られて、トテテテとリンちゃんの下へ駆け戻る。

「リンちゃん、知らへんつて〜 ♪」

「何で会話が成立してんだツツーのオオオツ！」

「ぎゃん！」

後頭部スパーン言うたよ？

パモカハリセン、連続二発目やよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「黙れ！ この『脳味噌ターザン娘』！」

「ほんでな？　ウチ、いっぱいいっぱいやってん」

「ウホ？」

「違ちやうねん。そういう事やないねん」

「ウホホ？　ウホ！」

「せやよ？　ウチは、そつちがええねんよ？」

「ウホオ……ウホウホ」

「あ、わかる？」

「ウホ！」

「アハハハハハ★」

「ウホホホホホ★」

「いや……まあ、何つつーかさあ」

ウチとゴリラさんの会話を聞き流し、リンちゃんはウンザリ顔やった。

何で？

見た事もない植物が雑多に繁しげる深緑を、ウチとリンちゃんはゴリラさんに肩担かたかつぎされて進む。右肩にウチ、左肩にリンちゃん。六本腕やから安定感バツグンや。

「ウホホ、ウホ」

「うーん？　どうなんやろ？　あ、リンちゃんはどう思う？」

「知るかッ！」

何で？」

「ええやん！ 答えてあげたつたら、ええやん！」

「ウホオ……」

「ほらあ！ ロツポちゃん、落ち込んでもうたやん！」

「そもそも何を言ってるのか解らないツつーの！ ってか“ロツポ” って誰だ！」

「えへへ、この子や ♪ 腕が六本あるから“ロツポちゃん” やねん★」

「アンタ、ネーミングセンスをどうにか……いや、もういいわ……うん」リンちゃんは深い溜め息に沈むと、気持ちを切り替えた。「んで？ 何でアンタは、コイツの言葉が解ん

のよ？」

「解らんよ？」

「はああ？」

「ほんでもな？ 何か、こう……言いたい事は解んねん ♪

“可能性”にも、程があるわッ！」

怒られた……。

何で？」

「つたく……で？ その“ロツポゴリラ”の質問って何よ？」

伝わんねん★」

「ウホ！ ウホウホ！」

「〃ロツポゴリラ〃 違う！ 〃ロツポちゃん〃 やねん！」

「どっちでもいいッつーの！」

「ウホ！」

「黙れゴリラ！ アンタなんか、本来 〃ゲテモノゴリラゴリラゴリラ〃 で充分なんだからね！ それをわざわざ 〃ロツポ〃 っ て付けてやってんだから！ それも、このアタシが！ モモに免じて！ 感謝しなさいよね！」

「ウ……ウツホ……ウウ……ウホホホホ……ウホ〜ン！ ウホ〜ン！」

「メソメソ泣くな！ 空いた手で顔を覆って！ どんだけシユールな絵面だ！ 両肩に

美少女担いだ六本腕ゴリラがメソメソ乙女泣きするジャングルって！」

「リンちゃん！ 意地悪アカン！」

「いいのよ、ゴリラだし」

「女の子に、そないなキツイ事を言うたらアカン！」

「女の子だったーッ！ まさかの 〃女の子〃 だったーッ！ そこは何かゴメー

！」

せやから、ウチ 〃ロツポちゃん〃 言うてたやんな？

泣き止んだロツポちゃんは、気を取り直して歩き出した。

のっそのっそ……両肩にウチとリンちゃん担いで、のっそのっそや ♪

これ、楽しいね？

えへへ★

「んで？ ゴリ……ロツポ？ アンタ、アタシ達を何処へ連れて行こうつての？」

「ウホ！」

リンちゃん、困惑顔をウチへ向けた。

あ、あの目……すが縋つとる。

「モモ、通訳」

「知らへんよ？」

「肝心なトコでえええーツ？」

「せやから、会話やないねん。フィーリングやねん」

「さつき会話してたじゃん！」

「ちや違うねん。何となく『好き嫌い』とか『コツチがいいアツチがいい』みたいなのは感じ

んねん。せやけど言葉は解わからへんねん」

「クルの事を訊きいてたじゃん！ アレ、会話だったじゃん！」

「あん時は分かったねん ♪」

「そのフィーリングを、もう一度オオオーッ！」

リンちゃん、うるさいよ？

周りの樹からカラフルな鳥さんが、いつせいに飛び立ったよ？

と、急にロッポちゃんが歩くのを止めた。

何や一転して雰囲気が凄味を帯びとるねえ？

そんでもって、ウチとリンちゃんを静かに降ろすと、この場所を指差した。

「……ウホ」

「うん、わかった」

「ウホ」

「リンちゃん、危ないから此処から動くなって」

「……いや、いま会話」

何？

そして、ロッポちゃんは目の前の樹林へと向き直ると、六本腕で胸を叩き乱した！

「ウホホホホホーッ！」

ドラミングや！

ドラミングの乱打や！

「ウホホホホホーッ！　ウホホホホ！　ウホ！　ウホホホホホーッ——

「ゲホゲホ！」

「……噫むせた。」

「そりやそうやんな？」

「叩き過ぎや。」

「それも六本腕の高速乱打やもん。」

「息継ひまぐ暇ひまなんて、あらへんもん。」

「威嚇いかくに呼応するかのようには、見据える繁しげみがガサゴソ動いた！」

「そこから出て来たんは、不思議な生き物やつた！」

「プロポプルブルのゼリーや！」

「ピンク色の水饅頭みずまんじゅうや！」

「せやけど、大きい！」

「ウチとリンちゃんの腰丈ぐらいはある！」

「イチゴゼリーや！」

「へプロブだ！」

「せやの？ リンちゃん？」

「あんなデツカいイチゴゼリーがあるか！ しかも、密林に！ つてか、そもそも生きてるか！」

「リンちゃん、たくさん言うたねえ? 賢かしこさんや ♪」

「うっさい! ホワホワ笑ってんな! この非常事態に!」

「あんな? リンちゃん?」

「何だツつーの!」

「そのへプロブって、何?」

あ、引っくり返った……。

「アンタ、ホントに銀曆ぎんれき世代か!」

「せやかて、知らへんモンは知らへんもん」

「ったく……要するにへプロブツつーのは、宇宙単細胞生物よ! 生態や特徴もへアメーバに酷似しているけど、見ての通り人間サイズに巨大。厄介なのは、捕食本能が貪欲つて事。そして、切つても殴つても効果が無いつて事。つまり——」

「こんにちは★ あんな? ウチ 陽ひノ咲さきモモカ 言うねんよ?」

「——つて、モモ——ッ?」「ウホ——ッ?」

えへへ★

ウチ、テクテク近付いてへプロブはんへに挨拶したつた ♪

ウチ、捕まった……。

クルちゃんと惑星ジェルダFractal. 2

ポヨンポヨンや ♪

ブロボはん、ウチを頭だけ出して包み込むと、そのまま跳ねて逃げ出した。
連続ジャンプで森の中を駆け抜けとんねん。

せやから、ポヨンポヨンや ♪

ポヨン——ピヨン——ポヨン——ピヨン——ピヨン——視界が上がったり下がったりで過ぎ
去って行く。

ほんでもって、結構快調や。

えへへ★ 何や、コレ楽しいねえ？

遊園地みたいや ♪

「モモ————ッ！」 「ウホ————ッ！」

あ、リンちゃんや。

リンちゃんとロツボちゃんが、全力疾走で追い掛けて来とる。

せやけど繁る草や蔦が障害になつて、思うように進めへんみたいや。

掻き分け、足取られ、それでも必死になつて駆けて来る。

一方で、ウチはポヨン——ピヨン——ポヨン——ピヨン——楽しい ♪

あ、そつか！

跳ねとるから早いんやねえ？

足取られへんもん。

ポヨン——ピヨン——ポヨン——ピヨン——あはは★

「止まれ！——このイチゴ蒟蒻！——モモ返せ！」

リンちゃん、やつと並走に追い付いた。

葉屑はくずまみれにボロボロや。

ブロボはんは御構い無しに、ポヨン——ピヨン——ポヨン——ピヨン——リンちゃん

と一緒に、ウチもつと楽しなつた★

「つてか、モモ！ アンタも抵抗するなり何なりしなさいよ！ 何をのほほんニコニコ

してんだツツーの！」

「あんな、リンちゃん？ コレ、楽しいよ？」

「無垢顔コクンと『楽しいよ？』じゃないツツーの！ さつさと脱出しないとエライ事にな

なるわよ！」

「延長料金？」

「違うわッ！ 溶かされるって言うてんのよ！」

「何で？」

「この状況で無垢顔コクンやめろ！ 誰のために爆走してると思ってるのよ！ 腹立つ

！ この〈ブロボ〉ってのは、獲物を溶解捕食すんの！」

「せやのツ？ それ、大変やん！」

「そう言うてる！」

「ウチ、裸にされてまう！ 森の中を裸で跳ねてるトコ、みんなに見られたない！ ふ

ぐうー！」

「そつち違うわー！ ツー！」

「あんな？ ポヨコちゃん？」

「……誰だ 〃ポヨコちゃん〃 って」

「えへへ★ この子や 〃ポヨンピヨンポヨンピヨン跳ねるから 〃ポヨコちゃん

〃やねん 〃」

「せめてウサギに付けろ！ 〈宇宙怪物〉にファンシーネーム付けるヤツなんか見た事な

いわよー！」

「あんな、ポヨコちゃん？ 溶かさんというて？」

「原始生物に通じるか！」

「……あんな？ リンちゃん？」

「ハア……ハア……何だツツーの！」

「わかった——って」

「ここでまさかのファイリンググー——ッ！」

ポヨコちゃん、跳ねる勢い増した。

「ああ？ 待てツツーの！ このイチゴゼリー！」

また引き離されるリンちゃん。

ほんでもって、やがて拓けた原っぱに着いた。

周囲を樹々に囲われた形で、天然の柵みたいに領域を覆われとる。

敷き広がる草は足首までに短くなっとなって、森の中とは違って見るからに過ごし易い

感じや。

そこに、たくさん「ポヨコちゃんの色違い」が居る。

「ゼエ……ハア……」「ウホ……ウホ……」

あ、リンちゃんとロツポちゃんや。

ようやく追い付いた。

「オイ、コラ！ イチゴゼリー！ ココ何処だ！ ってか、モモ返せ！」

「ウホ！」

「あんな？ どうやらポヨコちゃんの村やて」

「アンタも馴染んでんじゃないツツの！ さっさと抵抗しろ！」

「何で？」

ウチが小首コクンと訊ねた途端、何やリンちゃんから「プチッ！」という音が聞こえた

……気がした。

「フ……フフ……フフフ……」

沈めた顔に薄ら笑いを浮かべて、ユラユラと近づいて来たよ？

「そーかそーか……この期に及んで『何で？』と来たか……」

不穏なオーラに、ドン引き後ずさるロツポちゃん。

リンちゃん、まりよく魔力とか発動したん？

「いいから、とつとと出るオオオー……ッ！」

「イタタタッ！ リンちゃん、イタイ！ ウチ、イタイのイヤやあ！」

こめかみグリグリされた！

ゲンコツでグリグリされたよツ？

渾身の力ちからでグリグリされたよツ？

埋もれとるから抵抗できへん！

なすがままの拷問ごうもんや！

ウチ、ポヨコちゃんから出た……半ベソで。

ふぐう！

「んで？ 此処がコイツの村って？」周囲を見渡して、リンちゃんが分析。「ってか『村』って呼ぶより『集落』か」

「せやの？」

「でしよーよ？ 家屋とかの建築物も無いし……。ま、原始的生物じゃ、そんな『知恵』は無いけどさ」

リンちゃんが見下した傍かたわらで、ウチとロツポちゃんは番茶もろ貰うとった。

「ありがとうねえ？ ポヨコちゃん？」「ウホホ……」

「まさかの『おもてなし精神』あつたーッ？」

ポヨコちゃん、器用きゆうや。

体の一部を触手に変えて、それを腕きゆうみたいにして急須きゆうすをコポコポ……ほんでもって、スツと湯呑みを差し出した。

「いや、さも『はい、どうぞ』みたいに差し出されても困るんですけど……」

リンちゃん、困惑こんごうや。

「飲んだったら、ええやん？」「ウホオ……」

「まったり馴染むな、常識皆無×2」

毒突きながらも、ズズツと片手かたてですす啜りで状況観察を滑らせる。

広い原っぱには、青や緑や黄色のポヨコちゃんが思い思いにピョンピョン動き回った。

ウチには何をしとるか分からへんけど、きつとコレがポヨコちゃん達の生活光景なんやろね？

「……警戒心はゼロか。アタシらに敵意を向けるでもなくガン無視って？」

「友達やからやらないの？」「ウホホオ？」

「樂觀に溺れてんな、天然パースケ×2」

暫ししば黙考を巡らせた後、リンちゃんはポヨコちゃんへと振り向く。

「オイ、イチゴゼリー？ アンタ、何でアタシ達を此処へ連れて来た？」

プルプルプル！ プルルン！ プルン！

「……そーだった、コイツ喋れないんだった」

ガクリと膝ついて落胆や。

リンちゃん、うっかりさんや ♪

「モモ！ フィーリング発動！」

「無理や★」

「アタシに嫌がらせしてんのかーッ！ その異能力はーッ！ーッ！」

リンちゃんふんがいが憤慨した直後、場の雰囲気いのうりよくが急変する！

絶叫に驚いたワケやなさそうや。

みんなプルプルが小刻みになって、その場に固まっとる。

ふと見れば、ポヨコちゃんもや！

「ポヨコちゃん？ どないしたん？」

返事無い。

まるで緊張しているみたいや。

何となく……何となくやけど、みんなの意識は正面の繁みしげへと傾けられとる気がした。

せやからウチとリンちゃんも、そこを注視する。

そこだけは鬱蒼感うつそうかんが色濃い。

一際ひとときだけ樹々きが逞たくましい生命力を誇示し、互いの威嚇と協力を織り成す暗がりのベールや。

樹林のトンネルは深い闇に視線を吸い込み、それは数メートルどころか延々と底無しに瞳を持って行くかと思える暗さやつた。

ガサガサと繁みが乱される。

何かが現れようとした。

近付いて来る気配に緊迫感が強調され、リンちゃんはヘリウムガンへと手を掛ける。そして、姿を現した！

……メイドさんやった。

文字通りそのままの“メイドさん”やよ？

見た目には、ウチらと同じぐらいの年頃やるか？

緑色の髪をひとつで、大きなピンク色のリボンでうなじから一房ひとふさに纏まとめとる。特徴的な揉み上げで、そこだけはストレートロングヘアみたいに長く伸ばしとった。

円つぶらな瞳がクリツとして、柔らかそうなほつぺたの真ん中に小鼻チヨコンや。

印象は可愛らしい童顔なのに、何故か“大人びた落ち着き”を感じさせる。

「どういう事よ？ クルの説明だと、この惑星ほしに高度知性体はいない……つまり“人間”なんていないはずよ」

「あ、せやねえ？ そないな事、言うてたねえ？」

「……何者よ？ アイツ？」

「訊きいてみるね？」

「うん、お願い……って、モモローツ？ 違ちがーうー！」

ウチ、テクテク近づいて挨拶したった ♪

「こんにちは★」

「……どなたです？」

「あんな？ ウチ『陽ひノ咲さきモモカ』言うねんよ？」

「……はあ」

「誰？」

「はい？」

「せやから、誰？」

「何がですか？」

「教えて？」

「何をですか？」

「名前や」

「私わたくしの……ですか？」

「せや ♪ メイ子ちゃんの名前や ♪」

「……いえ、いま『メイ子ちゃん』と御呼びになりましたわよね？」

「せや★ メイドさんやから『メイ子ちゃん』やねん★」

「……センスが」

「ほんでな？」

「……………」

「ウチ、何て呼んだらええのん？」

「無限ループッ？」

と、はたと何かに気付いたかのように、メイ子ちゃんはウチの顔をマジマジ凝視し始めはった。

「え？ ウソ？ そんな？ まさか！」

何が？

「ヒメカアアア〜ん♡」

「うひゃあああ〜〜〜ツ？」

抱き着かれた！

いきなり抱き着かれたよツ？

恍惚に頬擦りスリスリや！

「うふふ♡ ヒメカ♡ 会いたかったですわ♡」

「ふぐう！ ウチ〃モモカ〃や！ 〃ヒメカ〃違ちがう！」

「うふふ♡ ヒ・メ・カ♡ うふふふ♡」

聞いてくれへん！

幸福トリップで聞いてくれへん！

「ふぐううう！」

引き離そう思うて抵抗するも、ガツチリハグが離れへん！

どれだけ力ちからあるのん？

このメイドはん！

「嗚呼、わたくし私のヒメカ♡

もう放しませんわ ♪

」

この人、怖い！

ウチ、この人怖いよツ？

「ふぐ……ふぐう……ふえええ……リンちゃん……うわくくん！」

「アタシのモモから離れろー……ッ！」

土煙の猛爆走でリンちゃんが迫つて来た！

その勢い任せに、力ちから尽くでウチを抱き寄せる！

奪還や！

えへへ ♪ リンちゃんに奪還された ♪

「ああん！ 何ですの？ アナタは？」

「うっさい！ アタシのモモを怖がらせてんじやないわよ！」

「……アナタの？」

「そうよ！」

「ア・ナ・タ・の?」

「う!」

リンちゃん?

何で言い淀むん?

「ううううっさいわね! この子は “みんなのモモ” なのよ! みんなのつて事は、アタシのつて事なんだからね!」

何か身に覚えがない格上げされた!

ほんでもつて、どつかで聞いた『ガキ大将理論』出た!

「あら? でしたら、わたくし私のもの……という事でもありますわね?」

「うッ?」

温顔ニツコリで言いくるめられた。

うん、そうなるやんな?

リンちゃん、もう少し考えて言うて?

「ううううっさい! アンタのものはアタシのもの、アタシのものはアタシのものよ!」

徹底した!

徹底して『ガキ大将理論』継承した!

そんなしてたら、また近場の繁しげみがガサゴソした。

どうやら、新たな参入者の登場や。

「騒がしいと思ったら、やはり来ていた」
クルちゃんやった。

クルちゃんと惑星ジェルダFractal. 3

宴が始まった。^{うたげ}

歓迎の宴や。^{うたげ}

ウチとリンちゃんの。

原っぱへと座り込むウチとリンちゃん……と、クルちゃん。

その背後にドデンと座るロツポちゃん。

各々の前には皿代わりの葉っぱが敷かれとって、その上にはフルーツやら肉やらの質

素な御馳走や。

うん？

肉、どないして焼いたん？

ま、ええわ★

コレ、おいしい ♪

ほんでもって、目の前では数匹のちっこいポヨコちゃんがリズムカルにポヨコンポヨ

コン跳ねとる。

どうやら歓迎のダンスみたいやね？

と、ややあつてクルちゃんが質問してきた。

「陽ノ咲モモカ、天条リン、何で追つて来た？」

「いつも通りヘイザーナ」とヘミヴィークで追つて来たよ？」

「違う」

違わへんよ？

「宣言したはず——今回は、私一人で行く——と」

「リンちゃんや ♪ リンちゃんが行こう言うたねん」

「ふむ？」

ジー……と、リンちゃんを傾視する。

その視線に堪えきれなくなったんか、リンちゃんはしどろもどろに言い訳を取り繕った。

「ア……アア……アタシは別にアンタなんか、どーでもいいんだから！ ただ、フレツ

シュなパイヤ食べただけで……」

「マンゴーやないの？」

「……う！」

言葉詰まったよ？

気まずそうに詰まったよ？

何で？

「そんな事より！ アンタこそ、どーいう事よ！ この惑星ほしに高度知性体はいないんじゃないの！ 何よ、アイツ？」

「ビシイ指差すのは、向こうの草原でポヨコちゃん達に指示を出しているメイ子ちゃん。

あんなん見ると、たぶん偉い人やね？

あ、コッチ気付いた。

ニツコリ笑顔で、ウチに掌てのひらを振ってはる。

ほんでもって、隣のリンちゃんを軽く見て……小馬鹿にした蔑笑べっしょう飾った。

「ムツツツカアーツ！ 何よ、アイツ！」

「彼女は〈プロブベガ〉の「ラムス」——この惑星ジェルダに生息する〈プロブ〉達の女王」

「ハツちゃんみたいなもの？」

「陽ひノ咲さきモモカ、並列に考えてはラムスに失礼」

それ、ハツちゃんには失礼やないの？

「だ〜くら〜！ その〈ブロボベガ〉って何だツツーのよ！ 高度知性体じゃん！ アイツ〜！」

「彼女は特異例。そして〈ベガ〉とは、正式には〈ベムガール〉の略。〈宇宙怪物〉と遺伝子レベルで融合して人間形態へと新生した『宇宙怪物少女』の総称」

「宇宙人とは違うの？」

「異星間交流が確立していなかった旧暦ならいざ知らず、この銀暦に於いては生態的差別化定義は不可能と考えていい。両者の定義差は、偏に発生プロセスの分類概念にのみ依存している。よって、同義と考えても支障は無い」

「ハツちゃんみたいなもの？」

「陽ノ咲モモカ、同義に分類してはラムスが不憫過ぎる」

ハツちゃんは可哀想やないのん？ それ？

「でもさ？ 〈ブロボベガ〉とか言いつつも、アイツ『人間』じゃん？ 〈ブロボ〉の要素

ゼロじゃん？」

「天条リン、あの形態は『地球人』をベースとした『擬態』に過ぎない。本来の彼女は『人型フォルム』を形成した〈ブロボ〉そのもの」

「ふうん？ 要するに〈変身〉ってか？」

「あ！ そう言えば、ウチの事『ヒメカ』言うてたけど……誰と勘違いしてはったん？」

「日向ヒメカ」とは、旧暦時代に彼女が溺愛^{できあい}していた地球人。共に「家族」として生
活していた」

「地球にいたん？」

「そう」

「旧暦に？」

「そう」

「何歳だツツの！ アイツ！」

「天条リン、そもそもへべガは「地球外生命体」に分類される。よって「地球種子型人
類」の寿命概念は適用されない」

「その「ヒメカ」いう人、そないにウチと似てたん？」

「似ていない」

「ふえ？」「は？」

「ただし潜在的雰囲気は似通っていなくもない」

「潜在的な雰囲気って、よく「芸能人オーラ」とか呼ぶアレの事なん？」

「そう」

「んで？ アイツつてば、ずっとあんな性癖なワケ？」

「そうではない。確かに素地としては「日向ヒメカへの異常な溺愛感情」を抱^{いだ}いていた

ものの、誰彼構わずではないし、あそこまで壊れ……過剰ではなかった」

「……アンタ、いま『壊れて』って言い掛けたわよね？」

「言っていない」

「せやったら何で、あんなに過剰になったん？」

「断定は出来ないけれど、人恋ひとこいしかつたのかもしれない」

「ふえ？ ラムスちゃん、寂しいん？」

「旧暦時代、彼女は地球で『家族』となっていた。銀曆ぎんれきに於いて古郷へ惑星ジェルダの女王と従事しているものの、高度知性体との交流接触コンタクトは喪失している。永い歳月を鑑かんみれば、ホームシックにも似た虚無感が萌芽もがしても不思議ではない」

「そっか……寂しいねや」

そんなん聞いたら、ウチらから同情涌く。

孤独こどなんは辛いよ？

心の風船。パンパンなって苦しいよ？

「そういうワケで……陽ひノ咲さきモモカ、今後は彼女の為ながままになってあげて欲しい」

「絶対イヤや！」

無垢な瞳でクルコクンして何言うてんの？

それとコレとは別問題や！

「御話が弾おはなしはずんでますわね？」

ややあつて、ラムスちやんが合流わたくししてきた。

「どうですか？ モモカ様？ 私の作わたくしった『北歐風デミグラスソース煮込みハンバーグ

』は？ 御口おくちに合あひまして？」

「うん、コレおいしい♪」

「ああん♪ 幸せですわ〜♪」

「ま、未開の惑星にしちや、予想外の御馳走よね」

「少し黙もくもくっていて頂たまけます？ そのモブ女？」

「はあ？ フ……フフ……主役のアタシあたしに向かって『モブ女』とは……いい度胸どくちゆうしてん

じゃない！ アンタ！」

主役、ウチ……。

「上等だーッ！ 殺やつてやろうじゃないのよ！」

リンちゃんの勝ちちや気に火あが着きいた！

おまけにフリガナ違ちやう！

アカン！

相当、頭に血ちイ昇あつてる！

そんな殺伐ころはくとしたん『闇●』だけで充分ちゆうぶんや！

「リンちゃん、ケンカはアカン！」

ウチ、慌てて腰を抱き押さえた！

「はくなくせ〜ッ！ モモ〜ッ！」

「ふぐう！ ア〜カ〜ン〜ッ！」

「陽ノ咲モモカ、そのまま投げ捨てればへフロントスープレックスへと発展する。意識を果てさせるのに効果は抜群」

「せやの？ せやったら、せーの！」

「何が『せーの！』だ〜〜〜ッ！」

「ふぐうッ？」

ハリセンバチーンや！

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「潤々しながら『痛いよ？』じゃないツツの！ この脳ミソ新日娘！ だいたい、クルもだ！ 妙な提案すんな！ このアーパー、すぐ鵜呑みにすんだから！」

リンちゃん、あんまりや！

と、不意に「よよよ」と泣き噉る声。

……ラムスちゃんやった。

どないしたん？ 急に？

「ひ……卑怯ですわよ！」

「は？」「ふえ？」

「モモカ様に抱きつかれる様を見せつけて、仲の良さを誇示するなんて！ 初対面の私わたくしが不利なのは明白ですわ……グスツ」

「……アンタ、いまの流れ見てた？」

「ハッ！ そうですわ！ 全身〈液状体質〉の私わたくしならば、投げ捨てられても平気……何度、脳天から叩き落とされてもノープロブレムですわ！ 抱きつかれ放題ですわ！」

変な着地した。

ほんでもって、聖母のような慈しみでウチへと両手を広げた。

「さあ、モモカ様♡ 思う存分、私わたくしに〈フロントナンタラ〉を仕掛けて下さいませ♡」

「

イヤヤ」

「グス……ううう……」

「殺人技回避したのに、地べたに泣き崩れてんなツツーの！」

ウチ、この人少し苦手かもしれへん……。

「ところでラムス、アナタと話がしたい」

顔色ひとつ変えんと、クルちゃんが切り出した。

それを受け、ラムスちゃんの雰囲気ガスツと引き締まる。

「ま、そうでしょうね。わざわざ貴女がいらしたという事は……。よもや懐かしい顔に、こんな形で再会するとは思っていませんでしたけれど」

「何よ？ アンタ達、古くからの知り合いなの？」

リンちゃんの質問に、ラムスちゃんの温顔がニツコリと回答。

「ええ、そうですわよ？ モブ女？」

……毒吐きよった。

「上等だーッ！ このスライムメイドーッ！」

「ふぐう！ リンちゃん、アゝカゝンゝッ！」

「放せーッ！ モモーッ！」

「うう……あんまりですわ……また抱きつかれる様を見せつけるなんて……ううう」

「このカオス、エンドレス？」

クルちゃん、そう思うなら何とかして！

呑のん気にクルコクンしとらへんで何とかして！

「では、私とラムス是对話のために席はずを外す」

「何よ？ 此処ですりゃいーじゃん？」

「天条リン、その申し出は却下。生憎あいにく、今回はラムスとマン・ツー・マンで話したい」
 「はああ？ アタシらに聞かれたくない秘密事ってか！」

「そう」

「……迷い無く肯定したわね、アンタ」

「え……ええやん、リンちゃん？ 久しぶりの再会で、きつと積る話もあんねんよ？」

「無い」

クルちゃん、淡白に否定した。

ウチ、かほ庇つてあげたねんよ？

「モモカ様？ わたくし私がいけない間、寂しいでしょうけれど、少しだけ御待ちになっていて下さ

いませ？ すぐに戻りますから ♪ 「」

別に寂しくないよ？

と、これ見よがしにウチの肩を抱き寄せるリンちゃん。

「ほれ？ さつさと行けっつーの？ シッ！ シッ！」

わたくし野良犬扱いに扱いはった。

「私のモモカ様から、その雑菌まみれの手を御離しなさい！」

「へへくん ♪ アタシとモモは一緒にシエア食いとかしたりする仲間なんだもん

ねー ♪ アツカンペロペロベー★」

「な……何ですって！ 不潔！ 不潔ですわ！ もしも私のモモカ様わたくしが、変な感染症に掛かったりしたら……ッ！ モモカ様、この性悪バイ菌女と御別れになるべきです！
いますぐ！ そして、パートナーには私わたくしを！」

「イヤヤ」

「……うう……あんな雑菌バイ菌モブ女に負けるなんて！」

ラムスちゃん、また泣き崩れはった。

「カオスは、もういい」

醒めて纏めるクルちゃんまじ。

「という事で……陽ひノ咲さきモモカ、面倒を起こさないで、おとなしくしているように御願い
する」

「はーい★ うん？ 何で、ウチだけなん？」

「天条リン、陽ひノ咲さきモモカが面倒を起こさせないで、おとなしくしているように監視を御願いする」

「あー……まあ、尽力はしてみるわ。うん」

「何で、ウチだけなん？」

そんなんしてたら、またまた近くの繁みがガサゴソ。

全員がハッと注視した。

このパターンは、また誰か来る。

「今度は何よ？ 何か引き寄せる電波でも出てるワケ？ この集落！」

「失礼ですわね、モブ女。私の村に、そのような怪しい仕掛けはございません」

「どうかしらねー？ 何たって〈女王様〉が『変態』だし？ 『類は友を——』で、変人呼び寄せてるんじゃないのー？ ア・ン・タ・が！」

「あら？ でしたら、貴女も『変人』という事になりますわよね？」

「フ……フフフフ……」

「ウフフフフフ ♪」

リンちゃんとラムスちゃんが静かなる火花を散らす中、低木を掻き分けて問題の相手が現れた。

「ようやく追いついたぞ！ リンにモモカよ！」

……ハツちゃんやった。

「我われを置いて行くこうとしても無駄な事！ そう、このハーチあぐつ！」

噛んだ！

遂に、そこまで噛んだ！

どんどん堕ちていく！

こつちの〈女王様〉！

「カオスは、もういい」

クルちゃんの醒めた本音には、ウチとリンちゃんも同感やった。

クルちゃんと惑星ジェルダFractal. 4

クルちゃんとラムスちゃんは、宣言通りに席を外した。

残された人は、ウチとリンちゃんとロツポちゃん……それにハツちゃんや。

「んで？ わざわざ追って来るって、何だツツーのよう？ エルダニヤ？」

「うむ、どうしても伝えるべき事があつてのう」

「お笑い芸人になる決心でもした？」「ハツちゃん、年末芸人大会に出るのん？」

「違うわッ！」

「何や？ 違うのん？」

「コレじゃ！ コレを伝えに来たのじゃ！」

揚々と「カラフルな立方体」を取り出すハツちゃん。

「我が愛機（わが）ヘリヒアーク専用（専用）の格納庫（ドック）から、斯（か）様な物（もの）が発掘（か）されてのう」

「何なん？ これ？」

「各面（各面）が色（色）違い（違い）な立方体（立方体）じゃん？」

「フフフ……コレは単なる立方体ではないぞ？」

「そう言われても、見た目には単なるオブジェにしか……って、まさか！」

「どないしたん？ リンちゃん？」

〈大樹神〉〈濁酒徳利〉——これまでも、予想外の物体に擬態していたわ

「ええ？　せやったら、コレが今回のへネクラナ——」

「そう！　コレこそが旧暦に大ヒットしたアイテム〈ロービツクキューブ〉也！」

甲高い破裂音がスパーン！

間髪入れずにハリセンアブリが叩き込まれた……ハツちゃんの顔面に。

「わざわざ旧暦玩具の立体パズル見せに来たってか？　ああん？」

ハリセンをパシンパシンとメトロノーム刻みにしつつ、ハツちゃんを威圧に見下すり
ンちゃんの殺気。

怖ッ！

「揃えたのじゃ！　自力で揃えたのじゃ！」

「だったら、何だ！」

「うむ、見て欲しい」

悪びれずに言うた。

この人、めげへん！

「フフフ……では、我が腕前を披露してやるとするか」

自己満足に進めたよ？

見る言うてへんよ？

「モモカよ、コレをグチャグチャに掻き混ぜるが善い」

手渡された立方体は、一面辺り九立方体にパーツ分割されとる仕様や。それをガチャガチャ回すと、各面が雑多な入れ代わりに細かいランダムカラーを構成する。

「やったよ？」

「うむ、御苦労。フフフ……驚くでないぞ？ まずは、各パーツをバラしてだな」

「のっけからプレイスタイルが違うわー……ッ！」

フルスイングハリセン、スパーン！

女王様の顔面、クリーンヒット……。

「回すの！ コレは回して揃えるんだッつーの！」

「何と！ そうであつたか！ では、無理じゃな？」

投げた！

一考も無く、淡白に投げた！

「ウホホー★」

「ロツポちゃん揃えた！ ものの数秒で揃えた！ 六本腕を使うて！ スゴい！」

「うむ、見事である！」

「……ゴリラに知恵で負けんな、エルダニヤ」

と、リンちゃんは忘れていた事に気がついたようや。

「そういえば、ロツポ？ アンタ、アタシ達を何処へ連れて行こうとしてたワケ？」

「ウホホ、ウホ、ウホホホホ！」

リンちゃん、また表情曇った。

「モモ！」

「解^{わか}らへんよ？」

「やっぱり、このオチかーッ！」

「フム？ なるほどのう？」

「つて、エルダニヤ？ アンタ、言葉解^{わか}るの？」

「何じや？ リンよ、解^{わか}らんのか？」

「解^{わか}るか！ つてか、アンタは何故解^{わか}るツ？」

「通訳^おが居^おるからのう？」

「は？ 通訳？」

誰？

ハツちゃん、妙な事を言い出したねえ？

此処おに居るの、ウチとリンちゃんとロツポちゃん……それから、ハツちゃん自身だけやん？

「何処おにいんのよ？ 通訳なんて？」

「先程から居るではないか？」

「だ〜か〜ら〜！ 何処に……って……」

リンちゃん、言葉失った。

ウチも失った。

ロツポちゃんもドン引きしとる。

ハツちゃんの周り、オーブ飛び始めた！

この人、霊界通信で通訳してはった！

「どうじゃ！ 我が専属整備士の有能さは！ 実に多才！ 実に有能！ 今回ばかり

は、御主おぬしたち達も認めざる——って、何処へ行くツ？」

草むらや！

草むらへ脱兎や！

全員、恐怖に避難や！

ひとまず落ち着いて、ハツちゃんの話聞いた。

オーブはんには席を外してもらおうとして……。

「つまりじやな？ こやつの集落に、我等われらと同じへ人型生命体が居おるので会わせようとしたらしいのう？」

「は？ アタシら以外に？」

「うむ」

「……どういう事？」

親指を噛んで思索するリンちゃん。

「この惑星ほしにへ高度知性体は、原則としていない……あの『ラムス』とかいう『イケズブリブリ毒舌ビッチスライムメイド（くたばれ）』は特異例……」

何気にエラくデイスつとるよ？

「だとすれば、考えられるのは……アタシ達と同じへ来訪者は？ つて事か？」

「ウチら以外に？ どないな人やろ？」

「う……ん、確認してみたけれど……クルから面倒起こすなって言われてるし、動くワケにも……」

「わかった！ せやったら、ウチが確認して来る！ リンちゃんは此処で待つとつて？」

「ロツポちゃん、行いこう！」

「ウホ！」

「うん、御願ごい……つて、モモーッ？ 違ちがう！ 一番動うごいちゃいけないの、

「アンターーーーッ！」

何やリンちゃんが叫んどったけど聞こえへん。

とつづくに後方や。

ロツポちゃん、意外と駆けんの速いねん。

「此処がロツポちゃんの集落？」

「ウホー！」

やっぱり森の中に拓けた場所やつた。

せやけど、ポヨコちゃんトコと違って鬱蒼うっそうとしている。

周囲を樹林に囲われとると、そもそも敷地面積が狭いからやろね？

ポヨコちゃんトコが「草原の周囲に樹々が囲つとる」と形容するなら、ロツポちゃん

トコは「密林の中を切り拓いた」という感じや。

ほんでもつて、やっぱりロツポちゃん達がウロウロしとる。

「ふええ？ こんなにたくさんのロツポちゃんが居おつたら、ウチ判わからへんようなるよ？」

「ウホウ？」

「あ、せや！ ウチ、閃ひらいた！」

「ウホ？」

ウチ、ロツポちゃんの頭に赤いリボンを結むすんだった。

「えへへ ♪ コレで判わかるよ？」

ロツポちゃんは、しばらく不思議そうに眺ながめ——「ウホ ♪ ——満足そうな様子や。」

そんなしてたら、いきなり大きな音が掻かき鳴ならされた。

コレ、銅鑼ドラやんな？

誰だが作つったん？

一転して周囲が慌あわただしくなる。

全員が作業中断に集まり、集落中央に据えられた大きい切り株へと畏かしこまった。

「何が始はまんのん？」

「ウホホ、ウホ、ウホホホホ」

「さつき言いつとつた“人”が出て来きんの？」

「ウホ！」

「その人、偉えらい人なん？」

「ウホホ」

「ふうん？ ある日現あれて、そのまま“女王”にななったんや？」

「ウホ……」

「それ、ロツポちゃん達が決めたんやなくて、その人が勝手に名乗ったん？」

「……ウホ」

「そうなんや？ 迷惑な話やんね？」

「ウホウ……ウホホウホウホ」

「ほんでもって、毎日の惑星探索を義務化されて報告せなアカンの？」

「ウホ……」

「地脈エネルギー値が高いトコなん？ 何探しとんのやろ？」

「ウホウ？」

「それは判らへんのや？」

「ウホ！」

「そんなんで、ポヨコちゃんの種族とも反目したん？ あ！ せやから森の中で遭遇し

た時、二人共とも喧嘩腰ケンカごしやったんやねえ？」

「ウホウ！ ウホウホ！」

「うくん……せやけど、そりやロツポちゃん達がアカンよ？ 勝手に縄張り荒らされた

ら、ポヨコちゃん達かて面白いよ？ ウチかて、勝手に自分の部屋に入られたらイヤ

やもん」

「ウホホ……ウウ」

「逆らったら、お仕置きされるん？ アカンちゃん！ そんなん、イジメっこや！」
「ウホウ……」

「うん、ウチは分かったよ？ ホントはロツポちゃん達かて、したくないねんな？ 言われたから、しゃーなくや」

「ウホホホ……ウホ？」

「説得？ ウチ『もう自由にしたって』って言えばええのん？」

「ウホ……」

ロツポちゃん、申し訳なさそうに沈んだ。

せやねえ？

いままで大自然で仲良うやってきたのに、いきなり身に覚えの無い王権制度を強要されたら堪らんねえ？

コレ、可哀想やんな？

「うん、分かった★ ウチ、お願いしてみる ♪」

「ウホ？」

「ええよ？ 友達やもん」

ややあつて、切り株ステージに〈女王様〉が現れた。

べっぴんさんや。

全体的に華奢きゃしゃで繊細な印象やねん。フワリと銀色の長髪ながみが泳ぎ、繊細でスレンダーな肢あし体を白い〈PHW〉で包んどる。

「……あれ？ この人、どっかで見た事あるね？ ドコでやる？ うくん？」

ウチが記憶おぼえを手繰たぐつとると、謎の女王様は眼前がんぜんに畏かしこまっているロツポちゃんの集団へ向かつて揚々ようようと名乗り始めた。

「聞きけ、忠実なる私兵共よ！ 我が名はへニヨロロトテ——」

「ああ！ セや！ やっぱりニヨロちゃんや！」

「——誰だ、オマエは？」

怪訝けげんそうなな表情へと染まるニヨロちゃん。

ウチ、一団の最後列からトテテと近寄った。

「また会えたねえ？ えへへ ♪」

「……誰だと訊きいている」

「ウチや★ // 陽ひノ咲さきモモカ”や★」

「何処かで遭遇したか？」

「覚えてへんの？」

「知らぬ」

「ふぐう……ヒドイやん！ アレやん！ 惑星レトロナで会あうとるやん！」

「覚えは無い」

「ウチへミヴィークで戦ったよ？」

「ミヴィーク？」

「もう！ シャチ型宇宙航行艇コスモクルーザーの事やん！」

ウチ、プリプリや！

激オコぶんぶんや！

ニヨロちゃんは、暫しばらく脳内記憶を反芻はんすうして——「ああ、アレか」——ようやく思い出したみたいやった。

えへへ ♪

ウチ、捕まった……。

クルちゃんと惑星ジェルダFractal. 5

私——クルロリは、彼女と共に草原へと腰を下ろした。

小高い丘きゅうりょう陵だ。

とはいえ、此処まで緩やかな勾配が続いていたので、そこそこ標高は高い。

眼下には森の深緑が息吹き、見渡すに山々が青の清涼に霞む。

二人して、その景色に意識を流した。

風がそよぐ。

草は泳ぐ。

「正直、驚きましたわね。まさか、このような再会になるとは」

「それでもない」私は必然を生じるプロセスを示す。「少なくとも、私とあなたは『地球人類種子』と寿命が違う。太陽系銀河に於ける活動範囲を局地的に限定した場合、その尺度いかん如何では再会する確率は高くなる」

「……相変わらず理屈臭いですわね」

少々辟易へきえきとした様子だった。

何故かは特定できない。

プロブベガの「ラムス」——彼女とは旧知の間柄となる。
再会は久しぶり。

「それで？　今回は、どのような面倒事を追っていますの？」

「ラムス、私が特異状況に在ると何故断定できた？」

「貴女あなたが拘かかわって、面倒事ではなかった試しなどありませんわよ」

「ふむ？」

「……思いつきり理解不能な顔でクルコクンをしないで頂けます？」

苦虫顔で詰め寄られた。

そうか。

また私は「クルコクン」と呼ばれる仕草をしていたのか。

自覚は無い。

「コレを搜索収集うかがしている」

簡潔に納得を促す手段として、私は「ネクラナミコンの欠片」を提示した。

「石板？」

「コレは「ネクラナミコンの欠片」……現在は次元宇宙に散在してしまっている」

「ネクラナ……？ 何ですか？ その思いつきりパチモノみたいな名前のコレは？」

「アカシックレコード」

「ふうん？」 彼女は意味深に微笑びしょうを含んだ。「いつからいつから〈嘘〉をつけるようになりましたの？」

少し驚いた。

どうやら易々やすやすと看破されたようだ。

「ラムス、質問がある。どうして〈嘘〉だと断定できた？」

「あら？ やはり〈嘘〉でしたの？」

「ふむ？」

「鎌掛かまかけけですわよ。貴女あなたが、そうそう秘事を露呈ろていするはずがありませんから」

「ふむ？」

さすがにラムスだ。

既知の古さも推測材料にあっただろうが、それ以前に彼女自身が推理能力に長けている。

「で、何ですか？」

「いまは伏せておく」

「そうですか」

意外とあつさり引き下がった。

「追求はしない?」

「いまさらですわよ」

「どういう意味だろう?」

「私には汲み取れない。」

「それで? あの子達は、何ですの?」

「陽^ひノ咲^さモモカと、天条リン——彼女達と保護者マリー・ハウゼンには「ネクラナミコン」の搜索収集の協力体制を依頼した」

「……それだけですの?」

「そう」

「本当に?」

「そう」

「……本当に?」

「ジイと私の瞳を見据えるラムス。」

もしかして、コレが「値踏み」というヤツだろうか?

しかしながら、この項目に関しては、私も「嘘」はついていない。

マリー・ハウゼンとは「ネクラナミコン」を目的とした協力体制」であり、陽^ひノ咲^さモモ

カと天条リンとは「現地搜索を目的としたチームメイト」だ。
それ以上で以下でもない。

……何故だろうか？

彼女達を想起すると、少し精神状態が揺らぎを見せる。
イヤな感覚ではない。

旧暦時代にも体験した「温かさ」だ。

この「ラムス」と共に……。

ふむ？

「では、最後のは何ですか？」

「最後の？」

「あの〈蜂女〉ですわ」

「アレはバカ」

「……シンプルながらも辛辣な猛毒を吐きましたわね」

そうなのだろうか？

私は真実を告げただけ。

誹謗中傷の自覚は無い。

「では、この惑星ジェルダには、その搜索へ？」

「主目的は、そう。副次的目的は、違う」

「副次的目的？ 何ですの？ それは？」

「それは——」

口にしようとした瞬間、明後日の方角で大爆発が生じた。

森の一角だ。

そして、濛々と煙が上がる。

微かに流れて来るのは、けたたましい喧騒。

大方、予測通り。

「アレは……〈アリログ〉の集落が在る方角？」

ラムスが焦燥に腰を浮かせた。

彼女が言う〈アリログ〉とは、この惑星に原生する六本腕のゴリラ——つまり陽ノ咲

モモカが「ロツポちゃん」と呼んでいる種族の事だ。

「いったい何事が？」

何事でも無い。

予測確率九十六%で、確定している。

程無くして、巨大少女が樹海の波間から飛翔した。

滞空に眼下を見据えて叫ぶ。

「このの！ モモを返しなさいよ！」

やはり。

天条リンだ。

いや、訂正しておこう。

あの形態はへGフォルムへに巨大化しているからへGリンと呼ぶべきだ。

そして、この展開になったという事は、おの自ずと原因も判明する。

一応、釘を刺しておいたが、それも無駄であったようだ。

かと言つて、特に悲嘆も動揺も無い。

予測通りなのだから。

望む望まないに拘かかわらず。

「なッ？ 何ですの？ アレは！」

ラムスにしては珍しく、思いつきり驚愕していた。

ああ、そうか。

それが、普通の反応か。

彼女は初見だった。

「何故、あのモブ女が巨大化していますの！」

「そういう特性だから」

「フアジーな説明で片付けしないで下さいますッ?」

ふむ?

私は無駄を省いて要点だけをpushしたつもりだったが、どうやら彼女の要求にはそぐわなかったようだ。

とりあえず現状に於いて、それはいい。

それよりも気になるのは「誰と事を構えているか」だ。

そう、一般的に最重要視される「何が原因で、こうなったか」という要因すら、あの二人には無意味だ。

何故なら、何が要因であろうと、あの二人ならこうなる。

「ふむ?」と、私は気になった判断材料を一顧。「おかしい? 陽ノ咲モモカがいらない?」

「え? モモカ様? モモカ様が、どうか致しまして?」

「通常なら、あの二人はワンセット。天条リンが巨大化したのならば、当然のように陽ノ咲モモカも巨大化して傍にいる」

「……いま、何と仰いました?」

「陽ノ咲モモカも巨大化する」

「そちらではございませんわ!」

では、どちらだろう?」

「あの二人はワンセットで、当然のように傍そばにいる……ですって？」

「原則として、そう」

「フ……フフフ……フフフフフ……」

魅ふ？

「ゆ……ゆゆゆ……」

湯？

「許せませんわー……ッ！」

唐突に絶叫した。

声量にはビックリしたが、言動自体に驚きはしない。

極ごくまれ稀まれに、彼女こはこごうなる。

「あのモブ女ごと如ごときが？ 私わたくしのモモカ様と？」

アナタのではない。

「誰に断って、そのような役得を得ていますの！ あのモブ女！」

別に役得ではないし、許可も要いらない。

陽ひノ咲さきモモカは、基本的に誰に対してもフリーパスだ。

何故なら『警戒心』という言葉が脳内欠落している。

「……行きますわよ、クルロリ様！」

何処へ？

「こうなったら、私が目にも見せて差し上げますわ！ あのモブ女！ そして、完膚かんぷ無きまでに叩き込んであげますわ……私こそが、モモカ様に相応しいと！」

陽ノ咲モモカと付き合うのに、品格が要求されるとは初めて知った。

私を知る限り、彼女の前には「人間」も「アリログ」も「プロブ」も「ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワスプ・ピースウォームIV世」も並列なのだが？

ふむ？

「ラムス、もう少し待ってほしい」

「何故ですの！ この期は、ドサクサ紛れに、あのモブ女を失脚させて、ブラックホールまきのド真ん中へと葬り去る絶好のチャンスですよ！」

いま、物騒な事を言った。

「そして、モモカ様に私を売り込む好機！ そうしたら、毎日毎日、溺愛できあいのままに抱き合えますわ！ 誰の目も気にせずに、全宇宙公認のラブラブチュッチュツですわ！」

いま、アブノーマルな性癖せいへきを口走くちほしった。

「ラムス。気持ちは微塵みじんも分らないけど、もう少し待つ事を要求する」

「……いま、軽く毒を混ぜていませんか？」

混ぜていない。

真実。

「もう少し待ってれば、何か起きますの？ あのモブ女が爆死しますの？」

何故、そこまで天条リンを敵視するのだろうか？

親近嫌悪というヤツであろうか？

「たぶん、もうひとつの構成要素が生じる。そして、いつも通りの展開となる」

「もうひとつの構成要素？」

彼女が怪訝けげんを浮かべた直後、雲間を抜けて鋼鉄の巨人が降下してきた。

『フハハハハハッ！ 宇宙の帝王まで、あと100ポイント！ ドクロイガー参上！』

予想通りへドクロイガーが現れた。

そして、何故かポイント制になっていた。

彼が介入する展開は、かなりの高確率で予見出来た。

ただしポイント制については、まったくの予想外。

「帰れ」

『又オオ？ 取り付く島も無しにッ？』

間髪入れずに、Gリンの冷蔑れいべつれいぐう冷遇。

この展開も予測通りだ。

「さて……」私はベルトバックル部からパモカを取り外し、指令を口くちにした。「来て、ド

フィオン」

彼方中空に煌めきが一条。

それは、すぐさま〈宇宙航行艇〉として飛来する。

「な……何ですか？ この巨大なエイは？」

「私の愛機〈ヘッドフィオン〉」

「愛機？」 暫く言葉を呑んで見入るラムス。「あのヘッドリル軽バンは、どうしましたの？」

「……ラムス」

「はい？」

「コチラの読者が、アチラを読んでいるとは限らない。その辺りのTPOは弁えてほし

い」

「……貴女でもメタツツコミとかしますのね」

何故、苦虫顔を向けられるのだろうか？

まったく心当たりが無い。

ふむ？

と、後方から見知った顔が飛来した。

「おお！ クル！ 此処に居ったか！」

ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワस्प・ピースウオームIV世だ。些いささかか興奮気味にも見える。

「ハツちゃん、何？」

「クルコクンで “ハツちゃん” 言うな」

ふむ？

おかしい？

陽ひノ咲さきモモカに準じたのだが？

「そんな事より！ そなたに伝えるべき事が出来たのじゃ！」

「状況が一転したのは、こちらでも視認した。いったい、何があつた？」

「うむ、コレじゃ！」

掌てのひら サイズのカラフル立方体を見せてきた。

確か旧暦時代の立体パズル玩具「ヘロービツクキューブ」というヤツだ。

「……ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワस्प・ピースウオームIV世？ コレが何？」

「うむ、自力じりきで揃そろえられるようになった！」

「では、加勢に行つて来る」

私はラムスへと簡潔に告げ、愛機「ヘドフィオン」を発進させた。

彼女の傍らには、消沈したハーチエス・エルダナ・フォン・アルワस्प・ピースウオー
ムIV世がガクリと膝をついていた。

ぞんざいな無視に傷ついたようだ。

「揃えたのじゃ〜〜！ 自力で揃えたのじゃ〜〜〜！」
聞こえない。

地表から嘆き声が聞こえたけれど、聞こえない。

カオスは、もういい。

クルちゃんと惑星ジェルダFractal. 6

交戦は続いている。

いや、乱戦と言うべきか。

Gリン——

ドクロイガー——

そして、正体未確認の敵——。

いつも通りだ。

問題点があるとすれば、依然正体不明の敵は森林に潜んでいるという事。

そこから放たれる光線攻撃を、滞空するGリンが回避する。

そして、ドクロイガーがちよつかいを出し……ハリセンの制裁で返される。

あ、また泣いた。

ともかく専用宇宙航行艇コスモクルーザーへドフィオンに搭乗した私は、ようやく前線へと合流した。

「クル？ 何処行つてたんだツツーの！」

「天条リン、陽ノ咲モモカは？」

「……………」

ばつ悪そうに言葉を呑んだ。

ふむ、やはり予想通り。

この状況の原因は、陽ノ咲モモカだ。

私は眼下へと視線を落とす。

敵の姿は深緑の雲に潜んでいて、凝らしても視認出来ない。

という事は、少なくとも小型対象という事だ。

背後からドクロイガーが襲撃してきたので、尻尾部の電磁鞭でんじむちへテールビュートで叩

き払う。

……………また顔面押さえて泣いていた。

「天条リン、ひとつ確認したい。誰と交戦している？」

「ニョロロトテップだツツの！ アイツ、モモを拉致しやがった！」

どうやらへ惑星レトロナで遭遇したというアレのようだ。

私自身は事後報告のみで遭遇していない。

問題は、何故へニョロロトテップが、此処にいたか……………その目的だ。

過去のデータによると、相手の目的意識は、高度発展した科学文明に対する活動規模

縮小を目的意図とした警告、及び、武力制裁^{わよ}”であつたはず。

しかし、この〈惑星ジェルダ〉の文明レベルは原始的であり、対象条件としては外れている。

ふむ？

私が再び眼下を注視していると、攻撃地点から人間サイズの影が飛び出してきた。

銀色の長髪を靡^{なび}かせる美少女——なるほど、アレが〈ニヨロトテップ〉か。

確かに“通常の間人”ならば、Gリンを相手取つて対峙する際に滞空浮遊などしない。

「3 f \ 1 b 次 元の少女よ——いや“天条リン”と呼ぶべきか。何故、オマエは

つくづく邪魔をする？」

「ハア？ 知るかツツーの！ アンタなんか！ 自惚^{うぬぼ}れてんじやないわよ！ さつさと

モモ返せ！」

「返してやつてもいい。ただし、交換条件だ」

「何だツツーの！」

「オマエ達が収集している〈ネクラナミコン〉を渡せ」

「……はあッ？」

どうやら彼女の目的も〈ネクラナミコン〉らしい。

何が目的かは判らないが、少なくとも〈私〉へドクロイガーへニヨロトテップの三つ巴相関は確定した。

「何でアンタが〈ネクラナミコン〉を知ってるんだツツーの！」

「アレは、そもそも私が保持すべき物だからだ」

なるほど……そういう事か。

だとしたら尚更、彼女に渡してはならない。

しかし、おそらく渡さなければ、陽ノ咲モモカには危険が迫るだろう。

さて、どうしよう？

「……渡したら、モモを返すのね？」

「約束しよう」

暫し緊迫した反目が交わされる。

「わーったわよ！　そもそもアタシは、あんなんどーでもいいし？」

横柄な態度にGリンは承諾した。

私としては困った選択結果になったが、仕方がないだろう。

陽ノ咲モモカの安否とは、天秤に賭けられない。

何よりも、天条リンにとって、陽ノ咲モモカが如何に大切な存在かは重々承知して

いる。

迫るニョロロトテップを前にして、齒噛みながらに尻込むドクロイガー。

「どつちもがんばれー？ 負けんなー？」

Gリン、その覇気の無い声援は他人事気分と捉えてもいい？

『ええい！ 頭に乗るなよ！ 小娘共が！ ワシとて伊達にドクロ“髑髏”をやっていたワケではない！ イヤイヤながらのプライドがあるわ！』

意味不明。

『いまこそ見せてやろう！ ネットオークションで高額落札した秘密兵器を！』

ドクロイガー、それは“秘密”とは呼べない。

オークション参加者全員が認知している。

『フライング・ダッチマーラーン！』

拳を天空に振り上げ、エネルギー波を解き放った。

……五分経過。

……一〇分経過。

……十五分経過。

あ、何か飛来した。

どうやら日本の小型木船をモチーフとしたコスモクルーザーへ宇宙航行艇のようだ。

ただし“骨”のデイトールでパーツ構成されている。

とはいえ、実際には宇宙合金製だろう。

そうでなければ〈宇宙航行艇〉コスモクルーザーとしては機能しない。

しかしながら、この経過時間では実戦活用には向かないと思える。

それにしても独特の自己主張をした宇宙航行艇だ。コスモクルーザー

甲板上には複数の〈骸骨型アンドロイド〉ガイコツが整列し、何故か全員でオールを漕いでいた。

この雰囲気は、何処かで見た事がある。

旧暦データベースで……だ。

はて？ 何だっただろう？

考察材料の一環になるかは解らないが、骸骨達は低く震える声音で『柄杓をくれえ』ひしゃく

……柄杓をくれえ……』と呻うめいている。

ふむ？

「〈舟幽霊〉ふなゆうれい じゃん！」

ああ、そうだ。

Gリン、指摘をありがとう。

確か〈妖怪〉とかいう不吉な空想娯楽だ。

自ら「恐怖」の対象を生み出して楽しむのだから、人間というものは理解に苦しむ。

『失敬な事を言うな！ アレは〈フライング・ダッチマン〉だ！』

ドクロイガー、それは〈幽霊船〉——広義的に〈妖怪〉に分類される。

『柄杓をくれえ〜……柄杓をくれえ〜……』

『柄杓くればって言ってるじゃん！』

『言ってるも〈ダッチマン〉だ！』

『柄杓をくれえ〜……柄杓をくれえ〜……』

『妖怪じゃん！ 認めなさいよ！』

『……〈フライング・ダッチマン〉だもん』

この下り、要るだろうか？

ドクロイガーの上空で待機旋回を描く舟幽霊。

どうやら指令待ち……という事は人工知能搭載の自律型だ。搭乗者はいない。おそ

らく、あの〈骸骨〉達がリモート別行動を担っているのだろう。

『いくぞー！ フォルテームアップ！』

空中分解した〈舟幽霊〉が、追加アーマーと化して合体した。

準じてドクロイガーの外見が、ややゴチャゴチャとしたデイトールへと昇華され

る。

『髑髏合体！ ドクロイガー！』

……ドクロが増えた。

腕部や脚部に小型のドクロパーツが増えた。

私の記憶が正しければ、彼は〈ドクロ髑髏〉モチーフを辟易へきえきと嫌悪していたはずだが？

ふむ？

「ドクロ増えてんじゃん！」

Gリンが無遠慮に指摘した。

だが、この点は私も気になったので代弁に礼を言いたい。

ありがとう。

『うとううるさい！ ワシだってイヤなんだからね！』

何故、ツンデレくちよう口調なのだろう？

『だって、仕方ないじゃない！ ドクロ髑髏だもの！』

意味不明。

相田み ● を風に言われても、まったく要点を得ない。

『ともかく！ この形態となったワシを易々と倒せるなどと思うなよ！ ニヨロロト

テテツプとやら！』

囁んだ。

ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワस्प・ピースウォームIV世ばりに囁んだ。

だが、これは致し方ない。

確かに彼女の名前は、呂律ろれつを殺す言いにくさだ。

基本『ら行』や『ふあ行』の羅列は言いにくい。

もつともハーチエス・エルダナ・フォン・アルワस्प・ピースウオームIV世の場合は、少々病的ではある。

『喰らえええい！ ハイパードクロバーストオオオーツ！』

強化形態になっても、やる事は変わらなかった。

『グスグス……うう……』

数分後——。

私達の眼前には、ボロ負けして泣き濡れるドクロイガーがいた。

全高八〇メートルの巨体が、人間サイズの生身に負けた。

また『独活ウドの太木』を地で言っている。

「つたく！ 相変わらず使えないわね！ このドク郎！」

Gリン、またも代弁ありがとう。

『だって、仕方ないじゃない！ 髑髏ドクロだもの！』

こんな場面で 相田み ● を風が活いきた。

「さて、ではオマエが所有する〈ネクラナミコン〉を渡してもらおうか？」
 優勢の浮遊にニヨロトテップが迫る。

『……はい』

指先からのマジックアームで、悄悄と手渡した。

まるで従順な犬が、お手をするかのよう。

「渡すんかい！」

絶妙のタイミングでGリンがツツコミ。

この能力のポテンシャルに於いては、彼女こそが私の知己でナンバーワンかもしれない。

「コレで、ようやくひとつ……」

掌中の〈ネクラナミコン〉を見つめて、ほくそ笑むニヨロトテップ。

その僅かな隙を突き、Gリンが奇襲を仕掛けた！

ヘリウムブースター全開で特攻しつつ叫ぶ！

「セパレーション！」

プロテクターと化していた〈ヘミヴィーク〉が分離！

巨大化が解除された！

等身大に戻った天条リンは、しなやかな脚線美でニヨロトテップの手を蹴り上げ

る！

宙に舞う石板！

すかさずヘリウムブースターの出力を上げ、上昇キャッチを試みる！

が、右脚に触手が巻き付いた！

ニョロロトテップの右腕が変質したものだ！

「何ですって？ クラゲの触手？」

「言ったはずだ……この少女形態も、あのクラゲ形態も〈擬態〉だと。つまり臨機応変に

変質できる」

「うわつと！」

鞭拘束のように下界へと投げ捨てる！

「ヤバッ！ ミ、ヴィーク！」

即座に〈宇宙航行艇〉^{コスモクルーザー}が追う！

「G フォルム・メタモルアップ！ Gリン……あう！」

巨大な女体が樹々を滑り倒し、緑の雲海に土色の露道を刻んだ！

とはいえ、この判断は正解だと言える。

巨大化する事で尺度修正が為され、せいぜい派手に転んだ程度のダメージへと緩和さ

れたのだから。

人間サイズで墜落していたら致命傷——下手をすれば死んでいたかもしれない。

「みすみすくれてやると思うか？ 天条リンよ？」

悠然と見下したニヨロトテップは、頭上から降ってくるへネクラナミコンへと手を伸ばす。

「そうはさせない。好機なのは、こちらも同じ」

私は牽制の威嚇射撃を繰り出した。

「チー！」

滞空維持の後方跳躍で、大きく間合いを開くニヨロトテップ。

そもそも当てる気は無い。

尺度対比から言って、仮に〈宇宙航行艇〉の砲門であっても人間サイズには大口徑だ。掠っただけでも消し炭に死ぬ。

が、当てる気は無い。

ひとつだけ断言しておくが、当てる腕はある。

おそらく天条リンや陽ノ咲モモカでは不可能だろうが、生憎と私は射撃精度に自信がある。

が、当てる気は無い。

「天条リン」

「モチのロン！」

以心伝心とばかりにGリンが急上昇。

再び「ヘネクラナミコン」目掛けて。

『それ、ワシのオオオー！』

ドクロイガーも奪取の動きを見せた。

「させるか！」

諦めの悪いニヨロトテップ。

ひとつの石板を巡って、三者が争奪戦へと飛び込む。

再び混戦の装丁を催した。

罪なアイテムである。

その時——「イ〜ヤ〜ヤ〜！」——眼下の樹海から大絶叫が聞こえてきた。

耳慣れた「銀曆ぎんれきイアスナク弁」で。

クルちゃんと惑星ジェルダFractal. 7

「イ~~~~や~~~~や~~~~!」

たぶん、おそらく、ほぼ確定的に、間違はなく、ひ陽ノ咲モモカさきだ。

私の知人であり、尚な且おつ、現状な況か下かで、ぎんれき銀暦イアスナク弁しやべを喋る少女は彼女しかない。

あ、森から矢のように飛び出した。

ヘリウムブースター全開で。

すぐさま超高速で飛来するイザーナ。

「ギヤラクシーG フォルム・メタモルアップ! Gモモ!」

動画の倍速再生よろ宜しく、僅わずか数秒で巨大化変身を完了。おそらく通常時の二倍速。

それだけ焦っていたという事だろう。

疑問は、いくつがある。

何故、そんなに焦っていたのだろうか?

何に對して、そんなに怯えていたのだろうか？

どうやってニヨロトテテップの拉致状況下から脱出したのだろうか？

そんな考察点を諸々もろもろ浮かべていた直後、彼女を追つて真犯人が姿を現した。

「うふふ♡ 逃しませんわ ♪ モモカ様♡」

森から跳躍に飛び上がったのは、よく見知つたメイドベガ。

視認と同時に疑問が一気に氷解した。

おそらくラムスが救出へ向かつた——

その後、悪い性癖が発動——

陽ノ咲ひさきモモカは生理的嫌悪感のままに逃走するも、執拗に追われて、現状に至る——

大方、そんなところだろう。

「では、失礼致します」

「ぎゃん？」

ラムスが腕を引くと、連動したかのようにGモモが墜落した。

「ふぐう……う……動けへん？」

大の字で地面へと拘束されるGモモ。

「さて、それでは……いまこそ愛の抱擁を—— ♪ モモカ様——♡」

「イーヤーやーーーーーッ!」

両手広げの偏愛に飛び込むメイド。

恐々と拒否を叫ぶ巨大少女。

ふむ?

なるほど、そういう事か。

ラムスはへプロブバガでであり、そもそも部位境界の概念は適用されない。

如何なる形状であろうとも、本体と繋がっている限りは彼女の一部分だ。そして、その性質や強度も変質自在。

おそらくGモモには紐形状で部位を結び付け、それを手繰り寄せた。

ついでに言えば、先程の「らしからぬ超跳躍力」も、陽ノ咲モモカへと結び付いて引つ張られていただけの事だろう。

そして、地面には自らの液状部位を撒いておき、トリモチの如くGモモを捕獲した。彼女の粘着力と張力は極めて高い。

かつては飛翔せんとする巨大ロボットを地面に縫い付けた実績もある。

それはともかく……とりあえず尻尾部の電磁鞭へテールビュートで叩き払っておいた。陽ノ咲モモカへの義理立てで。

「あうッ?」

落下した。土煙を上げて。

「ラムス、訊きいておきたい事がある」

パモカを用もちいて、彼女へ直接連絡。

心配無用。

彼女も〈パモカ〉を所有している。

『痛たたたたた……何ですの！ 他人ひとを叩き落としておいて平然と！』

「アナタは何をやっている？」

『あら？ 貴女あなたにしては愚問ですわね？ 御覧の通り、モモカ様を救出しましたのよ？』

「その後」

『決まっているじゃありませんか？ そ・の・後・は……ウフフ ♪』

何が「決まっている」かは知らないし「ウフフ」と言われても意味不明。

回答にはなっていない。

「助けてえ！ リンちゃん！ クルちゃん！」

詳細は解らないが、面倒事が増えたのは直感した。

ふむ？ どうしよう？

「アタシのモモに何してんだーッ！ この変態メイドーッ！」

GリンがUターユンに突っ込んで来た。

『パプロフの犬』宜しくへネクラナミコンへそっちのけで。

そのままGモモの前へと隔たり立つ。

「あら？ そんなに出番が欲しいんですの？ モブ女？」

「うっさい！ このビチビチビツチメイド！ アタシのモモに何かしたら、タダじゃおかないわよ！」

一触即発に対峙する似た者性癖。

ふむ？ やはりカオス化した。

こうなるとへネクラナミコンへ争奪戦は、ドクロイガーに賭けるしかない。

少なくともニヨロロトテップへ渡すよりはマシだ。

改めて戦況へ振り返って見ると……あ、無様にやられてフツ飛んだ。

使えない。

「ようやく手に入れたぞ……我がへネクラナミコンへを」

確保した石板へと至悦に見入る。

「天条リン、陽ノ咲モモカ、困った事になった。ドクロイガー所有のへネクラナミコンへが、ニヨロロトテップに奪取された」

「ふえ？ へネクラナミコンへ奪われたん？ 大変や！」

事態の重大さを理解……してはいないかもしれないが、とりあえずGモモは狼狽の色

を浮かべた。

一方、Gリンは……。

「くれてやれ！ ンなモン！」

ラムスを睨め付けたまま吐き捨てた。

完全に頭へ血が昇っている。

「アカン！ リンちゃん！ アレ、クルちゃんの大切な物やん！ 一生懸命集めてる物やん！」

「石板の一個や二個知るか！ 後で纏めて奪い返してやるわよ！ アタシはアンタの方が百倍大事だツツーの！」

天条リンの言い分は分かる。

どちらを比重に置くか……天秤は陽ノ咲モモカだ。

……何故？

確かに天条リンにとっては“陽ノ咲モモカ”だろう。

それは承知している。

けれど、私にとつての最優先事項は「ネクラナミコン」だったはずだ。

なのに何故、私は同調の理解を抱くのだろう？

ふむ？

「アカン！」

「アカンくない！」

「アカン！ ウチ、クルちゃん困らせたない！ クルちゃん泣くのイヤや！」

……別に泣かない。

が、どうやら陽ノ咲モモカの頑固が発動したようだ。

こうなつた時の彼女は、周りを屈するまで軟化しない。

「ふぎふぎ……っ！」

懸命に「ラムスホイホイ」を引き剥がそうと試みる。

たぶん無理。

ラムスが、ほどかない限りは。

というか、ラムス？

何故、ほどかない？

私を知る限り、アナタは聡明な人種に分類される。

というか、抜け目が無い。

というか、したたかだ。

場合によっては狡猾にも映る。

ただの辛辣キャラではなかつたはず。

状況を把握できない程、愚かでもない。
ふむ？

そんな疑問を巡らせる最中、不意に彼女は人差し指をフルフルと立てた。

「その〈ネクラナミコン〉というのは、コレの事ですか？」

クンツと指を引くと、強引に石板が引き寄せられる。

「何ッ？」

ニヨロロトテップが動揺の色を染めるも、時既に遅し。

獲物は容易くラムスの手へと収まった。

「たぶんコレの事だと察して、先程〃糸〃を付着させて頂きましたわ。私の〃糸〃は

私自身……自在にコントロールできますの」

上空の敵へ向けて温顔ニツコリと挑発を投げ掛けた。

静かな敵意が反目する。

「惑星ジェルダの女王……キサマ、よくも！」

「あら？ 貴女に〃キサマ〃呼ばわりされる筋合いはありませんけれど？」

「……何故だ？」

「はい？」

「キサマは〈ネクラナミコン〉の争奪戦には無関心……部外者であったはずだ」

「ですわね。正直、こんな石板どうでもいいですわ。役に立ちそうにもありませんし……コレでしたら漬物石の方が、まだ価値がありますわね」

「ならば、何故だ！」

「友達がコレクションしていますので ♪」

……ふむっ？

「覚悟は出来ているのであろうな？ クイーン・ジェルダ！」

「あら、それはコチラの台詞セリフですわよ？ 無粋な暴君様？」

「何？」

「貴女あなたがへアリログへ達しに強いた理不尽な狼藉ろうぜき……私わたくしが知らないとでも？」

「ラムスちやん、ロツポちやん達の事を知ってたん？」

「ああん、モモカ様♡ もう一度「ラムスちやん」と呼んで下さいまし ♪」

「……イヤや」

「シクシク……そんな御無体な」

「つていうか、ほどいて〜！」

「それは却下致します ♪」

「何でツ？」

「モモカ様を危険な前線へ立たせたくはありませんから★」

「ふえ？ ウチの為ため……なん？」

「そ・れ・に ♪ ジタバタと苦悶にもがくモモカ様の肢体を見ていたら、何だか興奮してまいりましたの……うふふふ♡」

「やつぱほどこいてッ！」

ラムス、アナタは恍惚こうごつに何を口走くちばしっている？

「つてか！ だったら、何でほつたらかしてたんだったの！」

「何かを探しているのは解わつていましたから、それを手にしたタイミングで御破算ごわさんへとおとし返かえめる事が、何よりも御仕置きになると思おもいまして ♪」

さすがにラムスだ。

その辺りのしたたかさは健在。

「キサマ達ごと如ごときが、この私に勝てると思うか！」

「さて？ 勝率は判りませんけれど、勝てるんじやありませんこと？」

「何？」

「えつと……何でしたかしら？ そうそう、確か——やつてみなけりや分わからない！ やるだけやつたら、どうにかなる！ ——でしたかしら？」

「何だ？ それは？」

「バカの格言」

私とラムスの断言が意図せず重なった。

「どうやら戦力差を分かっているやないようだな。私とその気になれば、こんな惑星など壊滅できるのだぞ！」

「でしたら、その惑星そのものを相手取って頂きましょうか？」

不敵な余裕を飾り、彼女は指笛を高らかに吹いた。

振動——。

惑星自体が震えているかのような微震——。

その力強さは次第に増大していき、宛ら大地震のように大気すら震わせた。

発生源は四方八方からの土煙。

それは大地の怒濤の如く、我々の——いや、ラムスの下へと押し寄せて来る！生命であった。

この惑星ジェルダに棲まう生命達であった。

六本腕のゴリラへアリログ——。

三頭のサイへタンングロス——。

蝙蝠の巨翼で羽ばたく大蜥蜴はへラプロドン——。

電光を纏うカラフルな蝶はへデンコチョウ——。

そして、山の如き巨体に吠える直立型恐竜は、原始生命体の頂点へディメラ——

|。

ありとあらゆる原生生物が、ラムスの指揮下へと集合した！

まるで〈惑星ジエルダの意思〉を、総意に代弁するかのようによ！

「さて、では御相手して頂きます？ 我々〈生命いのち〉を？」

クルちゃんと惑星ジェルダFractal. 8

夕陽が温かみに射す草原で、ウチらはへ宇宙航行艇へ乗り込む手筈を調えた。
見送りに惑星ジェルダの動物達が集う。

『ウホ……』

代表するかのよう^ににロツポちゃんが進み出た。

「ロツポちゃん、もうすぐバイバイや」

『ウホウ……』

シユンとせえへんといて？

ウチ、後ろ髪引かれてまうわ……。

せやから、無理矢理明るい笑顔を繕った。

「もうイジメっ子はおらへんから、みんな仲良うせなアカンよ？」

足下ではポヨコちゃんが嬉しそうに跳ねとる。

それ見たら、此処来たんも無駄やなかつた思えるねん。

「ウホ」

「うん？ リボン？ 返さへんでええよ？」

「ウホ？」

「ロッパちゃんかて、女の子」なんやもん ♪

少しはオシヤレした方がええ★」

「……ウホ」

少し含羞^{はにか}んどった。

せやよ？

人間とかへアリログとか関係あらへんねん。

女の子は、みんな同じやねん。

「嗚呼、もう御帰りですのね……」別れの名残惜しさにラムスちゃんが嘆^{なげ}いた。「……モ

モカ様」

名残惜しき、ウチ限定やった……。

早う帰りましたよ？

「ラムス、今回は助力をしてくれて礼を言う」

相変わらず無抑揚なクルちゃんの謝辞に、ラムスちゃんは暫^{しばら}く素のままで見つめとつた。

ほんでもって、髪を鋤^すいて皮肉めいた閑雅^{かんが}を飾^かる。

「別に礼を言われる筋はありませんわ。私は、無礼な来客を追い返したただけですし」
せやねん。

あの後、ニヨロちゃんは撤退したねん。

特に攻撃も抵抗も示さへんまま。

まるでラムスちやん達へ惑星ジェルダの生命に気圧されるかのように……。

そのままへネクラナミコンは、ラムスちやんからクルちゃんへと譲渡された。

どうやら勝ったねんな？

正直、ウチには何が勝敗か分からへんけども……。

「それを引き寄せたのは、おそらく我々との間に確立した因果率。申し訳なく思っている」

「あら？ 貴女が拘わって、面倒事じゃなかった試しはありませんけれど？」

「そうか……自覚は無かった。ごめんなさい」

「で・す・か・ら！ 謝らないで下さいます？ まったく、調子が狂いますわよ……ブツ
ブツ」

何や小声で唇を尖らせとる。

「ともかく！ 貴女に、そんな殊勝なキャラは似合いませんわ！ いつも通り、他人の迷

惑そつちのけで構えていなさい」

「ふむ？　では、私が出来なくなったら来訪もいいという事？」

「……何故、いまさら他人行儀たにんぎようぎですの。別に、いいに決まっていますわよ。どれだけ永い付き合いだと思つていますの？」

「またトラブルを持ち込む可能性は否いなめない」

「如何なる難儀なんぎであろうとも、私がクリア出来なかつた試しがありました？　私を誰だと思つていますの？」

「ふむ？　抜け目が無く、したたかで、場合によつては狡猾こうかつにも映る辛辣しんちつキャラのへプロブバガ」

「……別れの際きわに、とんでもない毒を吐きましたわね」

「ふむ？」

苦虫顔へクルコクン。

せやけど、仲ええねんな？

ラムスちやん、毒舌どくぜつやけど。

たぶん素直やないねん。

自分を表すの下手やねん。

そしたら、リンちゃんと似てはるのかもしれない。

物腰は正反対やけど。

「あー、これでオサラバと思ったらせいせいしたわ！ とつとと帰るわよ！ モモ！
クルー！」

「別に貴女あなたは、どうでもいいですわよ。モブ女」

「あんだと！ この変態メイド！」

「ゴーホーム！ ハウス！」

「人様を犬扱いしてんじゃないわよ！ それ、この上なく失礼だかね！」

リンちゃん？

以前、ドクロイガーはんにしてなかつた？

リンちゃんはしかめっ面ツラでラムスちやんを睨にらみ据え、ラムスちやんは涼しい顔でプ
イツや。

そんな気まずい空気が支配する最中さなか……。

「……パモカ出しなさいよ」

「はい？ どうして私わたしが、パモカを差し出さなければなりませんの？」

「いいから出せツツの！ アタシのパーソナルIDアイディ、入れてやるって言うてんのよ！」

「は？ 通信関係になる……と？ 貴女あなたと？」

「か……かかか勘違いすんじゃないわよ！ アンタとは、まだ白黒ついてないんだかね！ その延長戦の為ためなんだから！」

ラムスちゃん、キョトンしはった。

ほんでもって——「クス」——軽く笑いはったんや。

三機の〈宇宙航行艇〉コスモクルーザーが帰還に浮上する。

垂直離陸の風圧が緑の海原を吹き撫でた。

見上げる動物達……そして、ラムスちゃん。

「ウホホ——ッ！」

ロツポちゃんが別れを雄叫おたけんだ！

そして——ドドドドドドドド——眼下から響く重低音！

ドラミングや！

出航の景気付けに六本腕のドラミングを披露してくれた。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド……ッ！

ロツポちゃんに続けとばかりにへアリログ達が一斉に叩き始める。

動物達が咆哮かなを奏で、ポヨコちゃん達は精一杯ピョンコピョンコ。

大合唱や。

見送りの大合唱や。

そんなん見てたら、ウチはじんわり思うた——来てよかった。

友達、仰山あげやうはんできた★

惑星ジェルダが小さなつてく。

『あ、そだ!』

「どないしたん? リンちゃん?」

『結局、今回は惑星ジェルダの〈ネクラナミコン〉をゲットしてないじゃん! ドク郎のは強奪したけど!』

……いま「強奪」言いはった。

『天条リン、心配無用。今回の〈ネクラナミコン〉は、既に私が回収してある』

『は? いつよ?』

『アナタ達が降下して来る直前』

『だったら先に言えツつーの! ったく!』

『ふむ?』

『……何を怒ってるの?』「みたいにクルコクンすんな』

「そんなすぐに見つかったん?」

『今回は降下事前に大凡の見当は付けていた。よって降下後は、すぐに発見する事が可能だった』

「どのぐらい掛かったん?」

『一〇分弱』

早ッ！

『だったら、アタシらが降下する必要なかったじゃん！』

『天条リン。私は最初から、そう言っていた』

『……うー！』

せやねえ？

後追いしよう言うたんは、リンちゃんやっただねえ？

「あんな？ クルちゃん？」

『何？ 陽ノ咲モモカ？』

「もしかしたら、今回はへネクラナミコン以外の目的があったん違う？」

『……』

「せやから、自由に行動できるよう単独降下を言うたん違う？」

『私にも分からない。けれど……』クルちゃんは、柔らかな眼差しで惑星ジェルダへと振り向いた。『……そうかもしれない』

『何よ？ その別目的って？』

『……ただ、会いたかったのかもしれない』

『……』

『……』

「えへへ ♪」

『つたく、そうならそうと言いなさいよね！ 最初から言つてりや、一緒に付き合つたつーの！』

『アナタ達とラムスは面識も交流も無い。私の個人的いちぜん一存に付き合わせるのは迷惑になる』

『なるかつつーの！』

『天条リン？』

『アンタねえ！ いつつも無関心・無感情・無抑揚で、我道邁進唯我独尊だけど——』

リンちゃん、それエラくデイスつとるよ？

ラムスちゃん越えしとるよ？

『——少しは“自分”を見せなさいよね。友達ともなんだから』

『……天条リン』

えへへ ♪

やっぱリンちゃん優しい ♪

せやからウチ、リンちゃん大好きやねん★

『では、その言葉に甘えて……ひとつ提示しておかなければならない事がある』

『は？ 何だつつーのよ？ 早速？』

『惑星ジェルダに引き返したい』

『はあ？ いきなり何言いい出した？』

『忘れ物をした』

『忘れ物って……〈ネクラナミコン〉は回収したじゃん？』

『せやねえ？ 他に忘れ物あった？』

『……………』

『エルダニャーッ！』『ハッちャーん！』

慌ててUターンや！

ドエライモン置いてきた！

「見るがいい！ 惑星ジェルダの者共よ！ 我、極めりし！」

「いえ、猛々しく〈ロービツクキューブ〉を翳して何を息巻いてますの……私の集落で」

「フツ……嫉妬か？ クイーン・ジェルダよ？ 同じ〈女王〉として、格の違いを思い知っ

たようじゃな？」

「な・ん・で・そうなりますの！」

「フツフツフツ……驚嘆も無理からぬ。二〇秒じゃ！ 遂に全面揃えるのを、三〇秒

切ったのじゃ！」

「……なるほど “ただのバカ” ですわね」

「だが、クイーン・ジェルダよ？ 我は器が違う！ 直々に御主へ指南してやろうぞ！」

なあに、礼など要らぬぞ？ 同じ「女王」としての好じや

「……さつさと帰って頂けます？」

今回の探査報告をニュートリノ通信にて受けたマリー・ハウゼンは、早々にデータを

更新……更新……あれ？ 静かだ？

恒例のキーパンチ音も奏でられていない。

………。

失礼します。

室内照明が暗いせいで、何処となくムーディーなシックさも有り……。

ああ、そうでもないや。

部屋は雑多な生活臭に散らかっていた。

散らかり具合、相当なものだわ。

ソファには畳まれないままの洗濯物が常駐放置で崩れ、その前に在るリビングテーブルには開封されたスナック菓子が散らばり湿気っている。

マリーと惑星ウイズエル

マリーと惑星ウイズエル Fractal. 1

ツエレーク艦内を並び歩くウチとリンちゃん。

ヴィシウム合金製の通路は、抗菌的ながらも簡素な殺風景や。上部の角にはへハイL^{エル}イデーイーEDの照明が涼しい白で機能的に照らし、それが果てしない光のルールと連なり続いとる。

「つたく、エルダニヤのせいでトンだ二度手間負ったわよ」

うんざりとした心労に、リンちゃんが愚痴った。

向かっとなるのは、マリーの部屋や。

さつき帰還したへ惑星ジェルダへ関する報告と、新たにゲットしたへネクラナミコンを届けに行く途中や。ついでに、これまでの解析進行具合も確認しに行くねん。

これまでも惑星探索の事後処理としてやってきたルーティーンやねんよ？

「せやけど、何やかんやでへネクラナミコンへ集まったねえ？」

「まあね」

「あと何個やつけ？」

「確かクルの話だと全部で六つ。で、惑星ジエルダでクルがひとつゲットしたし、ドク郎のも強奪したから……あとひとつか」

……リンちゃん、いま「強奪」言うた。

「全部集まったら、どないなるんやろ？」

「ん〜？ 当初、クルが言っていたのは『神の如ごとき力ちからを得る』って事だったけどね？」

「毎日、抹茶パフェやねんね？」

「……違うツツーの」

リンちゃん、何で苦虫顔なん？

「全部集まったら、リンちゃんは何を実現するん？」

「え？ ア……アタシ？ そ……そりやあ、その……」

急に振られたんで予想外だったのか、リンちゃんはしどろもどろになった。
せやからウチ、助け船出したったねん。

「毎日、イチゴパフェ？」

「違うわ！」

喰い気味に怒られた。

何で？

「でも——」リンちゃん、急に思索を紡ぎだした。「——ホントに、そんな力ちからを与える代物シロモノかしら？」

「どして？」

「正直、かなり胡散臭いうさんくさ。仮に、そんな壮大な物だとしたら、チープ過ぎるわよ」

「クルちゃん、そう言うてたよ？」

「……嘘だとしたら？」

「嘘？　せやけど、クルちゃん言うてたよ？」

「そりやそうなんだけど……あの時は、出会ったばかり。何らかの意図で、虚偽虚偽を飾ったとしたら？」

「そんなんアカン！」

「……よね。やつぱ」

「クルちゃん疑ったらアカン！」

「そつち？」

「クルちゃん、嘘つくような子やあらへん！　博士のサインも、きつと付いとる！」

「いや、それはないけど……」

「クルちゃん、友達や！　それやのに、クルちゃん嘘つき言うたら……リンちゃん……ふ

ぐつ……リンちゃ……グス……ふえええ〜ん！ そんなリンちゃんクライや〜！
ウチ、そんなリンちゃん見たない〜！ ふえええ〜ん！

「な……泣くなツツーの！ 仮に……の話よ！ 仮に……の！」

「イ〜ヤ〜やあ〜！ ふえええ〜ん！ うわ〜ん！ うわ〜ん！」

「わかった！ わかったツツーの！ もう言わないから！」

「グス……グス……ホンマ？」

「……たぶん」

「うわ〜ん！」

「わかった！ わかったから！」

「グス……グス……クルちゃん、嘘つきやない？」

「う……ん」

「サイン付いとる？」

「いや、それはない」

「うわ〜ん！」

「わかった！ 付いてる！ 付いてるから！」

「グス……グス……えへへ ♪ せやったら、ええねん ♪

ンちゃん大好きやねん★

♪ せやからウチ、リ

「あー……うん……」

「ほんなら、行こ？」

「は？ どうした？ 踵きびすを返して？」

「クルちゃんトコヤ」

「何で？」

「ごめんなさい言うて来よ？」

「唐突に謝られても怪訝けげんな顔されるわ！」

マリーの部屋に着いた。

「マ〜リー、開くけ〜て★」

「小学生の『あくそ〜ぼ★』言うみたいに呼ぶな」

何で？

ええやんな？

「マ〜リー！」

……返事無い。

「マ〜〜リー！」

……やっぱり返事無い。

「おらへんね?」

「留守? おかしいわね?」

「何で?」

「マリーのサイクルは把握してるもの。この時間は個人的な研究時間に割いているはず」

「毎回、時間通りとは限らんやん?」

「それを指摘されれば、何事もそうなんだけど……少なくとも、アタシ達が出会ってからは狂った試しが無いわよ」

「ほんなら何処行つたんやろ?」

「さて……つて、あれ? 電子ロック開いてる?」

「ドアの?」

「うん。変ね? パス掛けないで出るなんて?」

そう怪訝けげんを置きつつも、リンちゃんは無遠慮にスタスタと室内へ入った。
ウチ、続いた。

「「うわくお」」

入るなりの第一声は、二人揃ふたりそろつての失望驚嘆。

メチャ散らかつてんねん。

衣服とか投げっぱなしグチャグチャやねん。

食べ掛けお菓子が湿気とんねん。

「いくら容姿端麗頭脳明晰ようしたんれいずのうめいせきでも、こりや百年の恋も醒めるってモンだわ」

「レスリー長官でも？」

「いや、あのド腐れ変態は大丈夫つしよ？ 基本、乳さえあればいいから」

リンちゃん、銀曆ぎんれきトップにエライい言い様ようやんね？

腰に手を当てたリンちゃんは「ふむ？」と室内を見渡した。

ヒント探してんのやろね？

ウチ、邪魔にならないように、ソファに散らかった衣服の雪崩なだれをたたき始める。

ん？ 何やコレ？

……ブラや！

特大丸豆腐の空容器が落ちてる思うたら、これブラや！

デカツ！

「何か手掛かりになる物は……と」

リンちゃんのはのんびりと物色始めた。

気楽な態度からは、まったく焦燥が汲めへん。

まあ、マリーやからね？

別に大事件いう事もあらへんやろし。

「あれ？ 何だコレ？」

パソコンのデスクトップで足を止めた。

丁度、ウチも畳み終えたんで、トコトコと脇へ並ぶ。

一枚のメモ用紙いちまいや。

そこに書かれた一文いちぶんを、ウチとリンちゃんは軽く読んだ。

——探さないで下さい。

「……………うんんんツツツ？」

予想外の非常事態に、ツエレークフリッジ管制室には主要人材がつど集った。

もちろん、ウチとリンちゃん……そして、クルちゃんも。

「なるほど……状況は把握した」

詳細説明を受けたクルちゃんが淡白に納得する。

この非常事態に在っても全然ブレへん辺り、さすがやねんね？

周囲の大人達は悲観と不安にオロオロしとんのに、一番頼もしいねえ？

「ああ、マリー艦長……いったい何処に？」

メインオペレーター 恒詠ナレミつねよみさんは、瞳を潤うるませて、わなわなと口元くちもとへと両手を添えた。

せやねん。

いつも「何フラクタル f \ 何ブレンディングメシヨン b 次元、滞在可能推定時間——」言うてんの、この人やねんよ？

シヨートポニーテールの似合う爽さわやか系お姉さんで、年齢は十八歳。

ウチとリンちゃんからしたら、マリーよりも年齢近いから 〃気さくに何でも話せるお姉ちゃん〃 いう感じや。

「ナレミお姉ちゃん？ 落ち着いて？」

「で……でも、モモカちゃん！」

「大事おおごとやないねんから」

「大事おおごとだよツ？」

せやの？

「マリー艦長は、このヘツエレークヘツエレークの所有者であり、最高責任者であり、運行権限者……そして、あなた達へコスモウィズ・スクールコスモウィズ・スクールの校長先生であり出資運営者！ つまり、この艦艦の総総ては、マリー艦長そのものに依存している！ ううん、マリー艦長自身が、この艦艦そのものと言つてもいい！ このままじゃ……」

「えへへへ♪ 学校、おやすみや★」

「違うよツ？ その通りだけど違うよツ？」

どっちなん？

改めて見渡せば、みんな頭抱えて鎮んだり、激しい口調で口論したり……パニックパーリーや。

そんな不毛な混乱の中——「狼狽えんな——ツ！」——不意に一喝が場の支配権を根刮ぎ奪った！

リンちゃんや！

腰へと両手を添えた仁王立ちに、威風満々の叱咤を向ける！

「大の大人が揃いも揃って、オロオロと……みつともない！ アンタら、いままで何やってきた！ それでもへツエレーク＜運行スタツフか！」

「そ……それは……」「う……む……」

若冠十六歳の少女が、大人達を気迫に呑み込んだ。どつた。

この辺、さすが銀暦大企業の御嬢様や。

堂に入った象徴性とリーダーシップやんね？

「リンちゃんの言う事は……分かるけど……」

弱音を零すナレミさん。

せやせど、リンちゃんは自信に満ちてポニーテールを鋤^すき流した。

「アタシを誰だと思ってるの？ アタシはへ星河コンツェルンの娘 “天条リン” よ！不可能なんて無いんだから！」

そして、キビキビと今後の指針を打ち出す。

「いい？ まずはいつも通り！ 各自が受け持つ役割を、しっかりと果たす！ 最高権限者とはいっても、マリーは統括的な判断を下^{くだ}すポジション！ 各機能を働かせてきたのは、アンタ達！ 通常運行なら問題無し！」

「そ……そうか」「うむ、そ……そうだよな？」

「けれど、非常事態が起きたら？」

「んなモン、早々は起きない！ もちろん断言はできないし、そのままにはしておけない……から、臨時代役を立てるわ」

「臨時代役？」

「そ。信頼できる人材を……ね。少なくとも大局的な指揮能力に於^おいては、信頼性に長けた人物を」

「相^{あい}分^わかったーッ！」

ハツちゃん入って来た！

この場に呼んだらへんハツちゃんが、勢いよく飛び込んで来た！

「エエエエルダニヤ？ アンタ、どうして此処へ？」

「フツ……水臭いのう？ リンよ？ どうにも我を蚊帳の外にコソコソしていると思うたが、まさか我への『さふらいぎつぷ』とは……」

「喃んだ……っていうか、軽くダイエツト計画入った。」

「違うわツ！ つてか、誰だーッ！ コイツ呼んだの！ トンデモ非常事態そのものだから、一切秘密にして集合を掛けたのにーッ！」

「フツ……やはり気付いておらなんだか？」

「は？ 何がよ？」

「我が〈専属整備員〉を、御主達の尾行に使役していた事に！」

「塩撒いた！」

「ウチとリンちゃん、恐々ダンスながらに塩で清めた！」

「幽霊を発信器代わりに使うな！」

「〈ゆーれー〉とやらではない！ 有能な〈専属整備員〉じゃ！ ただ『姿が見えぬ』だけの〈専属整備員〉じゃ！ あとは『神仏を恐れる』、『御経に苦しむ』、『御札に近付けぬ』、『御香を嫌がる』……」

「それを〈幽霊〉言うねんよ！」

「さて、事情は分かった……任せよ、リンよ！ このハツちゃん、気高き〈女王〉の名に

懸けて指揮能力を惜しみ無く奮おうぞ！」

自分で「ハッチちゃん」名乗りだした。

嘔むの回避するために、自分から「ハッチちゃん」名乗り始めた。

「沈むわ！ アンタに委ねたら、ものの数秒で宇宙の藻屑だわ！ 銀邦最大の最新鋭艦

が！」

「うむ！ それもまた、さぶらいざつぷ！」

「黙れ！」

この艦、いまこの瞬間が一番『史上最大のピンチ』かもしれへん……。

マリーと惑星ウイズエル Fractal. 2

数時間後――。

宙域待機する〈ツエレーク〉へ、一機いっきの〈宇宙航行艇コスモクルーザー〉が收容された。
海亀型や。

その様子をブリッジから見届け、リンちゃんは静かに呟いた。

「……来たわね」

「せやねえ？」

さすがにハツちゃんには任せられへん。

せやから、リンちゃんは「あの人」を呼びつけた。

最初は渋っていたようやけど、マリー失踪の詳細を教えたら血相変えて飛び出したみたいや。

数分後――ブリッジのオートドアが開くと同時に、目も当てられへん動揺が飛び込んで来た！

「私のGカップは何処へー……ッ！」

「再登場の第一声に、何を口走ってんだアアア……ッ！」

ハイキック入った！

リンちゃん渾身のハイキックが、レスリー長官の顔面へクリンヒットした！

格闘家と見紛うばかりにキレのいいのを！

銀邦トツプ、現役JKに教育指導的体罰された！

「アンタ！ レーティング指定やり直させる気か？ ああん？」

倒れた長官の胸ぐら掴んで、ヤンキーばりに睨め付ける大企業令嬢。

リンちゃん、怖いよ？

「ジョ……ジョジョジョ……ジョークだよ！ ウエットに富んだ軽いジョークだよ！」

「黙れ！ アンタのは場末居酒屋のスケベオヤジ猥談だ！」

リンちゃん、何でそないな事を知つとんのん？

「とにかく……大凡の事情は判った」

長官は起き上がった襟を正した。

「つまりマリー——」どさくさ紛れの呼び捨てに、リンちゃんギロリ。「——ハウゼン

博士の消息が見つかるまで、この私にへツエレーク<の運営管理を一任したいというの

だね？」

「そ。アンタは、腐った〈銀邦軍長官〉なんだから〈大型宇宙船〉の運用には慣れている」
リンちゃん「腐った」言いはった。

自然体で「腐っても」やなく「腐った」言いはった。

「おまけに、こんなんでも一応は〈銀邦トップ〉の一角なんだから、おいそれと鷹派も
〈ツエレーク〉には手出しできない——没収とかね」

「……何気にエラくデイスられていなかったかね？」

「していない。真実」

まさかのクルちゃんが割り込んだ！

「ま、そういう事で〈ツエレーク〉は、アンタに任せる。その間に、アタシ達はマリーを
探し出す」

「うむ、それはいいが……手掛かりはあるのかね？」

「うくん、そこなのよねえ……」

「天条リン。その問題点なら多少は、どうにかなるかもしれない」

「は？ クル、アンタ何か知ってるの？」

「知ってはいない。ただし、幾つかは推測の糸口となりそうな要素が残されている」

「幾つか？ 例えば？」

「まず、マリー・ハウゼンは〈ネクラナミコンの欠片〉を持ち出して失踪した。ただし、

彼女が持ち出したのは〈惑星レトロナ〉時点での計三個——私達が〈惑星ジェルダ〉で収集した二個は、まだコチラに有る」

「それが? ……つて、そうか!」

「そういう事」

何やリンちゃんとクルちゃんだけで納得しとった。

ウチには、さっぱりや。

うゝん?

あ! せや!

「リンちゃん!」

「何よ? 急に興奮して?」

「ウチ、判ったよ! マリーの行先!」

「え? ホ……ホントツ?」

「オモチャ屋や!」

「は?」

「きつと並んでんねん! ゲーム欲しくて長蛇の列やねん! マリー、よっぽど欲しかったんや! 博士達のサイン入りゲームソフト!」

「……オイ」

「行こう！ リンちゃん！ ゲーム売場や！ ビックラカメラかアマタ電器へレッツ
ゴーや！」

「待てえええーい！」

駆け出そうとした瞬間、顔面ハリセンがスパーン来た！

鼻頭強打にスパーン室内反響した！

「ふぐう！ うう……痛いよ？ リンちゃん？」

「潤々して『痛いよ？』じゃないわ！ この脳みそ16ビット娘！ この銀暦ぎんれきで、そんな

ドラ ● エ世代がいるか！ ネット通販で一発いっぱつだわ！」

リンちゃん、あんまりや……。

「せやかて言うてたやん！ マリー、言うてたやん！ へネクラナミコンは『博士達の
サイン入りゲームソフト』って！」

「違うわッ！」「違う」

リンちゃんとクルちゃん、ふたりシンクロ二人同調に全面否定。

「つたく……いい？ これまで数々の惑星へと導かれたようにへネクラナミコンは、呼
びあう性質を宿している。そして、クルはへネクラナミコンの意思を感受できる。つ
まり——」

「あ！ 両方のへネクラナミコンをパモカ代わりにして、マリーと通話すんねんな？」

「違うわッ!」「違う」

「違うの? 何で?」

「この脳みそアパー娘は……。つまりクルを通じて、マリーが持って行ったへネクラナミコン」を感じる事が出来るの!」

「ふええ? マリーの居場所解るん? クルちゃん、スゴイねえ?」

「とはいえ、私が感知できるのは漠然とした広範囲のみ。その宙域内の何処に滞在しているかまでは特定できない。そこでへネクラナレーダー」の恩恵が必要となる」

「あ、なぐる! 臍氣おはらけに特定した宙域へ行った後はへネクラナレーダー」で更に絞り込むワケだ?」

「それでも大変な搜索活動になるんやないの?」

「陽ひノ咲さきモモカ、その通り。だから、マリー・ハウゼンが搭乗したへ宇宙航行艇」の性能スベツクデータから、その活動可能範囲を演算で割り出す」

「ふええ? そんなん可能なん?」

「別に難しい事ではない。彼女が搭乗したへ宇宙航行艇」の最高速度とエネルギー搭載総量、そして、これまでの経過時間を基礎条件に算出すれば、凡およその離脱範囲は絞り込める」

「せやけど、どっち行ったかは判わからへんやん?」

「だからへネクラナミコンでッつーの！ この『呼びあう性質』なら、逆に方角だけは察知できる！」

「あと〈凡庸宇宙航行艇〉というのは幸いだった。総じて〈宇宙航行艇〉には、単機によるへフラクタルブレーション航法〉の性能は実装されていない。つまり、少なくともへツエレーク〉と同一の現次元宇宙にしか出動できない」

「よし！ コマは揃ったわね！ 後は——」

「うむ！ ハウゼン博士が帰って来た時に備えて、隠しカメラの設置位置だね！」

「それもまた、さぶらいざつぷー！」

「………黙れ、阿呆 × 2」

と、不意にハツちゃんが何かに気づいた。

「むっ……」

注ぐ視線は傍らの艦長席——つまりはマリー専用の座椅子や。

その手前に据えられたコンソールヘジツと見入つとる。

「どないしたん？ ハツちゃん？」

「いや………斯様な物が、ぞんざいに置かれていたのう？ 実際、どうでもいいアイテム

ではあろうが………それでも『マリー・ハウゼンの所有物』であるのなら、そなた達が

預かった方が善いと思うが？」

説明に取り上げた物を見て、ウチとリンちゃんの顔色がサアと変わる！
ハッチャンが掛けて遊んどのメガネや！

マリーのメガネや！

家出したんは「表マリー」じゃなくて「裏マリー」の方やった！

「マリーの所在特定急いでッ！　そこ！　何やってんのーッ！」

リンちゃん、血相変えて指示出した！

「なるほど、これが『さぶらいざつぷ』という事？」

クルちゃん、違ちやうよ？

納得でクルコクン違ちやうよ？

マリーと惑星ウイズエル F r a c t a l . 3

「うくん？ やつぱり、わたし専用の〈宇宙航行艇〉コスモクルーザーも造っておくべきだったかなあ？
主動力として〈LHC型エネルギー機関〉を搭載しているけど……何せ旧型だから遅いのよねえ？」

と、わたしのこと「マリー・ハウゼン」は、現搭乗機のスペックに不満を覚えたのでした★
だつてね？

正直、わたしは〈ツエレーク〉を愛機と捉えていたから〈宇宙航行艇〉コスモクルーザーの必要性とか考慮していなかったもん。

毎回〈宇宙航行艇〉コスモクルーザーを要する局面では、リンちゃんとモモちゃんに御願いしていたし……。

え？

その〈LHC〉って、何か……って？

つまりへ大型ハドロン衝突型加速器の事よ？

正式英名はへ Large Hadron Collider へでへLHCへとい
うのは略称。

要は「量子加速実験によって高エネルギーを生み出せる」というへ巨大粒子加速器の事なの。

ただし同時に、その弊害的副産物としてへマイクロブラックホールへを発生させる危険性も孕んでいるけどね？

うん？ そんな危険エンジン搭載していいのか……つて？

ダメだよお？

いくら銀暦ぎんれきでも危ないもの。

だからね？ コレ、違法なの。

内緒ね★

だつてだつてえ！

こうでもしないとへイザナへやへミヴィークへには簡単に追い付かれちゃうモン！
ブウ！

「あ、そうだ！ バイパスを直結に簡素化したら、エネルギー抵抗値が少なくなる！ そうしたら、必然的に出力が上がるもんね？ あ、でも……充分な設備や工具も無いか。

下手に暴走させたらへマイクロブラックホールを生子出しちゃうなあ……。うん、でも、きつと大丈夫★ わたしは“やればできる子”だもん ♪」

閃いた妙案を実行しようとした矢先、通信システムがコールを奏でた。

レーダー反応を見れば、後方から追って来る機影が3機。

「あ、コレ……もしかして、もう見つかつちやつた？ 航行スピードから見ても間違いな
いかな？」

とりあえず通信回線をオン ♪

『マリーー！ 見つけたわよー！』『待ってえ、マリーー！』

「えい★」

切つちやつた★

と、今度はパモカがブルルル。

「ん〜？ 出た方がいいのかなあ？ 出た方がいいんだらうけど……絶対リンちゃんに怒られるよね？ う〜ん？ どうしよつかなあ？ 出ようかなあ？ やめようかなあ？ まだコール鳴ってる……コレ、出るまで止まらないなあ。あ、そうだ！ アミダクジで決めよう！ 紙とペン！ 紙とペン……つとー！」

『さつさと出なさいよー！ コールしてんでしょー！』

「ひゃうー！」

ビックリしたあ……。

出てないのに、リンちゃんから怒られた……。

「あのう？ もしもし？」

『もしもし……じゃないツツーの！ 何無視してんのよ！ 通信システム切るわ！ パ

モカには出ないわ！』

「あの、リンちゃん？ どうしてパモカをオンに出来たの？」

『こつちにはクルがいるんだかね！ 感情欠落にぬぼーつとして何考えてるか判らな

いわりに、スゴいんだからコイツ！ マリーほどじゃなくても！』

『リンちゃん？ 褒めとんの？ デイスつとんの？』

「あ、そつか。クルちゃんが遠隔的にハッキングして、勝手に回線開いたってワケね？」

『マリー・ハウゼン、その通り。アナタが通信を切った直後、天条リンがブツ壊れ——ブ

チキレて、私にパモカIDの解析を指示した。先程のコールは、さきほど僅かな間の回線情報を

引き出す事を目的としたダメージ工作』

『……アンタ、いま わすブツ壊れて”って言い掛けたわよね？』

『言っていない』

『つてか、マリー！ これまで集めたへネクラナミコン＜持ち出して、何処へ行くうって

のよ！ あの置き手紙は何だ！』

「あ、もう手紙を見つけちゃったんだ？ サプライズだったのに……ぶう！」
『さぶらいぎつぷっ…』

モモちゃん？ クルちゃん？

それ何？

『何よ！ サプライズって！』

あ、リンちゃんは言わないんだ？

「ん～……どうしよっかなあ？ 全部終わってから教えてあげる予定だったんだけどなあ？」

『いいから話せーっ！』

「ひゃうー！」

怒られた。

リンちゃんつてば沸点低いのよね……もう！

「あのね？ こんなメールが来たの★」

『は？ メール？』

「うん★」

『……見せてみそ？』

「は～い★」

わたしは彼女達のパモカへとメールを転送。

内容文は以下――。

『おめでとうございます。』

あなたの応募番号が当選致しました。

景品である〈ネクラナミコン〉は、こちらで引き換えの手配を進めております。

つきましては、御手数ですが〈惑星ウィズエル〉まで受け取りに御越し頂きたく思います。

期日までに御来訪頂けない場合は、獲得権利が他の方へ譲渡される点を御憂慮下さい。

これは最後にして最大のチャンスです！

尚、受け取りには身分証明として、御所有の〈ネクラナミコン〉が必要となりますので、忘れずに御持参下さい』

『……………』

「えへへ ♪ ラッキーだよね★」

『……………マリー？』

「なあに？ リンちゃん？」

『応募した？ 何かに？』

「ううん？ ひとつも★」

『いますぐ帰つて来オオオーい！』

「ひゃう！」

ビツクリしたあ！

いきなり大きい声出すんだもの！

ぶう！

『コレ詐欺！ 旧暦からある古典的な詐欺！ プレゼント当選詐欺！』

「ええく？ そうかなあ？ スゴクラツキーだと思っただけだなあ？」

『アンラツキー！ 甘ったるいラツキーデコレーションの中身は、超絶ビターなアン

ラツキー！』

「他の人は、そうかもだけど……わたしの場合は違うかもしれないじゃない？」

『同じ！ 相手にしてみれば、よくいるカモ！ 銀暦ぎんれきの才女が、格好のカモネギ！』

「それに、わたし騙されない自信があるもん★ 見抜ける自信あるもん★」

『一〇〇%引パ掛かるヤツの共有台詞ーーッ！』

「だ……だけど、本当だったら一気にへネクラナミコンへ揃うんだよ？」

『一気に失う！ 間違はなく失う！ アタシ達の苦勞がパーッ！ これまでの小説展開

がパーッツッ！ 作者の執筆労力がパーッツッッ！』

「で……でもお」

『でも何だ！』

「わたしも『見せ場』欲しいの！ 読者に『マリー、スゴイ！』『やっぱりマリー好き！』って言われたいの！」

『……トンでもない本音ぶっちゃけたわね、メタ表現で』

「人気欲しいの！ ブウ！」

『ブウじゃない！ フテンな！ 二〇歳はたちの子供！』

「マリー、活躍したかったん？」

「うん★」

「……………」

『……………』

「……………」

『……………』

「……………」

『モモoooooooooo?』『モモモ……モモチちゃん?』

ビツクリした！

いつの間にか、わたしの隣にモモちゃんがいた！

見つかる。「えへへ ♪」って、ホワホワ笑顔が含羞はにかんだ。

『モモ！ アンタ、どうしてそこにいんのよ！』

「来たねんよ？」

『あつげらんかと「来たねんよ？」じゃないツツーのオオオーツ！』

「あ、そつか。会話中にイザーナで接近して、あとはへPHWの気密性とヘリウムブー
スターで取り付いて……あれ？ モモちゃん？ ハッチは、どうやって開けたの？」

「クルちゃんやねん。クルちゃんがウチのパモカにデジタルピッキングのデータ送って
くれたねんよ？」

『クル！ アンタもグルか！ この隠密作戦！ アタシにも内緒で！』

『さぶらいざつぷ』

『黙れ！』

『天条リン、どうやら誤解している様子。これは隠密作戦ではなく偶発的な展開』

『はあ？』

『アナタとマリー・ハウゼンが問答に没頭する中で、ヘイザーナがスルスルとマリー機へ
接近するのを視認した——至近状態で陽ノ咲モモカが機体外へヒヨヒヨ出てくる
のが見えた——ハッチの前で「マリー、開くけくて ♪」と何度も呼んでいたが気

づかれなかった——次第に泣きそうになつてきたので、可哀想だから私がピッキングデータを送付してあげた——そういう流れ』

『どういう流れだ——』このややこしい状況で小学生レベルか——』

『陽ノ咲モモカひさきにしてみれば、中 ● くんの「磯 ● ! 野球しようぜ!」と同じ感覚』

「せやねん★」

『違うわ——』

「モモちゃん、遊びに来たの?」

「せやねんよ? あ、せや……ほんでな、マリー? 〈ネクラナミコン〉ドコ?」

「ん? そのコンソールだよ? 下部キャビネットに仕舞つてある」

「あ、ホンマや。コレ?」

「うん★」

「そしたら、コレ持つてくね?」

「うん、いいよ……つて、ええ——?」

モモちゃん、とんでもない事を言い出した!

悪びれない自然体で!

わたしは慌てて引き止める!

「ダメよ！ ダメダメ！」

「懐かしいねえ？ それ？」

『「何が？」』

リンちゃん共々、首を捻ひねったわ。

「モモちゃん、やっぱりリンちゃんに味方するの？ わたしを騙だましたの？ ひどいよ！」

「違ちがうよ？ 半分だけ」

半分は合ってるんだ？

「ウチ、騙だましてへんねん。マリーの顔を見に来てん。せやけど、いまさつきへネクラナミコンン 思い出したねんよ？」

どうやら、この子特有の場当たり行動パターンだったみたい。

「モモちゃん返して！ それが無かったらへネクラナミコンン 貰えないの！」

「貰もらんでええやん？」

「どうして！」

「マリー、応募しとらんかったら貰もらう権利無いよ？ そやのに貰もらったら「嘘」ついた事になる。そしたら「詐欺」やん？」

「うッ？」

「ウチ、そんなんイヤやねん。嬉うれしくないねん」

「ううツ?」

年下のお母さんから、正論に嗜たしなめられました。

「あんな? それにな? ウチ、リンちゃん大好きやねん。せやから、リンちゃん困らせ

たないねんよ?」

『……アンタ、これまでの章を読み返してみそ?』

当のリンちゃんは、何か言いたそうな不満感を出しているんだけど?

「じゃあじゃあ! わたしは? わたしは、どうでもいいの?」

「そないな事あらへん! ウチ、マリー大好きや!」

「ホント?」

「せや★ マリー、ウチの『お母さん』や ♪」

そこは『お姉さん』って呼んで欲しいんだけど……。

「じゃあ……わたしとリンちゃん、どっちが好き?」

「えへへく……リンちゃん★」

うわあ、ハッキリ言った。

含差はにかみながらハッキリ言った。

本人を目の前にして……。

この子、根っから『いいこ』なんだけど思慮しりよりよく力は大きく欠落しているのよね。

何気に結構な問題点。

「ふえええ〜ん！ ひどいよオ〜！ モモちゃ〜ん！」

「はわわ？ マリー、泣かんといてえ！」

「わたしだつて、モモちゃん好きなのに……モモちゃんもリンちゃんも、妹みたいに可愛く思っていたのに……順位つけられていたなんて！」

「訊きいたのマリーやん？」

……そうでした。

「関係無いもん！ わたし、傷ついたもん！ ふえええええ〜ん〜ん！」

「泣かんといてえ！ そないに泣かれたら、ウチどないしていいか分からへんなる！」

「そしたら——」

「グスツ……そしたら？」

「そうしたら「やつぱりマリーの方が大好き」つて言ってくれるかな？」

「ついでに「味方してあげる」とか言ってくれるかな？」

ワクワク ♪ ドキドキ ♪

「——そしたら、ウチは置いて行くしかないねんな？」

「なかなかトンデモドライな結論に着地しちゃった。」

屈託のないキョトン顔で。

ちよつとだけ「オモチャ売場でレジスタンスする子供」の虚しさが分かった気もある。こうして最後は白旗上げて「ママ〜！ ドコオ〜！」って本泣きになっちゃうワケね。

「ふええええええ〜〜〜ん！」

「泣かんといつてばあ！」

『カオスにアホな文字数を消費するな〜！』

リンちゃんが意味不明に怒気ヒドクつた直後、ズンツ と大きな衝撃に機体が揺れ崩れた！

「キヤ？」「ふぐう？」

被弾したかのようなインパクト！

わたしは緊迫一転に這い起きると、急いで周辺の様子をメインモニターへ映し出した！

「な……何？ 宇宙塵デブリでも、ぶつかつ……て、え？」

攻撃者の視認が、わたしを驚愕へと誘う。

それは少女だった。

純白の〈P H W〉を纏まとった少女。

鮫型サメの〈宇宙航行艇コスモクルーザー〉の鼻先に立つ麗姿。真空空間にも拘かかわらず長い銀髪を存在しな

い風に泳がせている。

涼やかな蔑視^{べっし}を、わたしの宇宙航行艇^{コスモクルーザー}へと注ぎつつ、彼女は静かな抑揚に名乗つた。

「我が名は〈ニヨロトテップ〉……」

マリーと惑星ウイズエル Fractal. 4

斯^かくして、わたしは〈惑星ウイズエル〉の沿岸に不時着したのでした。モモチちゃんもクルちゃん共々。

墜落にならなかつたのは、その身を呈して〈イザーナ〉と〈ドフィオン〉が落下速度を減衰させてくれたから。

とはいっても、墜落の圧を背負う形で抗ってくれたんだから、相当な負荷だったとは思う。

イザーナなんか砂浜乗り上げに息を切らしているもの。

ドフィオンは感情下手で分からないけれど。

『ゼエキュウ……ゼエキュウ……』

「よしよし、ありがとうねえ？ イザーナ？」

グロッキーなペットを癒やすように、モモチちゃんは鼻頭を撫でてあげていた。

わたしの〈宇宙航行艇〉^{コスモクルーザー}はと言えば……完全にオシヤカ。

そして「ハイザーナ」も「ドファイオン」も一人乗り。
うん、これは困ったぞ？

とりあえず景色を展望すると、見晴らしいっぱいに青が深呼吸している。
目の前に広がる水平線。

「ザザーン……ザザーン……と潮騒の戯れ。」

清々しいまでに済んだ空は、白綿を漂わせて癒しを謳う。

この場所自体は切り立った崖壁が囲う地形だったけれど、わたし達がいるのはサラサラ細やかな砂が敷き広がっている浜辺。

背後へと振り向けば、シダ植物の雑木林が「おいでおいで」と鮮やかな緑を自己主張していた。

うん、ちよつと南国リゾート気分 ♪

おまけにキラキラと日射しが眩くも暑くはないから快適 ♪

『へキュウ……へキュウ……』

「よしよし、もう少し休もうねえ？」

まだ続けている。

仲いいなあ。

こういうのを見ると、造ってあげてよかったって思えるの……えへへ ♪

「モモちゃん、イザーナ好き？」

「うん ♪ ウチ、イザーナ大好きや ♪ 仲よしやねん ♪」

『キュイ ♪ キューイ ♪』

えへ ♪ 何か嬉しいなあ……こういうの。

「どのぐらい？」

「リンちゃんの次 ♪」

うんうん ♪

……あれ？

「あの、モモちゃん？ 一番は？」

「リンちゃん★」

「二番は？」

「イザーナ★」

あれ？ あれれ？

「ヒドイよ！ モモちゃん！」

「何が？」

「わたしつてばへイザーナの次なの？」

宇宙航行艇コスモクルーザーよりも下なの？」

「違……違うねん！ マリー！」

「ふえ〜ん！ ヒドイヒドイヒドイ〜！」

「三番目はクルちゃんやねんよ？」

……まさかの回答が返ってきちゃった。

「陽ひノ咲さきモモカ、ありがとうございます」と、クルちゃんは深々頭を下げた御礼。

「いえいえ、とんでもあらへんです」と、モモちゃんは深々頭を下げた返礼。

……何コレ？

当て付け？

新しいイジメ？

わたし、メツチャ侘しくなった。

「ふわ〜ん！ ふわあああ〜ん〜ん！」

「はわわ！ マリー、な……泣かんといてえ！」

わたしがイジけて泣きじやくる最中、驚くべき事態が発生！

突然、海面が隆起したわ！

すぐさま。パモカアプりで計測すれば、数キロメートル沖の地点！

それは纏まとう海水を滝のように垂れ流しながら、みるみる育っていく！

遠目からでも把握できるほどに大きい！

「な……何？ まさか海底火山の噴火？」

「マリー・ハウゼン、その可能性は否めない」

「うわあー♪」

「ワクワクしとるけど、ウチ、そんな調査イヤやねんからね？」

「うー！」しれつと釘を刺された。「そ……そそそそうよね？ 惑星不時着しておいて、調査とかも無いわよね？」

うん、そうよ！

いまはモモちゃん達との信頼関係を確立する方が大事！

大事。

大事……。

大事——。

「あのね？ モモちゃん？」

「何？」

「この惑星ウィズエルってね？ 此処数十年〈プレートテクトニクス現象〉は起こってな

かったの」

「その〈グレートテケテケ運動〉言うの、ウチ知らへんもん」

「ん……簡単に言えば『地震の原理』かな？ つまり大規模に動いた地盤が差し込み

あつて、陸地変動を起こす現象」

「ほんで？」

「この現象が〈プレートテクトニクス現象〉だとすれば、惑星ウイズエルのマントル層が近年活発化している証拠で、そうなれば今後は大陸地形が大胆に変形する可能性すらもあるの！　もしかしたら目の前のコレは、奇跡的な瞬間かもしれないのよ？　スゴイと思わない？」

「……せやから？」

「環境変動の至近観察は、別に調査禁止の範疇はんちゆうじゃないよね？」

「アカン！」

頑がんと拒否されたわ。

目の前に宝箱があるのに取り上げられた気分……シクシク。

そうこうしている内に洗い流す怒濤どとうを脱ぎ捨てて、隆起の核が姿を現あらわした！

それは超巨大な二枚貝にまいがい！

「スゴイスゴイ★　おそらく全幅三〇〇メートルはあるわ！」

「マリー・ハウゼン、おそらくアレは生物ではない」

「うん！　あの貝殻が放つ光沢からして、おそらく〈コズミウム合金〉製ね！」

あ、貝殻が開いた！

内部から現れたのは、物々しい科学施設！

中央に貝柱を彷彿させるが如く聳えるのは、多面方角視界のブリッジタワー！

その他にも多機能型格納庫といい、四方に向けた数門のエネルギー機銃といい……基地とも要塞ともとれる超巨大な機械の砦！

「スゴイスゴイスゴイ ♪ ね？ ね？ スゴいね？ モモちゃん？」

「うん、まあ……せやねえ？ 大きい貝やねえ？」

醒めてた。

モモちゃん、醒めてた。

よし、わたしがスゴさを実感させてあげよう！

「此処からでも解るわよ！ アレ、傍目にもスゴい科学設備なの！ ムー帝国とかも発

見できそうならいい！」

「……それ、言うてええの？」

「よし！ それじゃレッツ・ゴー★」

「アカン言うてるでしょ！」

怒られた。

モモちゃん、わたしのお母さん？

そして、モモちゃんは徐にパモカを操作し始めた。

「モモちゃん？ 何処かに通信するの？」

「……リンちゃん」

「ええッ？」

「マリー、いい子にせえへんから言いつける！ 叱ってもらおう！」

モモちゃん、やっぱりお母さん？

「イヤア！ リンちゃん、怒ると超怖いんだもん！」

「アカン！」

プンスカプンと怒ったモモちゃんがパモカを耳に当てた時 だった。

全員が視界の隅で状況変化を捉える。

巨大二枚貝から、複数の飛行物体がコチラへ向かって来ていた。

「何や？ アレ？」

「うくん……何だろ？ 遠目には黒い点にしか見えないから判別は難しいけど……」

「マリー・ハウゼン、パモカの望遠機能を推奨する」

「あ、そつか！ うん、それがあつた」

クルちゃんに言われるままにディスプレイを覗き込む。

「うん ♪ 見える見える★」

「マリー・ハウゼン、数は？」

「六機。赤銅色の平たい金属盤が上下でくつついた形状で、挟まった部分には緑色に輝

く光が幾何学ラインとして流動している。その中央に点る赤い光点は、おそらくカメラセンサーね。対比物が無いから大きさまでは特定できないけれど。形容するなら〈飛行円盤〉……と言つてあげたいところだけど、色形から〈どら焼き〉を連想させるのよね」

「ふむ？」

クルちゃん分析の一考を含まむ間に、みるみる近付いて来る。

結構、快適に早かった。

そして〈どら焼き部隊〉は、わたし達の頭上で滞空制止。

こうして間近に視認すれば、直径八〇センチメートル程の円盤——成人男性の腰丈程度の大きさね。

赤い目が観察に見据えているのが直感で分かった。

「フライングどら焼き」や！ この子達「フラ焼き」や！

モモちゃん、混ぜちゃダメ。

語呂はいいけど混ぜちゃダメ。

知らない人が聞いたら「新種の銘菓」だと思っちゃうから。

「何なん？ この子達？」

「陽ノ咲モモカ、コレは〈ドローン〉で間違いない」

抑揚の欠落した電子音声が、無感情な宣告を下した。

『目標捕捉——任務遂行——タダチニ捕獲ヘト移行スル』

底部中央が蓋フタと開いて、先端に極太チューブがスルスルと伸び生える。紐状ひもなのにウネウネと動いている——つて事は、中身はパイプ構造になっていて、複数のワイヤー筋で自在に動かせる人工触手か。その先っぽに付いているのは丸型のペンチハンド。

「何や？ アレ！ 変なんがビローン出てきた！」

「あ、モモちゃん？ もしかして、ドローンだけにビローン？」

「言うてる場合、違ちがう！」

怒られた。

無数の触手は、わたし達へと迫り……。

で、現在、わたし達は要塞員の内部にいたのでした★

ワクワク ♪

前後をへフラ焼き〉……じゃなくてへ円盤型ドローンへに挟まれて、ベルトコンベアシステムの通路をウィーンと運ばれているのでした★

ワクワク ♪

「ワクワクするトコ違ちがう！」

怒られた。

「ウチら、連行されとんねん！ 四方八方から手足掴まれて、強引に空中輸送されたねんよー！」

「ん〜……確かに歓待って印象ではないかな？」

三人揃って拘束されていた。

延々と続く無表情なチタン壁が、抗菌ライトブルーのトンネルと流れ過ぎていく。わたし達は、ただ立っているだけで運ばれる。

その周囲を浮遊につきまとうのは、警護に困うへどら焼きドローン達。と、ようやく運搬が終わった。

強制的な案内に辿り着いたのは、左右開き仕様のオートドア。

どうやら此処は特別っぽい。

だって、これまで通過してきたオートドアよりも大きめなもの。

こういう仕様の場合〈特別室〉と考えるのが定石。^{セオリ}

『博士、捕獲対象ヲ御連レシマシタ』

ドローンの報告を合図に扉が開放されると、明るくも賑々しい室内が拓かれた。^{にぎにぎ}

壁一面に据えられた超大型モニターにはデイスプレイウインドウが分割投影され、施設内のあらゆる場所を監視カメラが映し出している。多々据え置きされた大型コン

ソールには、複数の入カインターフェイスと数々の計器類。それらは諸々の多機能性を主張していて、この部屋が管制中枢を担う指令室だという事実を暗に示していた。

これだけ大掛かりな管制設備にも拘わらず、室内に居るのは怪しい感じの御老体だ

け。
ボサボサの白髪は手入れの痕跡が無く、それどころか髪質が固いせいも逆立っていた。

どうやら身だしなみには無頓着みたい。

それはヨレヨレの白衣も物語っている。

険しい人相は豊かな髭と眉毛に飾られていて、深く潜んだ目つきは攻撃的に鋭い。特徴的な驚鼻も相俟って猛禽類を想起させるお爺さんだった。

年齢相応に背丈は小柄だけど肉体的に老いた印象にないのは、きっと結構しなやかな筋肉が付いているからね。

にしても、何処かで見た気がする人なんだけどなあ？

何処だろう？

誰だっけ？

「フッフッフツ……久しいな、マリーよ」

貫禄めいて含み笑うお爺ちゃん。

マリーと惑星ウイズエル Fractal. 5

給事仕様のへフラ焼き〉……じゃなかったへドローン〉が、室内にティーセットを用意する。

無味乾燥なシステムチックを裝飾する急造テーブルを囲うと、わたしは両手の内にカフェオレの温もりを広げつつ対話の席へと身を置いた。当然、モモちゃんとクルちゃんも同席。

「それにしても驚いたなあ……。お爺ちゃんは、わたしが幼い頃に亡くなった——つて聞いていたから」

「亡くなつてはおらん。長い間へフラクターブレイン〉をさ迷っていただけじゃ」

「お爺ちゃん、次空を徘徊はいかいしてたん？」

「語弊があるわ！ 似非エセ関西弁娘！」

「ごめん、お爺ちゃん。」

わたしも、そう思った。

「に、しても——」お爺ちゃんはブラックコーヒーをズズツと啜り、値踏みめいた視線を送る。「——まさかオマエさんが、マリーと通じておったとはのう……数奇なものじゃ」「ウイリス・ハウゼン、久しぶり」

両手包みのカップスープを嗜好しつつ、相変わらずの平静にクルちゃんが応えた。

何故か顔見知り然とした挨拶。

「え？ お爺ちゃんとクルちゃん、知り合いなの？」

「知り合いというか何というか……。まずは順を追って説明するか。マリーも承知じやろうが——まだオマエが幼い頃に、ワシはある実験を試みた」

「うん、聞いている。確か『特殊相対論を覆す新航行プロセスの立証』だよな？」

「そうじゃ。まあ実験結果は散々じゃったが……その副次的結果として、ワシは偶然にもノン フラクタル f \ ノン ブレーンディメンション b 次 元へと飛ばされた」

「そこから徘徊が始まったねんな？」

「語弊！ 似非関西弁娘！ 語弊！」

「違うねん。ウチ ちや 銀暦イアスナク弁 ぎんれき やねんよ？」

「知らんわ！」

モモちゃん、意外な天敵ぶりを発揮。

「でも、お爺ちゃん？ わたし達にとって ゼロフラクタル f \ ゼロブレーンディメンション 0 b 次 元 …… っつて、この次元宇宙

だよ?」

「いやいや、そうではない。ワシが指しておるのは〈 f フラクタル \ 〉ノン f \ ノン b 次 元〉であつて〈 0 フラクタル f \ 0 b 次 元〉とは異なる」

「聞いた事無いけど……」

「マリー・ハウゼン、説明する」軽く困惑する私への助け船として、クルちゃんが講釈を挟み込んだ。「確かに〈フラクタルブレーション〉の基点解釈は各自の次元宇宙こそが〈 0 フラクタル f \ 0 b 次 元〉としてカウントが始まる。しかし、ウイリス・ハウゼンが指しているのは、全フラクタルブレーションを俯瞰視した場合の起点次 元 〃 の事。つまり総ての〈フラクタルブレーション〉は、そこを起点として始まっている。言うなれば、始まりの宇宙〃——〈原初大宇宙〉とでも呼ぶべき次元」

「それって各次元に存在する起源領域〈原初宇宙〉でもなく?」

「マリー・ハウゼン、その解釈で正解。各原初宇宙すらも〈原初大宇宙〉から始まっている」

苦味を味わう一呼吸を置いて、今度はお爺ちゃんが説明を再開。

「そこから脱出する際に助力を授けてくれたのが、その娘〃クルロリ〃というワケじゃ」
「つまり……クルちゃん、お爺ちゃんを徘徊から保護したねんな?」

「じゃから! ワシの読者印象を貶めたいのか! 似非関西弁娘!」

「せやから違ちがうねん！ ウチ 銀曆ぎんれきイアスナク弁べん やねん！」

天敵発動。

わたしは苦手な喧騒を逸そらすべく、改めて室内を見渡して話題を探した。

「にしても……こんな最新科学基地を、よく造れたね？ この惑星ウィズエルには文明とは無縁の自然環境しか無いの？」

合金壁チタンの無叙情な部屋には、所狭ところせましと管理コンピューターやモニターディスプレイが囿はまっている。最新鋭の「ツエレーク」に及ばないのは当然としても、なかなかハイテク設備の展覧会。

改めてウイリスお爺ちゃんの人並み外れたスゴさを思い知った気がする。

「礎いしずえとなる素材は有ったでのう。幸さいわいにもワシは大型宇宙船共々に不時着した。大破して航行不可能なスクラップと化してはおったが、視点を換えれば有益な高度素材の宝庫じゃ。それに少数ながら作業ドローンも搭載しておった。それ自身に同型ドローンを造らせれば鼠算ネズミ算に増産させられる……放置にな。作業員の数さえ増やせば、大規模な改造作業も可能じゃ。不足している鉱物等は同じく掘削用ドローンを増産して、この惑星自体から採集させれば善よい。目的素材に達していなければ精製じゃ。労力と材料は、こうして補える。無論、司令塔たる頭脳はワシ自身。残す問題は「時間」じゃが、こればかりはどうしようもない。だから、いままで掛かった」

「理屈的には、そうなんだけど……スゴい……」

「そうかのう？ 至極、単純なプロセスじゃが？」

「知識や発想も去る事ながら、何と言つても行動力がスゴいわよ。わたしだってヘツエレーク〈の建造そのものは、銀邦政府に頼っている。しかも、自分自身で受け持ったのは設計と監修だけ……それも基礎設計構想はお爺ちゃんが残した物。わたしは、それをブラッシュアップしたに過ぎない。なのに、お爺ちゃんは単身裸一貫でコレを……」

「実を得るならば行動あるのみじゃろう？」

それはそうだけど、やっぱりスゴいなあ……。

わたし自身もだから好奇心を抱いたものには実践するようになっているけれど、お爺ちゃんに比べたら、まだまだよね。

惑星探査の実働だって、モモちゃんとリンちゃんに頼りきっているし。

「せやねえ？ 手先動かすのは効果的らしいやんねえ？」

「ボケ防止で基地を造ったワケじゃないわ！ 似非閩西弁娘！」

「だから、違うねん！ ウチ 銀曆イアスナク弁”やねん！”

いいなあ、上手い事キャラ立ちして……。

人が欲しかったら、こういうところ見倣わなきや！

マリー、ガンバ！

「ウイリス・ハウゼン、質問がある。この基地は、あのために？」

「そうじゃ」

「ふむ？ 以前は存在しなかった」

「オマエさんを送り出した後じゃよ。あの時は、基地建造も初期着手段階だったじゃ……土台さえ完成しとらんかったわい」

「成程、合点がいった」

……うん？

「送り出した？」

織り込まれていた疑問を眼差しまなざに乗せて、小首コクンとクルちゃんを見つめる。

「何か？」

無垢なクルコクンが返って来た。

本家が返って来た。

「いえいえいえ！ さらりと言っていたけど！ クルちゃん、お爺ちゃん関わっていたのツ？」

「そう。ただし、この基地が建造される以前まで。だから、先刻では初観測だった」

「初耳だよ！」

「介護してたねんな？」

「そうなんだ……」

此処に来て、一気に謎が氷解。

それで〈エイザーナ〉〈ミヴィーク〉と似ていたワケか……。

どちらも、お爺ちゃん製だものね。

「もしかして、わたしに接触したのも？」

「それは偶然。けれど、遭遇者がウィリス・ハウゼンの孫娘と知った時には、運命の巡り合わせを感じた……さぶらいざつぶ」

何なのかしら？ それ？

サムズアップのクルコクに言っているけど何なのかしら？

さつきも口くちにしていたけど？

もしかして、わたしの知らないハウゼン語？

「お爺ちゃんとクルちゃん、そこまで固執する〈ネクラナミコン〉——何なの？」

「ふむ？ では、マリーよ？ オマエはコレを何と解釈しておる？」

「とりあえず〈アカシツクレコード〉と説明されているけれど……」

「ふむ？」と、お爺ちゃんは意味深にクルちゃんをジロリ。「方便にしても安過ぎるな。そんな都合のいいオーパーツが存在するワケなからう」

「え？ でも？」

「コレは超エネルギーを極限圧縮する事によつて造り出された『超エネルギー結晶』なんじゃよ」

「超エネルギーつて……ちゃんと〈物質〉として存在してるけれど？」

「それがヤツの恐るべきスゴさなのじゃ。高圧縮エネルギーが結晶として物質化する——さすがの創造力と言つたところか」

うん？

ヤツ？

それつて『介在者がいる』つて事よね？

その人が作り出したつて事かしら？

だとしたら、スゴい天才……。

「お爺ちゃん？ 誰なの？ その人つて？」

「人ではない」

「……はい？」

「そやつの名は……いや、チト発声が難しいな……ダイレクトに思念での探り合いじゃつたからのう……かなり強引に人語発声するならば〈クツクトウル〉——我々^{われわれ}人間」の尺度で観念を把握するなら〈邪神〉とも呼ぶべき強大無比な超常存在じゃ」

「邪……邪神ツ？」

驚いた！

ともすれば、わたしの科学者人生さえも覆くつがえしかねないトンデモ発言だった！
 だけど、証言者はお爺ちゃんだ。

現実主義観点に懸けて、そこに虚偽は無い——ボケけていない限りはだけど。

……あれ？

つていうか、お爺ちゃん？

さつきへアカシクレコードを全面否定してなかったつけ？

眉唾オカルトつて一蹴いっしゅうしてなかったつけ？

その舌の根も乾かない内からへ邪神つて……大丈夫？

「テキサスのニワトリやねんな？」

「何でじゃー！」

モモちゃん、とりあえず黙っておこうか？

「まあ、厳密には〈精神生命体〉や〈高次生命体〉とか呼ばれている非物質生命体じゃがな」

「あんな？ その“ニワトリの真実”つて何？」

「ワシが訊ききたいわ！」

「陽ひノ咲モモカ、英語で『コケコッコ』と言ったワケではない」

「せやの？」

モモちゃん、とりあえず黙っておこうか？

一気に緊迫感を根刮ねこそぎにするのやめようか？

マリーと惑星ウイズエル Fractal. 6

「さて、では順を追って説明するかのう。先刻も話した通り、ワシは偶発事故によって〈原初大宇宙〉へと漂着した。そこで恐るべきものと遭遇したのじゃー!」

「それが〈クツクトウルー〉?」

「うむ。ワシが『その場面』に遭遇したのは、たまたま偶然じやろうが……ヤツは自身のエネルギーを結晶化させた〈ネクラナミコン〉を力点りきてんと使って〈次元門ディムゲイト〉を発生させておった。貪欲なアレは他次元に活動域を広げるべく〈フラクタルブレーション〉を越えようとしておったのじゃな。そこでワシは、ありったけの高出力エネルギーを力場りきばきてん基点となる〈ネクラナミコン〉にブチ込んで破壊——未遂のままに〈次元門ディムゲイト〉を崩壊させてやったのじゃよ」

「ええッ? それって心中行為もいいところじゃない!」

「そうじゃが?」

平然と返してくるけど……トンでもない事よ! それ!

あ……でも、だからか。

「それだったんだね？ お爺ちゃんが帰って来なかった真相は……。お爺ちゃんは、人知れず〈宇宙秩序〉を守っていたんだ」

少しだけ誇らしく思えた……。この人の血に在る事が。

とか感慨を噛み締めた直後！

「マリー・ハウゼン、それは違う。ウィリス・ハウゼンは、単に実験失敗のフラストレーションを発散したかっただけ」

「それなー」

八つ当たりだった。

未知の高次生命体相手に八つ当たりだった。

少しだけ気まずく思えた……。この人の孫娘に在る事が。

「で……。でも、お爺ちゃん？ よく無事で帰って来れたわね？」

「実際は永い事へ虚無の混沌を漂流し続けてたわい。脱出法を模索する以前に宇宙船はスクラップ寸前、エネルギー残量も尽きようとしておる。さすがのワシも、万事休すの匙投げじやつた……。クソツ！ クックトウルーめ！」

それは自業自得じゃないかなあ？

八つ当たりで、ありったけの高出力エネルギーを浪費したからじゃないかなあ？

「ところが、ある時コイツが現れた」と、慧眼けいがんの視線で指し示す。

うん？

え？ クルちゃん？

え？ え？

どういう事？

「それって、クルちゃんの宇宙航行艇コスモクルーザーも〈原初大宇宙〉へと漂着したって事？」

「いいや。いつの間にやら船内にいた。侵入形跡も密航痕跡も無く唐突に現れたという事じゃよ。恰あたかも〈瞬間移動テレポーターション〉でもしたかのようにな」

ホントにどういう事ツ？

「ワシは直感で悟った——コイツ、只者ただものではない……と」

うん、そうでしょうね。

話を聞いている限りは、そうでしょうね。

だって、クルちゃん自体が〈超常現象ちようじょう〉ですもの。

「クルちゃん、いままでは気にしていなかった……ううん、気にしないようになってきた。あなたとも信頼関係を築きたかったから……。だけど、この流れでは無視出来ない！

あなた、本当は何者なの？」

「私は——」

「あ！ クルちゃん、忍者やねんな？」

「……………そう」

絶対ウソだ！

「私は〈胡蝶流忍者〉とは知り合い。だから、多少は陰行術おんぎようじゆつも行使可能で……」

乗った！

モモちゃんのマッドバスに乗った！

とことん利用する気だ！

「ま、そんな事は、どうでもいいわい」

良くないよツ？

お爺ちゃん、怪奇現象の当事者ちよんじやうだよツ？

「とりあえず、この『グルロリ』によつて〈ネクラナミコン〉他諸々の事を教えてもらったワケじゃな。でなければ、ワシとて超常事象ちやうじやうの詳細など把握出来んわい。そして、こやつに取引を持ち掛けられたのじゃ——『次元宇宙に散在してしまつた〈ネクラナミコン〉を回収して欲しい』とな。対価は『 $0 \text{ f} \setminus 0 \text{ b}$ 次元への帰還』……悪くはない交換条件じゃ」

「だけど、エネルギーも無いような状況で、どういう手段で？」

「マリー・ハウゼン、それに関してはアナタの方が熟知しているはず」

「え?」

「つまり『特異点排斥の法則』」

「あ! そうか!」

「一次元層分だけへフラクタルブレインを転移——そこでまた暫く漂流し、やはりまた一次元層分だけ転移——その繰り返しで、現宇宙へと帰還したワケじゃな。それでも結構な年月が掛かった……こうして孫娘が成人しとるのだからのう?」

「だけど……『特異点排斥の法則』は受動的現象だから、クルちゃんも介入しなくても戻れたんじゃないかしら?」

「マリー・ハウゼン、この法則にはアナタが見落としている鉄則が有る」

「鉄則?」

「そう。つまり『特異点自身のエネルギー残量がゼロの場合は発動しない』という事。おそらく次元宇宙そのものが『行動も起こせない無害な存在』と看過してしまうため」

「ええッ? そうなの?」

「そう」と、クルコク。「だから、それを誘発する程度のエネルギー補給を交換条件とした」

「そっか……この学説の立証性だけは確信はしていたけど、総て仮想シミュレーションだけだったからなあ」

「脳内構想と実践経験では、何処かに『決定的な穴』があるという好例……実践は大切」
 「う……ん」

「この二人ふたりが示している」

「好き好んで次元放浪していたワケじゃないわいッ！」

「ウチかてイヤイヤ『乙女の奇跡！』してんねんッ！」

お爺ちゃんとももちちゃん、珍しく意気投合の抗議。

だけど、当のクルちゃんは「何か」と言わんばかりに疑問符クルコクン。

っていうか、ももちちゃんイヤイヤだったのツ？

せっかく『女の子らしく可愛い美少女戦士仕様』にしてあげていたのに！

ガーン！

「つたく……で、この惑星に着いてからは自然排斥現象——オマエの言う『特異点排斥の法則』は生じなくなつた。という事は、この次元宇宙こそがワシの次元宇宙——それこそへ0 ゼロフラクタル f \ 0 ゼロフレンジイメンション b 次元」と察せたワケじゃな。さて、そうとなれば次にやるべき事は見えた。即ちへネクラナミコンの回収じゃ。ワシに木こつ端微塵ほみじんと破壊されたへネクラナミコンは欠片となつて次空を越えた……が、廃棄物と化したワケではない。相変わらずクツクトウルの超エネルギーは結晶集束されているままじゃ。ともすれば総てを集めてしまえば、また本来の姿へと戻ってしまう。もしも、コレが誰かの手へと

渡って作為的に〈次元門〉^{ディメンゲイト}を開かれてもしたら……」

「……クックトウルーが、次空を越えて現れる」

「左様」

苦々しい沈思。

あのお爺ちゃんが自尊を折ってまで認める超常存在——それだけでも「凄まじさ」は伝わってくる。

未見であつてもゾツとした感覚を覚える。

わたしは緊迫の生唾を呑み込んだ。

まさに全宇宙を脅威に晒す大災厄……。

こんな戦慄、初めて体験する。

「テキサスからニワトリ来んのん？」

「だから、何でじゃ！」

と、直後、耳障りに鳴り響くサイレンが基地内を染め上げた！
 レッドアラート
 非常事態警報だ！

喧騒を連れた赤灯明滅が焦燥と緊迫を否応なく煽る！

「やれやれ、騒がしいのう」

お爺ちゃんは動ぜずにメインモニターを切り替えた。

改めて映し出されたのはコバルトブルーの大海原。

おそらく此処の周辺……ってどうか、基地の真ん前。

でなければ非常事態警報なんて鳴らないもの。

警戒対象は上空からゆつくりと降下中！

白雲を突き抜けて来たそれは、大きな波飛沫を噴き上げて海原へと着陸する！

巨大ロボだった！

全高八〇メートルはあろうかという巨大ロボットだった！

大角を生やした髑髏型頭部に、胸部一杯の髑髏意匠！

その巨体故に、荒れる潮は腿部までしか届かない！

あれ？ 何だろ？

初めて見るのに、初見の感じがしない？

はて？

「ドクロイガーはんや！」

「ふむ、間違いない」

モモちゃんの驚愕とクルちゃんの確定。

ああ、だからか。

いつも報告書に書かれているものね？

リンちゃんの書き方だと『ドク郎が来たから、ブツ飛ばした。おしまい!』って毎回簡潔に書かれているけれど……。

そのドク郎……じゃなくて、ドクロイガーはズシンズシンと鈍重な足取りで、この基地へと向き直った。

そして、正視に見据えると、徐おもむろに高笑う。

『フハハハハハッ! 宇宙の帝王になりたい? じゃあ、いつなるの? ……』
 『すぐでしょ! ドクロイガー見ろ——』
 『帰って来たか』
 『あ、博士。ただいま』
 切られた。

気迫に溜めまくった口上くちじょうが、悄々しおしおと「ただいま」に鎮まった。

……っというか、うん?

「少し待つとれ。いまハッチを開けてやる」

『は〜い』

「消毒はせえよ? 何処の惑星で、どんなウィルス付けて来ておるか判らんからの?」

『うがい・手洗い、毎回やってます!』

「結構」

『博士? おやつは?』

「今日はパンケーキじゃ」

「ルンタツタ★ パン・ケーキ ♪ パン・ケーキ ♪ パパもコレならオツ
 ケーさ★」と、嬉々に浮き足立ったスキップで。

モモちゃん達ぐらいの年齢かな？

肌露出が高いビキニ仕様の〈PHW〉を着用しているけど、その反面、各所には制御
 メカが装飾めいた自己主張に付いている。

とりわけ「髑髏モチーフ」のデイトイルは異色よね？

「手は洗ったか？」

「あ、博士！ もちろ……って、あああああ……ッ？ イルカ娘！」

モモちゃんを見つけるなりビツクリしていた。

当のモモちゃんはキョトンと返す。

「どちらさん？」

「ワシじゃ！ ドクロイガーじゃ！」

「「うん？」」

疑問符小首コクン。

わたしとモモちゃんとクルちゃん、全員揃って小首コクン。

「だ〜か〜ら！ ワシは〈ドクロイガー〉じゃ！」

「「ええええええ〜ッ？」」

理解したと同時に、わたしとモモちゃんは驚愕を叫んでいた！

「ヤッぱらいぎっつぱっ。」

クルちゃん？

それ、そろそろ読者も飽きたと思うの……。

「ウチ、てつきりへドクロイガーはん」は自律型ロボットかと思うてた！

「そうじゃ！ この形態はへプリテンドフォームじゃ！」

「プリペイドフォーム？」

「プリテンドフォームツツツ！ 何じゃ！ その『使いきり農地』って！」

「あ、なるほどね」「ふむ、納得がいった」

「何や？ マリーとクルちゃんは知つとんの？」

「その『プリテンド』っていうのは『成り済ます』とか『擬態』の意味なの。つまり、こ

の形態は『人間に似せた仮想ボディ』ってところね？」

「うむ、その通りじゃ！ この形態は生体^{バイオ}生成された転送用ボディじゃ！」

「どゆ事？」

「う〜ん？ モモちゃんに解るように説明するなら『分身体を使った人間変身』ってト

コかな？ あくまでも本体はへ人格プログラムだから、入れ物であるボディさえあれ

ば姿形は転送でどうにかなつちゃうのよ」

「せやけど『女の子』やん?」

「プログラムに『性別』の定義など意味が無いわ! っていうか、そもそもワシは『男』などと一言も言うておらんぞ!」

「せやたつけ?」と、モモちゃんはパモカを操作して、何やら検索し始めた。

そして——「あ、あつた!」——見つけたデータを、みんなのパモカにシェア。

え……つと、何々?

『Gモモ:ウチと惑星テネンス Fractal. 7』?

『なな泣いてないよツ? フハハハハッ! この『宇宙の帝王になってみたい男』が涙など見せるか! そのような懦弱さは、とうにブラックホールへ投げ捨てたわ!』

笑止! 笑止笑止笑止!』

「「「「……………」」」」

「言うてたよ?」

「言葉のアヤでした。ごめんなさい…………」

モモちゃん! 悪意無く追い詰めちゃダメ!

「ふむ? 御主おぬしら、顔見知りか?」

「いや、まあ…………何というか…………その…………」

うん?

「気まずそうに濁したわね？」

「ウイリス・ハウゼン……その経緯については、私から説明する」

「ああ！ やめて！ 言わないで！」

「クルちゃんが申し出た途端とたんに、今度は血相変えたわね。

「なあなあ？ 言うてたよ？」

「状況読めえええ！ イルカ娘えええ——ッ！」

「モモちゃん！ これ以上、追い詰めちゃダメ！」

「一番ツライの、吐血号泣の作者さんだから！」

「……なるほどのう？」

「クルちゃんから説明を受け、お爺ちゃんは静かに納得。

「流れを整理すると、こういう事よね？ 最初の頃、お爺ちゃんはクルちゃんへ〈ネクラ

ナミコン〉を預けて次元探索を一任いちにん……その為ために専用宇宙航行艇〈ドクロイオン〉まで授

けた——クルちゃん出立後、今度は独自に次元探索を進めるべく自律型ロボット〈ドク

ロイガー〉を造り上げ、同様に〈ネクラナミコン〉を授けて長期の探索指令に送り出し

た——その両者が鉢合わせして〈ドクロイガー〉がクルちゃんの〈ネクラナミコン〉を

奪おうと強襲——現状に至る」

「そして、その貴重な〈ネックラナミコン〉を失った……とな」

お爺ちゃんのリロリとした睨め付けに、褐色美少女が「うっ！」と気まぎれにたじろぐ。「あの時は、ひどい目に遭った」というクルちゃんの追い討ちに、更に「ううっ！」とたじろぐ。

「さて……どういう事かろう？ ドクロイガー？」

「待って博士！ 話を聞いて！ これは——」

「ポチツとな」

「——ギャアアアアア——ッ！」

御仕置きされた！

開口始めたのに、言い訳聞かずに御仕置きされた！

お爺ちゃんがパモカ操作すると、ドローンが呼び出されてシビンビンの一斉放電！

「う……ううう……」

「さて……どういう事かろう？ ドクロイガー？」

リセットした！

何事も無かったかのように仕切り直した！

プスプスと焦げ倒れた美少女を前に！

「ちよ……ちよつと待つて！ お爺ちゃん！ その件なら問題ないから！ 結果として、わたし達に回つてゐるから！」

「ウイリス・ハウゼン、マリー・ハウゼンの言う通り。確かにへニヨロトテツプへに奪われそうにはなつたけれど、最終的には我々が奪取している。結果としてへネクラナミコンの回収状況は大きく進展した」

「む……う」

渋々と指を下げる。

何で不服そうなのかしら？

もしかして、単に折檻せつかんしたかっただけ？

「ほんでもな？ ずっと『ワシは総てのへネクラナミコンを集めてへ宇宙の帝王』になる！』言うてるよ？ それは何で？」

「よ……余計な事を言うな！ イルカむす——」

「フツ……フツフツフツ……なあゝにい？」

「——やっちまつたなアアア——ツ？」

モモちゃん？ ホントに「やっちまつたなア」よ？

キョトンと「??」つて又ける場合じゃないから。

せつかく宥なだめたのに、ユラユラと狂喜的な邪笑を浮かべているじゃない。

にー！」

「要らないよツ？」

「ソイツをひけらかせば、否応なくオマエは目立つ！ 好奇対象として行く先々で人気者ウハウハじゃー！」

「最初に見るなり、みんな逃げたよツツ？」

「ちなみに、アレは絶対に外せん！」

「それ、もうへ呪い〜だよツツツ？」

お爺ちゃん、発想が……。

「そんな折、ワシはこんなのを見つけましたとき……。」

そう言つてパモカヘシエア転送されたのは、電子漫画のデータ。

あ、これつてユニバース大ヒットの冒険漫画『ニャンピース』だわ。

熱血少年主人公が伝説のオーパーツへニャンピースを求めて、仲間達と大宇宙を航海するスペースオペラ——漫画に明るくないわたしでも知っている。

そして、ドクロイガーが示したページでは、主人公がこう叫んでいた——「宇宙の王者にオレはなる！」

うん？ まさか？

「宇宙の帝王にワシはなる！」

相変わらず読めないなあ……。

純朴過ぎて……。

「リンちゃんもクルちゃんも友達やねんよ？」

「陽ノ咲モモカ、私も天条リンも承諾していない。だけど——」クルちゃんは異義を示しながらも、思慮を孕んだ眼差しで戸惑う美少女を見据える。「——彼女次第では、友達と認識してもいい」

彼女達のまつすぐな想いに当てられたドクちゃんは、頬染めに視線をピッと逸らして——。

「フ……フン！　べ……別に嬉しくない事なんかないんだからね！」

嬉しいんだ？

「で……でも、どうしても友達になつてほしいから、友達になつてもらっただけなんだから——」

なつてほしいのね？

「い……言つておくけど、ベベべ別にアンタ達の為^{ため}に友達になつてもらっただけじゃないんだからね！　ワシの為^{ため}なんだからね！」

うん、そうだと思う。

つていうか、そのツンデレ口調^{くちよう}、活用間違つてないかしら？

つまり〈仮想電子ディスプレイ〉ね。

みんなには『ツエレークの航路決定シーン』で、おなじみかな？
うん、アレ。

即興的だから解像度は落ちるけど、その分、至近の大画面だから、その場の全員で閲覧共有可能なのが利点。

映し出されているのは、再びコバルトブルーの大海原。

上空から落下して来た警戒対象は、大きな高潮たかしおを噴き上げて海中へと墜落する！

そのまま水没——って「うん？」

「どないしてん？ マリー？」

「いえ……いまの何処かで見たような気が？」

「隕石ちや違うの？」

「うくん？ 隕石……ではないかな？ 高速落下の一瞬いっしゆんだったから、黒い影”にしか見えなかつたけれど、不鮮明ながらに見覚えもあつたのよね。もつと別な……こう……何

だっけ？」

記憶を手繰たぐっていた数秒後、その正体が海面へと顔を出した！

負けん気任せに吠える巨大美少女が！

「ツプハア！ ……ソンの！ ……このアタシを叩き落とすとは、いい度胸してんじやない

のよー！」

「リンちゃんやー！」

「成程。確かにGリンが宇宙圏で交戦していたのを忘れていた」

「ああ、道理で肌感覚に見覚えが生じたワケね」

「言うてる場合やあらへん！」

Gリンちゃんが睨み据える先には、上空で浮遊待機する〈サメ鯨型宇宙航行艇〉——その鼻頭へと立ち蔑ミダシむ謎の美少女！

確か〃ニヨロロトテップ〃とか名乗っていた子よね？

モモちゃん達の報告に書かれていた……。

「天条リン、しつこい女だ」

「アタシを〃重い女〃みたいに言うな！ 腹立つ！ だいたいアンタ！ その〈サメ鯨型宇宙航行艇〉は、どうした！」

「これまでの勝敗——この私が、オマエ達のような下等存在に敗北を喫するなど〈ラプラス・コンプレックス確定未来軸〉に有り得ぬ流れであった。その敗因を鑑みた結果、オマエ達に在あつて、私には無い要素に気がついた。故ゆえに、私も所有した——それだけの事」

それはいいけど、どうやって造つたんだろう？ あの子？

素人が思い立って造れる代物シロモノじゃないけどなあ？

仮に設計技能に秀でていても、それを建造できる財力は必要となる。

逆に財力が有り余っていても、それを設計できる頭脳が無ければガラクタの増産。

しかも、わたし達の〈宇宙航行艇〉と同コンセプトのヤツ——つまりは〈超宇宙航行艇〉
コスモクルーザー スーパークルーザー
 なんだから、一見に分析看破できるほど安くはない。

少なくとも基礎設計者であるウイリスお爺ちゃんか、その頭脳を受け継いだわたしで
 しか把握できないブラックボックス。

銀邦政府ですら構造を掌握しきれないっていうのに？

ふむ？ 不思議……。

「ハントッ！ それが〈ミヴィーク〉や〈イザーナ〉と同じ〈超宇宙航行艇〉って？」
スーパークルーザー

「これもまた、かつてオマエが示唆していた〈可能性〉とやらだ」

「バカかアンタ！ 負けるとすぐさま『少女の容姿』を得て……今度は〈超宇宙航行艇〉
スーパークルーザー
 を所有して……アンタがやってるのは『友達のおモチヤを羨んで』
うらや
 買ってえく！』言ってる駄々っ子」と同じだッツのー！ 買って

「条件さえ対等であれば、オマエ如きに敗北する道理は無い」

「あんだとー！」

プチッと沸点キレる音が聞こえた……かと思えた。幻聴で。

そして、グリーンちゃんはヘリウムブースターで上空浮上。

「このアタシに勝てると思ってるんじゃないわよ！ 百億光年早いわ！ アタシは //

「！ // 天条リン」 なんだからね！

「相変わらずの根拠無き驕り、コレを見ても貫けるか？」

「何だ！ コレって！」

「G フォルム……メタモルアップ！」

「はああーッ？」「何やてッ？」「ふむ？」「ふわあ？ 驚いたあ……」

高々と垂直飛行する鮫型宇宙航行艇！

白雲漂う青々とした大空に、プリズム光彩の大きな輪が多数発生した！

間違いなくへオルゴネーションリングだわ！

それらが連なるリングトネルを潜ると、ニョロトテツプの肢体はみるみる巨大化

！

空中分解したへ鮫型宇宙航行艇がプロテクターとして装着されていく！

寸分変わらず同じプロセス！

そして、変身は完了した！

「……決着をつける」

「……の……上等じゃない！」

持ち前の勝ち気を睨み向けるGリンちゃん！

けれども、その菌噛みには焦燥が汲み取れた。

信じ難い謎を目の前にして、わたしは考察を巡らせる。

「不思議だわ……何故かしら？」

「せや！ 何で、ニョロちゃんまでへGフォルムに——」

「鮫^{サメ}つて超音波発生させないけどなあ？」

「——つて、そこは、どうでもええね——ん！」

怒られた。

当然の疑問を口^{くち}にしただけに怒られた。

生物学準拠なら重要な謎なのに……グスン。

「マリー！ ウチ、イザーナと行って来る！」

「リンちゃんの応援？」

「陽^ひノ咲^{さき}モモカ、私も同行する」

「うくん、確かに三人揃えば逆転劇もあるかもね」

「それもあある！ せやけど、何より止めなアカン！」

「え？ この戦いを？」

「せや！ こんなんアカン！」

珍しく息巻いていた。

モモちゃんは出撃した。

イザーナを呼び寄せて、すぐさまへG^{ギヤフクシー} フォルム・メタモルアップした。

クルちゃんもへドファイオンで一緒に出撃。

取り残されたわたしは、とりあえずへ仮^{ヴァーチャル}想電子ディスプレイで戦況を見守る事にした。

お爺ちゃんの傍^{かたわ}らでは、ドクちゃんの折檻^{せつかん}継続中。

カフエオレを友に眺めれば、映し出されるのは教え子達の激戦奮闘。

「巨大化か」関心薄い態度で珈琲^{すず}を啜るお爺ちゃん。「確かへG^{ギヤフクシー} フォルム」とか言うておったが……おそらくへOTF^{コスモマター}じゃな。宇宙量子へオルゴンを分子レベルで吸収融合し、質量変換した——といった感じかのう?」

「お爺ちゃん、よく解ったね? 初めて見たのに?」

「まあな。つまりは『質量保存の法則』を強引に捻曲^{ねじまげ}げたというワケさな」クツキーをポリポリしながら、取り立てた興味は無さそうにへG少女達の攻防を眺める。「オマエか? マリー?」

「うん、わたしの独学理論の応用。だけど基礎的には、お爺ちゃんがへイザーナとへミヴィークの設計図に残してくれたへ小型ハドロン衝突型加速器の高出力とへ光子コンバーターのエネルギータン換システム理論を併用したのよ? 宇宙規模適正尺度を

考慮すれば、巨体の方が利便性が高いから。惑星探索にしても、不測事態の対応にしても」

「それだけか？」

「え？」

「単にその理由だけならば “人間を巨大化させる必要” も無かろう。ワシのへドクロイガー”のような巨大ロボットでも造れば充分じゃ」

「それな！」

「ポチつとな」

「ギヤアアアアアアアア！」

ドクちゃん……『^{キジ}雉も鳴かずに射たれまい』って知ってる？

でも、正直驚いた。

お爺ちゃんが超科学知識に精通しているのは知っている。けど、まさか、こんな観察眼まで卓越していたなんて。

「例えば……例えばじゃ。主体と想っていたものが副次的付随の場合もある。つまり “巨大化” ではなく別目的を主体として、結果ながらに “巨大化” が付いてきた——といったケースなどな」

「うう……」

鋭い値踏みが刺さる。

痛いよう。

「何よりも、そんなシステムを成立させるといふ事は……あの子達は、アレという事じゃろうて」

「ち……違うの！ そうだけど、わたしはあの子達を実験台にしたワケじゃなくて！」
琴線を掻き乱されて、わたしはガタンと席を立っていた！

分かつている！

覚悟していた！

だけど、痛い……心が！

あの子達を想えば！

お爺ちゃんは、わたしの興奮を暫し観察した後——「ま、オマエの事だ。悪用目的はあるまいよ」——わざとらしく弛緩したテンションに纏める。

「訊かないの？」

「聞かせたいのか？」

わたしは淡い苦笑に首を振る。

同時に、染み入って来ていた……不器用な愛情が。

「ああ、じゃが、ひとつだけ——オマエにとって、あの子達は何じゃ？」

「え？」

予想外の質問だった。

まさか此処に来て『科学論』じゃなく『対象のレゾネーターを分析反映させたアイデンティティーの再認識考察』とは。

到底へ科学者へらしくない。

それは『哲学』だ。

……ううん、違うな。

そんなのじゃない。

だから、わたしは微笑んでいた。

心にそよぐ爽風のままに。

「家族だよ」

「家族？」

「そう……わたしの大切な家族」

「ふむ？」

お爺ちゃんはそれ以上追求せずに、浸る苦味に軽く口角を上げる。

空気の仕切り直しにカフェオレを一口含めば、両手に包む温もりが癒しに満たされてく

モモちゃん達は、今日も精一杯頑張ってくれている。

マリーと惑星ウイズエル Fractal. 8

「ニヨロちゃん！ ウチ、言うたよね！ イジメたらアカン！ みんなと仲良うせなアカン！」

「……幼稚な」

ウチの突撃を、子供の駄々とはばかりに軽くいなすニヨロちゃん。

ひらりと体捌きに避^かわすと、擦れ違い様に背中に手刀の一撃^{いちげき}！

「ぎゃん！」

不様につんのめり飛ばされながらも、ヘリウムブースターで空中を踏み留^{とど}まった！

「天条リンならいざ知らず、オマエ程度では相手にもならん。所詮は巨大化した子供だ」

「ふぐう……」

その通りや。

その通りやけど……何か悔しい。

「アタシのモモに何すんだ……ッ！」

憤慨ふんがい任せにGリンちゃんの特攻！

渾身こんしんに繰り出されるストレートパンチ！

これも同様に避かわされ……と思つたら、刹那に蹴り飛ばしの追撃を織り込んだ！

さすがGリンちゃん！

運動神経も鋭いけど、根本的に抜け目が無い！

「クツ？」

危あしきなつかしくも顎先あしきを掠めながら、Gニヨロちゃんはバック転仰け反りに間合いを開いた！

すぐさま斜め後方からへドファイオンへの牽制射撃！

せやけど、これも後方跳躍を重ねて回避や！

「やはり私が最もつとも警戒すべき相手は、オマエのようだな……天条リン！」

「言つとくけどね！ この子に何かしたら、ただじゃおこな——」

「リンちゃん大好きや——」 ♪ ぎゅううう♡」

「——いからねつたらつたらつたら——」

ハグや ♪

背後から仲良しハグやねん ♪

思いつきりギユウウウで幸しあわせや ♪

ほらー！ Gリンちゃんも嬉しゅうなつて『ウサギのダンス』歌つとるよ？

「痛いッつオオオーのー！」

「ぎゃん？」

振りほどくなり、脳天ハリセンスパーン！

何でッ？

「うう……痛いよ？ リンちゃん？」

「潤々して『痛いよ？』じゃないッつーの！ この脳ミソ潮騒娘！ いきなり懐かしいパ

ターン繰り出すな！ 読者だつて忘れてたわ！」

「ちや……違うねん！ コレは違うねん！ コレは……えつと……あ、せや！ コレは

ゞさぶらいざつゞやねんよ？」

「……無理矢理、流行らそうとすんな」

ウチとリンちゃんが姦しさを交わす最中——「フン！」——Gニョロちゃんが右掌か

らの光撃！

「危なッ！」「ひやう！」

慌ててヘリウムブースターで散ったわ。

「ちよつとアンタ！ いきなり何すんのよ！ 危ないじゃない！」

「私を相手にしておきながら余所事とは、つくづく腹立たしいものだな？ 天条リン！」

「したくてしたんじゃないツツーの！」

「せやったら、何で？」

「……そこに座れ、脳ミソパーパー娘」

「は〜い ♪」

「嬉々と座るな！」

怒られたよ？

何で？

座れ言うたの、リンちゃんやんな？

「クツクツクツ……まあ、いい。どうやらへネクラナミコンは揃ったようだからな」

「はあ？ 何処に……って、まさか！ この惑星へ誘き寄せたのは、アンタかツ？」

「何の事だ？」

「とぼけんな！ マリーにキャッチメール送ってへネクラナミコンを持って来させたで

しよー！」

「それは、私ではない……が、その者には感謝せねばなるまい。こうして、この場にへネクラナミコンは揃ったのだからな！ 労せずにな！」

「ハア……」と、Gリンちゃんは軽く呆れた溜め息。「御生憎様、揃っちゃいないツツー

の！」

「いいや?」

G ニヨロちゃんは、頭上に警戒旋回しているドフィオンを眺めた。

「アレに二個。そして——」

そして、今度は眼下の巨大貝を見据える。

「——あそこに三個」

「だ〜から〜! 揃ってないツツーの! まだ五個! <ネクラナミコン>は、全部で六個でしょーが! 算数も出来ないのかアンタ?」

「だから、揃ったと言う。残るひとつは……私自身なのだからな!」

「なツ?」「ふええ?」

さすがに面喰らった!

何や?」

ニヨロちゃん <ネクラナミコン> やったん?

「そうか! 宇宙クラゲに少女形態——思うがままに ぎたい 擬態 出来たのは、コイツ自身

が <ネクラナミコン> だったから!」

「せやったら、あれやんね? ニヨロちゃんは <大樹神さま> や <濁酒徳利> と姉妹って

事やんね?」

「……それは言ってやるな」

「ようやく実現する——我が悲願が！ 総ての次元宇宙にへ邪神クツクトウル〜を降臨させるという悲願が！」

噛み締めるかのように呟くと、Gニヨロちゃんはキツと上空を仰いだ！

そして、そのまま上昇離脱！

スゴいスピードやった。

あれ、到底へGフォルムで出せる推進力やあらへん。

帯びたエネルギーによる特異性かもしれへんね？

「クツクトウル〜？ 何よ？」

置き去りにされたGリンちゃんは、言葉に含まれていた初耳用語に怪訝を浮かべる。

せやから、ウチは親切に教えてあげたねん ♪

「テキサスのニワトリやねんよ？」

「クルーッ！ 後で説明を御願ーい！」

大声でドフィオンに呼び掛けた！

ウチ、信用されてへん！

ふぐう！

「つたく、何が目的かは知らないけど……とりあえず追うわよ！ モモ！ クル！」

「う……うん！」

『了解した』

ウチとGリンちゃんは、すぐさまへGフォルムを解除すると、傍らに再形成された
 へイザーナへミヴィークへと乗り込む！

この間、僅か数秒や。

追跡するならへ宇宙航行艇の方が早いねん。

そして、三機の魚影は垂直に飛び立ち、大気圏を後にした。

惑星ウイズエルの近宙域――。

そこにGニョロちゃんはいた。

蒼いエネルギー奔流を帯びたへネクラナミコンが、彼女の周りに円陣と従つとる。

「イア……イア……イア……」

瞑想するかのよう、意味不明な単語を呟き続けるGニョロちゃん。

瞼を綴じて鎮まり囁く所作は、まるでへ呪文詠唱の儀式でもしとるようやった。

「させるかつての！」

高速に強襲するへミヴィークからへリウム砲が発射される！

せやけど、拡散に弾かれた！

「ハア？」

予想外の展開に間抜けた声を洩らすリンちゃん。

バリアや！

まるでGニヨロちゃんの邪魔はさせないとばかりにへネクラナミコンンがエネルギーバリアを張った！

「結界つてワケか！ そんなら……Gフォルム・メタモルアップ！ Gリン！」

リンちゃんのメタモルアップ！

せやねん。

こうげきりよく攻撃力特化に重きを置くならへGフォルムンやねん。

「んにやろ！」

へリウムブースターの高速突進でストレートパンチを繰り出す！

またバリアや！

Gリンちゃんの拳が、エネルギー障壁の圧に押し止められる！

「ク……ウツ？」

それでも貫つらぬこうと踏ん張るGリンちゃん！

意地や！

リンちゃんの負けん気や！

「Gフォルム・メタモルアップ！ Gモモ！」

すぐさまウチも！

「タアアアアーーーーッ！」

Gリンちゃんの横からパンチを叩き込む！

パワー戦ではウチの方が、Gリンちゃんより向いてんねんよ？

『援護する』

クルちゃんのヘドファイオンも、ヒット&ウェイの砲撃に加勢！

せやけど……総て遮まげられる！

針の穴ひとつ貫通出来へん！

「イア……イア……イア……イア……イア……イア……イア……」

ニヨロちゃんの詠唱は続いとる。

そして！

「イア！ イア！ オオオオーーーーッ！」

極ごくまったかの如く雄叫んだ！

……つていうか、Gニヨロちゃん？

そのまま「イチローさんの牧場」でも行くん？

そんな思ってた直後、眼前の宙域が歪みに口くちを開いた！

「ブラックホールッ？」

『Gリン、それは違う。アレはへ次元門（アイテムゲイト）——即ち（すなわ）〃多次元宇宙と貫通したワームホールになる』

「言われてみればへブラックホール」と内側が違うねえ？ 何や〃暗い色の絵具（えのぐ）〃を掻き混ぜたみたいなのマールブル極彩や。黒やら紫やら……アクセントに黄色や赤も見えるで？」

「何処と繋げたのよ？ アイツ！」

『ひとつしかない。それは通常手段では決して貫通不可能な次元宇宙——即ちへノンフラクタル
f ノン b 次元』（ブレインデイメンション）

ウチらが驚愕に呑まれとる間に、その空間から何かが現れる！

超絶巨大な黒い影が！

空間穴の縁に重々しく手を掛け、暗い深淵（しんえん）から這い起きようとするかの如く（ごと）ゆつくりと抜け出て来る！

デカイ！

惑星サイズの巨体！

威圧的な——畏怖的な——戦慄的な——脅威やった！

「な……何やの？」

「なっ？ 何よ！ コレ！」

